

# 苛烈なる世界戦局

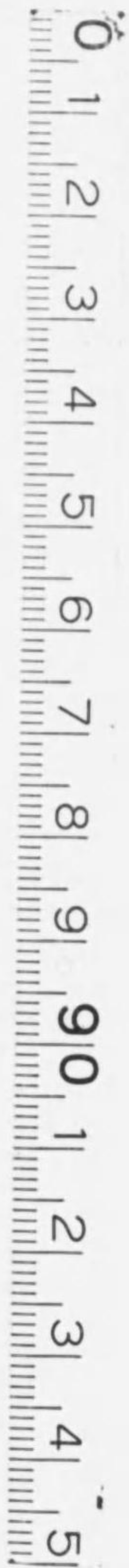
報年亞東



輯一第 年九十和昭

世界戦局とわが立場  
大東亞總力の結集  
米國戰時態勢管見  
距離と量の大東亞戦局  
歐洲戦局の決戦期

編社聞新日朝



# 始



特 239  
363

報年亞東日朝  
輯一第 年九十和昭

# 苛烈なる世界戦局

編社聞新日朝



發行所寄贈本

## 序

戦局はいよいよ重大なる段階に突入し、太平洋正面においては、敵の物量を恃む反攻がつひに内南洋に入つてわが本土に迫り、南方洋上の島嶼地帯より、北方の基地近くにいるる廣大なる戦域に熾烈なる戦闘が展開されてゐる。大陸よりする反攻はわが先制により挫折したものの、不逞にもわが北九州を盲爆するなど、反攻の功を一舉にかち得んとしてゐるものごとくである。飄つて歐洲のいはゆる第二戦線も大舉西歐海岸に企てられ、これに對するドイツの報復爆撃が非常な破壊力をもつて行はれて、しばらく對峙の姿勢にあつた東西の兩戦局にはかに決戦的情勢を著しくしてきた。大東亞諸民族の共存共榮の自覺が昨年の大東亞會議を畫期として頓に昂まるに對し、ソ聯と米英との扞格は次第に擴大して、政情の推移にも刮目すべきものがある。また航空戦力の重要度が急激に加はつて、戦闘における速度の水準が一變したと、科學研究の諸結果が戦闘の各面に數々の變化を與へてゐること、および戦闘の消耗性と軍需生産性の著大なる増進が、補給生産能力の戦力消長の上に占むる位置を甚だ重からしめてゐることなど、戦争はまさに相貌を變へるにいたつた。いまや戦局はこれらの總力をあげて展開されてゐるので、當面の推移こそ特に至甚なる注目を要するところである。朝日東亞年報昭和十九年第一輯は「苛烈なる世界戦局」を題目として擇び、この時機におけるわが國の立場を大觀するとともに、東西兩戦局の戦略的意義と政略的意圖を各個に検討し、さらにこれに處するわが必勝の態勢を論考することにしたのである。

本年報は昨昭和十八年版以來、四季分冊刊行に改めたが、世局の變轉が急激になつて、いよいよ分冊して急速なる刊行を要するに反し、出版事情の急變に遭遇して、かへつて刊行期日を遷延するのやむなきにいたつた。昨年之余儀なく第三輯をもつて打切り、ただちに本年第一輯にとりかかつて、昨年第四輯として収録すべき分をもかねて速行を期したところ、これまたかへつて遷延を甚しくするやうになつたのである。しかし急轉歩の事實を個々に追

ふにとどまらず、その底に流るる動向、その動向が有する諸般の意義を考究することは、今後の推移を按ずる上の指針として注目すべきであり、殊に當今のごとき史上稀にみる大轉換の途上にあるときには特に深き検討と大局的綜合觀察を肝要とする。刊行の期日は意のごとくならざるも、かやうな點に公刊の價値がなければならぬ。加ふるに本第一輯は校了眞際にいたり東西兩戦局に新たな情勢が展開したため、一部の稿を改めたので、さらに刊行を延期した事情もある。豫定よりおくれながらも、なほこれに最新の内容をもつて補はんがためである。

本第一輯は巻頭の「世界戦局とわが立場」につき朝日新聞社副社長緒方竹虎氏が筆をとり、ほか諸篇はいづれもそれぞれの部面を擔任する本社社員の執筆によるものである。そのうち恒川眞氏は本篇執筆のち間もなく日本放送協會に轉じてゐる。

なほ朝日東亞年報はもと本社東亞問題調査會において編輯したものであるが、その後同會が廢せられ、代つて中央調査會を置くにおよびこれを引繼ぎ編輯したところ、昨年末同會も廢せられたので、本第一輯よりは本社出版局において編輯することになつたものである。

昭和十九年六月

編者しるす

目次

苛烈なる世界戦局

序

世界戦局とわが立場

- 一 第二戦線の展開と歐洲戦局——二 米國の真正面は飽くまで日本——三 ニミッツ作戦は對日反攻の根幹——四 太平洋民族闘争の將來と日本

大東亞の戦局と總力結集

大東亞總力の結集

- 一 政治的大攻勢の展開——二 總力戦における國民精神の問題——三 「聯合戦争」における團結の基礎——四 團結を阻害するもの——五 大同團結の根本方針——六 大東亞會議の成果——七 世界觀の政治化——八 東亞の叛逆者——九 共同宣言の實踐

距離と量の大東亞戦局

- 一 敵の反攻主軸線——二 東印度の資源を狙ふ——三 航空基地の好適地を狙ふ——四 航空機の量による反攻

目次

一

—五 西南太平洋戦線——六 中部太平洋戦線——七 北部太平洋戦線——八 在支基地化による米の反攻——九  
印緬戦線——十 時の利に立つわが防備態勢の強化

南方火線の示唆

一 南太平洋の激闘……1 ラバウル戦局總論……2 ソロモン戦線の展開……3 ラバウル戦局の急轉……4 ラバウル戦局の展望——二 敵の戦術と技術の検討……1 南太平洋における敵の戦法……2 航空機の量……3 飛行場設定の技術……4 電波探信機……3 技術と量の問題を克服

印緬戦線の意義と特性

一 その重要性——二 「ビルマ奪回」の内幕——三 戦線の特性……1 地形の克服……2 熾烈なる航空決戦——四 印度解放戦の新展開——五 印度進攻の意義……1 英師營の狼狽……2 米、蔣への打撃……3 印度への影響——六 國民軍の祖國進軍——七 敵反攻の動向

歐洲戦局と反樞軸の政情

米國戰時態勢管見

一 米國民の戰意——二 生産力の問題——三 選挙戦と對戰爭態度——四 戰時社會の問題——五 人の給源が弱

歐洲戦局の決戦期

一 對獨決戦の展望——二 歐洲反攻の場所と時期——三 米英ソの政治攻勢——四 ソ聯の進出と米英の讓歩——五 遲延する第二戦線——六 決戦に引摺られる米英

不拔なるドイツ戦力の基底

一 ドイツ國民の士氣と團結——二 ナチス黨および國防軍の組織力——三 島政策と前線兵士の數——四 國防軍

カイロ、テヘラン會談と反樞軸の意圖

一 カイロ、テヘラン會談の意義——二 カイロ會談と日本處分の白晝夢——三 いはゆる戦後における支那の地位向上——四 テヘラン會談と第二戦線——五 ヨロッパ支配についてのソ英の對立——六 次に来るべきもの

國內總蹶起の措置

國民總蹶起の態勢

一 議會運営の戰時体制化——二 運用の適正に論議集中——三 國民運動の強化を力説——四 國民運動發展の方向——五 決戦非常措置要綱——六 三位一体の總蹶起へ

本年の財政と國民生活

一 五百九億圓の決戦財政……1 十九年度豫算の規模……2 一般會計も準軍事費……3 陸軍への他會計繰入れの増加——健全性の指標……4 共榮國共通財政の確立……5 陸軍、一般會計の一体化——二 戦費充足に大増税……1 十九年度増税の畫期性……2 税率引上げに重点を指向……3 新興所得階層をも捕捉……4 勤勞所得増税者新に二百萬人……5 少額貯蓄金の非課税撤廢……6 間接税は禁止税色を濃化……7 今後の趨勢は大眾課税——三 國民生活水準の確保……1 國民所得六百億圓……2 消費資金更に十五億圓壓縮——消費の戰時的組織化……3 食糧確保が戦争意志の中核……4 貯蓄増加の基底は生活の安定合理化

日滿食糧計畫の一體性

一 戦争完遂の二大要件——二 日本の措置——三 内地の食糧事情の輪郭——四 朝鮮および台灣の増産計畫——

目次

五 滿洲國の食糧計畫の發展……… 1 戰時緊急農産物増産方策の策定まで……… 2 緊急農産物對策の内容……… 3 蒐  
 荷對策……… 4 大農地造成計畫の全貌……… 6 食糧確保の日滿一体性

資料と解説

グルーの「東京報告」批判……… 岡本 鶴 松…一六八

一 米國政府、國民への影響多大——二 戰爭の原因を日本に轉嫁——三 對日戰の困難を強調——四 日米交渉を歪曲強弁——五 自ら矛盾に陥る——六 反間舌肉の言——七 遂に日本侵攻の暴言——八 米國の世界征服思想

獨立前夜にある印度の民族と經濟……… 岸 克 己…一八〇

一 獨立への途ひらく——二 民族的種姓の深刻性——三 寶庫印度と英の擲取……… 1 農業國印度と農村の窮乏……… 2 印度工業と英の阻害策——四 大戰の影響と民衆生活——五 獨立氣運の醸成

朝日東亞年報日誌……… 一九二

# 世界戦局とわが立場

緒方竹虎

## 一 第二戦線の展開と歐洲戦局

スターリンググラード以後ほとんど膠着状態を示してゐた歐洲の戦局は、六月六日午前一時、米英の反樞軸軍が西フランスのセーヌ灣およびノルマンディー半島に向つていはゆる第二戦線を展開してきたことによつてバランスが破られた。米英の本當の希望は、なんとか第二戦線の實施にいたらずして戰爭を終局に導くことであつたらう。一九四〇年、得意の鼓舞勸政策のみでフランスの倒るゝを見殺しにしたことから、それもそれは想像されるし、テヘラン會談で第二戦線を確約した口の下から、英國の新聞が「第二戦線をつくるためには山脈を一つ奪取するだけでも數箇月戦ひ、多數の死傷者を出さねばならぬが、これを英軍將兵に問へばなんと答へるであらうか。かうした條件のもとに第二戦線をつくることは馬鹿氣なことではないか」………「デーリー・エクスプレス」………と平氣で書いてゐたのでも想像されるのである。もちろんソ聯は行懸りからも矢の催促であつたが、結局鼓舞勸政策の線を超えて希望せざる第二戦線を賭けねばならなくなつたのは、反樞軸側が神經戰に破れて、米英らしからぬ乾坤一擲の決戦に乗り出したとみるべきであらう。戰爭開始後に判明したところによれば、最初の豫定は六月五日

世界戦局とわが立場

で、天候のため二十四時間延期を余儀なくされたのであるが、アイゼンハワーはこのうへ延期してはもはや士氣が保たれないといつて假を投げたといふ。それは要するに神戦の破綻であるが、同様のことは第二戦線の決行全般についてもいひ得ることであらう。

この稿を草するまで、獨軍總司令官ルントシュテット元帥は、反樞軸軍の主力の嚮ふところを見究めるために満を持していまだ十分の作戦を展開しない。随つて戦局の歸趨は豫断し得なかつたが、大局からみて第二戦線の開始がドイツのために「久しい待望の機會」であることは言を要しないところで、五月末わが大島大使が總統大本營を訪問したときも、ヒットラー總統は六月上旬第二戦線の來ることを綜合判斷的に豫想し意氣軒昂たるものがあつたとのことである。ヒットラー總統の方略は、要するに全力をあげて第二戦線の撃滅に邁進することである。それがために東部戦線も豫め可能な最大限まで縮小した。イタリヤにおいて反樞軸軍を撃破することは、わづかな投軍の増強によつて少しも困難でないが、わづかの投軍にしるこれを割くことは、反樞軸の牽制にはまることにほかならないので、古都保存の名のもとにローマから軍を撤収する。すべては第二戦線撃滅に全力を注ぐためであり、作戦のうへにも新機軸を出して斷じてこの神機を逸しないつもりだと、自信満々であつたと傳へられる。

この場合最も興味をひくのは、ソ聯の態度である。第二戦線と名づくる以上、定石としては西部と東部の兩戦線が相呼應してドイツ撃滅に協力しなければ意味をなさない。しかるに何人の豫想にも反して、ソ聯が第二戦線展開とともにまづ行動を起したのはフィンランドのカレリア地方で、その後漸次東部戦線全般に動きをみせてはゐるが、これはそも／＼何を語るか。

元來米英とソ聯は、その政體からも、支配階級の思想からも、到底永く提携し得る間柄でない。一九四二年獨ソ戦争の勃發とともに三國の間に提携ができたが、それはドイツといふ共同の敵に對する一時的の苟合で、戦争目的を達した後において米英とソ聯と相容れないのは、改めて説明を加へるまでもない。したがつてこれを米英よりすれば、獨ソの死闘は兩虎俱に傷く意味において思ふ壺であり、第二戦線がテヘラン會談以後も久しく懸聲ばかりで遷延に遷延を重ねたについても、多分に政略的意味があつたと考へられる。ソ聯側においても同様の懸引は戦線の蔭に隠顯してゐる。第二戦線を執拗に督促する半面には、戦後あるひは次の戦争の準備を少しも懈らない。米英とならんの交渉なく出し抜けにバドリオ政權を承認し、十年ソ聯に

亡命してゐた伊共産黨領袖エルコリーを遮二無二これに割込ませて、實質的にイタリアを赤化しようとしたのも、その對土政策と相まつて將來地中海に發言權なしし出口を確保せんための準備であり、最近南コーカサス地方の防備をしきりに増強し、イラン方面に軍需工場の建設を急ぎつゝあるなども、明かに對獨戦備ではなくて對米英の準備としか考へられない。戦後の國際情勢を思へば、米英が獨ソ相闘ふことによつて兩虎俱に傷つくの内心冀つてゐると同様に、ソ聯も第二戦線の展開によつて米英が相當程度消耗することを希望してゐるのになんの不思議もないのである。今度は米英が東部戦線の活潑化を督促する順番であるが、問題は極めて微妙で、第二戦線の進展いかんによつて米英對ソ聯の關係がどうなるかは容易に逆轉を許さなう。

かうした背景のもとにおける戦争は、戦争であると同時に外交であり、戦後處理に關する見通しと算盤とが確然と立つまでは、戦局はなか／＼決定的動きを見せるものでない。それは第二戦線展開前も展開後も同じである。商人國たる英國にとつては、戦争の勝敗は最後の帳尻の赤か黒かのみである。したがつて同盟とか共同戦線とかいふものも、その英國の利益のために利用價値の存する間のみの拘束で、帳尻を黒字にするためには同盟國を見殺しにすることもやむを得ないとする。しからば英國の、あるひは反樞軸の狙ひはどこにあるか。

この意味から、英國の月刊雜誌「十九世紀とその後」の昨年九月號にあらはれた「集成か分散か」といふ巻頭論文はきはめて興味多いものである。すなはち

勢力均衡を、もうお拂箱になつた政策だと相手にしないのは近頃の流行だ。しかしこれは政策ではない。英本國および英帝國にとつては自存のために必要な不易の條件である。歐洲本土において無敵の主人公となる國は同時に英本國の主人公ともなるであらう。これは古い眞理で、前代の英國人には親しい考へ方であつたが、いまやだんだん忘れられようとしてゐる。萬一この考へ方が英國國民の意識のうちから消え去つて國策を啓發しなくなれば、英國の時代はすぎ去つてしまふだらう。英國は大陸において同じ一國を宿敵とする理由がない。英國の唯一の敵は歐洲を支配しようとする國家または國家の聯合である。この敵に對し英國はいつでも用意し、いつでも同盟國を持つてゐねばならぬ。敵が變ると同様味方も變つて行く。昨日の敵は明日の同盟國となり、昨日の同盟國は明日の敵とならう。

英帝國の力に歐洲大陸における同盟國の力を加へれば、英帝國が強くさへあれば、制覇を狙ふいかなる列強に對しても勢力の均衡をとることができよう。この簡単な機構が「勢力の均衡」である。一九三九年九月英國は均衡機構を發動してここに第二次世界大戦がはじまつた。英國は全くこの均衡を保全するために戦つたので、他の理由で戦つたのではない。……(後略) (註)

「十九世紀とその後」の巻頭論文が果してどれだけの權威を有するかはもちろん問題であるが、保守的な英國の、そのまた保守黨的雜誌の巻頭に、英國の支配層と全く思想的に没交渉の論文の現れることは想像されない。一文の趣旨は、英國の戦争目的はポーランド救援でもナチスドイツ打倒でもなく、歐洲における「勢力の均衡」にあるといふのであるが、「英國は大陸において同じ一國を宿敵とする理由がない。英國の唯一の敵は歐洲を支配しようとする國家または國家聯合である」と喝破してゐるところに、もちろん英國の注文通りにはいかぬまでも、今後における米英ソ關係の含み、それに關聯する歐洲政局の波瀾を想像せしめるのである。そして、これは第二戦線の展開後においても何等修正を必要としないであらう。

(註) 同盟通信「海外電報」長谷川才次氏譯

## 二 米國の主正面は飽くまで日本

この歐洲戦局をめぐる空氣は明かに太平洋の戦局に反映してゐる。太平洋戦局と歐洲戦局を通じ、米國の主正面が日本であることは少しも疑問の余地がない。テヘラン會談で米英ソが歐洲第二戦線の打合せをしたといつて、米國の主正面が大西洋にあるごとく錯覺したり、近ごろ有名なニューヨーク・タイムスの軍事評論家ハンソン・ポールドウィンが日本難攻論をとなへ、その論文が一九四三年のピニッツア賞を得たといつて、少しでも安易な觀測に耽つたら、それこそ非常の危険である。それは西歐の第二戦線と呼應して、サイパン方面に對する反攻が會てない熾烈さを示してきたからいふのではない。米國は華府會議以後、さらに溯つていへば一八九九年の支那に關する門戶開放機會均等宣言以後、國策として東洋制覇の野望を露骨にし來つた。それは決して一政府の思ひつきによる政策でない。掘下げていへば、それは二十世紀とともに民族主義の時代のき

たことを意味し、太平洋が民族闘争の中心となつたことを意味するのである。米國で最初に太平洋時代のくることを豫言したのはブ・カナン大統領のもとの國務長官シュエードで、爾來ヘイの支那に關する門戶開放機會均等宣言もその後の對東亞政策もみなこの線に副つて發展してをり、今回の戦争も、これを單なる全體主義對モクラシーの闘争のごとくみるものがあれば、それこそ皮相の觀察といはねばならぬ。アメリカ民族は傳統的に西進の波に乗つてゐる。同時にその無作法な資本主義が支那四億の消費力と地下資源に目をつけたときに、こゝに太平洋をめぐるいつかは世界史的に激烈な民族戦争を展開せざるを得ないのである。

華府會議はたしかに一時期を畫した。當時英國は大戦の創痕から、たゞその世界最大海軍國の面子を保維持するに汲々たるのみで、米英海軍の均等主義のために他のすべての條件を犠牲にしたが、米國はこれを機會に英國をして日英同盟を廢棄せしめて日本を東亞に孤立せしめ、九箇國條約を締結してその年來の門戶開放機會均等宣言を成文化し、さらに五・五・三の比率によつて西太平洋における日本海軍の絶對的優位を封じ去つたのである。華府條約以後日米の衝突は必至の運命であつたといふも過言でない。少くともその後における米國の對東亞政策は、形はいろ／＼であるが、東亞の盟主たる日本の地位を覆すことに向けられたといへる。ルーズヴェルトの増長慢は、世界の兵器廠を以て自ら任ずる一方、英國の頽勢に乗じ、アフリカ、西亞、印度などにまで米國の勢力圏を設定しようとするのがみえるが、これは差當り資本主義の進出で、米國の世界政策の重點がどこまでも東亞にあり、したがつて戦争の主正面が太平洋にあることは、決して見誤つてはならない。さればこそ、スターリンの強要に對し、第二戦線の準備は一應進めてはきたが、日本に對する侵攻は「ニミッツ作戦」の名においてその全海軍を傾けんとしてゐるのである。

## 三 ニミッツ作戦は對日反攻の根幹

しかるに、英國はこの點事情を異にする。英國にとつてはどこまでも歐洲が主正面である。印度を有する英國はその防衛のためにもちろん東亞に對し強い執着を持つてゐるし、支那に多年植まつた勢力も容易に後退させようなどとは考へないで



あらう。幸にして英國が今度の戦争に生残つたならば、彼らは必ずやその傳來の執拗さと手練手管をもつて東亞における失地回復をはかるであらうことは、想像に難くない。しかし歐洲の戦線だけでも受け應へのできない英國としては、いま米國の尻馬に乗つて乏しい武力を太平洋の戦線に割くことは全く不可能である。それで英國はなんとしても太平洋正面に消極的たらざるを得ない。

米國太平洋艦隊司令長官ニミッツは短期の前線視察を行つたのち、二月九日眞珠灣の艦隊司令部において記者團これがニミッツに對し「われわれの主要目標は太平洋をまつすぐに横切り、支那沿岸を指して安全な海洋路を啓開するにある」と語つた。ニミッツ作戦なる言葉の喧傳され出したははじめである。このニミッツ作戦は、いふまでもなくガダルカナルの反攻以來、敵將マックアーサーによつて指揮されたいはゆる島傳ひの北上作戦に對し、一氣に中央進路をとつてフィリピンを衝き、ついでフィリピンを根據地として東南支那海岸にいたる海洋路を確保、それによつて支那大陸に基地を獲得し、日本に對し全力をあげて總反攻を展開するといふのである。このニミッツ作戦はマックアーサー作戦の抄々しくない今日、米國の對日戦略の根幹をなすものと斷じて差支ない。この稿を草する頃ニミッツは眞珠灣にあつて、サイパン強襲作戦を種にいろんな放送を飛ばしてゐるが、東南支那海岸にいたる海洋路の啓開の根幹となしてゐる點は二月九日も今日もなんらの變化なしとみて誤らない。なんとすれば假りにサイパンに基地を得たとしても空襲のみでなんら決定的結果をあげ得るものではないからである。

ニミッツ作戦はいはゞ常識作戦で、もし東南支那にいたる海洋路の啓開が容易であり、注文通り支那海岸に十分の空軍基地を獲得できるものなれば、マックアーサー作戦に優ることいふまでもない。しかしながら、それは日本海軍が悉く海底に沈んだのちのことであつて、日本海軍が満を持して健在するかぎり、支那海岸にいたる海洋路の啓開といふことごと、全くの夢物語りにすぎない。のみならず、英國はクエベック會談の結果によりマウントバッテン軍を編成したが、米國の希望するピルマ公路の奪回も企てず、背面からの支那進出は愚か、皇軍のために無残の敗北を重ねつゝあることは周知の通りである。これは印度の國內情勢に鑑みマウントバッテン軍の氣勢昂らざるにもよるが、そもそも根本において米英の根幹戦略の間に甚しい不一致がある結果にほかならない。

いはゆるニミッツ作戦に對しても、三月十六日のタイムズ紙はその「東亞反攻論」といふ社説において

最近東亞戦略を説く人々は、反輻軸軍が支那に十分な軍需資材を送つて空軍基地を建設し、そこから日本を爆撃するならば、日本を仆することができると信じてゐるやうだが、對日戦にとつてこれほど奇妙な迂路はない。なぜなら日本は島嶼を基地とする海國であり、大陸にどんな基地を設けたところでかゝる海軍國を撃破することは不可能だ。一九四〇年ドイツは英國に近接する歐洲大陸全域を支配し、英國を爆撃圈内に収める多數の空軍基地を有してゐたが、つひに英國を破ることができなかつた。かうした例で明かなやうに、支那に空軍基地を建設したところで日本を破る望みは全然ない。英國の歴史が訓へるやうに、島國は周邊の制海權を確保してゐるかぎり絶対に敗れることがないのだ。日本本土は島嶼群より成り、支那大陸と日本との地理的關係は英國と歐洲大陸ほど密接ではない。對馬海峡はドーヴァー海峡より五倍も廣いし、支那の空軍基地と日本との間の距離はドイツ空軍基地と英國間の距離よりもすつと大きいのだ。(註)

と論じてゐる。ニミッツ作戦がいまでは米國の對日根幹戦略であり、そしてタイムズが多くの場合英國の官邊の意圖を代表する新聞であるだけ注目し値すといはねばならぬ。それはひとり英國の新聞のみでない。米國の軍事評論家ハンソン・ポールドウィンもまた「大陸攻勢論」といふニミッツア賞を獲得した論文のなかに

……支那において日本に決戦を挑むためには、米英兩國が支那に對して多大の武器その他の軍需品軍隊を送ることが緊要である。支那大陸において日本軍に對し勝利を収めんがためには、われわれは支那に大軍を駐屯せしめねばならず、日本本土爆撃のための飛行場を幾つかつくらなければならぬ。眞に軍隊らしい重慶軍を大量に育成するのみでなく、米英軍自身も大部隊を送らねばならない。しかしこゝに問題となるのは補給であつて、これはまたほとんど解決困難とみられる……(註)と論じてゐる。假りにニミッツ作戦の支那にいたる海洋路が啓開されたとしても、支那大陸のほとんどすべての海岸近い要衝を占據してゐる日本軍に對し勝算は立たぬではないかと嘆いてゐるのである。

(註) 同盟通信「海外電報」

しからばニミッツ作戦は眞に不可能か。作戦家でないわれわれはこれ以上ニミッツ作戦の可能か不可能かを穿鑿するの要もないが、いづれにしても現實の戦局は苛烈深刻の度を加へつゝある。われわれはこれに對し、絶對に天皇の御統帥に信頼しながら、水のごとき冷靜さをもつて、たゞ、來るなきを待たず、待つあるを待たばよろしいのである。待つあるを待むの道は

これを一言に盡せば必勝の信念を堅持することである。二月十日の英紙デーリー・メールは、その社説に  
日本を徹底的に破るためにはわれわれは二つのことをしなければならぬ。その一つは日本人をして日本が不敗でないこ  
とを知らしめることで、第二は戦争が採算のとれる事業でないことを覺らせることである。日本人はその祖國がいかなる攻  
撃に對しても敗れないと信じてゐるが、この信念を撃破するためにわれわれは歴史の判決を逆轉せしめねばならぬ……

(註)

と論じてゐる。「戦争が採算のとれる事業でない」とは商人國英國のいひさうなことであるが、日本人の必勝の信念を難物視  
してゐる點は、いさゝか敵を知ると稱しても差支ないであらう。すなはち、假りにニミッツ作戦が支那にいたる海洋路を啓開  
し得たとし、しかして支那に基地を建設するに成功したとしても、その大規模の日本空襲に、日本人が天壤無窮を信じ、神州  
不滅を信じ、必勝の信念を微動だもさせなかつたら、どうするといふのであるか。兵器をもたぬ重慶軍ではお話にならぬし、  
懸軍万里大部隊を米英より輸送し來るときは好んで太平洋の魚腹を肥すもので、すなはちニミッツの支那基地よりする大規  
模空襲は、それが米英最後の希望をかけた日本反攻法であるだけ、あたかも反樞軸が歐洲の第二戦線について感ずると同様の  
乾坤一擲的危機を内包するものにほかならぬ。この意味でデーリー・メールの社説はまさに日本に必勝の道を教へるものとい  
つてもよろしいのである。

(註) 朝日新聞

#### 四 太平洋民族闘争の將來と日本

しかしながら、戦局はなほ前途幾多の曲折を孕み、勝利への道は遠い。假りに戦争がなんらかの形で一段落しても、民族闘  
争の渦巻は今後ますます深刻な様相を呈するのである。不幸なる歐洲は、今日の各民族が抹殺されぬかぎり、宿命的に第三次  
大戦第四次大戦をくり返し、一步々々「西歐の没落」に近づくほかはないであらう。なんといつても今後における世界政治の  
中心は太平洋である。日本を取巻く民族を見よ。米國は一億三千万、ソ聯は二億、支那は四億五千万、印度は三億七千万。こ

の十二億の民族闘争のなかに立つて日本が大東亞の經綸を行つていくのは決して容易な業ではない。今回の戦争がいかなる局  
を結ぶにせよ、米國がその戦争の創痍を癒すとともに再び支那を目指してその資本主義と民族闘争の爪牙をのばして行くこと  
は、あらかじめ想像に難くない。米國民族がその西進を思ひとゞまるのは、大東亞の新秩序が確立され、その爪牙を經濟的にも  
文化的にも打ち込む余地を失つたときのみであらう。それまでの間、この奔放な野望を抑へて大東亞の安定をはかるために  
は、日本はいまから明確な國策の方針をもつて東亞の足許を固めねばならぬ。いふまでもなくそれは支那とソ聯とに對する關  
係である。この間の調整が十分にできなくては、日本の大東亞に對する經綸は立たない。日支間の調整は「支那問題解決」の  
名のもとに兩國の間における七十年來の懸案であり、しかも見方によつてはいまだ解決の緒を得ない問題である。日ソ間の問  
題は、ソ聯の標榜する共産主義のゆゑに、半ば國內問題化して、これこそ玄關口から一步も足を踏み入れてゐない。しか  
し、太平洋をめぐる民族闘争の將來を考へるとき、この調整の問題はもはや一日を緩ゆるを許さない。これは戦後の問題で  
なくて、今日即刻の問題である。第二の太平洋戦争に備へるためではなくて、いまの大東亞共榮國を建設するための必勝の道で  
ある。對支對ソの問題は從來とかく單なる日本對支那、日本對ソ聯の問題として考へられがちであつた。しかし今後は太平洋  
を中心とした民族闘争の問題、もしくは大東亞戦争後における日本の世界政策の問題として考へられねばならぬ。そこには  
従つて、幾多の切り捨つべきもの、切り換へを要するものがあり、眞の大略と雄斷とを必要とする。歐洲戦局の歸趨いかに  
かゝはらず、世界の中心は太平洋に移りつゝあるが、それだけ日本の立場は重大であり、多難である。(六月二十八日)

## 大東亞の戦局と總力結集

## 大東亞總力の結集

本郷 賀一

## 一 政治的大攻勢の展開

「戦争を行ふとは、常に攻撃を行ふことである」とフリードリッヒ大王はいつてゐる。積極的行動こそ戦争の根本原理である。

開戦第一年において、わが國は一大軍事攻勢の展開によつて太平洋上における敵の軍事的據點を覆滅し、米英蘭の侵略的勢力を大東亞の天地より一掃して、侵略者の手より大東亞を解放した。第二年には、この軍事攻勢の大戦果の上に立つて、一大政治攻勢が展開された。すなはち一月九日の新中國の参戦と日と同じうしてわが對華新政策が強力に推進され、十月には日華

同盟條約が締結されて、兩國の關係はその本然の相貌に立ち還つた。八月にはビルマに、十月にはフィリピンに獨立が許容され、インドネシアの住民に對しては參政權が賦與された。タイ國には廣大なる地域が讓渡された。自由印度假政府はたゞちに承認されたのみならず、これにニコバル、アンダマン諸島を與ふる用意があると聲明され、その國民軍編成には強力なる援助が與へられつゝある。これらの諸事實はいづれもアジア諸民族を支援してその自主獨立を回復せしむるといふわが國の道義的外交を最も端的に表現したものであり、またそれゆゑに同時に敵米英に對する雄渾なる大政治攻勢であつた。十一月の大東亞會議はこの開戦第二年における政治的大攻勢の項點に立つたものであつた。

わが國の戦争目的からいへば、開戦第一年において米英蘭の軍事勢力を東亞から一掃したことは大東亞新秩序建設のための地均しにすぎない。米英蘭の羈絆から解放された諸民族を糾合して、アジア本然の姿における統一を確立しなければならぬ。これを經濟的に裏打ちするために、米英的に歪曲された經濟を有機的な一體として再編成しなければならぬ。さらに進んで米英文化の殘滓を拂拭してアジア独自の文化を興隆しなければならぬ。これがわれらに課された當面の最大責務である。

この任務を遂行するためには軍事的に敵の反攻を撃推するとともに、政治・外交・經濟・思想・文化の全分野にわたつてアジアの總力を結集し、その提携協力を一層緊密にして、アジア諸民族の一體化を急速に推進しなければならぬ。これが開戦第三年の歴史的任務である。その最高の指導目標として宣布されたのが實に大東亞共同宣言であつた。

政治的大攻勢は第一年の軍事的成果の上に展開された。中國に「水到渠成」といふ言葉がある。水が流れてくれば、自然に溝ができるといふのである。だが政治的な障壁が水の自然の流れを閉鎖してゐるときには、まづかゝる障壁を除去することが先決問題である。「時」の要素が絶對的に重視されねばならぬ戦時下にあつては、溝渠が自然にでき上るのを待つ餘裕はない。まづ渠を掘つて、水を到らしめなくてはならぬ。溝渠を掘つて水を通ぜしめたものは御稜威の下皇軍將士の善謀勇戦の賜である。アジア十億の民族を合流せしむる大渠は、第一年の軍事的攻勢によつて開鑿された。大東亞會議においてビルマ代表バ・モウ氏が「日本帝國の恩恵によつてわれわれの失はれた傳統と血とをこゝに再發見することができた」ことを力説して、皇軍に滿腔の謝意を表明した。第一年の軍事的勝利は第二年の政治的攻勢展開の基礎をなした。第二年の政治的攻勢の勝利は第三年における全面的攻勢の勝利を約束するであらう。

## 二 總力戦における國民精神の問題

現代の總力戦においては、武力戦と並行して外交戦・經濟戦・思想戦が戦はれる。戦争の勝敗を決定する主たる要因はもとより武力戦にある。外交戦・經濟戦・思想戦はリンネンバッハの言葉をかりると、武力戦の肩の上に立つものであるが、戦争が總力戦の様相を帯びてくればくるほど、これらの補助戦が勝敗決定の上に占むる地位は相對的に高まらざるを得ない。第一次世界大戦において勝敗を一舉に決するやうな勝利が、協商國側および同盟國側のどちらにも得られなかつたことからして、日露戦争までの數千年の間戦争の勝敗を決定してきた武力戦は、もはや勝敗を支配する決定的な要因ではなくなり、經濟戦および思想戦がこれにとつて代つたとの新しい戦争論さへ擡頭するにいたつたほどである。

大東亞戦争においても第二年の政治攻勢は、第一年の軍事的攻勢の成果のうへに展開されたのである。リンネンバッハの言葉をもつて、政治戦・思想戦は「武力戦の肩の上に立つたのである。第三年目たる本年度は政治戦・思想戦が、これまでの武力戦の成果を擴大するとともに、今後の武力戦にいよいよ戦力を發揮する基礎を形づくる。かくて政治戦・思想戦・文化戦が武力戦と並行して有機的に統一された總力戦を強力に推進して、敵を全面的に撃推しなければならぬ。

大東亞戦争はいふまでもなく大東亞の解放のための戦である。大東亞の各國家がその自主獨立のためにたゝかふ戦である。祖國の自主獨立は、その血によつてたゝかひとられなければならぬ。大東亞共同宣言は大東亞各國が共同の意志をもつて、大東亞の總力を結集し、大東亞の解放をたゝかひとることを宣明したものである。大東亞共同宣言の第一義的な意義は、大東亞戦争が大東亞の總力戦であることを大東亞各國が改めて公式に確認し、大東亞の物心兩面にわたる總力をあげて戦争を完遂することを盟約したことにあると思ふ。

ルーデンドルフ將軍がその著「總力戦」において特に強調してゐるところは、總力戦が著しく國民の精神力を必要とすることである。總力戦は國內のすべての人的・物質的資源、なかんづく特に精神力を戦争遂行のために、極度にまで發揮せしむることを要する。國民の一人一人が、「最後の汗の一滴、最後の血の一滴までも絞つて戦ふところの國民生存のための戦争の戦

士」であることを要する。一國の總力戦においてなほかくのごとしとすれば、數國の共同によつて戦ふ聯合戦争において、數國があたかも一國のごとく、強固に團結して、共同の戦争目的のために戦ふためには、各國民の戦争意識は一國の場合に比してさらに熾烈なるを要する。

戦争が長期にわたる場合、國民の團結の強弱いかんは、戦争の勝敗に最後の斷を與ふるものである。國民の精神力は、團結の基礎をなすものである。敵を一舉に壓倒殲滅し得るならば、國民の團結はそれほど決定的な意義をもたないといへるかもしれない。だが、近代戦においてはかかる速戦即決を容易に期待し得ない。いはんや敵が優勢なる場合においては、短期間に敵を壓倒することは決して容易なことではない。戦争が長期にわたればわたるほど、國民の精神力の強弱は、實に戦争指導上の根本問題となつてくる。

このことは大東亞戦争についてみる場合一段と切實なるを覺ゆる。大東亞共榮圈内各國民、各民族の團結を強固に維持し、強化することは、政治の重大なる任務であり、各國の戦争指導者に課された刻下緊急の責務である。

しからば、團結の基礎はどこに求むべきであらうか。強制によつて表面上は團結してゐるやうに見えても、それでは總力戦の苛酷な試煉に耐へ得るものではないことはいふまでもない。ルーデンドルフ將軍は一國の總力戦においては、國民の共通の民族的生活と信仰生活とにもとづく精神力に基礎がおかるべきものと説いてゐる。それならば、大東亞の總力戦においては、その團結の基礎をいづこに求むべきであらうか。

## 三 「聯合戦争」における團結の基礎

タイゼンは「ナチス戦争論」においてかういつてゐる。「多數の國家がある目的のために同盟を結び、一ないし數個の敵國に對して共同の闘争を起す場合に、聯合戦争が成り立つ。聯合戦争の利益は、一般的にみて、同盟國の資材、兵員を利用し得ることである。反對にその微妙なる弱點は、同盟した各國相互間の利害ないしその戦争目的が緊密にかつ永續的に結ばれてゐることが稀なことである。また同盟せる各國が各自勝手に働き、あるひは忽ちにして對立する點である。」

前大戦も聯合戦争であつたが、双方の陣營において、聯合戦争に最も肝要である戦争目的に對する信念が完全なる一致をみなかつた。前大戦の教訓からわれらがこの場合學ばなければならぬ最も重要な問題は、實にこの點である。前大戦では聯合國の協同いかにが、戦局を左右する重大なる要素をなした。同盟側は、戦局がドイツにとつて有利に發展しつゝある場合には、ドイツの指導のもとに緊密に協同したが、一たび情勢が悪化すると、たちまち同盟各國の足なみが亂れ、協調を失つて對立を來たし、ブルガリア、トルコはつひに戦線から脱落するにいたつた。タイゼンの説くやうに、同盟した双方の利害ないしその戦争目的が緊密にかつ永續的に結ばれてゐなかつたし、またかゝる状態をつくり出さんとするドイツの努力が缺けてゐたことが一般に指摘されてゐる。

大東亞における各國・各民族の協力は、タイゼンのいふ聯合戦争においては、まつたく「稀にみる」ところであらう。今次のヨーロッパ戦争においても、ドイツはフランスに進撃するためには、オランダ、ベルギーの抵抗を武力で制壓しなければならなかつた。皇軍は佛印へも、タイ國にも平和裡に進駐したのである。皇軍に戦を挑んできたものは、米、英、蘭軍のみであつて、これらの支配下にあつた住民は、文字通り箝食壺漿して皇軍を迎へ、皇軍の作戦に挺身協力したのである。これは住民がわが戦争目的が大東亞の解放にあることを正しく認識し、この目的達成のために自ら奮つて協同したことを示してゐる。

ルーデンドルフ將軍は、前大戦においてドイツが西部戦線において大攻勢をとつたことは、ドイツ國民をして、その戦争が侵略戦争であるかのごとく解釋せしめ、ドイツ民族死活的戦争であるとの自覺をもたせることができなかったことを深く遺憾としてゐる。國民は自國の死生存亡のための戦争には身を抛つが、好戰的侵略的戦争に對しては、熱意を昂揚させることが少いからである。大東亞戦争の當初にあつて懸念されたことの一つは、大東亞戦争が大東亞各國・各民族の死活のための戦争であることを、大東亞各國民・各民族に十分に認識せしむる準備なくして勃發したることである。しかしながらそれにも拘らず、大東亞各國家・各民族は大東亞戦争がたゞちに大東亞各國家・各民族の死生存亡の戦であることをその全心全靈をもつて感得したのである。大東亞會議におけるビルマ代表の言葉をかりるならば、「大東亞人の傳統と血の繋り」が、米英が必死に企てた隠蔽、歪曲、虚構の宣傳にも惑されず、明確に事態の本質を辨別し得たのである。

大東亞各國家・各民族はその死生存亡を同じくする。まことに同生共死こそ、大東亞全民族の運命である。これよりも強く

深い利害關係があるであらうか。大東亞の各國家・各民族は全東亞の保存獨立のうちに、はじめてその生存を全うし得る。個々の生存は全體の生存によつて、はじめて可能である。従つて大東亞の保全がまた各國家・各民族の目標でなければならぬ。かくて大東亞の各國家・各民族は、その戦争目的をまつたく同じくする。タイゼンが同盟戦争において弱點としたところは大東亞にはまつたく存在しない。「同盟した各國相互間の利害ないしその戦争目的が緊密にかつ永續的に結ばれ」てゐるのである。従つて大東亞においては同盟戦争の利點と強味とのみが残される。さらにこれを敵側の弱點のみをもつ同盟戦争と對置するとき、大東亞同盟の威力は一段と増大するわけである。

#### 四 團結を阻害するもの

大東亞共同宣言の宣布に先立つこと七日、昭和十八年十月三十日、日華同盟條約が締結された。新條約はその精神において共同宣言とまつたく根柢を同じくするものである。共同宣言に盛られた理想を顯現するうへにおいて、最も重大にして困難な問題は日華關係であらう。支那事變は七年にわたつて戦はれ、なほ現に戦はれつゝある。大東亞十億の民族を結集するうへにおいて最大の障礙となるものは、大東亞の内部に叛逆者が割據し、共同宣言の實現に執拗なる妨害を試みつゝあることである。大東亞十億の民族を打つて鐵火の一丸とするためには、まづこの内部の叛逆者の猛省を促し、眞の東亞的自覺に徹せしめなければならぬ。われらは重慶もまた東亞の同胞なるがゆゑに、大兵を進めて屍山決河の間にその覆滅をはかる前に、敢てその反省を要求する。日華同盟條約は、この意味においては、重慶に對し東亞的自覺への跳躍板を突きつけたものといふべきであらう。

新條約は、いふまでもなくわが肇國の大精神に出發してゐる。大東亞諸國が相互に善隣としてその自主獨立を尊重しつゝ緊密に協力して、道義にもとづく共存共榮の秩序を大東亞に建設し、もつて世界全般の平和に貢獻することは、わが國が多年冀念し來つたところである。こゝに日華關係はその本然の姿にたち還へり、兩國はその永遠にたどるべき大道を踏み出したのである。

孫總理は大アジア主義において、「世界文化の發祥地たるアジアは百年來米英の侵略のために衰微した。この時にあたつて日本が勃興したのはまことにアジア復興の出發點である。アジア各國は日本に協力して米英の侵略勢力を一掃し、強固なる團結をつくつて各國の自主獨立をはからねばならぬ」と力説してゐる。この孫總理の言葉は、大東亞共同宣言の精神と、まつたく符節を合はすものがあるではないか。青木大東亞相は第八十四議會において、このわかりきつた眞理が今日までどうして顯現することができなかつたかといへば、それは米英の東亞侵略の野望のためである、といつてゐる。われらもまた大東亞の團結を阻止してきたものは、地理的條件よりも、むしろ政治的原因によるものであると思ふ。それは米英勢力の驅逐によつて、かゝる政治的原因が撤去されるとともに、いはゆる水到り渠成つて各國家・各民族の大同團結の基盤ができたことによつても明かである。

大東亞の諸民族は、高山峻嶺や廣大なる海洋によつて隔離され、相互の接觸を阻止されてゐた。支那と印度との間には、高山高原が介在して兩民族の交通を阻んでゐた。兩者の交通は、その中間地帯に介在する諸民族の活動によつて、斷續的に行はれたにすぎなかつた。日本と南方諸島または印度との交通は大海に隔てられて、相互に影響し合ふほどの接觸を保ち得なかつた。従つて東亞を一つに結合する強靱な紐帯を缺いてゐたことは事實である。しかしながら大東亞諸條件を克服して相互に接觸し得る時代に入るに先だつて、ひとりわが國を除くほとんすべての大東亞諸地域は、歐米諸國によつて侵略され、政治的にも孤立せしめられてきたのである。アジアが侵略者のために隸屬され、壓迫され、搾取された所以のものは、決してアジアが弱かつたためではない。團結し得なかつたからである。そのために各個に撃破されたのである。相倚るべきものが相離れ、相助ぐべきものが相背いたためである。

大東亞會議において、フィリピン代表ラウレル大統領は、大東亞民族が一堂に會し、その結束を固め、共通の諸問題を協議する會議が開かれなかつた三つの原因をあげてゐる。その第一は、米英の大東亞に對する政治的支配および經濟的搾取、第二は、米英が分割統治主義により大東亞諸民族の分割をはかり、大東亞諸民族の士氣、生活力を弱めることに努めてきたこと、第三には、各民族に對する對日増悪心の鼓吹である。「日本は征服慾に燃えた貪慾な帝國主義的國家であり、權威、聲望の擴大を望む國である。もしわれわれが日本と接觸すれば、たちまち搾取、壓迫は免れ得ない。日本はわれわれの朋友・同胞にあ

らずして、仇敵なりと信ぜしめられた」と語つてゐる。大東亞の諸民族は、互に他人としてよりも、仇敵として存在せしめられてきたのである。いまや東亞における米英勢力は一掃されて、アジア諸民族の相互の友情と信頼とを通ずる一大溝渠が開墾されたのである。かつての仇敵は隣人となり、家族となり、分離・隔絶されたアジアが一つになる日がつひにきたのである。

### 五大同團結の根本方針

政治は人間の集團を取扱ふ。問題は人間の集團がいかにして魂を與へられた統一體として編成されるか、といふことである。總力戰における政治の任務は、總力を戰爭遂行の一點に結集することにあるといはなければならぬ。昨年十月の第八十三議會において、國內決戰體制は一應の完成をみた。ついで日程にのぼる問題は、大東亞の決戰體制を可及的速かに確立することである。

第八十三議會はビルマ、フィリピンが相ついで獨立し、大東亞の建設が一大進展をとげた直後に開かれた。この情勢を反映して、議會の外交問題に關する論議が大東亞建設問題に集中したことは當然である。十月二十七日の衆議院豫算總會の劈頭、中島彌團次氏は大東亞總力結集問題を取り上げて、「帝國はいまや大東亞諸國家・諸民族の自主獨立を實現し、帝國と諸國家との關係を闡明しつゝある際、大東亞渾然一體、大同團結せしむるところの根本方針を樹立するの要あり」と強調し、私案として、(一)人種的差別の撤廢、(二)民族の平等互讓、(三)互惠的經濟提携、(四)文化の交流、(五)資源の開發、共存共榮、(六)大東亞共同防衛、の六項目を提唱した。

これに對して重光外相はつぎのごとく答へてゐる。  
「大東亞建設は、もちろん大東亞全域の諸民族・諸國家の自發的な協力が基礎となるのである。従つて各民族・各國家が自發的に喜んで自分のために協力するといふ風にもつて行くためには、しばしば宣明されてゐる帝國の精神、平等にして互惠の觀念をもつて、すべてこれに接して行く。各民族・各國家の要望を十分に達成せしむることが根本になるのであつて、

かかる要望を達成し得られなかつた従来の關係はこれを打破する。すなはちこれが大東亞の解放である。」  
「さやうにいたして、互に互讓敦睦の關係をもつて、一家としての親和の境地を開いて行くならば、必ず大東亞各構成分子は自覺し、奮起して建設の聖業に協力するものと考へるのである。」

「しかしながらかやうな精神は、もちろんわが肇國の大精神であつて、これがたゞちに大東亞だけに獨占的のものでは無論ないのである。世界に向つて古今東西を通じて、何人も承服する立派な天下の公道でなければならぬのであつて、さやうな心構へで政策を進めて行きたい。」

外相の答辯を長々と引用したのは、ここに大東亞共同宣言の基本方針の萌芽をみることができるところである。外相は大東亞團結の根本原則がわが肇國の大精神に出づべきことを強調し、これを平等互惠の觀念をもつて表現してゐる。

大東亞の總力結集は強力なる政治主體の主導によらなければならぬ。この場合においても、戰爭遂行の主體が建設においても、主導的な役割を果さなければならぬことは當然である。従つて大東亞はこの主體を中心として結集されなければならぬ。總力を最大限度に發揮するためには、一つの中心を有する圓でなければならぬ。二つの焦點を有する楕圓であつてはならない。大東亞圓は日本と同心圓でなければならぬ。従つて大東亞圓もまた、わが肇國の大精神によつて團結せしめられなければならないことも自明の理である。大同團結の根本方針はすでに確立されてゐる。問題はただこれをいかに表現するかといふことである。歴史・傳統を異にし、風俗・習慣を異にする各國家・各民族をして、いかにせば正しく理解せしむることができるといふことである。

昨年八月新京で開かれた日滿華三國の興亞團體第二回會議は、はからずも興亞理念の確立について論議が沸騰した。それはわが國を理解すること最も深き滿華兩國においてすら、わが肇國の大精神もわが國民に對して説かるゝがごとき表現形式では、その理解を得ることが容易でないことが滿華兩國代表より指摘されたからである。興亞理念も各國の國情に應じて、それ〴〵適切に表現することが肝要である。わが肇國の大理想をいかに表現して、各國家・各民族を通ずる大東亞の大理想とするか、問題は實にその表現にあつたのである。重光外相の答辯はこの問題に對する解答として注意に値する。

翌十月二十八日衆議院は院議をもつて左のごとき大東亞總驅起に關する決議案を可決した。「東亞十億打つて鐵火の一丸と

なり、共同の仇敵英撃滅に猛進し、東亞を永遠に解放し、もつて世界恒久の平和を確立せんとす」。東條首相は「御決議の趣旨はもとより政府の意圖いたしてゐるところと、まったく符節を合するもので、實に力強き限りである」とのべた。「政府の意圖するところ」はこの日より旬日を出でずして早くも大東亞未曾有の盛觀をもつて出現したのである。

## 六大東亞會議の成果

大東亞會議に陪席した自由印度假政府首班スパス・チャンドラ・ボース氏は、「ビルマ代表が會議における演説で「アジアは一なり」と叫んだが、これを正しく大東亞會議を一言にして盡したのと思ふ」と評してゐる。

大東亞會議は、ボース氏も適切に指摘してゐるやうに、近代世界史上のあらゆる國際會議とまつたくその趣きを異にしてゐる。ナポレオン戰爭後のウィーン會議、クリミア戰爭後のパリ會議、露土戰爭後のベルリン會議、第一次世界大戰後のヴェルサイユ會議、一九二一年のワシントン會議は、ボース氏の言葉をかりると、悉く戰勝國が戰利品を分捕りするための會議であつた。「會議は踊る」との言葉をそのまゝ、これまでの國際會議はすべて陰謀と虚偽と恫喝とに満されたものであつた。しかるに大東亞會議はバー・モウ氏のいふ通り「有史以來はじめて東亞の國民は、東亞は一にして分離すべからずといふ眞理にもとづく、自由にして平等なる同胞として會合した」のである。そこには、なんらの陰謀も虚偽も恫喝もない。それは解放された諸國家の平等互惠、相互援助、緊密協力の道義にもとづく會議である。さうして大東亞における新しき國家間の秩序建設の基礎として道義にもとづく諸原則を確立し、しかもでき得る限り速に實現すべく努力することに固き決意を表明したのである。

大東亞會議の成果について、東條議長は閉會の挨拶において三つの點をあげてゐる。第一は、同會議が東亞の歴史、いな、人類の歴史にはじめてみる盛儀であつたこと、第二に、各國代表の隔意なき意見の交換によつて、戰爭完遂の決意、大東亞の建設、世界平和の確立に對する理想と熱意とが、完全に一致することを相互に確認したこと、第三に、特に重要なことは、いふまでなく、大東亞共同宣言の採擇をみて、明確なる共通の目標が得られたことである。

大東亞會議は、「東亞の民族がその歴史はじまつて以来、はじめて結合することができた」(バー・モウ代表發言)事實を、具體的に表現するとともに、會議を通じて、その協力がいかに相互の信頼と友誼の上に築かれたものであるかを表明してゐる。「いまや大東亞は、もはや單に地理的な名稱ではなく、確固たる基礎の上に立つ共榮圈を標示する」(タイ國代表發言)。

ビルマ代表は十一月二十五日ラングーン歸還後發表した談話において、東條議長のあげた第二の成果を敷衍してつぎのごとく語り、大東亞會議によつて、大東亞諸國家の協力がさらに一段と強化されたことを體認した點を、特に強調してゐる。

「會議は數々の成果を得た。……第二の成果は、大東亞史上はじめて各民族の指導者間に個人的接觸ができたことである。余個人としても汪主席にはじめてお會ひしたが、その結果、余には支那問題の深さがわかり、その解決がいかに複雑微妙をきはめてゐるかを諒解することができた。また滿洲國とビルマの關係も、意想外に密接なことがわかつた。これに對しビルマが接敵地區としての困難を冒して健闘してゐる事實を、各國代表はわがことのやうにビルマの第一線政策を諒解してくれた。この際特に強調したいのは印度問題の解決こそ、アジア問題の解決を意味し、印度の自由なくしてアジアの自由はあり得ないことを各國代表に完全に納得せしめたことである。」

## 七 世界觀の政治化

大東亞共同宣言は、「全アジア人共同の心を全世界に宣明したもの」(東條首相の新年交驛放送)である。「宣言は大東亞各國の戰爭觀念を簡潔強力に宣布せる大憲章であつて、世界歴史の新たな一章はここに書き下されたのである」(東條議長閉會の挨拶)。

共同宣言の原理的な問題については、政府首脳部からも公私の機會においてしばしば説明されてゐるし、各新聞雜誌上でも指導的立場にある人々からほとんどいひ盡されてゐるやうである。ここでさらに蛇足を加へる必要をみない。われらはただ思想戰の立場から、共同宣言の基調をなす彼我の世界觀について一言するにとどめたい。

實際、政治はこれを行ふものの精神態度に遡るものである。ある世界觀の行爲への轉化が、すなはちここにいふ世界觀の政治化である。

大東亞戰爭第二年の最も顯著な特質の一つは、彼我の戰爭目的がきはめて尖鋭な形で表現されたことである。對華新政策の推進による新中國の自主獨立の支援、タイ國への領土割讓、ビルマおよびフィリピンの獨立、インドネシアに對する政治參與權の許容、自由印度假政府に對する援助等々の諸事實によつて、わが國のなすところは、すべてこの戰が仁義のみいくさである本質を明かにしてゐる。わが國は興亡を賭し、鮮血をもつて得たるところを惜みなく與へて、ひたすら大東亞解放の實を具現しつゝある。これは米英的な戰爭觀をもつては、つひに理解し得ないところである。「眞の政治はまづ道德に忠誠を誓ふことなしには、一步も踏み出すことはできない」といふカントの言葉は米英に對しては、所詮、馬の耳に念佛である。

思想戰は世界觀の戰であり、戰爭目的に對する主義主張の抗爭である。萬邦の互惠敦睦を基調とする世界恒久平和を確立せんとするわが道義的世界觀と、利己的野望の達成、世界、なかんづくアジアの永久的隸屬化を目的とする侵略的な米英の戰爭目的とを比較するとき、その善惡、正邪はあまりに明白である。思想戰における最大の強味は道義に立つことである。この點からいつて、われわれは思想戰においても絶對的優位に立つものといはなければならぬ。

米英がその戰爭目的の規範としてゐる大西洋憲章は、冒頭に領土不變更の原則を掲げ、米英支配にもとづく現状維持を宣言した以外には、世界における不公正、不正義を是正して戰爭の起因を絶たんとする主張を缺き、また世界人類の福祉を増進すべき積極的方策をまつたく有してゐない。消極的にも世界平和の樹立に貢獻すべき建設的綱領を含んでゐない。しかもこの原則すら、その後の事態の進展にともなひ、彼らの手によつて弊履の如く捨てられつゝある。昨年夏以來敵陣營の首腦者は頻りに會合して、決議あるひは宣言を公表してゐるが、いづれも勝者と敗者とを對立せしめ、戰勝國が戰敗國に強制すべき和平條件をのぶるにとどまり、建設的な構想にいたつてはその片鱗だに示すことはできない。米英の戰後案なるものが、しばしば發表されてゐるが、これは戰勝を既定の事實であるのごとく宣傳せんとする一流の謀略にすぎぬ。カイロ宣言といひ、スマッツ案といひ、ともに全世界を悉く自己の獨占的支配下におき、特にアジアにおいては過去數百年にわたる壓制・搾取をさらに永久に繼續強化せんとする意圖を露骨にさらけ出したものである。東條首相は第八十四議會の衆議院豫算總會において、「他民族



は、米英にとつては、自己の繁榮追及のための一片の具にすぎない。カイロ會談は明白に、彼らの戰爭目的が侵略と他民族隷屬にあることを告白したものにほかならない」と喝破してゐる。

第八十四議會衆議院豫算總會は大東亞共同宣言に關し、四つの點につき政府の所見を質したが、そのうち大東亞共同宣言と大西洋憲章の本質的相違については、東條首相自らつぎのごとく政府の見解をのべてゐる。

大東亞共同宣言においては、單に大東亞民族だけの幸福を冀つてゐるのではない。すなはちその第五項に「大東亞各國は萬邦との交誼を篤うし、人種的差別を撤廢し、普く文化を交流し、進んで資源を開放し以て世界の進運に貢獻す」といふことを宣明してゐる。人種的差別撤廢の原則は、今日まで遺憾ながら米國の飽くなき侵略擄取のために一片の反古として葬られてきたのである。いまや世界の世紀を畫するこの大戰に、この正義の叫びを着々實現しつゝある。これが完成は一に大東亞戰爭の成否いかんにかゝはるのである。戰爭の目的は、帝國の自存自衛を確保することはもちろんだが、しかし廣義においては全世界に對し政者・被政者、強制・隸屬の關係なき状態を作りあげるといふことにも存するのである。米英の假裝的自由とは、そこに根本的に異なる大きなものがある。

宣傳は政治行動に先行すべきであるといはれてゐる。宣傳もまた政策の實踐の一つであるから、政策と密接に結びついてゐなければならぬし、さらにまたでき得べくんば、現實の施策よりも一步先んずることができればなほ上乘とする。それだからといつて、大東亞會議が一年前に開催されてゐたら、その効果はさらに偉大であつたらうとはいへない。それは宣傳は現實の問題を解決するために行ふ精神的武器であつて、その宣傳を必要とさせる現實の事態と密接に結びついてゐることが必要だからである。正しい現實的な生活認識を基礎として、民衆の行動を導いて行くのが宣傳の任務であるから、そのためには、まず現實の事實として侵略者の桎梏より解放され、あるひはビルマやフィリピンのごとく獨立し、あるひはインドネシアの住民のごとく政治參與の權を與へられてゐるといふ事態の嚴存することが必要である。大衆は物を具體的形態で考へるものである。抽象的な觀念といふものは、それだけでは大衆を行動に導く力をもち得ない。一般に利害關係に觸れないものは、感情を觸発する迫力をもたない。従つて大衆の行動を支配し得ないものである。今は苦しくとも後で樂になる。今は少し損するが後で大儲けができるといふ現實の利害なり、將來の希望がなければ、大衆を行動にまで導いて行くことは困難である。米英の戰

爭目的が現實の利益も、將來の希望も與へ得ないに反して、わが國は第一年において米英蘭の羈絆から解放し、第二年の政治攻勢の展開によつて大東亞共榮圈における創造的協力者たらしむるために、あるひは獨立を許容し、あるひは政治參與を賦與して現實に利益を與へ、將來の希望を約束したのである。實現すべき事態は現實にすでに完成の過程にある。しかも正しいといふ自覺と信念とは、思想戰においても、われらに情熱的な宣傳をなさしめずにはおかない。大東亞の諸國民・諸民族が物心兩面の總力をあげて戰爭完遂に挺身協力しつゝあるのは、興亞の理念がすでに大東亞民族を把握したことを、明示してあまりある。

## 八 東 亞 の 叛 逆 者

大東亞十億民族の總結集に洩れてゐるものに印度と重慶とがある。印度は武器なく、侵略者に屈從を餘儀なくされてゐる。重慶は武器をとつて米英を助け、東亞におけるその尖兵たるに甘んじてゐる。印度は救ふべく、重慶は斷乎として撃滅しなければならぬ。

「大東亞會議より歸國の途次南京に立寄つたスバス・チャンドラ・ボース氏は十一月十八日つぎのごとき聲明を發表して、中國の統一と印度獨立との相關性を強調した。

「アジアの團結にはつぎの二點が要請される。一は中國の統一であり、二は英國よりの印度の解放である。中國の統一は印度におけるわれわれの解放に力強い効果を與へ、われわれの努力を一層容易ならしむるであらう。事實中國々民の統一が印度におよぼす影響は極めて大きく、余はもし中國が統一されるならば、英米の勢力は最後の、かつ最も効果的にアジアから一掃されるであらうことを固く信じてゐる。

「西アジアの米英よりの解放は、一にかかつて印度の獨立にある。従つて、アジアの解放と團結のための運動を促進せしめるか、いなかは、まさに中國々民の手中に歸せられてゐる。」

ボース氏は南京において、今回中國を訪れてその心を悲しませた一事は、中國がいまだその統一を完成しないことである。

従つて自由にして團結せるアジアの創造のために、一段と力をいたさねばならぬことを痛感した、と語つてゐる。殊に中國軍隊が重慶政權によつて、英國の印度に對する支配を繼續し強化せしむるために、印度に派遣されてゐるといふ事實は、氏の心を暗くした。もし蔣介石が果して國民的指導者であるならば、なにゆゑにビルマならびに印度における國民運動を強壓するたために、英國を援助したのであるか。印度はかつて中國に反抗したことはなかつたではないか。そればかりではない。印度は却つて重慶に同情を寄せてゐたのである。昭和十三年ボース氏が國民會議の議長であつた當時、最初の醫學使節を重慶に派遣して、同情と厚意とを表明したくならぬのである。しかるに蔣介石はこの同情に對する返禮として、英國政府とともに印度民衆を打倒するために、印度に軍隊を派遣したのである。

ボース氏は南京から重慶に呼びかけて、蔣介石に懇へていふ。

「余は蔣介石に期待する。中國軍隊に對し、英國政府とともにわれわれを撃つためではなく、われわれが米英撃滅のため印度に向つて進撃する日に、われわれの印度軍隊とともに固く手を握るやうに命ずることを。もし團結した中國民衆をわれわれの味方に得たならば、われわれの義務は遙に容易にならう。余は中國の統一はアジア統一の輝く一ページとなることを確信する。東亞の全國民は日本とともに手を握り合つて、自由かつ團結せる大東亞の實現に邁進せよと呼びかける。」

十月二十一日昭南に自由印度假政府が樹立されて以來、印度獨立運動は不退轉の精神をもつて世紀の進軍を開始し、印度を東亞における最後の牙城と頼む米英に對して果敢なる闘争を開始した。東條總理は大東亞會議において、印度假政府にニコバル、アングマン諸島を割譲する用意ある旨を聲明したが、この二つの島こそ幾多の愛國の熱情に燃ゆる印度の志士が苦難の時を過し、英國の惡慮非道なる壓制に悲憤の血涙を流して倒れた地である。

自由印度假政府は一月七日ビルマに進出して、「印度における米英軍を殲滅し、印度民衆をその桎梏より解放する戰の最後段階に一步を畫した」(自由印度假政府聲明)。印度國民軍が國境を越えて進軍を開始するとき、政府が國民軍と行動をともにして前進することは當然である。三月二十二日休會明けの衆議院において、東條首相は皇軍占領下の印度は自由印度假政府の行政下に歸屬せらるゝ旨聲明した。アングマン島の舊英國知事官邸に翻へる三國旗は、やがてデリーの總督官邸の屋上高く掲げられる日が遠からず訪れるであらう、印度獨立成るのは日は、すなはちアジア解放の日である。中國の奥地にも斷じて大

東亞の叛逆者の蹄跡を許さないのである。

## 九 共同宣言の實踐

大東亞の建設は實に今後の實踐によつて、はじめて到達すべき彼岸である。このことは大東亞會議の席上でも各代表者から交々強調されたところである。すなはちビルマ代表は「新しき東亞の建設は一に大東亞戰爭の鐵火の下で行はるべく、アジアにとりて勝利か、然らずんば滅亡の二途あるのみ」と叫んだ。自由印度假政府の首班は「印度は英國に勝つか、然らざれば永久に屈服するか、二者一のほかはない」と斷言した。フィリピン代表は「大東亞戰爭に日本が完勝して、はじめて大東亞共榮圈の確立が可能である。さればこそ、大東亞戰爭完遂のためには、軍事的協力とのみならず、あらゆる物資を投げ出すことこそ、大東亞諸國家・諸民族の義務である」と喝破してゐる。戰爭に勝つことが第一の要件である。共同宣言の前文にも「大東亞各國は相提携して、大東亞戰爭を完遂し」とある。敵を制壓して、はじめて五原則も現實のものとなる。五原則による共榮圈は、あくまで戦ひとるべきものである。まことに共同宣言こそは、大東亞戰爭完遂即大東亞建設の原則を打ち樹てたものであり、この大原則の實踐こそ、アジア十億民族の崇高なる義務といはなければならぬ。

大東亞共同宣言は、たしかに世界的なヒットである。野球でいへば胸のすくやうなヒットを放つて一壘に出たやうなものである。だが續いて走者を二壘に送り、三壘から本壘に送り込む手が打てるか、どうかといふ點が問題である。第二、第三のヒットが連發されなければならぬ。

大東亞の結集といふことは、結局大東亞民族が、アジア民族としての自覺に徹し、わが國の道義的精神に信頼して、わが國とともに大東亞戰爭完遂に協力することである。従つて大東亞民族をしてその信頼感を深めるやうに指導することが肝要である。敵はいまや大東亞の強固な團結によつて、わが戦力が日一日と増強することをおそれ、必死の謀略宣傳を試みて大東亞諸國家・諸民族を離間反目せしめんと企てつゝある。敵の謀略はイタリアにおいて成功して以來、いよいよ執拗露骨となり、大東亞地域に對する内部擾亂工作はますます活潑となつてきてゐる。この敵の謀略を徹底的に破擯することがアジア民族結集のた

めの第一の任務である。この任務を果すためには逆説のやうであるが、まづ内部の結束を固めなければならぬ。圈内各國がそれぞれ自國々民の戦意を昂揚し、盟邦との協力を緊密にすることに努めなければならぬ。内部の結束を強化することと、外敵の謀略を粉碎することとは、二にして一である。共同宣言を貫く精神を滲透せしむることは、敵の謀略を防ぐ最も堅固な要塞を築くことである。

共同宣言の精神をいかにして徹底せしむべきかについて、青木大東亞相は一月二十六日衆議院豫算總會において、つぎのとくのとてゐる。

「現地においては、大東亞會議後、各國代表が歸國していつれも聲明を出し、あるひは議會において報告演説をしてゐる。その他諸般の方法をもつてそれ／＼の國民に呼びかけ、大東亞共同宣言の理想滲透に努力してゐる。新聞その他の言論機關もこれに呼應して國內の結束に一段の氣勢をあげてゐる。しかしながら各國の情況は一樣でなく、中には建國早々であり、國民の思想を統一し、經濟を安定し、もつて國民を率ゐて共榮團建設運動に足並を描へて行くことに、相當に困難な事情にあることは深く察せられる。私どもは各國指導者の立場に同情し、その政治力強化には、あらゆる協力をいたしてまゐりたい。そのためには、現實の施策において、共同宣言に盛られた理想を事實によつて具現することである。共榮團の理想を説くことはもとより必要であるが、大東亞の實情からみれば、まづ生活の安定を確保しなければその効果は期待できないであらう。戦時下における國民の生活は窮屈を加へてゐるが、殊に大東亞圈内各地域においては、米英の搾取政策の犠牲として國民生活の自給度が非常に低く、米英蘭などの侵略者の本國に依存せしめられてゐたため、その影響は今日においてもなほ相當に深刻である。従つて戦時下の一切の悪條件を克服して現地に産業を興し、物資や技術や資金を送り、あらゆる手段をつくして各地域の民生の確保に協力することがなによりも急務である。寺内南方方面最高指揮官が大東亞戦争第二周年記念日に際し「軍政方面においても、關係諸員の熱誠とその陣頭指揮、ならびに現地民衆の奮起により、治安の確保はもとより、作戦協力、開發建設などは着々軌道に乗り、いまや南方地域總力體制は將に完成の域に到達せんとしつゝあることは同慶のいたりにたへない」との談話を發表してゐることは、まことに力強きかぎりといはなければならぬ。

二月三日の衆議院決算委員會において、山本大東亞次官は共同宣言を現實に實行に移すためには、各國政府機關の提携によるばかりではなく、宣言の趣旨に徹して各國民・各民族のうちに自ら盛りあがる國民運動の連繫によらなければならぬと思ふが、その具體的措置についてはなほ研究中である、とのべてゐる。共同宣言は各國々民運動の最高の指導原理である。従つて宣言それ自身が各國々民運動を連繫する紐帯である。しかしながらその緊密かつ強靱なる連繫をはかるにあつては、多少の困難が豫想されないわけではない。それは各國の興亞運動はそれぞれの歴史と傳統と、その據つて立つ主義・主張とをもつてゐる。従つて運動を推進するにあつては各國の特殊性を考慮し、この特殊性に即應する方策を樹立することが必要である。しかしながらその特殊性を強調するのあまり、各團體がバラバラの行動をとることは、もちろん嚴に戒めなくてはならない。各國興亞團體は共同宣言に示された指導原理にもとづき、それぞれの特殊性を考慮して、その實踐綱領を決定すべきである。さうして統一ある運動を展開するために、興亞團體の横斷的な組織である興亞總力體制を確立し、主觀的な必勝の信念を、客觀的な必勝の體制へ躍進することが、刻下喫緊の急務である。

# 距離と量の大東亞戦局

天藤 明

## 一 敵の反攻主軸線

昨年十一月二十一日中部太平洋の小島ギルバート諸島マキン、タラワ兩島に對する敵アメリカの上陸作戰によつて、最もアメリカ國民が待望してゐるところのいはゆる對日中央進攻作戰なるものが開始された。しかして十二月十九日にはニューブリテン島マーカー岬、同二十六日にはグロスター岬、明けて一月二日にはニューギニア島グンビ岬とそれ／＼上陸、ビスマルク群島、ニューギニア島方面へわが注意を集中せしめつゝ、一月三十日すなはちギルバート來襲からわづかに七十日にしてわがマーシャル群島の要點クゼリン島ならびにルオート島に上陸を敢行し來つた。かくてこれを確保するや二月十七日には内南洋の最要點でありビスマルク、ニューギニア方面への扇の要ともいふべきトラック島に對して機動部

隊をもつて攻撃を加へ來り、さらにわづか五日を置いた同月二十二日その背後の要點たるマリアナ群島方面に同様機動部隊によつて襲撃し來つた。

かく敵が中部太平洋において打つてきた手をみると今度はわが本土への空襲であらうと一應考へられる。また敵もこれを呼號しその氣勢さへみせてゐる。だがわれ／＼はこゝに冷静に敵狀を判断し、敵の眞の企圖をしつかりと把握これに對處するところがなければならぬ。敵のわが本土空襲は地味な作戰、あるひはまた長期戦に飽きやすい米國民衆を引つぱつて行くためにどうしても行はなければならぬ手である。いはば政治的作戰である。されば多大の犠牲を拂つてもあるひはこれを敢行するかも知れない。しかし空襲によつてわが日本を屈辱せしめることができないことは彼らといへども自らよく承知してゐる。對獨爆撃のごとく熾烈なる空襲を敢行してもなほ空襲による勝利は望むことができないのである。まじ

てわが本土に對しては地理的條件、航空機の性能からして對獨爆撃のごとき大空襲の不可能なるにおいてをやである。われわれは中部太平洋において敵が打つてきた手に眩惑されて敵反攻の本筋を見逃してはならない。

敵反攻の主要作戰はあくまでソロモンからビスマルクを経てニューギニアの北岸を西に進む線である。わが最前線の重要據點ラバウルを攻略してニューギニアから東印度のわが資源地帯に迫らんとするマックアースー攻撃であるといふことができる。しかしてこれが促進をはかりわが兵力の分散を行はしめ、いはゆるわが内線作戰の利たる隨時隨所に兵力集中を行ひ得る態勢を採らしめざらんとするもの、具體的にいへばわがあらゆる兵力をソロモン、ビスマルク、ニューギニア方面にのみ集中せしめず、他に引きつけてマックアースー反攻の主要作戰を容易ならしめんとするものが

- 一、中部太平洋から空母を中心とする機動部隊によるニミッツ反攻、いはゆる中央進攻
  - 一、アラスカ、アリゾナからする北方進攻
  - 一、ビルマ、スマトラ方面を狙ふマウンテンバットン反攻
  - 一、在支米空軍の蠢動、支那本土からの空の反攻
- などである。これらを稱して敵は總反攻といつてをり、各個の反攻においてそれ／＼独自の狙ひと意義をもつてゐるこ

距離と量の大東亞戦局

とはいふまでもないが、これを大局的にみるに、ソロモン、ニューギニア方面からするマックアースー反攻を主軸に動いてゐるとみてよからう。右のほかに特定の反攻と名づくべきものではないが、わが戦力低下を狙ふ潜水艦戦の強化を見逃してはならない。また敵の空からする反攻中最近特に注目すべきは、

## 二 東印度の資源を狙ふ

敵の反攻態勢は大體右のごときものであるが、さてしからばなにがゆゑに敵はソロモン、ニューギニア方面の反攻をもつて主要作戰とするか、それにはつぎのごとき二つの現代戦特有の理由があり、現代戦の本質に徹するならば敵の企圖はおのづから判然とするのである。すなはちまづ第一の理由はマックアースー反攻は資源作戰である。第二の理由は航空機作戰であることを銘記すればよい。

資源作戦とはわが戦力の根源をなす資源地帯である東印度を奪回せんとする事である。現代戦は大消耗戦である。いまいづれの國をみてもストックによつて戦つてゐる國は一國たりともないことはいふまでもない。飛行機にしろ艦船にしろ戦車、重砲、弾薬にしろ、すべて前線の大消耗に對して十分なる補給を行はなければならぬ。補給の不十分が戦ひを不利ならしめたるは獨ソの東部戦線をもつてもまた樞軸軍のアフリカ戦線撤退をもつてもわかる。補給とは銃後の策源地から前線へこれらの軍需品を持つて行くといふそのみではない。銃後において前線の需要に應ずべく生産し、かつ送るといふことである。現代戦は生産しつゝの戦ひである。いはゞ生産戦である。従つてこの生産に必要な資源に不足を來せば戦の勝敗は自ら決する。マックアサーいな敵米英はこれを狙つてゐるのである。われらの手から東印度を奪回し、軍需資源を枯渇せしめ、しかして逆に自らの戦力に大増強をはからんとしてゐるのだ。たとひ帝都が廢墟と化さうとも地方の生産施設さへ健在であり南方から資源を運び得るならばわが戦争遂行力には微塵も動搖を來すことはない。だがもしかりに東印度を奪回されたなら、いな奪回されないまでも油田地帯が敵爆撃のため潰滅に瀕したらどうであらう。我々に飛行機が幾萬台あらうとも、不沈軍艦が幾百隻あらうと

も、さらにまた幾十萬の戦車があらうとも油なくしては動かすことができない。玩具同然と化してしまふ。こゝに東印度確保、その前衛たるソロモン、ニューギニア、ビスマルクにおける敵進攻企圖破砕の重要性があり、敵のマックアサーい反攻をもつて地味ながらも最重視する所以があるのである。さらに一步進んで考へるならばこの東印度こそは永遠の寶庫である。たとひアメリカ加州における石油を掘り盡してしまふ時代がきてもこの東印度には太陽と黒潮の恵みを十分に吸収し、液體燃料の原料たる砂糖、ゴム、バーム、コブラなどの資材植物は永遠に繁茂し、これを大東亞共榮圏に供給してくれる。將來有機物をもつて無機物に代へる時代がきても東印度で十分であらう。さらにまた東印度を制してをればおのづから西南太平洋と印度洋を制し得る。結局東印度を確保することは大東亞諸民族が永遠に繁榮する資格を有することである。これはまた敵米英にとつて不愉快きはまることである。世界制覇の野望をいだけ米にとつて全く我慢ならぬことである。かゝる意味においても東印度が彼らに重要であるといふことはわれ／＼以上に彼らの方がよりよく知つてゐるといふことも見逃せない事實である。

### 三 航空基地の好適地を狙ふ

現代戦は航空機戦であるといつても過言ではないほどその重要性が加はつてきた。今次の戦争において陸上戦における航空機の重要性を全世界に知らしめたのはドイツであらう。ポ；ランドを席卷し、またゞく間にフランスを降したあのドイツ軍大活躍、大勝利の主因は航空機の壓倒的優勢にあつたのだ。しかして航空機が海洋作戦においてもまた絶對性のものであることを全世界に知らしめたのはわが海軍航空隊である。ハワイ海戦にあの大戦果をあげ、マライ沖海戦では不沈を誇つた英戦艦プリンス・オブ・ウェールズを海底に叩き込んだ大勝利こそ世界戦史に航空機の重要性、海戦における必須性を刻みつけたのである。アメリカもイギリスも敗者の立場において航空機の絶對必要性を味はつた。特にアメリカにおいては太平洋艦隊の大部分が眞珠灣底に屠られてしまつた。艦船よりは飛行機の方が短時間で大量に生産できるといふ考へも手傳つて、たゞちに對日大反攻は飛行機によるべきであるとなしてこゝに大量航空兵力による反攻が決せられたのである。年産六萬台から十二萬台へと大量生産を企圖し一方には學生を總動員、搭乗員の急速養成に乗り出した。わかき純

眞なる血は彼ら指導者の巧みなる宣傳に躍り、そして祖國のために高鳴つた。二十數萬に達する學徒が續々と航空隊に入隊、こゝに質においては劣弱とはいへ量において我にはるかに優る大量航空兵力の蓄積に成功した。かくて彼らはいざ反攻を考へたとき、こゝに航空機の弱點に氣づいた。それはなんであるか。いふまでもなく飛行機は飛び出すべき滑走路を必要とする。そしてまた持つて行くべき爆弾、魚雷を貯藏すべき施設、飛行機そのものを置くべき格納場所、さらに飛ぶために缺くべからざるガソリンを保存すべき施設、搭乗員、整備員の宿舎を必要とする。さらにこれを護る高角砲陣地もなければならぬ。そしてこれらすべてが敵の爆弾に破壊されざるやうでできるだけ堅固なものにしなければならぬ。いはゆる航空基地が必要なのである。これらの諸設備を巧みにまとめあげて海上を自らの意圖するところへ思ふまゝに機動し得るやうにしたのが航空母艦である。だが空母は自ら搭載機數に制限を受ける。大量航空兵力を活用するためには大量空母を建造しなければならぬ。だが空母の建造には相當の日數が必要である。これではたゞちに大反攻を起すには間に合はぬといふのが開戦後間もないアメリカ作戦首脳部の考へであつた。そこで陸上にこの基地を求めそこから反攻の第一歩を踏み出さねばならなくなつた。しかしさらに深慮するに現代

で航空戦は陸上飛行場を作つてもそれが滑走路一本のみでは十分でない。いざ敵機空襲の場合、あるひは多数の飛行機、戦闘機も攻撃機も一斉に飛び出し舞ひ上れるやうにできるだけの滑走路を必要とする。さらに滑走路が多ければ多いほど、一本二本と敵の爆撃にやられても他の滑走路を使用することができて、敵機の跳梁にゆだねずにするのである。また滑走路が多ければいかなる方向の風が吹いても離着陸に不便を来さない。かゝる飛行基地をつくるには相當の廣地域を要し、條件も備はらねばならない。さらにもう一つ留意すべきことはかゝる飛行場ができてこれが一箇所では十分でない。一飛行場のみでは何百何千といふ大量航空兵力の展開ができない。そしてまた一飛行場のみの場合はこれが敵の大空襲によつて制壓されたならば、これを修理し飛行機その他を再整備するまではもう航空兵力による戦闘は不可能となり、敵に制空権を把握されてしまふことになる。従つて滑走路を澤山持つ飛行場が集團をなしてゐなければならぬ。甲飛行場が空襲されてゐる間に乙丙の飛行場から飛び出して戦闘を行ふことができ、甲、乙、丙の各飛行場が制壓されても丁、戊の飛行場から飛び立つて戦闘を継続し、その間に甲、乙、丙をそれ／＼復活することができる。しかして飛行場が多ければ多いほど、大量航空兵力が展開できる。アメリカが

自らの大量航空兵力を活用するための作戦計畫を練つたと  
き、おそらくソロモン、ニューギニアの線をとることに一致して決定したにちがひない。アリニューシアンをみても大量航空兵力を展開するにはあまりにも島が小さくまた岩山が多く飛行場設定に不便である。中部太平洋をみても同様である。ウエーキにしろマーシャル方面にしてもいづれも小さな珊瑚礁で大空軍の展開は不可能である。されば支那本土の日本軍非進駐地帯はどうであるか。なるほど大飛行場を建設し得る地が無数にある。これを建設して飛行機を印度方面からどしどし空輸することもできる。だが最も肝要なガソリンと爆弾をいかにして運ぶか。唯一ともいふべきビルマ・ルートは完全に日本軍に押へられてしまつてゐる。空輸するには数千機といふ輸送機を必要とする。これまた不可能なことである。従つて支那本土も當分駄目といふことになる。かくして唯一の途はソロモン、ニューギニア方面のみといふことになつた。ソロモン群島はほとんど海岸からすぐ山岳地帯に入るか、さもなくば濕地帯であるが、彼らの土木技術をもつてすればどうやら飛行場の設定が相當箇所に行ける。ニューギニアにおいては平時金鑛開發のため山中ならびに海岸に幼稚ながらも多数の飛行場がある。これを整備すればよい。さらに好適地が相當ある。こゝに大量航空兵力の展開ができる。しかも日

本の最も重要地帯とする東印度の資源地帯に接近してゐる。かくて彼らの本格的反攻はわが資源地帯の奪回と航空機の大々使用といふ二點からソロモン、ニューギニア方面に向けられ、昭和十七年八月七日ガダルカナル島ルンガ飛行場攻撃によつて開始されたのである。

#### 四 航空機の量による反攻

しからば彼らはいかにして大量空軍を活用し來つたか。彼らは個々の戦闘ならびに航空技術は劣弱である。だが劣弱なるまゝにこれを大量使用することによつて目的をある程度達し來り、これが同方面におけるわが軍の押され氣味なる主因をなしてゐるのである。彼らの空軍用兵をつぎに二、三検討してみることしよう。

一、敵がまづ敵前上陸を行はんとするとき、わが飛行基地に對して連日大空襲を敢行し來る。たとへば昨年十月三十一日ブーゲンビル島トロキナ岬に上陸を行つてきた際における敵空軍はニューブリテン島ラバウル、ブーゲンビル島ブイン、あるひは同島南方に位する小島飛行場バラレ、同北方のブカ島ブカ飛行場などに對し百機二百機、ある時は三百機を超える大空軍をもつて襲撃し來つた。この際敵は小型爆弾

をもつてわが飛行場における飛行機の破碎を狙つてきた。これを飛行場あたり一面ばら撒くときいかに上手に掩蔽中に格納しておいても爆弾の貫通しない地下格納にあらざるかぎりその都度幾分かの損害を被る。バラレのごとき小島に對しては全島に小型爆弾を撒きちらして行つた。また時限爆弾を飛行場附近一帯にとりかまはず落して行く。そして飛行場の修理を延滞せしめる。設営隊員が夜を徹して辛苦の末修理すればもう夜明けとともに飛來、またも破壊して行くといふ状況であつた。これを行ふ飛行機は決して一機よく一艦を屠る名手でもなくともよい。たゞ飛行場上空まで指揮官に追従し來つてその命令一下投弾すればよいのである。しかもかゝる多数の爆弾を投下するにはどうしても多量の航空機を必要とするのである。かくして残念ながらわが基地ブイン、バラレ、ブカは敵のため制壓されるところとなり、つひに敵はラバウルから飛び立つたわが海軍により多大の犠牲を出しながらもトロキナ上陸をなし得たのである。

一、十月三十一日未明、敵輸送船團が護衛艦隊と直衝機を配してトロキナに迫り來つた。これを發見した哨戒機は觸接を保ちつゝたゞちに基地に打電する。わが海軍はあるひは魚雷をいだし、爆弾をいだいて相ついで基地から發進、戦爆連合の編隊はまづ敵の護衛艦隊に突撃、敵直衝機の抵抗を排

除しつゝ痛烈なる雷撃戦を敢行、多大の戦果をあげた。ついで敵輸送船をも相ついで撃沈し去つた。だがこの間に打ちもらしたのがトロキナにたどりつき、そして上陸を開始した。わが海軍は二度三度と魚雷、爆弾を搭載しては攻撃に向つた。この間に残念ながら自爆機も出る。多数の被弾機が出る。自爆は免れたが敵弾のためやうやく基地に降りつく機が多い。かゝる機はたゞちに魚雷、爆弾を積んで再び飛び出すことはできない。修理に時間を要する。あるひは永久に使用不可能なものも被弾機の中には多いのである。かくて二回、三回と同じ機で攻撃を繰り返すうち、機数はだん／＼と少くなる。いかに世界最優秀のわが搭乗員とはいへ一日に三回も四回も攻撃に行くことは死よりも苦しいことである。かゝるとき敵はさらに新しき船團に新機の航空兵力を配してトロキナ上陸地点目指して北上し來つた。敵の北上が判明してをりながら、これを攻撃に行けない。それは航空兵力が寡少であるからである。とにかく敵はトロキナ上陸作戦において多数の艦船と航空機を失つた。この大戦果が大本營から發表され、國民のうちには戦ひの本質を掴まないでこの戦果のみをみてわが大勝利と喜び、戦果はあがるが戦局は不利となりつつあるを把握せず心に緊張を失ふ結果を來すことになつたのである。いづれにしても大量航空兵力さへあれば敵をして

トロキナに上陸せしめずして撃退し得たことは間違ひないのである。

一、トロキナ岬においてわが陸海の守備部隊と敵上陸軍との間に痛烈なるジャングル戦が展開された。戦闘が激烈になればなるほど兵力の増強、食糧彈藥の補給が必要となつてくる。わが方も敵もこれに對し補給の途を講じなければならぬ。だがそれにはやはり制空権を確保しておかないと輸送船が接近するとき敵機のために撃沈されてしまふ。そこでトロキナ上空において制空権の獲得に大空戦が展開される。わが戦闘機隊はたちまち敵戦闘機を撃墜し敵機を追ひ散らし、攻撃機は敵輸送船に命中弾を加へて大損害を與へる。だが飛行機はいつまでもトロキナ上空にとゞまることはできない。基地に歸らねばならぬ。わが機が基地に歸ると敵はたゞちに新機の船團と新機の飛行機をもつて北上し來る。この飛電一閃わが海軍はたゞちに出撃、赫々たる戦果をあげて歸る。だが敵はさらに他の船團を他の航空兵力が直衛して出動し來る。かく新機々々が出撃し來つては空戦そのものにおいてわが方がつねに勝利を得ても、トロキナ上空において時間的に制空権を握つてゐる間は敵の方が多い結果となる。下手でも數量の多い方が時間的制空権を握ることができるといふ結論となり、結局トロキナに對しては敵の補給の方が十分に行はれ

る結果を招來することになるのである。

一、あるひはまたわが艦船を攻撃し來る場合においてもわが機のごとく一機一發必中でなくても、多数の飛行機をもつてをれば戦果をあげることができる。すなはち數十機、數百機をもつてわが艦船の上空に覆ひかぶさつてしまふ。この際指揮官機一機のみ優秀であればこの大群を巧みにわが艦船上空に誘導することができる。かくて指揮官の命令一下投彈するならばいづれかの爆弾がわが艦船に命中する。かくて劣弱なる航空機といへどもかゝる方法によりある程度の戦果をあげ得るのである。

以上は數例にすぎないが、敵はかくのごとき大量航空兵力の活用によりてじり／＼とソロモン方面から押しあげてきた。ガダルカナル、コロバンガラ、ニューブーチア、ベラベラ、モノ、ウッドラック、トロブリアンドの島々に多数の飛行基地を設営し、飛行機を展開した。ニューギニア方面においても東端のラビからブナ、モロベ、サラモア、ラエ、フィンシハーヘンと海岸づたひに基地を進め、さらに密林地帯に數へ切れぬほどの飛行場を建設した。こゝにおいて敵はこれらの基地から飛ばす大量機によつて、あるひはブーゲンビル島へのわが補給を断たんとし、さらにラバウルへの補給路を脅かし、そしてまた連日連夜わが基地ラバウルに大

空襲を敢行し來つた。わが海軍は寡兵よく怒濤のごとき敵大空軍をがつちりと受け止めて、大撃墜戦を展開した戦果は偉大であつた。だがわが基地航空兵力は次第に減少せざるを得なかつたのである。この機逸すべからずと敵は昭和十七年十月南太平洋海戦に保有空母大半を失つて以來黙々として建設しつゝあつた艦隊航空兵力をくり出してきたのである。わが基地航空兵力はもはや殲滅し得たりと信ずるや、わが基地航空機の威力圏内に堂々と空母を中心とする機動部隊を出撃せしめてきた。基地航空兵力と艦隊航空兵力の兩刀をもつて一舉にラバウルにおけるわが航空兵力はもろろん、水上艦艇、地上陣地、あらゆる兵力の一舉潰滅を期して一大攻勢を展開し來つた。しかしてトロキナを足場にラバウル奪回を狙つたのである。だがそこにわが作戦の妙、兵力集中の用兵の至妙さが遺憾なく發揮されて、敵の企圖は完全に破碎され、ハルゼー艦隊は遂に潰滅の運命をたどつたのである。これが六次にわたるブーゲンビル島沖航空戦である。ハルゼー艦隊は大半ソロモンの海底に消えても彼らのソロモン、ニューギニアから東印度への意圖は決して消え去つたわけではない。いなそれどころかますます／＼圖魂を燃やして狂氣のごとくこれを貫徹せんとしてゐる。彼らはさらに一段と基地航空兵力を強化してまたも制空権下に一步一步と陸上基地の推進をはから

んとするブーゲンビル島沖航空戦以前の着實なる戦法に立ちかへつた。こゝにおいて注目すべき現象は艦載機の使用である。いかに重大なる輸送力を有するアメリカとはいへ連日何十機といふ消耗に對しては、思ふやうに米本土から前線へ陸上機を送ることはできない。しかもこの連続大攻勢の手を抜いたのではそれまでの犠牲と労苦が無に歸する。そこで最も早く輸送できる艦載機を補給し、これを陸上にあげて使用しはじめたのである。艦載機は組立てたまま、輸送空母に積み、前線基地に近づくとこれを艦上から飛ばせばたゞちに使用でき、陸上機のごとく荷揚げしてさらに日数を要して組立てる必要がないから急速補給には最も都合がよいのである。焦る敵はつひに艦載機を陸上に揚げて大攻勢を繼續しはじめた。しかし彼らの當面の目標であるラバウル攻略を果さんと必死の反撃をラバウルに集中し來つた。なにゆゑにラバウル攻略にあらゆる犠牲を敵は惜まないであらうか。

### 五 西南太平洋戦線

ラバウルは航空機をはじめ水上艦艇その他あらゆる點において最前線における要衝である。敵がニューギニアの北岸を西進して東印度に達せんとするにはいかにしてもこのラバウ

ルを攻略しておかないとこれを敢行することができない。なるとなれば西進すればするほど補給路は伸び、ニューギニアが密林地帯で陸上補給が不可能であるため、この補給は海路に頼る以外に方法がない。しかるにラバウルが健在なるかぎり彼らはこの補給路を断ち切れ、しかも彼らの前進部隊は腹背に敵を受けて自滅のほかはなくなるのである。さらにまたラバウルは特に飛行機の展開力においてすぐれてゐる。この方面における唯一である。彼らの土木技術をもつてすれば數千機を悠々常置できるであらう。これを手に入れることによつて敵の大量航空兵力はますます活用度を上昇せしめることができる。だが逆にわが國力が充實し、航空機の大量生産が可能となつた暁には、またこゝに大量の航空兵力を展開し得る。絶対に優秀なる航空兵力を多量に展開されたのでは敵は一たまりもなからう。一瞬の間に敵航空兵力は制壓され、ソロモン、ニューギニアにおいて反攻どころか後退を餘儀なくされてしまふ。こゝに敵が「日本に時を與へるな」と呼號し遮二無二ラバウルを奪回せんとする大きな理由がある。だがいかにしてもラバウルは堅固であり、攻めても攻めてもラバウル上空において敵機は大損害を被る。こゝにおいて彼らが考へたのは第一にわが兵力の分散であり、第二にラバウル包圍態勢を完成して直接この強固な陣地を衝かず、この補給

路を遮断してその自滅をはからんとする方法をとり來つたのである。

その第一策たるわが兵力分散を狙ひ、同時にブーゲンビル島沖航空戦における敗戦をも糊塗せんとする意圖をもつて打たれた手が中部太平洋におけるニミッツ攻勢で、昨年十一月二十一日のギルバート諸島タラワ、マキン兩島の上陸作戦となつて現れた。敵はこゝにおいても、艦艇においてまた兵員においてハワイ海戦、ブーゲンビル島沖航空戦に比すべき大犠牲を餘儀なくした。だがとにかく上陸に成功し、一應わが注意を引きつけておきながらたゞちにニューブリテン方面においてラバウル包圍態勢の第一歩ともみるべき手を打つてきた。すなはち十二月十九日ニューブリテン島マーカス岬に上陸を開始し、さらに一週間おいて二十六日にはマーカス岬と反對側のグロスター岬へと出撃し來り、またニューギニアにおいてフィンシハーヘン方面において對峙するわが陸上部隊の背後へ廻つて、一月二日グンビ岬へと矢つぎばやに上陸を敢行し來つたのである。かくして彼らはいづれも上陸地點に飛行場を設定し航空基地によるラバウル包圍態勢を着々と進めつゝある。ラバウルを敵が奪回することはニューギニアの北岸を西進することを最も容易ならしめると同時に、この線を西進することはまたラバウル包圍態勢を整へることであつ

て、そこには相關性がみられる點も留意すべきであらう。しかして敵の作戦を視るに、敵はわが強固なる陣地を直接衝かずして、つねにその背後に迂回し、こゝに航空基地を急速に設置してその補給路の遮断を狙つてゐる。ソロモンにおいてニューブーゲンビリア、ソロモン諸島の背後ベラベラ島への上陸、あるひはブーゲンビル島ではブインの背後トロキナへの上陸、ニューギニアにおいてはラエ、サラモアの背後フィンシハーヘン上陸、さらに前述のグンビ岬上陸、北方においてキスカの背後アツ上陸など、いづれも類を同じくするものである。この作戦は彼らの中央進攻路においても現れてきた。すなはちマーシャルへの進攻において敵は最も敵基地から近いマロエラップ環礁や、ミレ島、あるひはまたヤルト島に來らずして、マーシャル群島の中央部背後に位置するクゼリン環礁に上陸戦を行ひ來つたのである。これはマーシャル方面における制空権確保によつてクゼリン環礁以外のわが地上部隊への補給路を断ち、自らは犠牲を出さずしてこれを收めんとする意圖にほかならぬ。さらに敵の中央進攻を大局的にみると、そこにはわが兵力分散の企圖があると同時に、マーシャル上陸からトラック島、サイパン、テナン、グアム、パラオの諸島攻撃へと打つてきた敵の一聯の作戦は、大きくラバウルを迂回しその補給路を痛めるこ



とによつてこれを孤立化せんとする組織的戦法であるとみられる。最近敵はまたラバウル東方の洋上に位するグリーン島にも上陸し來つた。また二月二十九日にはラバウル西方のアドミラルティ島に有力なる兵を上陸せしめた。かくてラバウル周辺においても包圍態勢の手を打ち、また大きくその背後からも中央進攻の名において手を打ち、あらゆる方途をもつてその攻略に意を用ひてゐるのである。しかしてこのラバウル攻略戦の根本はあくまでニューギニア西進の意圖から出てゐることを忘れてはならぬ。それはすでに敵國內の評論にも現はれはじめサンデー・タイムスのごときは、「西南太平洋の主力はニューギニア作戦に集中し、ニューギニア西部に對する攻撃を開始すべきである。同方面の日本軍はすこぶる強力であるが、強烈な空襲と背後への上陸敢行によつて案外はやく前進できるであらう」、などとのべ彼らの眞意を吐露してゐる。

## 六 中部太平洋戦線

さて敵の中央進攻はあくまでマックアサー作戦の推進的作戦とみるが、たゞこの中央進攻なるものを單獨的にみるとき、敵の謀略的意圖も含まれてゐるが、そこにはまたほかに

派生的意圖が存する。それはわが本土空襲への足掛りであるといふ點と、このわが防衛線を突破して支那本土との連絡路を達成、同時にわが本土と南方共榮國との連絡を切斷しつゝ支那本土を基地にわが本土の爆撃に専念せんとする野望を成就せんとするの二點である。その可否は後述するが、この敵の中央進攻において注意すべきことは、敵がギルバート諸島についてマーシャルに上陸し得たこと、さらに空母をもつてトラック島あるひはマリアナ諸島に攻撃を加へ來つたことで、これは相當の犠牲を拂へば大空母群を動員しての大艦隊航空兵力を用ひることによつて、これ等の諸島にたとひ航空基地があつても作戦し得るといふことである。わが内南洋の島々はいづれも小島である。従つて大航空基地の設置は不可能で、大航空兵力の展開は困難となつてくる。ゆゑに敵の多數の空母から飛び立つた大航空兵力に對抗するには限度が生じ、自然その制壓を受ける結果となる。そこで敵のこの大空母群を破るには、どうしてもわが方においてもこれに對抗し得るだけの空母群の充實をはかるべきで、空母は空母によつて制壓しなければならぬことを痛切に感ずるわけである。

さて彼らはいはゆる中央進攻に對する結論をのべねばならないが、その第一點たるわが本土空襲については、おそらく犠牲を覺悟のもとにこれを敢行すればでき得るであらう。だ

がサイパン、テニヤン、グアムのごとき小島に迫つてさへも敵は大した戦果をあげ得ずに空母多數を犠牲に供してゐる。まして全國いたるところに基地を有するわが本土に接近するや、いづこからでもこれを攻撃し得る態勢にあるにおいて、わづか一度の空襲において敵出撃空母の大半を失ふであらう。いかに米が空母陣を誇るといへども、よほど空母不沈の成算がなければその愚は敢て行はないとみるのが至當であらう。米空母の現有勢力は海軍次官フォレストルの説明をそのまま受けいれてもエセックス級の制式空母はあづかに六隻で、インディペンデンス級の改装巡洋空母が九隻、ほかの五十隻は商船その他高速船の改装による輸送または商船護衛用の空母である。まだわが本土空襲を連続的に敢行するにはあまりにも兵力が寡少すぎる。地中海において伊の要塞バンテラリヤ、ランベツィサを空爆し艦砲射撃のみによつて降伏せしめ、ローマその他イタリア主要都市を空爆することによつてつひに伊をして降伏せしめ得た當時は、米もいかに空母を犠牲にしてもわが本土を大空襲することによつて降伏までとは行かなくても、空母の犠牲と差引きプラスだけの効果を収め得ると信じたに違ひない。だが猫額大の珊瑚島トラフに連日二日にわたる艦砲射撃に引續いて大空襲を敢行、三千トンの弾丸を叩きこんでなほ降旗も掲げないのは日本軍全滅

と敵は信じたであらう。しかるに敵が上陸を開始するや残れる全員が立ちあがりあらゆる防禦手段を請じ、敵をして未曾有の損害を被らしめて一兵残らず玉碎し、マキン、クニゼリン、ルオットにおいてしかり、敵は降伏を知らざる大和民族にいまさらながら戦慄を覚えてゐるであらう。かくのごとく物心両面において爆撃効果の少くしていたづらに犠牲の多い空母よりの本土空襲は、政治的空襲以外には彼らも斷行するにいとまか躊躇の體といふのが眞實であらう。最近強氣のニミッツも「日本を最も有効に爆撃するにはなんといつても支那本土の基地を利用することである。航空母艦による日本本土爆撃も不可能ではないが、歐洲戦域における經驗に徴すれば陸上の目標物に對しても相當の爆撃効果を與へるためには大量の爆撃を必要とすることがわかつた。しかしながら米海軍は機會さへあれば必ず日本に「一撃を加へるであらう」、とのべ、暗に空母からの大空襲による多量爆撃投下、また連続爆撃の不可能を認めてゐる。しからばつきに中央進攻路による支那本土への連絡の第二點についていかにといふに、ニミッツはまた「太平洋戦域の米海軍は艦船も兵員も十分であるが、直面する最大の障碍はきはめて危大な太平洋の廣さである」、とわが制海範圍を突破して行くことの困難さを率直に認めてゐる。敵がマーシャルに上陸し得たからとてたゞちに

トランク島にあるひはマリアナ諸島に上陸し得るとは決していひ得ない。マーシャルからさらに何百マイルといふ距離の防禦がある。速力のおそい輸送船團がのろ／＼とやつてきたのではたゞちにがわ哨戒網に引つかゝり、いかに護衛が強固であらうとも撃沈の憂き目に逢ふことはいふまでない。敵はマーシャル上陸に成功したが、トランクは空襲のみに終つた。そしてマリアナ攻撃においては空襲を敢行する前にすでに敵艦は撃沈され、わづかに申譯的に空襲を行つて残餘の艦隊は倉皇と逃げ去つてしまつたではないか。領域の老大さは敵の侵略を最も困難ならしめる。たとひ敵が外郭第一線を破り得たとしても、その推進力は波紋のごとくいくばくもなく迫力を失ひ、再び均衡状態に入り、たとひさらに攻勢が伸びたとしてもさらに数倍の威力が加はらなかり、これをいま一段と進めることは不可能である。攻勢の末端はナポレオンにもシーザーにもあつた。國力とその用兵に比例して限度がある。獨ソ戦においても電撃の威力を以てしてもソ聯の老大な領土を遂に制し得なかつた。敵米の物量の威力もわが制海領域を簡単に破り得ることはできない。中央進攻により支那本土との連絡をとると稱するは彼らの希望であり、戰略論の理想といつてよからう。タラワ、マキンの戦鬪に鑑みマーシャル上陸作戦は相當なる用意と覺悟をもつてした。すなはち

クエゼリン環礁に對しては二箇月前から爆撃を開始、前後十七回におよぶ空爆によつて地上陣地破砕に努めた。しかしして侵攻の三日前から艦砲射撃をなし來り戦艦、巡洋艦などの六インチから十六インチにいたる砲弾を一千發も打ち込んできた。艦砲射撃の間には空母から艦載機が飛來して投弾した。かくてクエゼリン環礁の三小島に一万五千トンといふ戦史未曾有の砲爆弾を集中してきた。しかしして、上陸し來つたのであるが、よく生き残つたわが將兵は破壊されたトーチカや海岸砲の下から敢然と躍り出て戦つた。善謀勇戦クエゼリン島においては敵は一度は撃退され、彼らは再び戦艦、爆撃機を呼び戻して砲爆撃を加へねばならなかつた。かくて南海の小島においては四日間にわたつて激闘は續いたのである。敵がこの作戦に使用した艦隊は北阿上陸作戦に匹敵する。開戦當初英國が保有した戦艦と同様の量が出動したといはれる。またマーシャル攻撃に参加した艦船量は少くとも米軍二十個師團を歐洲へ輸送し得るものであると稱してゐる。かくてやうやく彼らはこれに成功した。マーシャルからさらに作戦を敢行するには彼らがいかなる努力と物量をもつてしなければならぬかゞは判明する。この中央進攻が彼らのいふ支那本土への途たり得ると何人が正直に考へ得るであらうか。彼らはソロモン、ニューギニアのマンクアサー反攻があまりにも遅

遅たるに忿懣の情禁する能はず、思案の末窮餘の一策として

これが採用を行つたにすぎないのである。

たゞこゝに誰もが注目し疑問に思ふのは敵はなにがゆゑに西北濠から直接東印度を衝きあげて來ないであらうかといふことである。しかしこれは濠洲の地理的條件を考慮するならばおのづから判然とする。すなはち米本土から東岸のシドニー、メルボルン、ブリスベーンなどに一應兵力軍需品を送り得ても、こゝからさらに西北濠へ輸送すべきならぬの輸送力もない。あまりにも大作戦を展開するには補給條件において缺くところがあり、その上わが防備態勢が強固であるからである。

## 七 北部太平洋戦線

さてつぎは眼を北方に轉じて見よう。アッツ島から北千島までの距離はわが北海道から千島北端までの距離より近いといふ事實は一應考慮すべきことであらう。米本土のわが本土に最も接近してゐるのが北方である。従つて米國民がその進攻に最も期待をかけるのも宜なるかなといへる。しかしそこには風雪、濃霧、流水と自然の障礙が横はつてゐる。これをいかに征服するかは彼らの北方進攻の成否いかんがかゝつて

ゐるのだ。苛酷な自然の力にのみ信頼してをれない状況たらしめんとする敵米の動きが、最近北方におけるわれ／＼の最も注目すべき現象といふことができよう。しからば彼らの自然克服の動きとはいかんといふに、まづ第一には一月二十日以降五日間連続夜間爆撃をいづれも數機編隊で、また二月四、五、六の三日間同様夜間爆撃を北千島に敢行し來つたこととで、その機種は速力、防備、攻撃力ともに弱いコンソリデーテッド PBY および PB2Y 飛行艇であつた。しかも安全性の多い夜間を狙つたことはおそらく試験飛行に違ひない。敵機の耐氷装備の試験に重點がおかれたものとみられる。第二にはついで二月四日夜間に乘じて我監視の目をかすめて北千島沿岸に現れた艦艇數隻が午後九時半から約四十分間にわたつて砲撃を加へて立ち去つたこととで、わが兵力の偵察と、わが防備圏への偵察的潜入などを狙つたものとみてよく、これらは彼らが空からあるひは海上から何事かなすあらんと企圖しつゝあるものとみてわが方においてもこれに備へるに如くはない。彼らの北方に集中せる兵力をみるにアッツ、アダク、ダッチハーバーをはじめ各基地に集結したとみられる第一線機は、長距離爆撃機、哨戒用飛行艇、中型爆撃機と攻撃機に重點をおき五百ないし六百機が待機してゐる模様である。アラスカ、カナダの後方基地における機を算入すればお

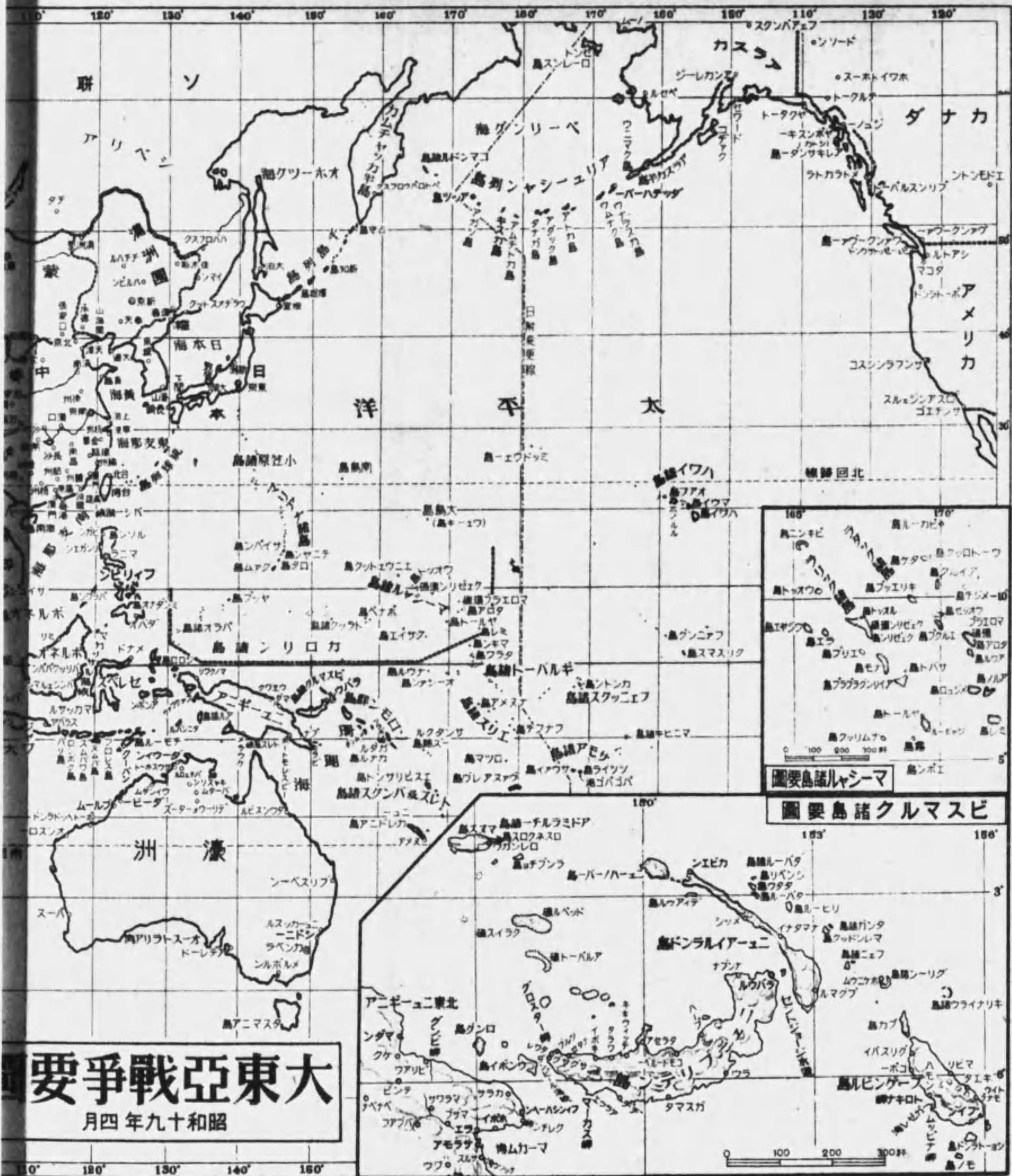
そらく千數百機とみてよからう。ついで陸上兵力はアラスカ、アレウト山系において訓練されたと稱する山岳部隊、落下傘部隊、戦車、装甲車などの機動部隊を含む五、六個師團十二、三萬の兵が、アタカプス島を中心に配備されてゐる模様である。また海上兵力はダッチハーバー、コチャックを根據地とし新司令官フレッチャーのもとに各種艦艇を相當數保持してゐる。だがこれらの兵力をもつては到底わが千島に來襲することはもちろん不可能で、彼らが千島上陸を敢行するにはおそらく全太平洋艦隊を動員しなければ目算は立つまい。こゝにもわが領域的防備の利があり、彼らがいま千島上陸を呼號するならば、それは彼らの現兵力に徴するとき謀略的宣傳以外になにもものもないといへるのである。

### 八 在支基地化による米の反攻

マリアナ群島を攻撃して失敗した敵は海上機動部隊による日本本土空襲の困難さをしみるゝと味つた。海上からわが本土空襲が困難なとき最も考へられるのは支那本土からの空襲で、爾來アメリカ軍部内において在支米空軍重視論が擡頭しはじめてきた。ニミッツは日本を撃破するには支那大陸から攻撃を加へる以外に手がなないと、しかも在支米空軍の強

化策いかにについては、麾下艦隊を率ゐて太平洋を横斷進撃する、とわが戦略態勢や海軍力を無視した暴論を吐き、むしろビルマルト再開不能を告白してゐるが、いづれにしても支那大陸に飛行機はもちろん軍需品を送り、重慶政權のいはゆる最大動力五千二百三十餘万に武器を與へて、支那大陸からわが兵力を駆逐しなければ勝利の途はないといふ考へ方が強くなつてきたことは事實である。また陸相スティムソンもまた、武器貸與を強化して重慶軍を第一線において活潑なる戦ひを行はしめねばならぬ、とのべ、ニミッツ同様重慶重視を認めてゐる。これらの考へ方はむしろ現在までの彼ちのとり來つたわが防備戦への反撃があまりにも犠牲が大きく、これを繼續せんか、アメリカの老なる軍需生産力をもつてしてもこれに耐へることができないといふ點を認め、ある意味において彼らの作戦の失敗を吐露してゐるともみられるのである。ともあれ目下のところ重慶重視のもつ最も大きな意義は在支米空軍の強化で、これによつて従来のゲリラ戦から對日本格的空襲を狙つてゐることは間違ひない。しかしわが軍に押へられ、彼らの意のごとくならぬことはいふまでもなからう。

一、わが在支部隊の戦力低下、和平地區主要地の孤立化



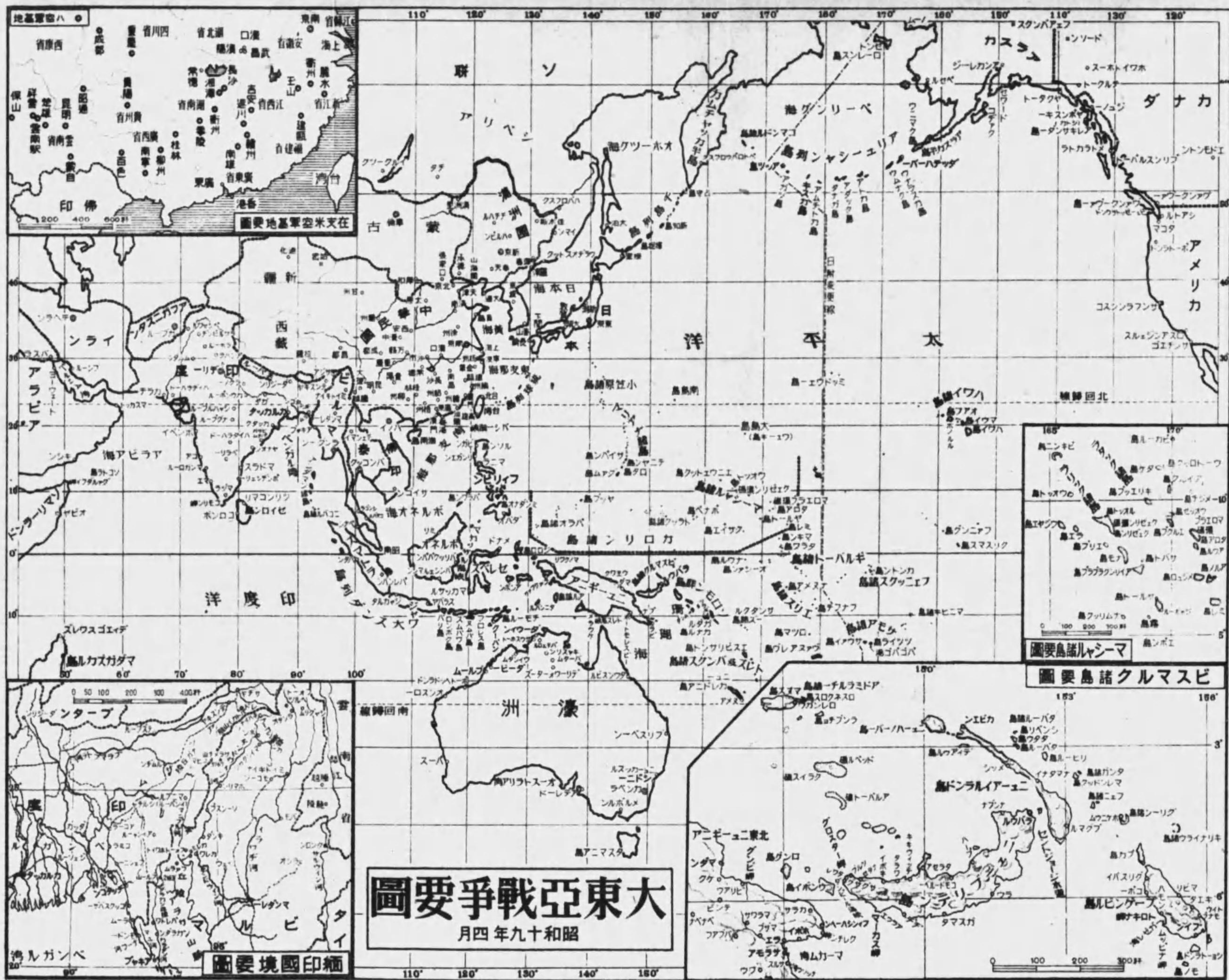
大東亞戰爭要圖  
昭和十九年四月

# 八 在支基地化による米の反攻

マリアナ群島を攻撃して失敗した敵は海上機動部隊による日本本土空襲の困難さをしみるゝと味つた。海上からわが本土空襲が困難なとき最も考へられるのは支那本土からの空襲で、爾來アメリカ軍部内において在支米空軍重視論が擡頭しはじめてきた。ニミッツは日本を撃破するには支那大陸から攻撃を加へる以外に手が無いとのべ、しかも在支米空軍の強

る意味において彼らの作戦の失敗を吐露してゐるともみられるのである。ともあれ目下のところ重慶重視のもつ最も大きな意義は在支米空軍の強化で、これによつて従来のゲリラ戦から對日本格的空襲を狙つてゐることは間違ひない。しかしつぎのごとき主なる動きがみられるが、たゞ増強ルートがわが軍に押へられ、彼らの意のごとくならないことはいふまでもなからう。

一、わが在支部隊の戦力低下、和平地區主要地の孤立化



大東亞戰爭要圖  
昭和十九年四月

を企圖し、主要地をつなく鐵道、揚子江、南支沿岸を航行するわが船舶を目標に出撃、わが後方交通線の遮断を行はんとする。

一、敵の最も望むわが本土空襲もわが航空部隊の活動に意のごとくならず、こゝにおいて敵は戦意を旺盛にしわが航空部隊に挑戦せんとしてゐる。

一、江西省では遂川、福建省では建甌などが航空部隊に叩かれても、これを整備せんと懸命の努力をつゞけ、前進基地の強化をはかつてゐる。また一方桂林、昆明などの後方基地の擴充にも努め、B 29のごとき長距離機の離着陸に備へんとしてゐる。前後方合せて二十數箇所の基地が米人指導のもとに整備擴充され、一大航空要塞化を行はんとしてゐる。

一、B 24、B 25などをもつてしてはその前進基地はつねに叩かれてゐる現状では、わが本土心臟部の爆撃は困難なもので後方基地から爆撃可能なるB 29、B 32などを配置せんとしてゐる。いはゞ新鋭機による本土空襲の企圖が漸次濃化されてきた。しかしこれも目下準備中といふ程度で、われに對處するだけの時の利は十分にあることを銘記しなければならぬ。

## 九 印 緬 戰 線

英國の人氣男マウントバッテンを東南アジア軍司令官に任命、大宣傳につとめたビルマ反攻も全く意のごとくならずといふのが現状である。本格的ビルマ反攻は地理的條件の最も悪い陸上作戦ではあるまい。彼らの企圖は東部印緬、北部印緬、雲南の三國境から一齊に反攻進軍をなし、この方面にわが兵力を集中せしめておいて海上からベンガル灣を経てラングーン方面へ、あるひはアンダマン、ニコバル方面へと上陸、これを基地化してわがビルマ軍の補給路を断ち、一舉にビルマを奪回しようといふにあつた。だが陸上においてはいづれもわが陸軍部隊の先制攻撃に逢つて敗戦につぐ敗戦をつづけ、これに加へてベンガル灣の上陸作戦は目下全く望みうすとなつた。海上よりの上陸作戦實行困難の因は種々あらうが、まづ第一にはイタリヤ戦線が案外手間どつてゐること、第二は歐洲第二戦線問題などから艦艇、船舶、兵員、航空兵力などのビルマ方面への増強困難となつたことによるものとみてよからう。ビルマ戦線は地勢からして陸上交通はきはめて困難で、敵が陸上大兵力をしてわが軍と接觸せしめるためには、どうしても海路を擇ぶよりほか途がない。しかしわ

が軍は今日まで道路その他に非常な改善を施し、兵力の急速なる移動を断行し得る状況である、従つて彼らが上陸作戦を断行すればたゞちにわが軍の大兵力と衝突しなければならぬ。ゆゑに彼らの兵力もわが大軍を壓倒するに足る大兵力の上陸を行はねばならぬことになる。上陸作戦を断行する前にはわが航空兵力を押へておかないと、島影一つさへ視野に入らぬ紺碧のベンガル灣において彼らの船團はたゞちに発見されて恐らく撃滅の運命をたどるであらう。そこに基地航空部隊の増強、空母を中心とする大艦隊の増派が必要とされ、大船團、多数の上陸用舟艇また必要缺くべからざるものである。これがいまだに準備ができない。しかしこのまゝ腕を拱いてゐるわけにも行かない。わが軍の防備陣の完璧を期せしめないため、あるひは兵力を分散せしめるため、現在能ふかぎりの努力を拂はねばならぬといふ彼らの狙ひが、今回東部印緬國境の蠢動となつて現れた。だがこれもブチドン正面シンゼイワ盆地、モンドウ方面において敵第七師、第五師がまさに潰滅に瀕するの要き目に逢ひ、インパールは將に陥んとしてゐる。われ／＼がビルマ戦線において最も注意すべきは敵の航空兵力である。目下東部印緬國境においては逐次増強されてテンスキア、インパール、パレル、シルチャ、トラバザ、アヌーラ、フエンニー、チッタゴン、コンククスバザ

など大小百箇所に約一千機が集結してゐる。また空母も逐次廻航されつゝあらう。だがこれくらゐの航空兵力ではまだまだ大反攻を行ふには十分ではない。彼らの航空大兵力が東部印緬國境に集中しはじめた時こそ彼らの本格的反攻が開始される秋である。

#### 十 時の利に立つわが防備態勢の強化

B 29、B 32の長距離爆撃機もわが本土に對して連続的大爆撃を敢行するにはいまだ性能において數量において十分でない。大型空母はいまなほ建造中であり、大型空母からする双発爆撃機による空爆もゲリラ的空襲以外になにもものでもあり得ない。時の利はまだ／＼我にある。「時の利」あるがゆゑにゆつくり防備態勢を備へてよいといふことではない。時の利を一瞬も無駄にできないのが現状である。わが國はじまつて以來いまほど時の重要なことはあるまい。一刻千金、万金以上に値する秋である。彼らの謀略宣傳に耳を藉すことなくいまこそすべてをあげて防衛線の強化に、銃後決戦態勢の強化に努めねばならない。

## 南方火線の示唆

門田 圭三

### 一 南太平洋の激闘

#### 1 ラバウル戦局總観

敵米が最大戦力を傾けて大反攻を企圖しつゝある太平洋正面の戦局は、トラック爆撃(十九・二・十七・十八)および同じ敵機動部隊によつて行はれたサイパン、テニヤン爆撃(十九・二・二十三)を境として、さらに重大な新段階に入つていた。ガダルカナル戦の口火が切られて以來、ソロモン戦局が太平洋における最も重要な戦場としての地位を占めつゝあつた。ギルバート反攻作戦の開始(十八・十一・二十一)によつて中部太平洋突破を試みんとするニミッツ攻勢の企圖は、漸くその鋒先を現しはじめたとはいへ、なほソロモン戦局の重大さは世界の視聽を集め、ラバウル攻防戦の

歸結いかんは太平洋における彼我の戦略態勢に至大の影響を與へるものとして最大の關心をひきつけつゝあつた。ラバウルを死守し強靱なる航空要塞であるこの地點を確保することは、第一にガダルカナル以來押してきた敵に一舉に反撃を加へ、わが態勢挽回の一大痛棒を與へるための最大の據點を確保することであり、第二にトラック方面を中心とする内南洋への關門を堅守することである。この二大戦略的要請からラバウル戦局に對しては依然最大の戰術的重點がおかれてきたのである。

一月末日から開始せられたマーシャル諸島、クエゼリン、ルオット上陸作戦によつて戦火は内南洋に及ぶにいたり、敵のニミッツ攻勢は容易ならぬものであることが漸く明かになつたのであつたが更に兩島守備軍部隊の壯烈なる戦死後一句にして大膽にも敵が機動部隊を驅つて決行し來つたトラック爆撃サイパン、テニヤン爆撃は、中部太平洋のわが堅壘を脅

かすにいたつた。中部太平洋に點綴する一連の島嶼群は太平洋正面におけるわが本土防衛の戦略戦であるとともに、大東亞共榮圏を内懐にいだく海洋要塞線でなければならぬ。その戦略的 중요さは改めていふをまたない。この中部太平洋が敵の脅威を受くるにいたつて、戦術的重點は一擧にしてこゝに移せざるを得なくなつたのである。

内南洋における諸戦闘の展開と時期を相前後してニューアイランド島の東方グリーン島(十九・二・十五)、續いて北方アドミラルティ諸島(同、二十九)に上陸し來り、常套の捲き揚げ戦法―敵の表現をもつてすれば蛙跳び作戦といふ―によつてラバウル、カビエン包圍態勢を着々進めるにいたり、これらの上陸地點に航空基地を設定することによつてラバウル方面の制空權は敵手に歸するにいたつた。さらに敵はグリーン島アドミラルティ諸島を結ぶ中間のタバル島(カビエン東方)、エメラウ島ムッサウ島など一連の諸島嶼に上陸し來り、カビエン、ラバウルの包圍を整へるにいたつてゐる。上述のごとく中部太平洋の新戦局と、ラバウル包圍態勢によつて、南太平洋戦局の重大な轉機はもたらされ、別異の段階に入るにいたつたのである。

### 2 ソロモン戦線の展開

もさらに航空基地を前進せしめたことによつて、該方面の航空兵力をもつて直接ラバウルのわが航空部隊に闘ひをいどみ、十八・十・十二の大空襲を皮切りとしてラバウル空襲を大規模に開始するにいたつた。

かくして制空權を伸展せしめつゝ、その制空權下に敵は爾後着々新しい作戦の手を打ちはじめ、コロンバンガラ島轉進と同じ月のうちにはやくもモノ島に上陸(十八・十・二十七)、續いて敵はわが堅城ブインを素通りしてブーゲンビル島トロキナに捲き揚げ上陸作戦を強行(同・十一・一)してきた。トロキナ上陸作戦に當つては敵が容易ならぬ決意と準備を持つてゐたことは上陸部隊への補給増強のために大機動部隊をくり出し、これが海軍航空部隊の邀撃に遭つて累次のブーゲンビル島沖諸航空戦の展開をみるにいたり、わが方はハワイ海戦以來の大戦果をあげたことは周知の通りである。しかし敵はこの大きな犠牲をも厭はず執拗に補給をつゞけ、トロキナ地區に三箇所の飛行場を設定するにいたつたのである。

ついでニューギニア戦線よりはダンピール海峡を越えてつひにニューブリテン島西端にとりつき、マールカス上陸(十八・十二・十五)、ツルブ上陸(同・二十六)を敢行、上陸後ただちに飛行場を設定し基地を推進してきた。

陸海空に互る皇軍の血戦によつてガダルカナルの戦闘に半年余(十七・八―十八・二)の時日を費した敵は、その後中部ソロモン作戦の開始まで約五箇月に及ぶ準備を積んだ上、レンドバ上陸(十八・六・三十)の擧にいで中部ソロモン戦の火蓋を切つた。レンドバ上陸よりムンダ攻防戦の展開を中心として、ソロモン戦局はまたしても惨烈な陸海軍の血闘を見るにいたつたが、結局激戦三箇月余にしてコロンバンガラ島よりの無血轉進作戦の成功(十八・十・五)を最後の花として、わが方の轉進完了によつて中部ソロモン戦は終幕をつげるにいたつた。ガ島に反攻を開始して以來實に一年二箇月を要して敵はガ島からムンダまで、僅々の距離を漸く進出しえたのみであつた。敵が拂つた巨大な損耗、犠牲と時日の空費、これに對するいふに足らぬ戦略的なわづかの進出が、敵國內に喧しい議論と非難を呼び起したことは周知の通りである。

しかしながら中部ソロモン戦の終了によつて敵はガ島からムンダに航空基地を前進せしめ、わが第一線となつたブーゲンビル島ブインに對する空襲を猛烈に開始した。一方ガ島轉進と期を同じくして皇軍が轉進せるニューギニア島ブナ地區に航空要塞を設定し、また中部ソロモン轉進と相前後したラニ、サラモア戦の終了によつてニューギニア島方面において

かくのごとくラバウルを挑むごとく南、西兩方面より基地を進めてきた敵は、ソロモン系、ニューギニア系、兩系空軍を相呼應してラバウルおよびカビエンに對する空襲を熾烈にくり返しはじめたのである。十八年の歳末以來四月下旬にいたる間においてラバウルに對する敵の晝間大空襲がなかつた日は、僅々兩三日を數へるにすぎない。もつてその規模と執拗さを知るべきである。このやうに敵が連續空襲を行ふことによつて意圖するところは、主としてトロキナ方面のソロモン系空軍をもつてするラバウル空襲による「ラバウル航空撃滅戦」(敵の表現をもつてすれば)の展開であり、他方ニューギニア系空軍によつてはカビエン、アドミラルティ空襲とカビエン―ラバウル方面のわが海上補給路を遮断せんとすることにあつた。トロキナ基地の完成をまつてラバウル空襲は主としてソロモン系敵空軍の擔當するところとなつたものと推察されるのであるが、従来よりも著しく敵基地とラバウルの距離が短縮せられたために、従來の大型機の編隊に加ふるに、艦爆(急降下爆撃機)、戦闘機など小型機が多數に交つて來襲するやうになつた。この大型機、小型機集團をもつてする來襲によつて、敵は二月中にわがラバウル航空隊を撃滅せんとする目算を有してゐたものごとくである。海軍戦闘機隊が寡勢をもつてよく邀撃につとめ、連日六十機、七十機と

いふ大量の敵機を撃墜し、輝かしい戦果を記録してゐたのはこの前後のことである。

ソロモン、ニューギニア兩系統空軍をもつてする又状空襲の激化は、ラバウル周辺の海上交通を著しく制御し困難ならしめるにいたつた。ラバウル——カビエン、ラバウル——ブーゲンビル、カビエン——アドミラルティなどの近海補給路も、晝夜を分たぬ敵大型機の綿密な海上偵察爆撃によつて發動機艇にいたるまで捕捉攻撃される状態にいたり、各基地との連絡は急激に困難となり、海上輸送路の遮断といふ方面よりして、まづラバウル戦局の情勢は緊迫の度を高めるにいたつたのである。

### 3. ラバウル戦局の急轉

かゝる又状空襲の熾烈化はいづれ敵が新しい作戦の手を打つてあらう機運の近きを思はせ、中部太平洋におけるマインヤル侵攻作戦の開始(十九・一・三十)とにらみ合はせて底氣味の悪い底流を藏してゐたのであるが、敵はブーゲンビルよりさらに北に捲き揚げて、ニューアイランド東南方グリーン島に上陸してきた(十九・二・十五)。同島には若干のわが守備隊があり奮戦したが遂に通信連絡も絶えるにいたつた。グリーン島はラバウルとブーゲンビル島ブカとの海上連絡路の

要衝にあつてをり、敵の同島上陸はブカ輸送の遮断をはかるとともに、敵魚雷艇基地、航空基地を北上推進せしめんとするものである。特に我が方でも十分警戒してゐたところであつたがニューアイランド東側海面の衛星的な一連の島嶼群を傳つて基地を進めんとする島傳ひ北上作戦の企圖を明かにしたのもとして重視すべきものがあつた。

それより二日経て二月十七日、敵機動部隊は突如として内南洋の堅壘トラックに急襲を加へてきた。これが南太平洋戦線のわが背後を脅かすに恰好となるとともに戦術的重點の移行を來さざるをえなくなり、ラバウル戦局に重大な影響をもたらすこととなつたことは、さきに略述した通りである。

敵は「航空撃滅戦」の目的を達するためにこれまで執拗にくり返してきたわがラバウル飛行場に對する爆撃戦より一轉して市街地帯、兵舎地帯の爆撃を開始、焦土戦術を採るにいたつた。(十九・二・二十八)。敵機を邀撃するものは地上高射砲火であり、優秀な隊員と機材を擁しかつ高い練度を有する陸海軍高射砲隊はいまやラバウル戦の花であり、敵大編隊を迎へて連日敵機撃墜破の戦果をあげ、敵の心膽を寒からしめてゐる。市街爆撃に加ふるに、敵艦また頻々とラバウルに迫つて艦砲射撃を加ふるにいたつて、ラバウルの様相は一變し、南太平洋の戦相も急激に變容した。

市街爆撃の開始と期を同じくして敵はアドミラルティ諸島に上陸、反攻を開始した(十九・三・二十九)同島は中部太平洋、ニューギニア、ラバウル、この三戦線に互つて重大な影響をもつ戦略的な要衝である。すなはち敵が同島に侵攻し航空基地を進めることは、第一にトラック—ラバウル間の補給連絡路に重大な脅威を與へる。第二に同島からトラックまではおほむね六百五十哩の近距離であるからトラックあるひはメレヨン方面まで爆撃圏内に入ることとなる。これは戦略的に新段階を畫するものであるといふまでもなく、現在既に敵はアドミラルティ基地を利用して内南洋方面に連續爆撃を開始してゐるのである。第三にニューギニア北岸を西進せんとする敵にとつてアドミラルティの皇軍の存在は横腹に匕首をつきつけられてゐるやうな恰好にあるが、同諸島への侵攻はこの側面の脅威を除くことになるのである。第四にカビエン、ラバウルの包圍を目指す大きな布石であり、あたかもその退路を絶つがごとき態勢を整へることなど、數へればその戦略的意味は輕視すべからざるものをもつてゐるのである。

かくのごとき情勢の展開によつてラバウルの制空権が敵手に歸すると同時に、この必然的結果としてラバウル周辺の海上交通路は敵機の跳梁下に暴されることとなり、海上交通路

の管制——制海権はまた不安なものとなり、海上補給は一段と困難を加へるに至つた。ラバウルの孤立的情勢はかくして急調子をもつてもたらされてきたのである。敵はさらにつゞいて矢張り前に記したバール島、エメラウ島、ムソウ島などカビエン外郭の島嶼群に上陸、さきのグリーン島上陸をもつてすでにその片鱗を示してゐた島傳ひ北上作戦によるカビエン、ラバウル包圍作戦の企圖は一應その目的を達したものと認めざるをえない。

### 4. ラバウル戦局の展望

上述せるところにおいて中部ソロモン戦より南太平洋の現戦局にいたるまでの経過はおほむね明かとなつたであらう。敵は熾烈な空襲をラバウル、カビエンに一日の休みもなくくり返してゐるのであるが、ラバウルの陸海軍部隊は軒昂たる士氣をもつて儼然たる守備についてゐる。同地は現在では横穴式防空壕が完備し、防空要塞としての設備を整へてをり、空からする敵の反復攻撃による被害はいふに足らぬほど僅少である。また食糧、彈藥は相當豊富に蓄積してあり、かつ空爆に備へて分散格納の措置が講ぜられてゐる。殊に同地は廣大な地積を有してをり、ある程度の食糧自給も可能である。補給は困難であるとしてもこのやうな食糧事情はなんと



いつてもラバウルのもつ強味であらう。加ふるに同地の守備に配せられた陸海軍の部隊は精強をすぐつた大軍である。戦局の将来は固より逆踏するを許さない。しかしながらこのやうな条件のもとにある同地の将来はつぎの二つの場合に分けて考へられるであらう。

もし敵がその常套戦法とするやうに、堅陣に猪突するを廻避してもつばら補給路の遮断と徹底的空爆による防禦力の破壊をもつて、戦力の低劣化戦法——よりわかりやすいへばちり貧戦法——をとるとすれば、わが方の堅固な防空設備と豊富な食糧事情は十分かくのごとき敵の企圖を空しくせしめるであらう。ラバウルが擁する航空基地群はいづれわが航空兵力の増強が着々實現した暁、再び強力な航空部隊の進出をみると、前進基地として敵陣破碎、敵に對する徹底的打撃を與へるべく制空權奪回の根據地として至大の戰略的價値をもつものであるが、敵が上述のごとき持久戦法をとるならばこれこそ願つたりといふべきで、ラバウル航空基地群は將來のわが逆攻勢に際し戦局逆轉のうへに重大な役割を演ずることになるであらう。

これに反してラバウルの強靱性に怖れをなす敵がもし強引に奪取戦に乗り出すとすれば、敵はその最大の弱點とするところを衝いてもらひたいと自ら進んで出てくるやうなもので

れたやうに中部太平洋における新しい戦局の展開が大いに影響してゐるのではあるが、南太平洋戦線のみ局限して考へてみても敵の戦法にも多々検討すべき點があるのである。敵の戦法はまづ第一に制空權の前進である。このためには航空兵力局地絶對優勢主義を採り、量的に優勢な航空兵力をもつて制空權を前進せしめる。第二に制空權の前進にとともに制海權の前進——わが補給路の遮断である。第三に制空權と制海權の掌握のもとに海上輸送兵力をもつて上陸作戦を試み、上陸に成功すれば、たゞちに飛行場を設定し制空權をさらに前進せしめる。この基地の前進のために急速な飛行場設置技術をもつてゐるのである。要約するならば以上の三者に盡きるのであるが、かくのごとき戦法は皇軍が創始し、緒戦期たる第一段作戦において範を示しかの大戦果をあげたものであつて、この戦法をそのまま踏襲してゐるにすぎないといひうるのである。たゞ最も注目すべきものとして第一に航空機の壓倒的な量的優勢、第二に基地設置技術、第三に航空戦、海上作戦、補給戦などあらゆる戦の分野を通じて戦術上の革命をもたらしてゐる電波探信儀の活躍がある。この三者は特に南太平洋戦局の進展上決定的な役割を果してきた戦略戦術上の重大な要素であり、大東亞戦争の前途にまた至大な影響をもつてゐる。従つてこれらに對する對策は分秒を争つ

あらう。といふのは敵米が最も恐れてゐるのは兵員の損耗である。戦死傷による人的損耗は最も嫌惡するところであり、その最大の弱點であるがために、極力回避してゐるところである。敵がラバウルの皇軍に對して決戦を挑んでくるならば、その結果のいかんにかゝはらず、巨大な人命の犠牲を覺悟しなければなるまい。精強な皇軍の布陣の前に果して敵にその覺悟があるか。

敵は以上二者のいづれを採ぶであらうか。南太平洋戦線はラバウル包圍によつて新しい段階に入つたとはいへ今後における該戦局のなりゆきは戰略的にも政治的にもなほ多大の波瀾を藏してゐるのである。

## 二 敵の戦術と技術の検討

### 1 南太平洋における敵の戦法

ソロモン反攻を開始してから中部ソロモン戦の終了までに敵は一年二箇月余の長時日を費したが、その後の敵の作戦の速度は相當にはやく、トロキナ作戦から四箇月ないし五箇月でもつてラバウル包圍の態勢に達するに至つてゐる。敵の侵攻速度がこのやうに速度をはやめたことは、冒頭において觸

て講すべきはもちろん、一日もはやく敵の水準を凌駕するところが刻下の急務となつてゐるゆゑんであり、特に検討を要するところであらう。

### 2 航空機の量

開戦當初の惨敗によつて主兵力としての航空兵力の重要さにまづ誰よりもさきに目覺めた敵米は、たゞちに航空機の大増産にのり出してきたのであるが、その大増産の結果はソロモン戦線における壓倒的ともいふべき航空兵力の量的優勢となつて現れてきたのである。島嶼の點綴するソロモン方面では基地航空兵力の活躍舞台となることは當然であつて、敵は絶對優勢の基地航空兵力を當方面に配してきたが、トロキナ作戦にあつてはそれでも足らずとなし、機動部隊をもくり出して艦隊航空兵力と基地航空兵力の協同作戦を展開し、局地絶對優勢主義を慎重にとつてきたことはブーゲンビル島沖諸航空戦の経過において周知の通りである。トロキナ飛行場完成後は對ラバウル空襲のための第一線機として、ムンダ、トロキナ兩基地に約八百機内外を配備し、これをもつて交代に出動せしめてゐたやうである。

これに對しわが航空部隊は寡勢ながらもラバウルの邀撃戦に、また敵海上部隊の攻撃に着々戦果をあげてきたが、ラバ

ウルを若干離れた友軍基地にあつては味方機の姿をみることはほとんど絶無で、もつぱら敵機の跳梁にまかせ、制空権、制海権を握つてゐる敵が、上空および海上よりする護衛のもとに、思ふがまゝに眼前に上陸してくるのを切齒しつゝもいかなともすべき方法がないといふ状態がこゝかしこに現出する状態であつた。航空機の量的優勢が戦闘部面をいかに支配するかといふ一例として、ツルブ地区の上陸作戦(十八・十二・二十六)の模様をあげてみよう。

敵が上陸作戦の準備としてツルブに本格的の大爆撃を開始したのは上陸にさき立つ約一箇月前からで、延べ六百機から少い時で二百機ぐらゐをもつて連日來襲、友軍機の使用を不可能ならしめるために飛行場の爆撃にまづ力を注ぎ、つぎに兵站地区、海岸沿ひの陣地を綿密に爆撃、味方機の邀撃がないためノース・アメリカンのときは五百メートルないし千メートルぐらゐの低空で悠々爆撃を加へてゐた。殊に海岸沿ひの密林はことごとく焼野原と化し、波打際から百メートル二百メートルの間は人一人歩いて上空からみえるやうに一木一草をも残さず焼き拂つた。敵の上陸を阻止すべき海岸の友軍陣地を狙つたものである。敵の來襲は一日五、六回にわたり、味方陣地附近および展望のきゝさうな重要地點を焼野原としたあとは、哨戒を嚴重にし、陣地構築の暇を與へな

い。敵機が上空に飛來したとき、地上からでも應射しようものなら、それこそたちまち爆弾と機銃でその附近は一木をも残さぬ状態となる。夜間はたえず二機づつ交代で海岸線およびボンゲン灣上空を往來し、夜間を利用して海上よりするわが補給の遮断にあたつた。かくのごとく陸上の行動、海上の行動の自由をことごとく奪ひ、ほとんど無抵抗状態に近いまで徹底的な爆撃をくり返したあげく、上陸作戦を敢行してきたのであるが、これも數百機の敵機および海上よりする艦砲の射撃によつて完全に制壓しつゝ、堂々上陸してきたのである。

航空機の絶対優勢はかくのごとく戦闘を一方的ならしめるのであり、困難な上陸作戦も著しく容易となるのである。精強な皇軍は上陸し來つた敵軍を邀撃し、敵の制空権下にあらゆる悪條件を排して敵につねに多大の損害を與へてきたことはもちろんであるが、「飛行機さへあれば」と切齒扼腕したといふ多くの事例はことごとく敵機の壓倒的數量と、これに對する友軍機の寡なさを物語るものにほかならない。ラバウル戦局の急轉も彼我の航空兵力量の差が招いたものであること、いまさらいふまでもないことであらう。

### 3 飛行場設定の技術

設置は従來のごとき滑走路一本と附屬建物をつくればいゝといふ素朴な考へ方から飛躍して、いまや飛行場を中心とする航空要塞の築城であり、規模の大にして複雑な施設となつてゐるのである。

敵はその機械化された設営力によつて、驚くべき短時日をもつて飛行場をつくり、航空要塞を構築しつゝある。グリーン島のごときも面積狭少な珊瑚礁で、飛行場の構築は困難とみられてゐたのであるが、その困難を克服し、しかも一週間ほどの短時日でつくりあげてゐる。エメラウ島のごときも十日間位でつくれたやうである。その技術の高度と敏速さはまことに侮るべからざるものがあるといはねばならぬ。従つて敵は新上陸地點にはたちまち堅固な航空要塞を構築するので、爾後のわが方の攻撃は非常に困難となるのである。

飛行場滑走路設定工事は伐開作業、整地作業、輻壓作業、舗装作業の四段階に分ち得るのであるが、伐開作業には機械鋸、ブッシュカッター、ブルドーザー、トラクター、整地作業にはブルドーザー、スクレイパー、トラックショベル、ダンプトラック、輻壓作業には自動ローラー、被牽引式ローラー、振動搗固機、舗装作業としてはソイルセメントのために機械ミキサー、敷きならしのためにモーターグレイダーなど、各作業ごとに種々の機械が使はれるのであるが、土木用

新占領地における飛行場の設定は、占領地點の防禦のためには早急に航空兵力の進出が必要であり、他方敵を急追撃せんためにも味方機を一刻も早く進出、集結せしめ、敵に余裕を與へず制空権を伸展せしめることがまた必要であり、防禦、攻撃いづれの要求よりみても敏速さを要求される。航空兵力が主兵力的な地位を占める今日、前進陣地の構築は飛行場の設定が中心となるといへるであらう。従つて敵機の來襲下に飛行場をつくる場合も多く、この點にみてもその敏速さは作戦上の至上命令である。

敵米にあつては戦前より飛行場構築工事が機械化されてゐたのであるが、別に道路をつくる機械が著しく發達してゐたこと、大農式農業經營のために農耕用の機械を多く使つてゐたことなどによつて、土木機械および土木機械工業が非常に發達してゐたことのために、飛行場設定工事はことごとく機械化せられてゐる模様である。これに對してわが國にあつては道路構築は多く失業救済的のものが多く、その機械化のごときは論外であり、また農業經營も零細的小農經營を主體としてゐたために兩者ともつばら人力によつてゐたのである。従つて土木機械の發達は著しく遅れてをり、飛行場設営の規模も従來の土方請負工事の範圍に止まり、鋸とシャベルをもつてする原始的作業を主體としてゐたのである。飛行場

トラクターが大體においてその主體をなしてゐるのである。敵は機械力をもつて急速に航空基地を整備し、つぎ／＼に基地を推進せしめて量を持つ航空兵力を進出せしめ、もつてその制空權を伸展せしめ、航空機をもつてする制壓圏を擴大しつゝラバウル作戦を急速調をもつて進めてきたのである。わが國でも航空基地施設工事の機械化は急がれてゐるし、敵をこの技術方面においても凌駕する日は遠くないと信じられるのである。

#### 4 電波探信儀

電波探信儀—電探は各方面の戦術に革命をもたらした。これの用途を目標別に簡單に分けて考へてみよう。

(イ) 對飛行機。遠距離にある敵機をいちやく檢知し空襲を早期に探知し、邀撃態勢をはやく整へ得るといふのが最も初歩の電探の效用であるが、さらに電波標定機による高射砲の射撃は、暗夜あるひは濃霧中のまたは雲上の敵機への射撃を可能にした。従つて夜間空襲などの隱密作戦は著しく困難となつたのである。

(ロ) 對艦船。電探による艦砲射撃は、暗夜の海上または霧中の海上における海戦で、従來は想像もされなかつた正確な命中率を示すにいたつてゐる。従來夜陰に乗ずる驅逐艦の船を捕捉してゐたより遙か遠距離の敵を捕捉しうることとなり、その活躍範圍は著しく擴大し、戦果もまた飛躍的に増加するにいたるのである。

かくの如き優秀な兵器がもし一方的に利用せられてゐたとすれば、他方の飛行機、軍艦、船舶、潜水艦などの活躍は封鎖されてしまふこととなるのである。

この電探、殊に小型電探は敵側において相當進歩してゐり、わが飛行機、驅逐艦、潜水艦なども相當苦しみられたことはいなめない。殊に夜戦を得意とするわが航空部隊、海上部隊がその戦術に若干にもせよ變更を來さざるをえなかつたことはおぼひがたく、南太平洋戦の展開において相當の影響をおよぼしたことはいなみがいと云ふであらう。

この電探も現在着々敵に劣らぬものが完成されつゝあることは喜ぶべきことであり、海軍においても電波兵器の改良と増産のため畫期的の措置が構ぜられてゐることは戦争の前途のため慶賀すべきであらう。

### 三 技術と量の問題を克服

以上ラバウル戦局の現段階を明かにするとともに、今日の情勢に立つていたつた戦術、技術上の彼我の差異の主要なるものについて検討を加へた。上に検討した航空兵力の量、基

肉海戦法のごときは高度の訓練を要し、その壯快さにおいて海戦中の花と謳はれてゐたのであるが、電探射撃の發達によつて夜戦に對する従來の觀念は根本から覆へらざるをえなくなつた。従つて敵の制海權下に暗夜に乗じて躍りこみ奇襲をかける、あるひはとり残された味方基地に補給をするといふやうな離れ業は非常に困難となつたわけである。さらに飛行機が小型電探を備へつけることにより、暗夜でも海上の艦船の發見捕捉は容易となつた。従つて飛行機をもつて綿密な警戒網を張つてゐる場合、その海面を小型艇などによつて夜陰隱密裡に補給せんと行動してゐても、忽ち捕捉撃沈せられることとなる危険性が増加して来た。

かくの如くして敵機または敵艦の行動圏内における隱密行動は絶望となり、海上隔つた前進基地への補給のごときはわが完全な制空權、制海權のもとに非ざる場合、著しく困難となつたのである。

(ハ) 對潜水艦。主として飛行機にそなへつけられた小型電探は、潜水艦が夜間浮上してゐる場合或ひは海面に潜望鏡をのぞかせた瞬間に潜水艦の存在を探知し、これへの攻撃を可能ならしめる。これは對潜水艦作戦に畫期的な變革をもたらしたので、潜水艦の行動を著しく制約するにいたつた。逆に潜水艦が電探を備へてゐると従來潜望鏡をもつて敵艦

地設定の機械化、電波探信儀はいづれも喧しく論議され、すでに着々その改善を見るにいたつてゐる。南太平洋戦の戦訓はまた至大なものがあつたといふべきである。

しかしながら上の三者のごときものは早急を要する點において最も重要なものであることはもちろんであるが、もとよりこれのみでいゝのではない。陸上兵力の裝備の問題、艦隊兵力の増強の問題、對潜水艦問題など、同時に着々解決してゆくべき點は數へるにいとまはない。殊に中部太平洋において敵機動部隊の出没をみると、艦隊兵力、殊に艦隊航空勢力の緊要なること今日にまさるものはない。この點は本年報昭和十八年第一輯においていちやく指摘した通りである。要は相對的な兵力量の急速な増強と質的の改善が必要なのである。敵の戦法はさきにもべた通りわが第一段作戦の踏襲にすぎない。わが方においてラバウル戦局の示唆に鑑みて技術的、量的な諸點において飛躍をとげてゆくならば、大東亞戦争の完勝はわが手にありといひうるであらう。

## 印緬戰線の意義と特性

根津菊治郎

### 一 その重要性

印緬戰線は、太平洋戰線が海上の基地争奪戦として發展してゐるのに比して、陸戰の集約される戰域であり、支那事變の必然的發展としての大東亞戰爭本來の性格も、多くの様相をもつて彩つてゐる。しかも東亞の最前線としてのこの戰線は印度および印度洋をめぐつて、世界戰爭における東西戰線の相交する微妙な戰域でもある。

すなはち英帝國最後の戰略基地であり反樞軸陣營の兵器庫としての印度の防衛、對日反攻の基地としての支那大陸の強化——この二つの戰略目的に要請される敵のビルマ奪回企圖は、反樞軸軍の東亞總反攻に相呼應して空陸よりするビルマ反攻の連続となり、わが派遣軍および航空部隊の不斷の先制攻撃によつて熾烈なる攻防戰を展開しつゝあるのである。

ビルマこそはわが南方の最重要資源地帯たる東印度諸島を守るうへに對敵の一大障壁であり、政戰兩略上の重要性を具備してゐる。従つて世界戰局の動向はこの戰線に密接不可分の影響をもつとともに、印緬戰線の一舉一動はたゞちに印度、ビルマ、支那大陸に一貫する大陸戰線にひびき、世界戰局に微妙にして甚大なる波動を傳へるのである。

### 二 「ビルマ奪回」の内幕

敵が久しく呼號しつゞけた「ビルマ奪回」こそは敵陣營にとつてはクエベック會談以來の重大なる戰略となつた。この會談において創設された東南アジア反樞軸軍司令部の目標がビルマ・ルートに再開にあり、これによつて重慶の抗戰力を培養するのみならず、在支米空軍の擴充強化によつて對日攻撃基地たる支那大陸における全面強化を狙ふものである。

しかも最近ニミッツの中部太平洋攻勢の進展と呼應して米軍の太平洋戰略目標は支那大陸への到達にあり、この目的達成を前提とする場合、米軍に對する南方からの補給を確保するためにビルマ奪回が絶対に必要であるとし、ビルマ・ルートの再開論が新しい角度から擡頭するにいたつたのである。

從來歐洲第一主義を固執してきた英國が對日攻勢を策するにいたつたのは、このクエベック會談以來の米英對日共同戰略にもとづくものであり、對米迎合も含まれてゐるが、英は印度防衛に關し現状のまま推移することを許されぬ内外情勢に直面してをり、對日正面攻撃は米國に擔當させておいてむしろその間隙に乗じてビルマを奪回し、英帝國の威信を示すとともに印度防衛を確立するといふ意圖であつた。

米國はビルマ攻略によつてビルマ・ルートを再開し、在支米空軍の補充を容易にし、わが本土ないしは南方補給路を制壓下におさめ、わが戰略要線に全面的に脅威を與へるためには是が非でも英國を對日正面攻撃に引入れようと畫策し、一面米英の援助促進をさげぶ重慶の戰線脱落を防止する唯一最大の謀略であつた。

英國はこの奪回作戰に失敗すれば最後の寶庫を失ひ英帝國の崩潰をたどるのは必至である。それゆゑにビルマの奪回が英國にとつて全生命であるのに對し、米國のビルマ・ルート再

開のための反攻は局地的な戰略といへよう。こゝに英の慎重な態度があり、米の拍車をかける態度が見られた。しかし利用し利用し合つても敵の「究極の目的一致」となつたのである。しかしてクエベック會談で「大東亞反攻」として決定し、カイロ會談においても確認されたといはれるビルマ奪回作戰計畫なるものは、ビルマの周邊に大兵力を集中し内線に立つわが防衛を包圍攻撃によつて打ち崩し新輸血路「レド公路」の打通によりビルマ・ルートを再開、もつて印度——ビルマ——重慶をつなぐ一大戰略要線を完成し、南太平洋戰線に呼應して對日反攻の長大なる西部戰線を實現せんと企圖するものであつた。

かくてクエベック會談直後、東南アジア反樞軸軍司令部の創設と總司令官にマウントバッテンの任命を發表した。マウントバッテンは英海軍々令部長を勤めた元帥ミルフォード・ヘヴン侯を父に持ち、ヴィクトリア女王の曾孫にあたる名門の出の提督で、昨年八月赴任を前に海軍大將に進級した。當時わづかに四十三歳の彼を、對日本格作戰の總帥に据ゑた狙ひは、彼が米國で人氣を博してゐるところから、彼によつて英國の印度支配の地位を保持し、米國の野望を巧に牽制せんとする狡英の魂膽も織込まれてゐたのであるが、表面の宣傳は昨年三月敵英が上陸専門の「奇襲部隊」(コマンド)を編成

したとき彼はその初代司令官となり、北阿作戦に成功したといはゞ奇襲上陸作戦の名將だとおだてあげてゐる。そこでマウ  
ンドバツテンが昨年十月ニューデリーの本據に着任以來、印  
度およびセイロン島を基地とする西からの對日攻勢準備に着  
手するや、印度洋を渡つての一大上陸作戦、ビルマ反攻の海  
陸同時作戦などが世界的に印象づけられ、彼とともにビルマ  
戦局は大きな焦點となつてきた。一面、在支在印米軍司令官  
スチルウエルを總軍の副司令官とし、相ついで東南アジア方  
面の米英空軍を合休、これを英空軍大將リチャード・ベイア  
ースの指揮下におくと同時に在印英空軍、米第十航空隊を單  
一司令部の下において司令官に米少將ストラッド・メイヤー  
を任命するなど總司令部の編成完了とともに一應敵陣營に期  
待感を與へてゐた。マウントバツテンはこれよりさき、クエ  
ベック會談で任命を受けるやワシントンにいたり米陸海首腦  
と二週間にわたり協議し、ロンドンに歸つてウェーヴェルや  
印度相アメリーとも打合せ、重慶に飛んで蔣介石とも作戦協  
議するなど忙しい動きをみせ、十月ニューデリーに着任、必  
死の攻勢準備にとりかゝつたのであつた。

### 三 戦線の特異性

戦を支配してゐた。實にこの面の作戦は渡河、濕地通過、ジ  
ヤングル突破の三つの特異性を點綴し、この自然の克服、利  
用によつて激闘がつけられたのである。

昨年の敵の第一次アラカン反攻においてはわが軍は小部隊  
をもつて英印軍第十四師團の大軍を阻止する一方、有延挺身  
部隊はアラカン山系三百キロの大迂回作戦を強行、モウド  
ク、マユ兩山脈を横斷、大密林を突破してマユ河からベンガ  
ル灣岸に到達し敵の退路を遮斷、これが包圍殲滅に成功した  
のであつた。いかなる地形をも克服して放膽なる大迂回戦を  
敢行するわが絶妙さと精強さを身を以て體驗したはずの敵は  
大兵力をもつて第二次反攻に出で滲透戰術によつて出撃した  
が、わが軍の敵の裏をかく迂回作戦により、またしても殲滅  
の憂目に遭ひ、敵は再び「アラカンの悲劇」をくり返したの  
である。

アラカン・ヨマの北の別稱バトカイ山系の分脈が厚く光つ  
て山岳重疊たる大高原地帯がチン丘陵である。雄大なる新戦  
場と化した中部國境戦線の中心となつたチン丘陵は、このバ  
トカイ山系の最高峰ケネディ・ピークの二千六百メートルを  
王座として二千メートルから千メートルの峻峰と溪谷の連接  
によつていたるところ大密林に掩はれてをり、丘陵の東麓に  
はチンドウイン河の支流ミンタ河、中央にマニプール河が流

印緬戦線の意義と特性

#### 1 地形の克服戦

ビルマ國境戦線ないしは印度進攻作戦の特異性は「地形の  
克服戦」である。作戦指導のうへからみれば放膽絶妙なる各  
個撃破に出で、敵脱出路および補給路を遮斷して孤立化せし  
め、これを包圍殲滅するといふ典型的な作戦方法で推進され  
たが、皇軍部隊の進撃は一面において山岳、密林との戦ひで  
あり、濕地と水との戦ひであつた。これら地形の克服戦こそ  
全戦線に通ずる戦の様相でもあつた。

南部のアラカン戦線では、ビルマ國境の屋根である海拔三  
千メートルのアラカン・ヨマをはじめモウドク、マユの三山脈  
が並行屹立して峻嶮なる様相を形づくつてゐるうへにカラダ  
ン、マユ、ナーフの三大河川が南北に流れて二、三キロから  
五キロの河幅におよぶ奔流のほかに幅一キロ前後の支流は無  
数の網の目に流れてクリークをつくり、濕地デルタ地帯の連  
續である。しかもベンガル灣の海洋に臨んだデルタ地帯では  
湖の干満にさへ大きな制約を受け干満は河川に二メートルな  
いし四メートルの水位差をもたらし、十キロの上流までもお  
よぶ。これがため舟艇によるわが機動は絶大な苦心をとま  
つた。また全山はジャングルに覆はれ道といふのは野象の通  
路ぐらゐで山谷にあるひは河底を通らねばならず、地形が作

れ、幾多の深谷を形成してゐる。印度領マニプール溪谷と  
もにアジアの秘境であつたのが、いまや世界戦局の焦點とな  
つて大きく浮び上つてきた。

チン丘陵の東側に沿ひ山谷を縫つて印度領マニプール侯國  
へ通ずる自動車道路があり、今次わが印度進攻作戦における  
進撃路をなしてゐる。わがビルマ戡定作戦によつてビルマか  
ら敗走した英軍はチン族を懐柔してマニプール道路の建設に  
酷使し國境一帯に半永久的な陣地を構築したのであつたが、  
一年余の腐心いまやわが攻撃據點となつた。しかしこれらの  
大小の山系深谷には横斷路としては數へるほどしか残されて  
ゐないし、チークの樹海、千古の大密林を突破して印度へ電  
撃的の進撃をつけたわが將兵の苦闘また思ふべしである。

北部ビルマ作線および雲南怒江の戦域は地勢が邊境であ  
り、南部國境に比して氣象がもたらす環境的な様相が著しく  
相違し雲南國境の峻、高黎貢山系は白雲をいたゞき、昨年二  
月の重慶軍撃滅作戦に際しては、わが派遣軍將兵は山麓の高  
原に咲く櫻花に送られつゝ白雪を蹴つて高黎貢を制壓した。  
一方北ビルマのフーコン地區一帯はビルマの母といはれるイ  
ラワジ河の上流から西の大河チンドウイン河に挟まれるタル  
ン、タナイ兩河流域一帯の低地で、密林と濕地の「死の谷」  
とさへいはれる邊境である。敵は兵站線に悩みつゝ道路建設

「躍起となり、反樞軸軍の輸血路いはゆる「レド公路」打通のため、バトカイの嶺を越え海抜わづかに二百メートル内外のフーコン低地に到達したが、雨季には全く氾濫して一面の湿地と化し、瘴氣満つるあらゆる悪条件に阻まれてゐる。日印軍のインパール制壓によつてこの樹海群林に孤立した米英重慶混成軍を「死の谷」に自滅の運命に追ひ込んだ。

かくて雲南、高黎貢からフーコン、インパール、チン丘陵、アラカン地区にいたる戦線實に一千餘キロ、この長大なる陸正面に戦闘を展開する皇軍鐵桶の布陣は天の時、地の利、民族の和を具備して印度大陸の一角深く進攻しわが軍が主動的戦局を把握せる現段階において、勝利のわが將兵に満腔の感謝をいたさねばならぬ。

### 2 熾烈なる航空決戦

印緬の空に展開される彼我の航空決戦はますます熾烈さを加へてきた。しかも昨年から本年にかけての航空戦の様相は飛躍的な新段階に突入したことを注目せねばならぬ。

在印度の敵空軍勢力は約〇〇機といはれる。昨年五月には英空軍七百機、米空軍四百機、印度人空軍百機の計千二百機と稱せられてゐたが、輸送機、練習用および印度人訓練機などをのぞき實際の第一線兵力は米英合して〇〇機内外であつ

攻撃戦法を採用してきた。かくて一月中の敵機來襲延機数は三千五百機、二月は實に四千七百機といふ激増ぶりを示し、わが陸軍航空部隊の撃滅戦も激化して印緬航空戦は熾烈化の一途をたどつた。

しかるに三月に入つて皇軍の電撃的な印度進攻作戦が開始されるや敵機の蠢動は一時全く鳴りをひそめたかに激減するにいたつた。敵は三月五日以來アッサムのハイラー飛行場から米英印支混成の四個旅團約五千の空輸挺身隊を北部ビルマに降下させ、大東亞戦争最初の畫期的壯舉であるとマウントパッテンをして特報せしめたのであるが、わが軍の火中に飛込んだ虫のやうに全く包圍され、密林の孤兒と化した。この敵のいはゆる「壯舉」のために敵は東部印度に配した空軍の全力をあげて空挺部隊に協力させ、空中補給、掩護にあたらしめたもので、わが誘引作戦にまんまと乗せられ、無謀な企圖は失敗に歸し、敵空軍の大兵力を全く徒勞に終らしめたのであつた。

しかし量をたのみ、反攻の主力となす敵空軍の動向は輕視を許さぬものがあり、印緬の彼我航空決戦の激化は航空性能の發達、戦術の進化とともに、その様相を急激に變貌しつゝある。彼我ともに兵力の増強、新鋭機種の上場、電波兵器の急激な發達などがもたらす戦法は著しい變遷を呈してきた。

た。しかし昨年來敵はビルマ反攻に備へて航空兵力の増強に狂奔した結果、現在東部印度だけでも米英機〇〇を越え飛行基地は〇〇にあまる。米英兩空軍は任務を分擔し、英軍機は戦爆をもつてフェニンイ、アコーラ、シルチャ、チャタゴンなどベンガル州の印緬國境周邊を基地として近距離出撃を專任、米空軍はカルカッタ周邊および北アッサムの各基地に蟻踞してラングーン、モールメン、マンダレーをはじめビルマ各地の遠距離爆撃をくり返してゐたが、南部の英空軍が脆弱なため現在では米空軍がベンガルにも現れてゐる。一時盛んにビルマに出撃してきた英の爆撃機ウーリントン・ブレンハイムなどは次第に姿を消し、これに代つて米軍機のコンソリ B 24、ノースアメリカン B 26などが出撃し來り、戦闘機もスピットファイアのほかに米の P 40、P 38、P 39などに代つた。かくのごとくビルマ戦線に出撃する機種、機数からしても米空軍が英空軍に代位してゐることは確實で、在印空軍の指導權も米側が掌握してゐる。

一昨年の雨季明け以來、敵機はラングーンをはじめビルマ各地に出撃し、昨年末頃まではわが兵站基地、輸送路、船舶埠頭、市街地などの爆撃に終始してゐたが、本年一月ごろからビルマ總反攻に先行して來襲頻繁となり、大膽にもわが地上部隊の最前線や作戦地区にも來襲、戦爆併用による超低空

最近の敵空軍にみる戦法を検討してみよう。

彼我ともに防空陣の強化に對し優越せんとする要求は「超高度へ」「夜間奇襲へ」の二分野を急速度の開拓しつゝある。昨年一二月ごろわが在緬荒鷲の印度航空作戦に挑戦した敵ハリケーンは當初二、三千メートルの高度であつたが、回を追うて五、六千メートルに高め、五月ごろには優に八千メートルを突破する高度をとつて反撃してきた。空中戦闘の主動性を握るためには優位たる高度に立たねばならぬ。この必要が生む高空戦への關心と努力は彼我ともに異常なものとなり、互に高度を競ひつゝ昨年の雨季明け以來の空中戦は飛躍的な高空で展開されるにいたつた。敵英はハリケーンに代るに高空性能の優秀なスピットファイヤーさらに新鋭機、敵米もムスタング P 51などを増強し、昨年末以來アラカン戦線およびカルカッタ、テンスキア進攻作戦における彼我の戦闘は八千ないし九千メートルの高々度で行はれた。従つて爆撃機の爆撃高度も著しく高まり、ラングーン上空に晝間來襲するコンソリ B 24のごときは六千メートル以上の高度をもつて侵入してゐる。偵察機の高度も速度の威力とともに成層圏に肉薄してをり、敵の木製機モスキートなどはラングーン方面に一万メートル内外で侵入するのである。

つきに從來空の隘路とされてゐた夜間奇襲の本格的強行で

ある。ラングーンのごときは一昨年末ごろから敵機の夜間爆撃が連続的に行はれてゐたが、敵はむしろ神經戰的效果に重點をおき、甚しいときは一夜中ぶつ通しに飛び廻り都市盲爆を行つたことも幾度となくあつたが、昨年末ごろ以後は晝間よりも夜間の本格的爆撃に轉じ來り、夜間専門の飛行隊まで編成してゐると傳へられる。しかし來襲の都度わが制空部隊に捕捉され痛撃を受けてゐるが、無線航法の發達、照明、照準具の進歩を利用して敵は將來ますます夜間空襲を強行するであらうことを豫想せねばならない。

すでに印緬の空には高々度ないし成層圏内の空中戦が現實に展開されてをり、夜間空襲の諸困難も漸く克服されてきたことを明瞭に看取するのである。しかも世界に卓越せるわが優秀新鋭機に對し熾烈なる挑戰の意慾を示しつゝある事實を嚴に監視せねばならない。

#### 四 印度解放戰の新展開

敵陣營が共同の目標とするビルマ奪回を呼號し、いまや東亞に残された唯一の寶庫印度を防衛するためにも敵英にとつて今次反擊戰は必死の戰である。しかも昨春のアラカン作戦と異り、太平洋作戦と同工異曲の構想をもつて展開されたのであるが、勇戰善謀の皇軍はビルマ國境の各戰線で敵反攻の

布陣を各個擊破しつゝ印度國民軍とともに印度へ進攻した。いまや新戰場はビルマの山野を離れた印度の天地に移行し日英大決戰が展開されんとしてゐる。こゝにいたつて戦局は大波瀾を巻き起し皇軍のビルマ防衛は尖銳なる印度解放の一大攻勢作戦に轉じて根本的に性格を一變し、大東亞戰爭に重大なる新段階を畫するにいたつた。

印度進攻作戦こそは敵のビルマ反攻策源を覆滅するにあり、意義深き印度解放戰の緒戰でもある。それ故に目指すところはあくまでも米英打倒であり、斷じて印度民衆を敵とするものでない。従つて印度に對しなら領土的野心なきはもろんである。東條首相は三月二十二日印度國民軍の祖國への進軍を機に談話を發表し

「帝國の目的とするところは敵勢力を擊碎し印度を完全に印度人の手に委ねんとするものであつて、國民軍の進軍する祖國印度の地は直にことごとく自由印度假政府の行政下におかるべし」

とて領土的意思想なき帝國の正義を改めて中外に宣明した。またビルマ方面陸軍當局も雄大な印度作戦の新展開を闡明し「印度民衆を敵とするものでなく、毫も領土的野心を有せず、我軍進駐の寸尺の土地といへども眞の自由印度のものとなす用意あり」

と公約した。さきの印度獨立に對する支援の帝國の公約はいま如實に實証され皇戰の本義を顯現しつゝある。いまや新生獨立の歡喜に燃えるビルマ國軍も共同の敵擊滅に全面協力し、日緬印三軍一體となつて三億五千万民族解放の大進撃を續ける。こゝに大東亞戰爭本然の姿を見るのである。

#### 五 印度進攻の意義

##### 英陣營の狼狽

印緬國境の隨所に英印軍を孤立せしめ輝かしい戦果をあげつゝ印度國民軍とともに奔流のごとく印度へ進撃した皇軍はマニプール高原を席卷し侯國の首都インパールを包圍するにいたつた。インパールは東部印度における敵の陸空軍の最大基地であり、チャッタゴン、テンスキア、レドを結ぶアッサム・ベンガル鐵道の要衝である。本作戦、特にインパール制壓の戰略的意義は敵唯一の兵站線を脅威し、特にレド公路打通の使命を帯び、鳴物入りで宣傳につとめたフーコン地區出撃部隊と呼應する雨季前の積極作戦の續行は不能となるばかりでなく、この方面の敵は「死の谷」に自滅の運命に暴される。英本國方面では印緬戦局の推移を憂慮の色をもつて見守り、

外電の傳へる英國軍部筋の觀測は

「日本軍の北印度國境方面に對する攻勢は、單に防禦戰略の一部をなす作戦的攻勢にすぎない。日本軍の進攻はいまだ印度に對して重大脅威の程度にはいたらず、ステルウェル軍の進撃がはかどれば雨季前にイワラジ河上流へ滲透することができ得るであらう。マニプール方面の戦局は疑ひもなく英軍に不利であるが、マウントバッテン軍は優勢な空軍を利用して第一線への補給をつゞけるであらう。」

と米蔣軍に一縷の希望をとどめてゐるが、前線の英印軍司令官オーヒンレックの發表は

「日本軍の有力部隊はインパール街道を進撃しつゝあり。もしこの進撃を阻止できなければ兵站線は斷たれ、前線飛行基地は孤立化する危険あり。」

との赤信號をかゝげ、東亞および伊戰線の派遣印度軍を急遽召還轉進せしめる方針といはれる。事實、敵の印緬防禦線深く打込んだ楔が將來いかなる役割を演ずるかには敵側が最もよく知つてゐるだけに敵陣營の衝動と混亂は蔽ふべくもない。日印軍にとつては、將來、北部アッサム、あるひは南のベンガルに對する行動の自由を確保する一大橋頭堡ともなり、戰略的地位を一段と強化したのである。

今次作戦はわが先制攻撃によつて火蓋を切られたものであり、戦局の主動性は儼として皇軍の掌中にあつた。現に帝國は太平洋において敵の苛烈なる反攻に對し決戦を戦ひつゝあるが、しかも作戦の要請に應じて隨時隨所に攻勢の主動權を發動し得るのであつて、印度進攻にまで進展し移行した事實は、わが戦力の大なる保有を實証するものである。

奸惡なる敵英國は太平洋において日米相戦はしめ、戦局の發展を待つて印緬國境に反攻し、米英の挾撃によつて對日總反攻を形成せんと企圖したのであるが、いまや重大挫折に遭遇しつゝある。

## 2 米、蔣への打撃

敵陣營がビルマ反攻を企圖せる重大要因の一たる北部ビルマにおける對支輸血路の打通企圖もこの作戦によつて挫折に瀕した。印度アッサム州のレドからビルマ北邊のフーコン地區を抜けて怒江に達し、舊ビルマ・ルートに連絡する新對支輸血路「レド公路」の打通計畫は敵米が最も熱意を示してゐたところで、米がこの輸血路打通によつて援蔣強化を實現し、重慶軍による對日大陸第二戦線の戦力を昂揚、在支空軍を飛躍的に擴充して對日本土空襲の野望を達成し、もつて太平洋戦線を牽制せんとの意圖であつた。

このため米は在印重慶軍三個師に指導將校ならびに米式裝備を入れ、訓練を與へて自己薬籠中のものとし、最近では雲南遠征軍をも米の指揮下に入れんとする野望を起し、これがため陳誠は遠征軍司令官を辭任して引揚げる騒ぎを演じた。他民族の犠牲において人的資源の損耗を回避せんとする敵米はこゝでも重慶軍を日本軍の前に立たしめ輸血路打通に狂奔してゐる。

蔣介石また現在の窮狀を打開する唯一の途は北緬輸血路の實現によつて米英物資を仰ぐことにあり。英印軍による西からのビルマ反攻の曉には米の指導に雲南軍を同調せしめ反攻作戦に轉移せんとする氣勢を示した。しかるにビルマ周邊の反攻はことごとく瓦解し、かへつて皇軍の印度進攻の現實に直面して重慶の窮乏打開、米の要求する支那大陸第二戦線の強化のいづれもが畫餅に歸するほかない。

## 3 印度への影響

わが印度進攻作戦が軍事的に敵の東南アジアにおける最大の反攻基地たる印度に重大脅威を與へつゝあることはいふまでもない。印度は敵陣營の作戦基地としてのみならず、兵站基地としても重要性をもつてをり、敵英國の反攻戦力の源泉であることを指摘せねばならない。

英國は印度の老大な國土、人口、資源を利用收奪し、前大戦と同様の「對英貢獻」を印度に課し、全印度の國土と民族をあげて對日戦の一大據点たらしめんと企圖した。この野望を實現するため、推定最高動員能力三百五十萬のうち、すでに二百萬の印度兵を徵募せるほか、英の鞭と米の器材とにより印度の兵器廠化を着々進め、最近の進捗ぶりは想像以上と傳へられる。

すなはち軍事工業化計畫の成果が示す兵器、彈藥の大生産力がそれである。ロンドン・タイムズ紙が宣傳する「兵站基地印度の武器生産」は昨年度においては石炭と輸送の隘路があつたにかゝらず、火炮と彈藥は從來の水準を抜き、小銃は戦前の十倍、火炮は九倍、機關銃十二倍、彈藥は二十七倍に達し、高射砲、裝甲車なども豫定通り生産されたといふ。航空機工業のごときも發動機以外の部分品はほとんど生産され、パンガロール、ボンベイ、ニューデリーなどにあるフォードの航空機製造組立工場の強化、コンソリデーター航空機會社がマイソールに大規模な製作工場を新設した實狀などは對日戦に、援蔣に印度が果しつゝある役割の大きさを窺ひ得よう。従つて印度の寄與いかに反樞軸陣營にとつて全く死活の問題である。日印軍の進軍がこの印度の兵器廠に點火する役割をもつものであることを銘記せねばならない。

さらに今次大戦の過程において昂揚された印度民衆の民族意識はもはや英の恫喝や懐柔によつてもいかんともなし難い域に到達しつゝある情勢下に、日印軍の進攻が及ぼす政治的影響は甚大であらう。英國の狼狽に比例して全印度の抗英獨立機運は漸次濃化し、最近ではアッサム、ベンガル地方で軍用米の強制供出を拒否したり、米國管理のアッサム、ベンガル鐵道に非協力を表明するなど騒然たるうちに、最も利目すべき動向は印度中央議會と回教徒聯盟の抗英的態度がある。

すなはち國境突破の十日後、三月二十七日印度中央議會に提案された國防費増額案および戦時新增税案の政府原案を五十六對五十五票で否決し去つたことで、しかも親英派、懷疑派が多數を占める議會において、會議派と結んで原案不成立の誘因をなしたのは回教徒派であつたといふ事實である。從來印度獨立のための戦線統一を標榜してきたガンジー、ネーラーの國民會議派と常に對立して英國の走狗に甘んじたジンナ一派の回教徒聯盟が、國境より起る新事態を映して反英的性格を明かに示したことは印度國內の代表的新動向として注目すべきである。「印度進攻」の波動はまさに親英の牙城をも搖がし、印度の獨立運動が内部的に一大變化をとげ、その方向が積極的に一元化されるであらうことは疑ひないところである。



一七五八年英の侵略がベンガルに魔手を伸ばして以来實に二百年、いまや三億五千万の印度人のための印度に黎明が訪れて、大英帝國の太陽没せんとするを如實にみるのである。

### 六 國民軍の祖國進軍

今次の攻勢作戦に印度國民軍およびビルマ國防軍が共同戦列に立つて皇軍とともに進撃しつゝあることは最も注目すべき歴史的快事である。特にチャンドラ・ボース最高指揮官の率ゐる印度國民軍が皇軍精銳と肩をならべて印緬國境を越え祖國印度へ武力進軍した事實は、世界の現戦局・政局に絶大な渦紋を投げるであらう。

東條首相が「印度獨立については帝國政府は實力を以てこれを十分援助する」と、印度解放に對する帝國の決意を表明したが、果して印度國民軍は皇軍の實力をもつてする支援を力強い後盾として、印度解放の宿願達成のためデリー目指して進軍を開始し、いまや獨立三色旗を祖國印度に翻へしたのである。ボース首相の自由印度假政府樹立以來、印度の救世主へ心寄せてゐた印度民衆は國民軍を迎へて熱狂しつゝあり、その感激思ふべしである。

ボース首相は三月二十一日、印度國民軍の國境進撃にあたり聲明を發表

とを確信する」と、改めて帝國の立場を闡明し

「自由印度假政府は唯一の使命を遂行するのみ、すなはち武力により印度の聖なる地より英米軍を追放し、恒久的なる自由印度國民政府を確立することである。われらは英米軍が撃滅されるか、印度が解放されるまでは武力闘争を繼續するであらう。同時に解放されたる地區の建設工作に邁進するであらう。自由印度假政府は印度國民の唯一の合法的政府である。」  
「印度國民諸君よ、諸君は再び印度の國民、自由の國民に立還らんとしてゐる。諸君自身の政府自由印度假政府に馳せ參ぜよ。」

と烈々祖國解放戦勝利の第一聲を放つた。

この世紀の祖國進軍に應ずるかのごとく、各戦線において英軍内の印度兵の投降續出が報ぜられてをり、印度國內の抗英運動に火を點じ、印度解放戦は燎原の火のやうに廣がる原動力となるであらう。假政府ではマニプール平原に獨立戦の基地を擴大、さらに前進を期するであらうが、解放地域の金融工作、通貨問題も決定し、自由印度の建設工作ははやくも成功を収めてゐる。

かへりみれば昨年十月二十一日昭南に自由印度假政府の樹立をみてより半歳に満たず、印度獨立の最終の戦と叫んで祖國へ進撃した印度國民軍によつてはやくも東部印度の一角に

「印度國民軍は日本軍の密接なる協力により聖なる使命に發足せり」と

「いまや待望の自由を實現すべき絶好の機會なり。同胞諸君にしてこの機に乗じ任務を遂行せば自由は遠からず達成されん」と

と在印度同胞に呼びかけ飛檄した。  
またビルマ國バー・モウ國家代表も三月三十一日、對世界放送をなし世界につけた。

「印度進撃こそは、この數世紀にわたり英國の武力と戦ひ敗れてきた印度人、ビルマ人にとつて世紀の事件である。敵がいかなる欺瞞宣傳をいはうとも日印軍の印度進撃は儼然たる事實である。」

國民軍の進撃にともなひ假政府本據も印度の解放地域に設置すべくたゞちに準備が進められ、自由印度行政長官には假政府財務相チャタートジ氏が任命され、ボース首相も解放地に理想政府の樹立を言明し「解放即建設」の工作が押し進められた。

インパール攻略の迫つた四月四日、ボース首相は「印度進撃の第二次聲明」を發表し、「日本政府は印度に對したんら領土的、政治的、經濟的、ないしは軍事的野心を有せざるこ

自らの領土を確保したのである。

### 七 敵反攻の動向

奇襲上陸の専門家が敵が宣傳したマウンントパッテンが昨夏、東南アジア軍司令官に就任の際「英國の東亞反攻作戦はあくまで海上奇襲作戦により開始され、ビルマ奪回も陸路進出に困難であるから陸路は一兵でも少くし、海上よりの攻撃に主力を注がねばならぬ」といつたことによつて敵が對日海洋二正面作戦を企圖してゐることく印象づけられ、雨季明けと同時にベンガル灣岸への上陸作戦と呼應し、國境より一齊に總反攻を起し一舉にビルマ作戦を決定的段階に導かんとする企圖であつたと想像される。印緬戦線は敵の最も得意とする高度の機械化作戦の活動を阻止する密林と濕地の連続で、英軍がマライ作戦において體驗した以上の苦惱をなめてゐるだけに、國境アラカンの自然の障壁に加へて皇軍の鐵桶の布陣の前に陸兵のみをもつてしては一步も進み得ぬことを知る敵が、一縷の望みとしたのは海上からの奇襲上陸併用の海陸同時作戦ではなかつたであらうか。唯一の空からの奇襲空輸挺身隊もいたづらに空軍力の空費と重慶側の「生命の浪費」にをはりマウンントパッテン攻勢は最悪の失敗にをはらうとしてゐる。外電の報ずる米軍事消息筋の意見は「マウンントパッ

テンはビルマ作戦に必要な海軍船舶の掩護不足のため、大作戦による危険を冒したくないと吐くのである」といひ、米紙はマウ

ントパターンとスチルウェルの對立を報道してゐる。氣象的、地勢上の多くの制約をもつ印緬の全戦線では雨季中の半年間は大兵力の自由なる行動を妨げる。その雨季はまさに五月にはじまるのである。とくに印緬國境地方は世界で最も多雨の地であり、瘴癘の地である點などから考へても、この雨季中の陸上よりの大反攻は實現不能と見られよう。

敵が敗戦を糊塗するため放送しつゞける宣傳文は「現在の攻勢は本格的作戦の豫行演習にすぎない。大規模に展開されるまでは相當な期間を要する」といふのであつて、第一次アラカンの悲劇の際、ウーエーヴネルが「アラカンは本格的攻勢のための練兵場である」と嘯いたのと同義語である。

元來、敵のビルマ反攻作戦に關して英國では二つの意見があり。一はあくまで陸上より攻撃してビルマ・ルートを奪回せんとするものと、他は海上より奇襲上陸を企てんとするものである。前者の陸上作戦の困難、いなむしろ不可能については數次にわたる小反攻および今回の徹底的覆滅を體驗して如實に敵が思ひ知つたはずである。しからば敵が呼號するごとく果して海上よりする奇襲上陸併用の海陸協同作戦は實現の可能性をもつであらうか。昨年以來外電によつて報ぜられ

た敵のこの作戦豫想を綜合すると、まづベンガル灣の制海權を確保し

一、地上作戦に並行してラングーン、もしくはビルマ南岸モールメン方面に上陸作戦。

二、ビルマ南岸よりマライ半島西岸に對する前哨基地たるアングマン、ニコバル諸島の奪回。

三、マライ半島西岸の最狭部クラ地峽に上陸、もしくは海上勢力をもつて直接スマトラを衝き、もつて東印度諸島と日本の連絡線遮斷。

大體右の三つに歸してをり、またデーリー・テレグラフの軍事評論家中将マーチンは、「ビルマ陸上作戦は地勢、氣候、交通の諸點からみて不利である」といひ、英の軍事評論家シリル・ファールスは「印度よりするビルマ作戦は陸海兩様作戦をもつてせねばならぬが、それは島から島への連續的作戦でなく、大陸の一部からベンガル灣を経て同じ大陸の他の一部への上陸を意味する。すなはち陸上大兵力をして日本軍と接觸せしめるためには海路を遠ぶ以外道なし」と論じ、デーリー・メールは「今後の對日戦はベンガル灣が中心となり、ニコバル、アングマン諸島が近き將來中心戰場となるべきである」と斷じてゐる。

以上のごとき上陸作戦意欲は、あながち宣傳のみと輕視す

るのは危険であるが、奥地の日本軍攻撃に消耗するよりも一舉海上から後方據點たるラングーンに上陸奇襲せんとするは作戦的に全く不可能なことである。ラングーンはベンガル灣の河口からラングーン河三十マイルを溯航しなければならぬいからである。他の重要前進據點たるベンガルのアングマン、ニコバル諸島の奪回意圖を敵がもつものとするれば、われを知らざるも甚しといはねばならない。この兩列島はビルマの南端よりスマトラの北端にわたり蜿蜒千七百キロ、二百數

の島々が飛石傳ひに連つてゐる。南アングマンのポート・ブレアまで、セイロン、カルカッタからいづれも二千キロ、爆撃機で約五時間、艦船部隊なら二日間で到達し得るが、米陸軍當局が告白せるごとくビルマ作戦を決定するものは結局船船の問題であり、マウントパターンをして「ベンガルに大艦隊を轉用するに非ざればビルマ奪回は不能である」と結論せしめた苦慮もこゝにある。しかも太平洋戦線の飛石作戦とは全然異り、アングマン、ニコバル兩列島以外に島影一つなきベンガル、印度洋に露出した艦隊の行動がどれほど危険きままるものであるかは敵自らが知つてゐるはずだし、英海軍は對獨決戦に備へ、あるひは第二戦線問題をも考慮に入れねばならぬ情勢下にあつては、大海軍力を印度洋に振向けることは困難なことといふべきである。

しかしながら一面、北阿戦線および地中海方面の安定によつて英海軍は戦艦、空母以下の地中海艦隊の主力を印度洋方面に回航したと外電は傳へてをり、米軍も北阿方面の航空兵力ならびに陸兵を印度に派遣増援せることを米當局が言明してゐる。印緬國境における陸上反攻の企圖挫折がもたらす敵の焦躁と太平洋戦線の進展は、敵に海陸兩面作戦を促進させぬとも限らず、われらは印度洋上に濃化される明日の戦雲を凝視しつゞ警戒すべきであらう。

翻つて支那大陸を基地とする對日反攻の新たな展開もまた看過することのできない様相を示してゐる。米英の企圖するところは、これによつて日本を威嚇するとともにビルマ反攻の挫折に對する重慶の不滿を慰撫せんとする政治的考慮を含んでゐることはいふまでもないが、米はあらゆる困難と犠牲をしのびつゞ在支米空軍の増強、大型機用の基地整備、印支空輸による援將強化などに狂奔してをり、重慶また米英に對する視察團の派遣、空軍再編成、米空軍との提携強化などによつて對日反攻の便乗を策してゐる。さらに最も注目すべき新動向は新に英空軍の支那戦線への積極的参加が傳へられてゐること、最近重慶の對英接近、英との合作強化の諸事實の半面、重慶を懐柔して米の軍事的政治的な重慶獨占を牽制するとともに、重慶の犠牲によつて印度防衛を策さざるを

付なくなつた英の媚態政策を物語るものであるが、英空軍の  
又那戦線参加は一應豫測されるところであり、近くなんらか  
の反攻を企圖してゐるものごとく、印度洋とともに大陸の  
空をも厳に注視すべきであらう。

## 歐洲戦局と反樞軸の政情

### 米國戦時態勢管見

細川隆元

#### 一 米國民の戦意

敵アメリカの戦時態勢を解剖するについて、四つの面からこれを見ることにしたい。第一は國民の戦意、第二は生産力の問  
題、第三は政治情勢、第四は戦時社會の問題の四つである。順を逐うてこれを説明することにしよう。

第一に戦力の基礎といふべき國民の戦意、言葉を換へれば、戦争遂行上における國民の精神的團結力がどの程度のものであ  
るかといふ問題である。開戦當初と今日とを比ぶれば、アメリカ國民の戦意は非常な變化を來してゐる。パールハーバーの大  
打撃を蒙つた當時、アメリカ國民の間に一通りの敵愾心と對日憎惡が漲つたことはもちろんであるが、しかし國民の戦意は全

般的にみてすこぶる低調であり、政府の國民に對する戦争指導にもかゝらず、一向に戦意は昂揚しなかつた。それには二つの理由がある。一つはアメリカ國民といふものが、日本の實力、特に近代國民としての日本、國防國家としての日本を知らなかつたこと、すなはち日本といふものゝ實體に對するアメリカ國民の認識が缺如してゐたことが戦意低調の第一の理由となつたのである。「東洋の小國」といつた頭から日本を見下した日本觀によつて、アメリカ國民は戦争の相手方としての日本を輕視してゐた。二つにはパールハーバーの奇襲によつて、彼が受けた大損害についても、世界一の生産力を鼻にかけてゐるアメリカ國民は飛行機でも軍艦でも船でも、つくつてしまへば損害も元通りになるから、まづドイツと戦ふ片手間に日本を叩き潰すぐらゐは、さほど困難なことではあるまいといつた、自己の生産力にすべてを頼つてゐる國民の自惚れが戦意低調の第二の理由となつた。だからこの戦争は軍人と政治家にまかせておけば、そのうちにかたづくだらうといふのが戦争勃發當初における國民全般の感じであつたのである。

それが二年間の経過をみて日本の強さを知るに及んで、それに基いて敵愾心も起り、またこれはうか／＼してはをれないといふ氣持になつてきた。つまり日本の戦果がどん／＼あがつてゆくのでこれは俺達の考へてゐたやうなものではないと認識してきた。戦果の影響で國民の戦意が昂まつてきたのである。もう一つは駐日米大使グルーの歸國である。昭和十七年八月の第一次日米交換船で歸國したグルーは國民の戦意低調をみて一驚を喫したのである。爾來彼は全國を遊説して國民の對日認識の是正と、これにもとづく國民の戦意昂揚運動を展開したが、彼の所論は歸國後半歳にして彼が出版した「東京報告」といふ著書に最もよく盡されてゐる。もちろんこの著書は日本における軍民離間を狙つた謀略的宣傳を目的としたものではあるが、その著書の中で彼は「ともかく日本は強く、日本人の精神力は世界的に優秀なものである。それが集つてきてゐる日本國民の精神的團結、これは實に類ひないほどえらいものだ。また物質の面についても日本は貧乏國、持たざる國といふやうな觀念は舊い對日觀で、かういつた對日認識でこの戦争を繼續するならえらいことになる。」と國民に向つて呼びかけてゐる。

グルーはその所説において「いはゆる藉すに時を以てすれば日本の物質の面は、精神力と相ともなつて非常に強いものとなる。お前らは日本の實體を知らぬ。自分が數年間日本にをつた經驗にもとづいた具體的事實に徴しても、その精神的な力に優るとも劣らぬ物質的な力を有してゐる。この日本の持てる潜在力は絶對的に輕視してはいけぬ」と強調してゐる。さらに

「かういふ強大な一大強國と戦つてゐるのに、今日のやうな國民の戦意でどうするか。まるでだらしない。かういふ調子では勝つどころの騒ぎではなく敗けるのだ」とハッキリいつてゐる。「隨つてこの際徹底的に日本を叩きつけて足腰の立たなくなるまでやつつけなければアメリカは未來永劫浮ぶ瀬がない。つねに日本は眼の上の瘤だ。だから途中で態のいい講和をしたり途中で戦争を打ち切つたりしたらアメリカの敗けだ。日本國民といふものは七轉び八起きする國民だから徹底的に粉砕しなければならぬ。それには今日のやうな國民の戦意では問題にならぬ。國民よ、醒めよ。さもなければわれらは勝味がない」と喝破した。

このグルーならびに同じく交換船で歸國した十數名の新聞記者がさかんに言論戦を展開した結果、アメリカ國民の日本再認識といふものは非常に強くなつて行つた。自分らは日本の實體を知らなかつた。なるほどグルーのいふやうに日本といふ國はそんなに強いのかと、日本の實體を認識することによつて、その方面から生じた國民の戦意はずつと違つてきた。

以上は國民の自覺といふ方面からきた戦意の變化の概略であるが、一方ルーズヴェルトの戦争指導といふ部面からみた國民の戦意はいかなる變化をみせてゐるか。最初ルーズヴェルトが戦争目的として國民に訴へ、これによつて國民を率ゐんとした言葉は「自由主義とデモクラシーの擁護」であつた。しかしかゝる抽象的な戦争目的をもつては國民の戦意を燃やすことはできなかつた。議會や言論機關からはルーズヴェルトに戦争目的を具體的に明示せよと迫られ、日本からは大東亞戦争といふ名稱をいちはやく突きつけられたといふ具合で、彼はいろいろ考へて、例の「生き抜くための戦ひ」といふことをいひ出した。これは彼が考へた言葉である。

彼はこの名稱によつてどういふ戦争指導をやりはじめたかといふと、要するにアメリカの國民生活は世界一に高度なものである。もし戦争に負けたらこの生活は壊れてしまふ。だからお前達が愚圖々々してゐるとえらいことになるぞ。お前ら自身の生活を守るために張切つて戦へ、戦に負けて困るなら負けぬやうに頑張れ、と戦争の結果論を目的論にすりかへた指導をしたのである。これはアメリカ人の單純で實利主義的な頭を狙つたもので、生活部面に目的を結びつけられるとアメリカ人には利目があつた。世界一高度な生活がなくなつては大變、これは負けられぬといふことで、かういふ方面からも戦意は揚つてきた。ところがこれではどうも消極的である。これは負けたら大變だから負けられぬといふのであつて、積極的な戦意は揚つてこない。そこで

もつと積極的な方面の戦争目的として、つぎに彼はどういふことをいひ出したかといふと、ちやうど去年の北アフリカのカサブランカ會談の後の頃から「世界制覇の野望」といふことを國民の前にすつと暴け出した。當時におけるルーズヴェルト、チャーチルの共同聲明にもある通り、カサブランカ會談における米英兩國作戦の終局目的は「日獨伊三國の無條件降伏」にありと世界に宣傳されたが、この裏づけをなしてゐるのが米の世界制覇の野望である。もちろんルーズヴェルトの口から「世界制覇の野望」といふ言葉こそ使つてゐないが、戦後世界を支配する者は米國であるといふ國內宣傳こそは、まさにルーズヴェルトが新しい戦争目的として國民に對する戦争指導を展開し、今日までつゞいてゐるアメリカの戦争目的にほかならない。

アメリカ人はなんでも世界第一主義でなければ承知できない。第二はいやである。これはワシントン、ジュネーヴ、ロンドンの軍縮會議を通じてみてもわかる通り、あの軍縮會議は要するに米英の争覇戦であつた。さうしてジュネーヴ會議は米英の正面衝突で破れたが、結局ロンドン會議でアメリカが勝つた。なんでも世界第一でなければ承知しない。この國民的に共通な傾向といふか性格といふか、趣味といふか、このアメリカ人の世界第一主義の嗜好を世界制覇の野望に移したのである。さういふ方面からする戦争指導はたしかに効果をもたらしした。それでアメリカ人の戦意が消極的な防禦的な意味の戦意から積極的方向に變つてきたとみておかねばならぬ。

今次の世界大戦の皮を一枚剥けば、そこには世界制覇の野望が相剋してゐるのである。一例を南米のアルゼンティン問題にとつてみよう。元來アルゼンティンといふところはイギリスの資本的勢力の非常に強いところで、現在もイギリスが大部分押へてゐる。これに對してアメリカが取つて代らう。このどさくさまぎれにイギリスの勢力を追い出してアメリカの勢力を入れようといふのが、現在アルゼンティンにおける英米の争ひである。イギリスとしては、あてこから牛肉を買ひ小麦を買つてくる。この牛肉と小麦を自分の方に安全に來さすためにはこの際あくまで中立を守らせたい。アメリカとしては中立を放棄させることによつて、そのどさくさまぎれにイギリスを放り出し、南米洲を安全に自分の脚下におかうとする。こゝにイギリスとアメリカの激しい葛藤が醸し出されてゐる。西アフリカはもう大體アメリカの勢力になつてゐる。北アフリカも最近アメリカの勢力が非常に伸びてゐる。トルコにおいてさへイギリスとアメリカの争ひは激烈でアメリカの勢力が大分伸びてゐる。イラン、イラク、インド、こゝも全く英米の競争場裡でアメリカがだん／＼浸潤してゐる。このやうにアメリカがこの戦争を利用

して世界制覇の野望をなしとげようといふことは具體的に現れてゐるが、その野望をカサブランカ會談頃から國民の前にぶちまけた。戦後の世界を支配するのはアメリカだといひ出したのである。

敵愾心の問題をとり上げてみよう。アメリカの大衆宣傳のいちばん尖端は映畫であるが、この映畫なども戦争がはじまつて半年ないし八箇月ぐらゐはドイツを目的とした映畫ばかりで、ドイツに對する憎しみを國民に植ゑつけるやうな映畫でいっぱいであつた。それがこの半年ないし八箇月間位の傾向をみると、ほとんど日本關係のものになつた。日本に對する敵愾心を國民に植ゑつける映畫が非常な勢ひで作製されてゐる。かういふ政府の宣傳政策といつた方面、敵愾心の養成といふ方面からする戦意も揚つたとみなければならぬ。

標語についても最初は日本關係の標語はあまりなかつたが、最近ではたとへば公債賣付でも「キル・ワン・ジャップ、バイ・ワン・ポンド」(一方の手で一名の日本人を殺し、他方の手で一枚の公債を買へ)といふやうな標語をつくつてゐる。また物資節約の標語を新聞に書いてゐる例にみても、たとへば紙の節約についていへば、「セーヴ・ペーパー、キル・ジャップ」(紙を節約し、日本人を殺せ)。さういふアメリカ式の對語には必ずジャップをもつてくる。さういつた方面からする敵愾心を利用して政府の政策の運行を援けようとし、また政策の遂行に關聯しつゝ敵愾心をそゝるといつた遺方であり、この半年ないし八箇月間ぐらゐから全般的に敵愾心がぐつと變つてきた。かういつた敵愾心の面から觀察しても戦意はずつと揚つてきてゐるとみるべきである。

## 二 生産力の問題

第二に生産力の問題をのべることにしたい。敵アメリカの生産力の上り下りについてはいろいろな議論を聞くが、これは机の上でたゞ数字を組合はして計數的に上ると議論してみたところが、あるひは當るかも知れず、あるひは當らぬかも知れぬ。かういふことはあまり過大評價する必要もないし、あるひは樂觀論にすぎず不覺をとつてもいけない。要するに實體を把握し、敵情勢の實相を視ねばならぬ。アメリカの生産がいかなる變化をきたし、現在の生産がどの段階まで行つてゐるかを知

り、またルーズヴェルト政権が経済上においてどういふ手段をとつてゐるか、といふことを知らなければならぬ。一言にしていへば、とにかくアメリカは自由経済機構のまま戦争に入つた。もちろん戦前八箇月間ぐるりに武器貸與法によつてイギリス援助のために平和産業が軍需産業に切り換へられた。自動車工場などはところ／＼軍需産業に切り換へられたが、本格的な軍需産業に乗り出したのは、なんといつても大東亞戦争に入つてからである。従つて戦時経済政策、経済機構は大體自由経済機構のまま戦争に入つてしまつた。さういふ場合アメリカがいかなる政策をとつたかといふと、これはどの國でも同じことで、いはゆる金の豫算によつて彼が持てる國を誇つてゐただけに、富裕なストック資材をつぎつぎに生産にぶち込んで行つた。アメリカの生産力が急上昇を來したのはむしろ當然である。しかし昨年の五月からアメリカの軍需生産に全般の頭打ちがみえてきた。これのいちばん大きな原因はどういふところにあるかといふと、アメリカが持てる國を誇つてゐるといつたところが、軍需資材が全部均等に捕つてゐるわけでない。或る物資はありあまるくらゐあるがだん／＼ストックの少くなつてくる物もある。たとへばゴム、錫、マンガン、銅といつたやうな彼が持てる物資の中で貧弱なもの、かつその補充が困難な物資はやはりだん／＼底をみせてくる。ゴムなどは開戦當時大抵二年間ぐらゐのストックであらうと推算してをつたが、満二年間たつた頃からだん／＼と底がみえ出したのはアメリカ自身で發表してゐる数字をみてもわかる。人造ゴムはまだ全般的に見て代用的なところまで行つてをらぬやうであり、ゴムが彼のいちばんの悩みとなつてゐる。さういふ風に彼が持てる物資の貧弱なストックがだん／＼減つてきた。そこに生産資材のうへの均衡が破れはじめたのだ。いはゆる生産資材の跛行状態がアメリカの生産全般に現れ出したといつていい。昨年五月頃からのアメリカ軍需生産の全般的頭打ちの現象は、こゝにその最も大きな理由を發見することができるのである。

このほかに當時の生産全部門にわたる頭打ちにはさらに三つの原因が重なり合つてゐるとみることができよう。その第一はアメリカにおける國內輸送問題の隘路である。輸送問題は戦前はすべてが自動車輸送で、スピードからいつて、時間からいつて、運賃からいつて、汽車などは問題にされなかつた。鐵道會社は機關車でも車輛でも車庫の中にぶち込んで、いはゆる鐵道會社大不景氣を展開してゐた。ところが戦争になつてガソリンが減少すると輸送上の自動車重點主義が急速に鐵道重點主義におきかへられた。そこでふるい機關車を出してゐる。アメリカではボロ貨車といつても相當なものだらうが、

アメリカ流にいつてさういふのをうんと引張り出してきたので運轉回数がぐつと一週にふえた。ところがあゝいふ大きな領土だと保線工事がさう簡單にゆかぬ。要するに運轉回数の急激な増加に比例して保線工事が追いつかぬ。車輛がふるい。それに扱ひ方が亂暴だから少し故障のあるやうな車は始終故障を起すといふ具合にアメリカの最近の鐵道は事故頻發である。それは新聞や雑誌にも寫真入りで始終報ぜられてゐるものをもみてもわかる通り、故障頻發とダイヤの亂雜がアメリカ國內輸送の一大悩みである。かゝる國力輸送の隘路といふものが生産におよぼす影響をみるに、ともかく生産資材が均衡を保つてゐる間は、影響があるとしても、さほど目立つた影響をおよぼさない。しかし一度生産資材の跛行状態が現出すると、輸送の隘路といふものゝ生産能力におよぼす影響は絶大である。ちやうど昨年五月頃アメリカの生産に現れた資材の跛行現出にあつて、この輸送問題が物をいひ出したのである。

第二は例の勞働争議である。昨年春の春早々ルーズヴェルトの宿敵たるジョン・ルイスによつて勞働者の總罷業が斷行された。その結果製鐵がガタ落ちをした。非常な減産をしたことは政府もハッキリ發表してゐる。鑛鑛爐の火が將に消えんとするほどの事態に陥つたので、これが軍需生産の上に非常な影響をおよぼした。

第三は昨年春の歐洲戦局の好轉にもとづくアメリカ國民の樂觀氣分が生産に悪影響をおよぼしたことである。獨ソ東部戦線においてはスターリングラードがソ聯軍の手に歸する。北アフリカ戦線においては獨のロメル軍が退却した。歐洲戦局全般の好轉によつてアメリカ國民に樂觀氣分が横溢し、工場勞働者の缺勤積出となり、さすがに生産力を誇るルーズヴェルトをして、「當時の勞働者缺勤による飛行機生産量は一千台に相當する」と嘆ぜしめたほどである。これら三つの原因がその根本的原因である生産資材の跛行と重り合つて、昨年五月頃からのアメリカ軍需生産全般の頭打ちの原因をなしたとみられるのである。

ではこれでアメリカの生産は「行詰り」とみるべきであらうか。爾來數箇月間のアメリカ生産部門の計數だけをみると、一應かゝる推定なり、判斷なりを下す理由はあつた。しかしこゝに生産力を判斷する場合において單に計數だけを机上でいぢらず、敵の施策なり、その手口をよく検討して、その實體の實相に對する判斷を誤らないやうにしなければならぬわけがある。金の豫算と總花主義生産時代から、アメリカは物の豫算、物動計畫、重點産業の時代に入つて來た。今年度のアメリカ生産が

計畫豫定表をみると、昨年度までの總花主義とはよほど趣きを異して明瞭な重點主義に移つてゐる。これは作戦の必要がもたらした結果であることもちろんであるが、その主なる理由は金の豫算より物の豫算に移り、物資の調整統合、生産の合理化に入つて来たからであるといへよう。

物資の均衡、物動計畫といふことはあゝいふ大きな土地ではなかく困難である。しかし全然さういふことを考へずにストックを減茶減茶に金の豫算でやつた時に比べれば著しく合理化への方向をとり出した。この物資の調整が利いたならば、生産の隘路が一應開けてくるといふことも、考へておかねばならぬ。現に昨年十月頃からアメリカの生産力は、全般的にみてまた多少ながら上昇をたどつてゐることもみのがすわけには行かない。従つてアメリカの生産力は一應飽和點に達しながらも、物の豫算、物資調整、重點産業への轉換によつて早急の行詰りを豫想することは危険である。

もう一つ考慮に入れなければならぬことは、民需は前から壓縮されてゐるが、アメリカは食糧品をはじめとして、民需はなほ壓縮の余地を相當持つてゐることである。どこまで行つたら音をあげるか。かういふことは機械的にいへないのであつて政府の施策のいかん、戦局の情勢、國民の耐久限度によつて決するが、しかし全體的にみて民需の壓縮の余地はまだく残りつてゐるとみなければならぬ。この民需の壓縮によつて生産に剩される余地といふことを私どもは計算に入れてかゝらねばならぬわけで、従つて以上の二つを睨み合せてアメリカの生産がさう急に行詰ると観測することは、あるひは誤りになるかも知れない。むしろまだ伸びるといつた方が大觀的の觀察においては當るのではないかと思ふ。

### 三選挙戦と對戦争態度

第三に政治部門の方をみることにする。アメリカの政界を概観すると、ルーズヴェルトの人氣が落ちた。共和黨が非常に進出をしてゐる。民主黨は仲間割れをしてゐる。この三つに盡きるが、今日から考へてルーズヴェルトが本年十一月の大統領選挙に出るかどうかといふと大體五分々々である。一昨年の暮から去年のはじめにかけて私どもがアメリカの情報をみて判断してをつたところでは、まづ七分三分で出る方が多いとみてをつたが、最近は大分悪くなつて彼が出得られないであらうとする

分の方がずつと殖えてきたとみてよいと思ふ。まづ概観的にみて五分々々である。

彼が出得ない點はどういふところにあるかといふと、第一に共和黨が人氣を回復してきた。一昨年の上下兩院議員ならびに州知事の中間選挙において共和黨が非常に進出してゐる。そのもつとも著しく畫期的の變化といはれたのはニューヨーク州知事の選挙である。ニューヨーク州知事は大統領の登龍門といはれてゐる。あの選挙でルーズヴェルトが推した候補が共和黨の候補デニールのために軽く蹴落された。殊にニューヨーク州は民主黨の傳統的地盤である。しかもルーズヴェルトの本邸のあるハイドパークのお膝許である。こゝで民主黨の候補が敗れて共和黨が出たといふのである。あの時は民主黨のうちでいろいろな候補者争ひが起きた。民主黨はニューヨーク州の領袖たるジム・ファレーがルーズヴェルトと黨内で候補者擁立争ひをはじめ、結局ジム・ファレーの一派が敗北したが、この内輪揉めが選挙技術上の點として民主黨敗北の一つの理由にあげられる。しかしその根本原因はなんといつても民主黨の凋落と、ルーズヴェルトの人氣低落の證左である。

共和黨側の大統領候補者は六月の黨大會で決するが、その有力候補であるニューヨーク州知事デニール、西南太平洋最高指揮官陸軍大将マックアーサー、前共和黨候補ウィルキー、オハイオ州知事ブリッカーらのうちで、現在のところデニールが最も優勢であり、結局彼に落ちつくとみてよからう。従つて今秋の大統領選挙は民主黨のルーズヴェルトと共和黨のデニールとの一騎討ちと豫想される。當落の豫想が五分々々であるとするならば、なんといつてもこれからの戦局が大きく響くのであつて、戦局の好轉によつて、彼の人氣が多少でも回復すれば、戦況がよいからもう一遍やらせようといふ國民的の心理が彼の四選を可能にする歩合は考へられる。

では民主黨が勝つてルーズヴェルトが四選した場合と、共和黨が勝つた場合、アメリカの政治部門からみてその戦時態勢にどういふ影響があるだらうか。ともかく今年十一月の大統領選挙前後を通じて、アメリカの政治部門は選挙をめぐる議會を中心として競争が非常に苛烈になつてくる。その結果アメリカの政治に幾多の弱點、缺陷を暴露すると考へて差支へない。たとへばルーズヴェルトが四期出馬したとしても、十二年間の政權掌握の反面、彼はほとんど手持の人間を使ひ果さんとしてゐるし、また彼の人氣低落と相まつて彼の政治的足場はすこぶる弱體化してゐる。だから民主黨の勝利によつてもアメリカの政治は少からざる悩みに當面してゐるとみてよからう。いはんや選挙の結果ルーズヴェルトが四選されず、議會の分野が民主、

共和兩黨の地位轉倒を來たすやうなことがおこれば、アメリカ政界の混亂は相當なものであらう。共和黨が勝つた場合はどうか。この場合まづ考へられることは、國內政策の變更である。ニューディールに反對の共和黨によつて國內政策が變る。さういふ方面から戰時中に政策の切り換へが行はれれば、いろ／＼な政治部面の缺陷弱點を暴露することは必至である。いづれにしても今後の大統領選挙を通じてアメリカの政治の缺陷が現れるとみてよいと思ふ。しからばアメリカ政治の悩みと缺陷を計算に入れる限度をどこまでも擴張していか。たとへば共和黨が出てきたら非戦論がアメリカに起る、あるひは戦争打切論が起るといふことは考へられないので、そこまでアメリカの政治部面の缺陷を推し換へて希望の観測をすることはできない。殊に共和黨の政綱の第一はなにかといふと強力な戦争の遂行といふのにある。戦前非戦論者の人氣であつた例のリンズバークは、ルーズヴェルトを主戦的大統領と攻撃し、主戦論的大統領のもとに大佐の官職にとゞまるを潔しとしないと、辭表を叩きつけて日本流にいへば野に下つた。そのリンズバークが戦争がはじまると同時に「ことごとくにいたれば自分は過去の議論を清算して、アメリカの戦争遂行に全面的に寄與するであらう」といふ長い聲明を發し、いまではフォード會社の飛行機工場の監督官をしてゐる。さういふ具合にあつたアメリカ隨一の人氣のあつたリンズバークさへ然り。いはんや共和黨が民主黨に代れば非戦論に變るであらうと、そこまでアメリカの政治部面の缺陷を推し換へて考へることは希望の観測にすぎよう。民主、共和兩黨いづれが出るとしても、今日のところアメリカの戦争遂行といふ根本方針には變更なしとみておかねばならない。

#### 四 戰時社會の問題

最後にアメリカの戰時社會の問題を採上げたい。第一にアメリカの戰時社會問題で、今一番大きな問題になつてゐるのは風紀の問題である。戰時下における道徳低下問題は教育界、言論界の大きな問題となつてゐる。風紀の問題がいかに戰時社會を横ましてゐるかの例證としてつぎの一例があげられる。ボストン市の公園に「日没後十八歳未満の女入るべからず。ボストン市役所」といふ立札が立つてゐる。性の開放は世界第一といはれてゐるアメリカで、これまた世界のどこを捜してもないやうな

珍妙無類の札が立つてゐる。アメリカの戰時社會の風紀がいかに紊亂してゐるかといふことは、これを見ただけでもわかると思ふ。一方花柳病の患者の増加といふことから考へても推察される。

男女關係の紊亂は戦争下の結婚問題にも現れてゐる。参戦後のアメリカに結婚率が急増した。これは政府の人口増殖政策のためでもなく、アメリカ女性の戀愛至上主義のためでもない。戦争以來アメリカ政府がことさら結婚奨励策を執つたこともないし、またアメリカ女性は戀愛至上主義者たるべくあまりに實利的である。そこでこの結婚の増加はどういふことかといふと、出征者の妻は月額五十ドルの補助を受ける。(長男の出征は三十ドル・次男以下は二十ドル)。そこでかねて戀仲にあつた女はどしどし出征實際の男と結婚した。五十ドルがもたらへるからである。その結果、重婚や三重婚まではやり出した。また出征した夫が戦死すれば、遺族者に対する扶助金をもらつて、またどしどし他の男と結婚して行く。戦死が確認されなくとも、夫の行方不明の通知を受つた妻は、すぐに他の男と同居生活や結婚生活に入つてしまふ。ひよつこり歸つてきた夫と、第二の男と妻との三角關係問題なども戰時社會の風景をなしてゐる。

もう一つアメリカの風紀紊亂の中心をなしてゐるのはアメリカの女軍である。現在女軍の数は五十萬近いであらうが、元來女軍を志願した者の大部分は知識の低い女中クラスである。インテリもわづかゝるにはゐるが、大部分は教養のない者が多い。この女軍は最初「女子陸軍補助部隊」(Women's Auxiliary Army Corps)と呼んでゐたが、「補助」は怪しからぬと女軍が騒いだ結果「女子陸軍部隊」(Women's Army Corps)と名稱を變へた。すなはち最初は略稱W.A.A.C.と呼んでゐたが、つぎにW.A.C. (ワックス)と呼ぶことになつたわけである。そこまではよかつたが、まだ給料が違ふ。男と女と差別待遇をするのは怪しからぬ、とまた女軍が騒ぎ出し同じ大尉なら大尉の給料を支拂ふべきであるといふので、現在は給料も同じになつた。海軍の方は陸軍より遅れてできたが、これは海軍だといふことでワックスに對してウエーヴスといつてゐる。このアメリカの女軍であるウエーヴスとワックスを中心に非常に風紀が紊れてゐる。昨年の七月この女軍のキャンプに姪姪事件が起きたり、えらい事件が起つて議會や言論機關が女軍を痛烈に叩いた。給料を増せとかなんとかいつてゐるが、彼らのやつたことはなんだ。風紀紊亂だけぢやないか。アメリカの戰時社會の風紀紊亂は女軍にあり」といつた。そこで陸軍長官のスチュムソンが長い聲明を出して、あれは女軍の一部に起きたことで、全般の士氣には絶対に影響がないと陳辯これ努めた。さういふわけでア



リカの女軍は戰時社會の風紀紊亂の因をなしてゐる、といつても過言でない。たゞこの女軍が五十万といふ數字に物をいはせて、陸海軍の軍隊事務や沿岸警備などで、男の手を省かせてゐる點は看過できぬものがあらう。

戰死、戰病、戰傷といふことに對してアメリカの社會がどういふ感情を持つてゐるか。アメリカ人は鼻柱が強く、戰闘力が旺盛なことは間違ひない。しかし彼らは戰死、戰病、戰傷といふことには非常に神經過敏である。非常に恐れる。特に銃後の社會、さらに出征家族にあたへてゐる影響は大きい。これは社會風景の一端をみればすぐわかるので、戰死者が出て陸海軍から通知がくる。さうするとこつそり葬式をやる。親戚友人には知らせるが一般の人にはなるべく知らせない。これなども人の戰死を聞きたくない、従つて自分の家で戰死者が出てなるべく人に知らせないやうにする。彼らがいかに鼻柱が強くても戰死、戰病、戰場に對しては非常な恐怖心のあることを物語つてゐる。政府としてはさういふ國民性を知つてゐるから戰傷、戰病者が病院船で送られてきて、人の眼につかない夜、人がゐなくなつたのちに病院船から降して、病院列車に移し療養所に運んでしまひ、なるべく人にみせぬやうにする。國民がみればいはゆる戰爭嫌惡感が起るといふ心配があればこそ、さういふ現象があるわけで、戰死、戰病、戰傷といふことに對して非常に神經過敏であり、いやがり、恐れてゐるといふことがハッキリとアメリカの戰時社會の風景から窺はれるわけである。

### 五人の給源が弱點

以上ごく概觀的ではあるが、敵アメリカの戰時態勢の概略を説明した。そこでこれらを通觀して、彼らの弱點いづれにありやと考へてみると、なんといつても彼らの戰意はさきほど書いたやうに揚つてきてゐる。開戰當時とは比較にならぬほど揚つた。今後も揚るとみねばならぬ。ただいかに揚つても日本の國民精神の力との間にはつねに大きな差を持ちつゝ、この戰爭が續いてゆく。戰爭の終結にいたるまでこの精神力の相違はつねに彼の弱點であると斷言して憚らぬ。もう一つはアメリカの戰時經濟の弱點は人的資源の不足にある。とにかく叩く、叩くことによつて人的資源の覆滅をはかる。物質的損害もさることながら、この點はまだ造つてくるとみなければならぬ。持つてもゐるし、造つてもくる。飛行機にしても船にしても、やられて

もやられてもまだ、造つてくるとみなければならぬ。もうそろ／＼この邊で音をあげるとも思はれない。ところが人的資源の方は大體が不足であり非常に窮屈である。この損害はさう簡単に解決がつかぬ。技術において誇るアメリカでも人間を作る技術は持つてをらぬ。この點はさう簡単にゆかぬから人的損害はそのまま、實損になつてゆく。彼の弱點を大きくしてゆくことによつて、これが敵米國民の心理に與へる影響は十分計算に入れてよいと思ふ。

戰爭の見通しは誰にもわからない。たゞいかに決戰の年ないしは決戰段階であるといつても、今年中に戰爭が片付くと思ふものはおそらくないであらう。あと二年か三年か、あるひはそれ以上かゝるかかわからない。であるから、われ／＼はまづ敵の實體と敵國の實相を知ることが必要であり、またわが方としては、いはゆる必勝の信念にもとづく國民總力の發揮が肝要である。戰局の一進一退に一喜一憂するほど愚なことはない。もう一度ゆつくり坐り直して、戰爭の實體と、敵の態勢と、戰局の現階段を見直し、どつしりと落ちついた余裕ある氣持で、戰爭の現狀に對處することが、指導階級にとつても、國民全般にとつても、最も必要なことであると思はれる。戦ひは正にこれからである。

# 歐洲戰局の決戦期

聽 濤 克 己

## 一 對獨決戦の展望

今日歐洲戰線における二つの主要な問題は、東部戰線におけるソ聯軍の異常な攻勢展開と、米英軍の西歐侵攻作戦の切迫とである。兩者は合して對獨東西挾撃作戦の展望を可能ならしめ、かくして米英ソ反樞軸軍の對獨興亡の決戦がいよいよ作戦日程にのぼつたのである。歐洲戰線の緊迫を語り、歐洲戰爭における決戦期の到来を云々するのは、この事實を指すものであることいふまでもない。

歐洲戰爭を今日の事態にまで導いた大きな契機となつたものは、昨年九月八日の伊バドリオ政權の無條件降伏である。この事件を境として歐洲戰局が急激に彼らのいはゆる對獨總攻撃といふ決戦の様相を帯びてきたことは明かな事實である。日獨伊三國同盟を最も弱い一環において切崩さんとする

敵の企圖が、これによつて一部の成功を収め、軍事的にも獨軍の側面に脅威を與へるにいたつたのである。しかしイタリアの國內分裂を惹起せしむるにいたつた米英の地中海作戦の成功は、果して米英軍單獨の戦果と認めることができるであらうか。米英が北阿、地中海においてあげた作戦的成果は、東部戰線における獨ソ主力戦の發展を土台として、はじめて可能であつたのではなからうか。いまこれらの點について少しでも疑問を抱く者は恐らくあるまいと思はれる。

そこで歐洲戰爭は依然として東部戰線における獨ソ兩軍の死闘を樞軸として發展しつゝある、といはなければならぬのである。對獨總攻撃の今日の情勢も、要するに歐洲の主戰場たる東部戰線の推移がもたらした結果である。しからば東部戰線では一體何事が起つたのだらうか。いふまでもなくソ聯軍の異常な進撃が新しい情勢を展開せしめてゐるのである。昨年二月初頭の「スターリングラードの悲劇」を頂點とする

第二次冬季攻勢以來、ソ聯軍は昨年いつばいほとんど休止する暇もなく攻勢作戦を繼續してきた。第二次攻勢においてドン河流域、ドネツ盆地に到達し、さらに一般の期待を裏切つて夏季攻勢をも開始したソ聯軍は昨年秋季までにドニエプル河キエフの線に進出、さらに昨年末よりの第三次冬季攻勢においてウクライナ平原奪回を企圖し、一部は中央突破により舊國境をこえてポーランド領内に進撃、目下戰線はポーランド領内、ハンガリー、ルーマニア國境まで延びるに至つたが、いまこの戰綫經過を詳述する必要はあるまい。要はこのソ聯軍の急進撃が、歐洲の他の戰線における軍事的可能性を生み、歐洲大陸の政情に頓に緊張感を生じ、米英をして對獨決戦を決意せしむるなど、刻下の歐洲戰局を動かす最大の因子となつてゐる事實を指摘すればよいのである。

米英の地中海よりする對獨側面作戦の一應の成功と、バドリオ降伏といふ政略的成功も、かゝる東部戰線の新展開が背景にあつたからのことである。こゝにおいて米英は、地中海作戦の作戦的、政略的成果をいかにしてさらに擴大するかの問題と、ソ聯軍の攻勢をいかに利用するか、ないしは急進撃を続けるソ聯軍に對しいかに自軍の地歩を固むべきかの問題とに當面した。しかるに側面作戦の戦果を擴大するといふことは、その論理的歸結として當然米英を懸案の第二戰線計畫に

歐洲戰局の決戦期

接近せしめたり、またソ聯軍に對抗して將來の歐洲大陸における自軍の地歩を固めるといふ問題は、さらに米英をして大規模な對獨攻勢の構想に眞剣ならしめたのである。兩々相まつて米英はつひに禁斷の第二戰線作戦を自ら考へ決意するにいたつたのである。イタリアの政治異變は、さういふ意味ではじめて歐洲戰局に一時期を畫するものとみることができ、久しく開かへるべくして開かれなかつた米英とソ聯の最高軍事政治會談の機運が、バドリオ降伏後急激に醸成され、昨年十月下旬のモスクワ三國外相會談を経て、同年十一月末より十二月初頭にかけてルーズヴェルト、チャーチル、スターリン三首腦間のいはゆるテヘラン會談の開催にいたり、對獨總攻撃の戦略が決定されたと公表されたことは、この間の事情を雄辯に物語つてゐる。

すなはちモスクワ會談では、「ドイツならびに歐洲におけるその衛星諸國に對する戰爭を短縮するためにとらるべき措置」について三國軍事専門家の間に協議がとげられ、それを基礎としてテヘラン會談では、獨軍撃滅に關し「東、西、南よりなされるべき作戦につき完全なる意見の一致をみ……その規模と時期に關し決定をみた」といふことが、敵側公表によつて明かにされてゐる。もちろんこの決定通り米英が實行するかいなかば、疑問の餘地十分であるが、米英をしてかゝる

決定にいたらしめた昨年来の歐洲戦局の推移は重視しなければならぬ。獨軍がすでに米英の上陸作戦必至とみて西歐防衛に萬全を期してゐる事實や、またテヘラン會談後昨年十二月二十四日米將アイゼンハワーが西歐侵入作戦總指揮官に任命され、同時に以下首腦陣容が發表された事實や、また最近における米英軍の上陸作戦準備の事實などに對し、眼を蔽ふてはならないのである。テヘラン會談の決定内容はまだ開かれない玉手箱のやうなものではあるが、今後の歐洲戦局の發展を豫想する鍵であることは否定できない。かくのごとくして歐洲戦争は本年度において決戦段階に入り、近く戦局の急展開をみることに必至であるといふのが衆口的一致するところである。

## 二 歐洲反攻の場所と時期

従つてテヘラン會談後の歐洲においては、米英の第二戦線展開の場所と時期とが新しい課題として論議されてゐる。

これについてテヘラン會談の公表が、「東、西、南より」對獨作戦を行ふに決したとのべてゐるところから、まづ作戦の「場所」について種々様々の觀測を生み出してゐる。第一には佛、白などの沿岸より西歐に上陸作戦を行ふとの説である。

ソ聯の第二戦線要求が西歐以外の上陸作戦は第二戦線と認めずとはつきり斷定してゐるので、米英側でもソ聯の要求をおそらく無視するといふことはできないとの見方からこの説は最も有力視されてゐる。また米英自身の戰略的立場からしても、眞に有效な第二戦線を展開するには西歐上陸以外にないことは明かである。しかしそれだけに獨軍の防備はこの地域において最も完成されてをり、いつでも米英上陸軍を邀へて撃つ鐵桶の布陣ができ上つてゐるので、西歐上陸は米英軍にとつて眞に乾坤一擲の冒險作戦となる可能性がある。それで米英軍がかゝる大膽な作戦を敢行し得るとは考へられないとの見方も同時に有力である。とにかく米英がいままで第二戦線を設つてきたのはこの危険はまりない西歐上陸を回避したいがためであつたことは争へない事實である。しかし現在の戦局はたとひいかなる冒險作戦であらうとも、これ以上の回避を許さないところまできてゐるとみるのが至當であつて、米英軍にテヘラン會談後の今日なほ遲疑逡巡の跡があるとはいへ、西歐上陸作戦の可能性は最も大であると信ぜられる。

第二に「南よりする」攻撃とは、すでに敵側の新聞や軍事評論において喧傳されてゐるバルカン上陸作戦を指すものと見られてゐる。この作戦が有力視される根據は、前大戦にお

いて聯合軍がバルカンを北上して獨軍の背後を衝き、西部戦線の膠着を破つて軍事的勝利の最後の機會を掴んだことがあるので、今日の米英軍もこの戰略展開に執着してゐるといふのが一つ。も一つの根據は政治的觀點によるもので、それは米英がソ聯のバルカン進出、東歐制覇、ひいては地中海への進出をおそれ、これを牽制しようとする下心を有するところのものである。

しかし第一の根據は現に西部戦線の缺如してゐる今日、左程有力ではあり得ない。むしろ第二の政治的考慮から、米英軍がバルカン上陸作戦を重視してゐるものゝやうである。だがこの作戦展開のためには、ソ聯の諒解いかに問題であつて、この點テヘラン會談がいかなる決定に達したか疑問とされるところである。一般にはテヘラン會談で米英ソ間に或る程度の諒解が成立したと信ぜられてゐるので、バルカン上陸またその可能性は無視できない。のみならず米英は昨夏伊本土上陸以來はやくもバルカン侵入の機會をうかゞつてゐたのは疑ひないところで、それだけに米英がこの作戦に強い執着をもつてゐることを考慮に入れなければならぬ。しかしバルカン作戦の鍵ともいふべきトルコの中立問題の歸趨が、まだ海のものとも山のものともわかつてゐないことは、この作戦展開上の最大の未解決問題である。

第三にはこの西、南兩方面よりする上陸作戦を同時並行的に行ふといふ説である。通常上陸作戦は、その焦點を並し、敵の防戦方法を混亂させ、敵をして應接に遑なからしめるため、同時に數箇所から行はれるといふのが常識論である。この常識論からだけでも相當根據のある見方といふことができ。また米英軍の實際の配置を見ても、すでに英本國、北阿、南伊、西亞に相當兵力が集結されてゐるが、一部情報によると、さらに歐洲作戦用兵力として英本國に七十五万、アルゼリアに三十万、伊本土に十數万、サイプラスに二十五万を集結を目標に、兵力配置を急いでゐるといはれるのでかゝる同時作戦の可能性なしとしないのである。しかしこの場合といへども、米英が西歐かバルカンかいづれに主力をおくか、問題であり、米英の第二戦線作戦は結局西歐かバルカンかの問題として呈示されてゐるといひ得る。

翻つてその時期はいかに。テヘラン會談の公表はこれについてなにごとくも觸れてゐない。會談直後にはソ聯軍の冬季攻勢と睨み合せて二月説などが飛出してゐたが、その後三、四月説となり、さらに五、六月説となつて、いままでも根據ある説とみられてゐたものが單なる臆測にすぎないことを暴露してゐる。この間ソ聯の新聞、雑誌はいまだに米英軍が第二戦線を決行しないことに對し、またまた不満と非難を表明するに

いたり、果していつ米英軍がテヘラン會談の決定を實行に移すのか、謎のやうな問題になつてゐた。

たゞこの問題については、さる二月二十五日英首相チャーチルが議會で行つた報告演説が唯一の手掛りとなつてゐる。すなはち彼は「現在では歐洲に對する爆撃を反樞軸軍の一番重要な攻勢とみねばならない。」そして「春から夏にかけて反樞軸空軍の爆撃が一段と増強されよう。全面的な大爆撃こそ海を越えて歐洲上陸作戦が據つてもつて立つ基盤である」とのべたのち、「テヘラン會談で三國代表がなによりも第一に意見の一致したことは、この夏には陸海空三方面から獨軍を攻撃するといふことだ」と言明してゐる。この演説で明白にされた點は米英が現在の對獨空爆を一層激化するといふ點で、歐洲上陸作戦の時期については漠然と觸れてゐるにすぎない。それにもかゝらずこの一言を根據として第二戦線の時期はこの夏から秋にかけての間だらう、といふ解釋がまたぞろ行はれてゐる。要するに「時期」については、なんら判斷の基礎となるべき根據はなく、唯一の手掛りともいふべきチャーチルの演説でさへも、果してそれを示唆したものかいなか、大きな疑問が残されてゐる。

もともと第二戦線に關する敵側の觀測や評論を立入つて穿鑿することはそれ自體としては無用なことである。しかしこ

これらの觀測や評論を通して敵側の歐洲侵攻作戦の切迫感に觸れることができる。歐洲戰局の指向するところが第二戦線を必至ならしめてゐるといふことは、もはやなんらの疑問も存しないといふべきである。だが敵側の言動をつぶさに検討してみると、テヘラン會談後の今日といへどもいままほ米英が第二戦線展開につきソ聯とどの程度の協定に達してゐるかにつき疑問が湧いてくる。結局第二戦線の「場所」と「時期」について確たる諒解が出来てゐるかいなか、假りに原則的諒解が出来てゐるにしても米英が果してその諒解通りに實行に移すか否か疑ひなきを得ない。特にチャーチルの演説のごときは、第二戦線の時期を暗示したといふよりも、米英が現在でも對獨空爆の戦術に力點をおき、第二戦線はまだまだ實行を延期しようとしてゐるのではないかとの印象が強い。もし米英がこの問題についてさういふ態度をとつてゐるとすれば、それは第二戦線作戦がもつ至大な冒險性と、米英の對ソ政策とがこの間に作用してゐるとみて間違ひなからう。その意味で同問題は、最近における米英ソ關係の觀點からもう一度検討を要するが、これは特に後段において取扱ふことにしよう。

### 三 米英ソの政治攻勢

テヘラン會談を一期として米英ソ三國が對獨總攻撃の態勢を整へんとしてゐることは、たとひ米英側においてなほ第二戦線作戦につき躊躇の色があるにせよ、本年度の歐洲戰局を最も重大ならしめてゐることに對して變りはない。しかしこれは武力戦一本槍で進まうとしてゐるといふ謂ひではない。現代戦においては、武力戦と政治外交戦は合して一個の巨大な戦略を構成し、兩者は全く不可分のものであるが、米英ソはまた武力戦と並行してさかんな政治攻勢を展開してゐることに着目しなければならぬ。

この三國の政治攻勢はもとより對獨戦略の重要な一部として展開されてゐる。それは獨衛星諸國家に對する戦線離脱工、中立國壓迫、獨防備態勢の攪亂などの形態をとつてゐる。その結果歐洲西端イベリア半島からバルカン、トルコ、西亞にかけて、歐洲諸小國は政治的動搖と不安に襲はれ、これら諸國の懸然たる政情が歐洲戰局の緊迫感をいやが上に尖鋭ならしめてゐる。ソ聯は東部戦線において發揮した軍事的實力と、米英の對ソ妥協を利した押強い歐洲政策とによつて、東歐、バルカン諸國に獨得な政治工作を行ひ、米英は大

西洋憲章と武器貸與法を武器とし、反樞軸軍の勝利を宣傳しつゝ政治的威嚇と經濟的壓迫のあらゆる手段を弄してゐる。この兩者の政治攻勢は期せずして各所に對立、紛争を惹起せしめてはゐるが、それにもかゝらず兩者は合して反樞軸側の歐洲政治攻勢として發展してゐる。

まづバルカンをみよう。バルカン諸國を最も緊張せしめてゐるのは、ソ聯軍のボイランド領内、ハンガリー、ルーマニア國境進出である。ソ聯はこの事態を利用して、はやくから新設なバルカン工作を開始してゐるが、ソ聯はこの工作において、汎斯拉ヴ主義といふ有利な思想的武器をもつてゐる。民族的同血に訴へるこの標語は、ブルガリア、舊ユーゴスラヴィアをはじめ、ボイランド、チエコスロヴァキア諸民族には特別な響きを傳へる。加ふるに汎斯拉ヴ主義と汎ゲルマン主義との歴史的鬭争を回顧すれば、これはまた西斯拉ヴ諸民族に反獨的思想を植付ける有力な手段ともなる。最近におけるソ波國境問題、ソ聯・チエコ友好援助條約の締結から、ブルガリアにおける傳統的ソ聯勢力の存在、舊ユーゴ領内の親ソ的チトー政権の成立などの諸事件は、それぞれ特殊な政治問題を内包してはゐるが、その背後にはこの汎斯拉ヴ主義が介在してゐるといへよう。

バルカンにおけるソ聯勢力の政治的橋頭堡はブルガリアと

舊ユーゴスラヴィア領内のチトー政権とである。ブルガリアが樞軸國の一員であり、對米英宣戰を布告してゐるにかゝらず、いまだにソ聯と正常なる國交を維持してゐる事實は、ソ聯の傳統的對物勢力の強さを物語つてゐる。ブルガリアこそはソ聯の對バルカン工作の關門であつて、ソ聯がこの關門を通過してユーゴスラヴィアのチトー政権、ギリシアの親ソ的バルチザン部隊と接觸し得たのである。昨年十二月五日成立聲明を發した共產系チトー政権にいたつてはソ聯のバルカン工作が實を結んだ最初の成果である。いままではこの共產派と並立してゐたユーゴスラヴィア政権の陸相ミハイロヴィッチの親英派部隊は、チトー派に完全に壓倒され、米英までチトー政権をもつて反樞軸側の戰闘部隊として承認するにいたつた。ソ聯のあげた成果は對米英勝利の意味においても注目し得る。

米英のバルカン工作は最近ソ聯の進出に壓倒されてゐるとはいへ、これまたバルカンに昔の政治地盤を回復し、獨軍のバルカン防備陣を攪亂せんとして執拗に行はれてゐる。特にロンドンにギリシア、ユーゴスラヴィア兩亡命政権を擁する英國は、戦前のバルカンにおける自國勢力挽回を夢みてゐる。最近では米英はブルガリアの首都ソフィア、ルーマニア油田などに對する空襲を行ひ、或は昨年十二月十二日米國務長官ハルをしてハンガリー、ルーマニア、ブルガリア三國に對し、戰線

離脱の恫喝的聲明を發せしめるなど、バルカン攻勢を激化してゐる。

これら東西よりする米英ソのバルカン政治攻勢は、ソ聯軍の急速な西進と相まつて、バルカン諸國に深刻な影響を與へてゐることはいなみ難い。しかし一九四一年以來バルカン防備施設とバルカン政治戦線の統一に努力し來つたドイツは、さらにダルマチア、モンテネグロ、アルバニア、セルヴィア各國に獨立を許容してバルカンの政治強化をはかり、また軍事的にはユーゴスラヴィア、ギリシアのバルチザン部隊に對する徹底的掃蕩作戦、獨軍部隊のハンガリー進駐を行ひ、新事態の發展に對處してゐるので、米英ソが政治攻勢についでバルカン攻撃戦に移つた場合には、バルカン山系の峻嶜と強力なる獨軍の反撃とを覺悟せねばなるまい。

しかしバルカン攻勢の焦點はトルコにある。それはトルコの中立が米英のバルカン作戦の一大障碍であるからである。米英がはやくからトルコの中立壓迫にあらゆる術策を弄してきたことは米英の不當なる中立壓迫の好適例であつて、こゝに詳細論する必要があるまい。たゞテヘラン會談後米英の對土工作が一段と熾烈になつたことを指摘すれば足りよう。すなはちテヘラン會談の歸途ルーズヴェルト、チャーチルはカイロにおいてイノニエー土大統領と重大協議をとげた



# 歐洲戰局要圖

昭和十九年四月



米英のバルカン工作は最近ソ聯の進出に壓倒されてゐるとはいへ、これまたバルカンに昔の政治地盤を回復し、獨軍のバルカン防備陣を擾亂せんとして執拗に行はれてゐる。特にロンドンにギリシア、ユーゴスラヴィア兩亡命政権を擁する英國は、戦前のバルカンにおける自國勢力挽回を夢みてゐる。最近では米英はブルガリアの首都ソフィア、ルーマニア油由などに對する空襲を行ひ、或は昨年十二月十二日米國務長官ハルをしてハンガリー、ルーマニア、ブルガリア三國に對し、戦線

しかしバルカン攻勢の焦點はトルコにある。それはトルコの中立が米英のバルカン作戦の一大障碍であるからである。米英がはやくからトルコの中立壓迫にあらゆる術策を弄してきたことは米英の不當なる中立國壓迫の好適例であつて、こゝに詳細論する必要があるまい。たゞテヘラン會談後米英の對土工作が一段と熾烈になつたことを指摘すれば足りよう。すなはちテヘラン會談の歸途ルーズヴェルト、チャーチルはカイロにおいてイノニエー土大統領と重大協議をとげた

が、それはテヘラン會議における米英ソ間の決定内容を明示し、トルコの參戰を強要したものとみられる。米英が第二戰線作戰を控へてトルコ問題の解決に焦慮してゐることはなんらの疑ひなく、その後もトルコ強壓の手を緩めてゐない。しかるにトルコが毅然として或は巧妙に、米英の強壓を退けたため、目下米英の對土工作は全く行詰りに達し、米英はトルコに對する經濟援助と武器貸與法の適用を停止するなど、犬糞的報復に出でゐるのは笑止である。しかしトルコの態度決定の鍵を握んでゐるのは米英でなくむしろソ聯であり、その意味でテヘラン會議後の米英土カイロ會議にソ聯代表ヴィンスキーク氏が參加し、會議が米英ソ三國の名において開かれた事實はみのがせない。トルコの態度はすでに原則的に決定されてをり、ソ聯の意志次第でそれが表面化することあるべきを忘れてはならない。

翻つてイベリア半島のスペイン、ポルトガル兩中立國の地位も、米英の外交干渉により次第に修正が加へられてきた。イベリアの兩中立國といつても、ポルトガルは元來親英的傳統の國であり、問題は主として親樞軸的中立國たるスペインにあつた。米英は歐洲作戰の際のスペインの戰略的、地理的重要性に着目し、同國をして對樞軸協力態度を放棄せしめんと畫策してきた。一昨年十一月の米英軍北阿上陸に絡んで、

西葡兩國間にはゆるイベリア中立ブロックの結成をみ、またスペインのスネル外相の退陣、ホルダナ新外相の登場をみたが、これらの出來事はスペインをしてポルトガルの中立へ接近せしめることとなつた。その後米英はあらゆる口實を設けてスペインの對樞軸協力を非難し、同國壓迫を強化し、この間昨年十月のアゾレス基地使用問題をめぐるポルトガル壓迫などのことがあり、イベリア攻勢もまた急をつけたが、テヘラン會議後米英のスペイン強壓は一段と激しくなつた。

米英は、一、スペイン青色師團がいまなほ東部戦線の戰闘に參加してゐること、一、スペイン海港に避難した伊船舶の抑留、一、スペイン國內における獨逸關の活動、一、軍事資材の對獨供給などの諸點をあげて外交的壓力を加へたほか、米國務省は對西石油輸出停止を聲明、英國もこれに追隨して小麦、石炭の供給禁止をもつて威嚇した。先年の革命の瘡痍まだ癒えないスペインは、經濟的疲弊に加ふるに、同國經濟の對米英依存度がきはめて高いことは、スペインの對米英外交に重大な困難を課してゐる。すでにスペインは米英の要求を或る程度承認した模様で、米英のイベリア攻勢は一應鎮靜に歸してゐるが、スペインがその中立政策の内容にどの程度の修正を加へたかは、今後の事態の發展がこれを明かにするであらう。

以上概括した米英ソの政治攻勢は、いふまでもなく三國の歐洲總攻勢作戦の前哨戰的役割を演じつゝあるものとして、特に重大視しなければならぬが、この政治攻勢進行過程に米英對ソ聯の外交角逐が火花を散らすにいたつたことは注目すべき問題である。果して三國は政治攻勢において共同動作をとつてゐるであらうか、ソ聯の立場はいかん、米英はなにを考へてゐるかなどの問題がこの中に含まれてゐる。特にテヘラン會談後の三國關係の新しい發展を検討せずして、現在の歐洲戰局の實相に觸れることはできないのである。

#### 四 ソ聯の進出と米英の讓歩

元來米英とソ聯とは戰爭目的と國家的利害を甚しく異にするため對立紛争が絶たないことは當然であるが、モスクワ、テヘラン會談後の三國關係は特に新しい角度から眺めなければならぬ。會談はこれを政治的觀點からみれば三國間の政治協力を達成せんがための會談であつた。従つて兩會談が三國の政治協力についていかなる成果をあげたかが問題であるが、これについてはモスクワ會談における最大收穫と目される四國共同宣言があるのみである。しかしこの共同宣言も、米・英・ソ・重慶の四強國をもつて世界の四大強國であ

ると勝手に自認し、右「四大強國」は戰後の平和機構樹立のために相協力するといふ獨善的聲明を盛つただけのもので、三國間の根本的對立にいかなる調整が加へられたかはもちろん知る由もない。

従つて兩會談後三國關係がいかなる新發展を示してゐるかをみる以外に方法はないのである。しかるに兩會談後の三國關係は、いはゆるソ波國境紛争においてはやくも試驗台に乗せられたのである。

ソ波國境問題は昨年三月ソ聯とポーランド亡命政権間の外交的應酬に端を發し、つひにソ聯の對波斷交にまで發展したが、その後別段の波瀾も起らなかつた。しかるに本年一月ソ聯軍のポーランド領内進出に驚いたポーランド政権が、舊領保全を趣旨とする一方的聲明を發したことから問題は再燃した。これに對しソ聯は新國境線としてカーゾン線を新たに提議すると同時に、ポーランド亡命政権を交渉の相手と認めず、さらに、「バルト地方や國境問題はソ聯の國內問題」だとの強硬態度を持し、これより一步も退かなかつたので、同紛争は極度に紛糾するにいたつた。もと／＼同紛争は一介の亡命政権の力の埒外にあるもので、質的には英ソ紛争として發展して行つた。然も同問題はバルカン、東歐における英ソ利害の接觸の焦點たる意義を有してゐた。英國の亡命政権支持

の眞の理由はヴェルサイユ體制的「反ソ遮斷線」の復活にある。そのうへ米英共通の問題としては大西洋憲章中の「民族自決」の原則をどうするかといふことであつた。しかるに本年二月二十二日英首相チャーチルは議會演説において「カーゾン線こそソ波國境として公平なるものである」と言明、英國の對ソ屈服を記録して紛争は鼻がつけられた。

東歐における英ソ關係については、昨年十二月十二日締結されたソ聯とチエコスロヴァキア間の友好援助條約も特記に値する。英國はかねてポーランドとチエコを結ぶ國家聯盟をつくり、これを中軸として東歐一帯にヴェルサイユ體制的國家群の形成を企てゐた。ソ・チエ條約の成立はソ聯が英國のこの東歐政策を中央部において切斷したことを意味する。モスクワ會談におけるオーストリア復活決定もまたソ聯の東歐より中歐への進出の下地をつくるものである。

さらにバルカンにおいては、共產系チトー政権の成立、親英派ミハイロヴィッチの没落、英國の事實上のチトー政権承認が、ソ聯外交の勝利を明かにしてゐる。英外相イーデンは昨年十二月十四日、「英・米・ソ三國はバルカンにおける反獨ゲリラ部隊を極力援助するに決した」と聲明、ユーゴー領内のゲリラ部隊についてはチトーの名をあげて激賞してゐるが、ミハイロヴィッチの存在は完全に無視してゐる。しかも

英國はチトー政権に軍事使節をも派遣してゐるのである。イーデンはそのうへ現在カイロに本據を移してゐるユーゴー亡命政権につき「ユーゴー解放實現の曉においては、チトー、在カイロ兩政権とも進んでその存在をユーゴー國民自身の擇ぶところに委ねんとする」ものだと言明してゐる。ギリシアの反獨部隊とギリシア亡命政権についても同様の事態が發展しつゝあるやうに察せられる。すなはち英國がバルカン政治攻勢の主導權をソ聯の手に委ね、ユーゴー、ギリシア兩亡命政権をそのため犠牲に供したことが立證されてゐる。

米英のバルカン作戦の鍵を握るトルコに對しても、ソ聯は独自の政策をとつてゐる。テヘラン會談後ソ聯は米英と共同歩調に出で米英の對土外交壓迫に参加し、ためにトルコの中立政策は大いに揺らいだが、その後間もなく米英ソ間の政治紛争の激化をみるや、かへつてソ土關係改善に乘出したのである。ソ聯の對土態度の變化はトルコの政情に小康を與へる結果となり、トルコはソ聯の友好態度を後押しにして最近の米英の強壓に頑強な抵抗を示してゐる。ソ聯はその独自のバルカン工作の重要な一環としてトルコに對する發言權強化に努力してゐるものとみられる。その他西亞特にイランにおける米英ソ三國勢力鼎立の事實はこゝに紹介するまでもなく世界周知のことである。



こゝにおいてソ聯と米英の利害の接觸線は、西亞よりバルカン、東歐にいたる長大な一線を畫してゐる事實をみるのである。しかるに三國外交政策のも一つの交叉線が、西亞より北阿を経て地中海におよぶ他の一線をも畫してゐる。北阿ド・ゴール政權、南伊バドリオ政權をめぐる三國の外交角逐がそれであるが、こゝにもソ聯の退しい進出がみられるのである。北阿政權は昨年八月二十六日ソ聯が米英に先手を打つて同政權を承認して以來急速にその政治性格に變貌を來した。モスクワ會談後舊フランスの軍人、實業家、官僚、國家主義政治家の勢力を代表するジロー派が追はれ、舊社會黨を地盤とするド・ゴール派が實權を握り、その周圍に共產黨分子が蟻集するにおよんで同政權は徹底的に親ソ政權に變つたのである。またソ聯は昨年九月四日創設された反樞軸地中海委員會に強引に割込み、地中海のあらゆる政治問題に確固たる發言權を獲得したが、本年に入つてから米英の裏をかいて突如バドリオ政權を承認し一波瀾を起した。南伊においてはバドリオ政權と伊各政黨を網羅する反ファシスト委員會との對立抗爭日を追うて激しくなつてゐたが、米英はアムゴット(占領地軍政機關)を通してバドリオ政權を支配し、反ファシスト委員會の同政權改組要求を不問に附さうとしてゐた。ソ聯は同政權を承認することにより反ファシスト委員會とバドリオ間の

抗爭に止めを刺し、委員會と政權との合流を促進し事實上同政權の「民主主義的」改組を不可避ならしめたのである。ソ聯はバドリオと委員會との双方に對する支配權を確立したのである。

ソ聯の歐洲政治進出を物語る事例はこの他數へ切れぬほどあるが、そこに現はれてゐる最も顯著なる事實は、米英ソの對立激化といふよりも米英外交の對ソ妥協と讓歩とである。東部戰線における實力行動を背景として米英に對する自己の相對的地位の向上を意識してゐるソ聯は、第二戰線展開を斷乎米英に要求し、もし米英がこれに應じなければ獨自の政治的立場から歐洲政策を遂行せんとする決意と自信とを有するにいたつた。テヘラン會談は一つにはソ聯のかゝる強硬態度に促されて成立したものである。ゆゑにテヘラン會談において、米英が三國の政治協力につきソ聯にかゝる言質を與へたかといふことは、左程重要ではない。といふのは會談そのものがソ聯の強硬態度に對する米英の迎合と妥協とにより成立したものであるからである。かくして成立したテヘラン會談の軍事、政治協力に關する決定は、その精神において偉大な拘束力をもつてゐるのである。米英がこの拘束を打破らうとすればテヘラン會談招集の意義は全く無に歸するのである。またテヘラン會談の開催を必要としたやうな歐洲戰局の

現實に背馳する結果となるのである。

米英ソの政治攻勢といつてもソ聯の立場との間には、根本的な相違があることはいふまでもない。しかるにテヘラン會談後においては、米英はその欲するといふなにかゝはらず、テヘラン會談の決定の精神に則つて行動せざるを得なかつたのである。それが必然的に米英の對ソ妥協の方向をもたしたのである。従つてテヘラン會談後米英ソの對立激化を示唆する新しい事例が續出したが、それにもかゝはらず米英ソの歐洲政治攻勢は、「ソ聯の進出と米英の讓歩」の線にそつた共同攻勢として展開されてゐるといひ得る。

### 五 遅延する第二戰線

しかし米英の對ソ讓歩の外交はルーズヴェルト、チャーチルが三國關係の現實的把握の上からやむを得ないと觀念してゐるかも知れないが、兩國内に幾多の反動を起さないわけはない。現に露骨な反ソ論、政府の戰爭指導に對する非難、歐洲亡命諸政權の不滿などが著しく擡頭し、決戦を前に兩國々内戰線に多少の危機的症候を呈せしめてゐる。勿論これらの政治的反動は兩國内に常に存在してゐた。而してテヘラン會談の招集によりルーズヴェルト、チャーチルが歐洲總攻撃を決

意したと時期を同じくして、兩國國民の間に根據なき樂觀論が流布して國民士氣を著しく低下せしめ、そこに國內反動が表面化する大きな間隙がつくられたのである。決戦期に現れた米英兩國の國內政情の異常現象は畢竟決戦を苦慮する米英の心理的動搖と解される。いひかへればこの心理的動搖が、再び第二戰線展開の決意を鈍らせ、決戦を躊躇せしむる素因となつてゐる。

米英國民が決戦期の到來と同時にいはれなき樂觀論に陥つたのは、要するに政府の戰爭指導の結果が現れたのである。米英兩國政府は戰爭の長期化による國民の疲勞と倦怠をおそれるあまり、米英の戰勝近しとの國內宣傳によつて國民士氣の弛緩を食ひとめようとした。しかしそれが架空宣傳であつたことは、兩國政府がこの國內宣傳に大重になつた時期こそ、第二戰線ないしは大軍事行動による決戦を回避し續けた時期である。ゆゑにこの國內宣傳は決戦回避を糊塗する方便であつたともいへる。しかるにテヘラン會談においてにもかくにも歐洲總攻撃が決定されるや、過去の國內宣傳の結果たる國民の樂觀論は國內反動の擡頭の地盤となり、政府の戰爭指導に大なる障礙を與へるにいたつた。

この傾向の特に顯著に現れてゐるのは英國であつて、まづソ波國境問題にからむ政府の對ソ屈服を、大西洋憲章毀損の

而からとり上げた反ソ論が急に勢力を擴大した。保守黨議員はもちろん労働黨議員もこれに参加し、有力な新聞雑誌もこれに唱和して、大西洋憲章中の「政治形態選擇の自由」と「民族自決」の原則が蹂躪されたといきまいてゐるが、その鋒先はソ聯の歐洲進出に向けられてゐる。中には第二戦線の無謀と無用とを主張するものもある。この空気を助長するのは歐洲亡命諸政權の對英不滿である。バルカンにおいて對ソ讓歩の必要上英國によつて犠牲に供されたユーゴ、ギリシア兩亡命政權はもちろん、その他英國に亡命中の歐洲各小國政權は、英國外交の趨勢に驚き將來の不安におびえて英國内の反ソ勢力と合流したのである。

一方英國民の間には戦争早期終結の要望と並行して、將來の國民生活復興の要求が強く現れ、しかもこの要求から當然生れるべき戦争遂行への熱意の上昇は現れず、逆に將來の不安からくる戦争努力に對するサボタージュの傾向が強い。最近における大規模炭礦罷業の發生はその著しい例證である。英國では「炭坑夫の罷業は政治問題だ」といはれるほどである。かつて一九二六年炭坑夫と、鐵道従業員、交通労働者の三者同盟により全英的労働總罷業を勃發せしめた事實、炭坑夫が英労働運動の前衛闘士たる傳統を有してゐることは、この言葉の正當さを立證してゐる。前大戦全期にお

る英國の罷業件数は二千八百七十六件で、戦争後期において労働罷業の續發が英國内に革命的社會情勢を招來し、やがて軍隊と國民にこの空気が傳播してゆるしい情勢を呈した。しかるに今次大戦においては、一九四三年九月までの罷業件数はすでに四千八百五十三件に達してをり、前大戦時の社會情勢がさらに大規模に發展する下地は十分につくられてゐる。もし今回の炭礦罷業が他の産業部門に波及した場合には英國の混亂は收拾できないものとなつたらうが、政府の干渉が奏功してどうやら一應この危機を脱したやうである。

米國においても事態はほゞ同様である。今年秋の大統領選挙をめぐり、共和黨、民主黨内の反ニューディール派、孤立派は猛烈反ルーズヴェルト運動に乗出し、過般の増税案における大統領の敗北、議會の勝利のごときはこれらの反大統領派勢力の擡頭を物語つてゐる。しかもこれら勢力は實質的には反ソ勢力を形成するものであつて、大統領選挙前哨戦の激化とともに、政治家、言論機關の露骨な反ソ言説は注目に値する。ソ聯機關がウィルキーの言動を論難し、孤立派を反ソ派と非難し、ハースト系新聞をヒントラー御用紙と罵つてゐるとき、米國內の反ソ論に對するソ聯一流の反撃である。かくしてルーズヴェルト、チャーチル兩政府が、テヘラン會談において對ソ協力による歐洲總攻勢を決定した瞬間、國

### 六 決戦に引摺られる米英

以上において米英ソ三國の對獨總反攻態勢が展望されその前哨戦として三國の歐洲政治攻勢が展開されてゐるのが歐洲現戦局の特徴であることをのべた。しかし歐洲政治攻勢の過程中に三國の政治的對立抗争は一層激化し、かへつて米英の決戦心理をかき亂すやうな國內事情の發展がみられることを併記した。その間いさゝか矛盾が存するやうに思はれるので、結語として歐洲戦局を大觀的に特徴づけ、本論のしめくくりとしたい。

第一に東部戦線における戦闘が、米英の第二戦線展開の有無とは無關係に重大な局面に達したことが、歐洲戦局の現在を決定する主因となつてゐること。ソ聯はその軍事行動を背景に、米英の第二戦線不履行の場合には獨自の歐洲政策を推進せんとする決意を示すにいたり、米英は對ソ政策の最終的決定を迫られた。

第二に伊バドリオ政權の降伏に現れた米英の地中海作戦は、今次大戦における米英軍最初の戦果であると同時に、米英軍が漸く大規模軍事行動に移りはじめたことを物語つてゐた。米英は地中海作戦における成果をさらに擴大せんとして

内において重大な難關に立つたことは明白である。それは問題の最も單純な形においては、第二戦線決行をめぐる政府と反ソ勢力間の抗争といひ得る。政府はいかにしてこの國內的紛糾を切抜けることができるか。また反ソ勢力に對していかなる政治勢力と社會層とを背景として對抗し得るか。きはめて困難な問題が發生してゐるのである。ルーズヴェルト、チャーチルはこの紛糾を切抜ける最善の方法は、即時第二戦線を決行することだといふことをよく知つてゐる。これは地縁した國民の士氣を引締め、國民大衆の廣汎な支持によつて反ソ勢力に打勝つことができるからである。しかしチャーチルは自らが保守黨首領であり、保守黨こそは反ソ勢力の母體である。しかも第二戦線決行を支持するものは、左翼親ソ勢力なのである。ルーズヴェルトは大統領選挙を目標にはやくも大衆迎合の姿態を整へつゝあるが、それは方便にすぎない。彼もまた左翼政治勢力と労働組合との支持を受けて財閥と議會とに對し、正面抗争を敢てするとき戦争指導の方向を決して好むものではない。ルーズヴェルト、チャーチルはこゝに疑ふべからざる進退兩難に陥つてゐる。その當然の結果として第二戦線展開の遅延とならざるを得ない。ソ聯がはやくもこの空気を察して第二戦線即時展開の要を指摘してゐるの

バルカン作戦を企圖したが、それにはソ聯の諒解が必要であつた。しかしこのときの成果擴大の方途はバルカン作戦に限られるものではなく、ソ聯の要求する西歐第二戦線が戰略構想として、最も合理的なものであつた。かくて米英は期せずして第二戦線作戦に自ら接近して行つた。

第三にこれらの事情によりつひに開催をみたテヘラン會談は、元來の成立事情からいつても米英ソ間の政治協力と軍事協力の方式を決定すべき會談であつた。従つて同會談の決定は、米英の欲するといふにかゝらず、兩國に對し侵すべからざる拘束力をもつていたつた。おそらく同會談では三國協力の原則的討議があつたのみで、具體的實踐的項目についての諒解はなかつたらうとみられるが、そのことはそれほど重要ではなく、會談を必要ならしめた歐洲戦局の客觀的條件と米英側の主觀的條件とがすべてを決してゐる。

第四にテヘラン會談後の三國政治攻勢の實際的發展は「ソ聯の進出と米英の讓歩」といふ線にそひ、その限りにおいてテヘラン會談における決定が實踐されてゐる。すなはち米英ソの共同攻勢が推進されてゐる。

第五にその間三國間の政治的對立は激化し、米英兩國内に反ソ勢力著しく擡頭、兩國政府に進退兩難の苦汁を味はせられてゐる。しかし米英の行動を決する絶對的力として、兩國軍

事生産が昨年上期より下期にかけてすでに頂點に達し、これ以上決戦を回避しても軍事生産の増強は期待されないのみか、かへつて國內經濟上の諸困難を累増させるのみだといふ事實をあげることが出来る。戦備は軍事行動を促すとしてもいはうか、それが戦争の論理である。また現在の米英國內の政治的紛糾、國民士氣の弛緩は、特に英國において深刻でありこのまゝ放置すれば前大戦末期におけるごとき社會不安の情勢がさらに大規模に發展する可能性がある。労働者の戦争努力に對するサポーターズとしての罷業の増加、その軍隊への傳播、および國民一般に對する影響などは、前大戦に實際に起つたことであり、今次大戦においても起り得る可能性は十分にある。かゝる危険を脱却し、かへつて國民士氣を昂揚せしむる方法は、決戦を敢行する以外にはない。米英は必然にこの方向を擇ばざるを得ないであらう。

## 不拔なるドイツ戦力の基底

濱田常二良

### 一 ドイツ國民の士氣と團結

一九四三年初頭から一九四四年へかけての歐洲戦局は、實のところドイツにとつて有難いものではなかつた。スタールィングラードの悲劇、バドリオ政權の裏切行爲にもなふ南歐戦線への配慮、米英空軍の對獨爆撃の激化等は、この時期における悪材料の著しいものにならう。それでもドイツは事態の推移を率直にみとめ、ひろい視野でもつて歐洲の大局を見渡し、一面では突發的な事態に關する對應策を講じ、他面では歐洲新秩序の樹立とゲルマン民族の生存とのために不撓不屈の戦争を續けてゐるばかりか、随分ハラ／＼させるやうな事態に立ちいたつても、なほ餘裕のある態度でもつて遠慮を廻らせてゐるやうに見受けられる。すなはち一言にしていへば狼狽してゐないことになるが、かうした不拔なるドイツの戦力は現在の歐洲戦において大いに注目すべき課題であることもちろんである。

ドイツの戦力のうちで、まづ第一に擧げねばならぬことは、ドイツ國民の士氣と團結の點であらう。

一九四四年を迎へるに際し武裝親衛隊と警察官とに對して與へたヒムラー内務大臣の年頭の布告は、「一九四四年のわれらの合言葉はフリードリッヒ大王が七年戦争に際して殘した「われら何處の天地を彷徨するとも、敵をして和を乞はしめるまでは絶對に矛を收めず」といふ言葉である」といふ短い文句であつたといふが、これは戦時下ドイツ國民の氣持を端的に表現したものだといへる。

一九四四年の年頭にドイツ國防軍に與へたヒットラー總統の布告には、「ドイツが今日擇びとることのできるものはただ一つあるのみだ。それは勝利を得るまで闘ふことだ。いか

なる戦争といへどもその終結はあるもので、今次の戦争もまた永久に続くといふことはあり得ない。……今日われわれに残された仕事は、戦ひに勝つことのみである」と述べてをり、またゲンベルス宣傳大臣は、一九四四年一月三日日本新聞記者團との會見において、「ドイツ軍としては、米英空軍の對獨爆撃に對して、漫然報復を延期してゐるわけではなく、適當な時機に斷行する決心である。報復攻撃は非常に大規模であつて、いよいよ決行する場合には、英國民はドイツ諸都市に對する盲爆について必ずや後悔するであらう」と語つてをり、さらにヒットラー總統は、同年一月三十日のラジオ演説において「歐洲諸國家の救済の問題は、ナチス・ドイツ國民ならびにその武装兵力とドイツ同盟諸國によつてのみ解決される」と説いてゐるが、これらはいづれもドイツ國民の不撓不屈の精神を代辯したものとみてよい。

換言すれば、ドイツの指導者階級が右のやうな強固な意志を表明し、九千萬人のドイツ人が、指導者階級の指示のままに動いてゐることはドイツ國民のもつ強靱な士氣に由来するものであり、この強靱な士氣がドイツ戦力の重要要素になつてゐることを認めねばならぬ。ところでかうしたドイツ國民の士氣は、今次の戦争においてはじめて發揮されたかといふに、さうでなく、ヒムラー内務大臣も引用したやうに、フ

リードリッヒ大王の時代においてすでに顯著に現れてをり、また多少の異論はあらうとも、第一次世界大戦當時においても、大體同様の事實をみとめ得るであらう。といふのは第一次世界大戦の末期においては、ドイツの都市では一人當り一週につき、一千二百二十グラムの糠附き雜穀、百三十五グラムの骨附き獸肉といふがごとき乏しい食糧配給でもつて頭張つたのである。この食糧配給を、現にドイツ全國にわたつて實施してをる一人當り一週につき二千五百グラムのパン、三百五十グラムの獸肉といふ食糧配給に比較すると、一方では今次戦争におけるドイツ戦力が、第一次世界大戦當時よりも餘程好條件にあることをみとめるべきだとも、他方ではドイツの銃後が、甚しい飢餓線上に彷徨しつゝもなほよくがんばつたといふ民族的士氣を證明することにならう。

そこでかうした強靱な士氣はなにに由来するか、どの程度に根強いかにいふ點が問題になるが、これはゲルマン人が中央ヨーロッパの地に移住して以來、乏しい太陽の光線と瘦せた土地とに嗜りつきながら、たえず周圍の異民族と鬭争して來た結果だといはねばならぬ。すなはち惡條件の自然と異民族の脅威とに對して闘ひ続けるといふゲルマン人の傳統は、近代文明に入つてからは豊かでない資源を科學の力によつて補ひつゝ、強固な民族的團結でもつてスラヴ民族ないしはア

ングロサクソン民族との間に、大掛りな試煉をくり返してゐるとみてよく、したがつてゲルマン民族としての鬭争生活は昔も今もほとんど變つてゐないといへる。不撓不屈の精神はむろんドイツ人だけのもの特性ではないが、ドイツの戦力を觀察するにあつては、ドイツ人のもの強靱な國民性をまづ注目する必要がある。

## 二 ナチス黨および國防軍の組織力

米英空軍の對獨銃後爆撃を一例として觀察するに、一九四三年春以來ルール地方の諸都市やハンブルグないしはベルリンが、あれほどしばしば大規模な空爆を受けてゐるに拘らず、ドイツの銃後が、なほ巖然としてこれに堪へ忍んでゐることは、單にドイツ國民の強靱な性格あるひはドイツ指導者階級のとる適切な善後處置のみによるのではなく、ナチス黨のもつ整備した細胞組織の力にもとづくものとみねばならぬ。すなはちナチス黨の組織の力がドイツの戦力を大いに強化させてゐることになる。

右と同様のことは戦局の推移についてもあてはまると思ふ。といふのはたとへば一九四三年初頭以來、ドイツ軍は東部戦線において思ひ切つた撤收作戦を行つたが、ウクライナ

不逞なるドイツ戦力の基盤

方面等から撤收するに先立ち、撤收すべき地域におけるすべての家畜と大部分の住民を西に向つて移動せしめ、しかるのち人間の使用し得べきあらゆる施設を徹底的に破壊し、その上で戦線を西に移動させるといふ有様であつた。そこでドイツ軍の撤收した地域に残つてゐるものは、燒野原と破壊された家屋や橋梁などと少數の住民といふことになり、このことは一九四三年秋スターリン首相が、ウクライナ住民を西にもち去つたドイツ軍の作戦に感嘆したといふ噂が傳へられ、またソ聯新聞が同年十一月中旬、スターリン、クレマトルスカヤにおける重要生産施設の受けた徹底的な破壊状況を報道し、また同年十二月上旬、ドンバス地方の炭坑の受けた破壊について、「ドンバスのほとんど全部の炭坑は目下水浸しであつて、ポンプで汲み出すべき水の量は三億立方メートルと計算され、第一次世界大戦後北佛の炭坑における復舊工事と同じ速度で復舊するならば、十年を要するほどのものだ」と説明したことによつても裏書される。

ドイツの報告によると、一九四一年夏の對ソ電撃戦によつて獲得したソ聯の地域では、獨ソ戦直前における住民数の六割五分から八割が残つてゐたといふ。だがソ聯側の報告によると、一九四三年九月一日、赤軍がハリコフを奪回した時には同市の住民は二萬五千人に過ぎず、また同年十一月十一

日、キエフを奪還した際には同市の住民は十萬人であつて、獨逸戦直前におけるハリコフ、キエフ兩市住民の合計が百七十萬人であつたことと比較して、雲泥の差であることをみとめてゐる。一言にしていへばドイツ軍は、徹底的な焦土戦術によつて徹收作戦を行つたことになるが、徹收作戦の困難であることは昔から兵家の指摘するところであり、ドイツ軍がこれほどまでの徹收作戦を敢行し得たのも、いはばドイツ國防軍の組織の力だと断定してよいであらう。すなはち前線においてはドイツ軍部の組織力、銃後においてはナチス黨の組織力が、いづれもドイツの戦力を高めてゐるといつてよい。

ドイツの人口は九千萬人だといひ、この人口はむろん少いものでないにしても、ソ聯人口の一億八千萬人、米國人口の一億三千万人に比較すると、決して多いものとはいへぬであらう。それでもこの九千萬人の人口でもつて足掛け六年の烈しい戦争を續けながら、歐洲大陸をもちこたへてゐる所以は、主としてドイツの前線銃後における組織力に歸するものと見てよい。ところで、この組織力は、實は他民族の眞似難いほどの特別な仕組みになつてゐるのではなく、九千萬人の人口と、ドイツの支配し得る物的資源と、ドイツの探究した科學上の研究とを、透徹した細胞組織に組み立て、これを刻明にかつ有機的に活動させて、ドイツ全體としての力を全面

的に動かしてゐるにはかならぬ。これを裏からいへば、ドイツでは遊んでゐる人間と眠つてゐる物質とが非常に少いといふことにならう。

### 三 島政策と前線兵士の數

ドイツは周圍に地続きの國境をもつてゐる關係から、主力を陸軍に注いでゐるのは當然である。元來ナチス・ドイツの考へ方は、ドイツ人の住む地域をもつて歐洲中の一つの島となし、この島の周圍においていかなる變化が起らうとも、島の中ではその影響を受けることなく安定した生活を営み得るやうにするといふのであつて、いはゞ外部から隔離した島を形成するといふ眼目でもつて、一九三三年以來、特殊な政治、經濟、社會上の政策を實行してきたが、歐洲戰の勃發後は從來の島政策を踏襲しかつ一層強化したに過ぎぬといへる。すなはち戦争はいづれの國についても自給自足を主とする體制に導くに違ひないが、一九三三年以來、島政策をとつてゐたドイツは開戦とともに餘程便利な事態にあつたとみてよく、これもまたドイツ戦力の一要素になるであらう。

足掛け六年を戦ひ續けてきたドイツの島の内外について概観するに、まづドイツの周圍を守るべき兵力であるが、ドイ

ツは一九四二年秋の状態では一千八十八萬人の兵士を動員し

てゐたといふが、一九四三年二月には國內の勞働力に向つて果斷な再編成を行ひ、この勞働再編成によつて浮び出た男子勞働者の餘剰を前線の兵士として押し出したことになる。

そこでどれだけ兵士を前線に送り出したかは不明であるが、いま假りに第一次世界大戰當時のごとく、現在においても總人口の一分七を動員してゐるものとせば、一千五百三十萬人の兵士を出してゐることになる。他方において一九四三年三月二十一日におけるヒットラー總統の演説によると、歐洲戰勃發以來滿三年半の間に、ドイツは五十四萬二千人の戦死者を出したといふから、一年當り約十五萬五千人の戦死者であつたわけである。

つぎに歐洲戰勃發以來屢次の電撃戰に關するドイツの發表によると、大抵の場合において、傷病者と行方不明者との合計は戦死者數の三倍になつてゐる。そこでかうした戦死者數とその三倍に當ると推定される傷病者および行方不明者數とを差引いた殘餘の兵士が、いまもなほ活潑に前線を馳驅してゐることとなるのはもちろんであるが、こゝで大いに注意してよいことは、一年當りの戦死者約十五萬五千人、それから傷病者および行方不明者と推定される四十六萬五千人を加算した六十二萬人といふ數字と、ドイツの一年當りの男子出

生數との關係であらう。

いまドイツの古い出生統計の一部分を見るに、つぎのやうな數字になつてゐる（人口一千に對し何人生れたかの數である）。

年	出生數
一九二六年	一九・六人
一九二七年	一八・四人
一九二八年	一八・六人
一九二九年	一八・〇人
一九三〇年	一七・六人

右の數字は舊ドイツ本國のみに關する統計であるが、オーストリーの人口は舊ドイツ本國の人口の約一割にすぎないから、オーストリーをも含めた現在のドイツ本國全體の人口に向つて、右の數字をあてはめても大した間違ひはないであらう。そこで一例として、一九二九年生れのものすなはち一九四四年において滿十五歳であるものゝ出生總數を概算するに、一九二九年當時における獨逸の總人口が七千五百萬人であつたとせば、人口一千に對して十八人の出生であつたことは、總數百二十五萬人の出生であつたことになる。この半數が男子であるとせば六十二萬五千人程度の滿十五歳の男子が待機してゐる計算にならう。この點についてはドイツでは幼

兒の死亡数の甚だしいことを併せ考察すべきであるが、この六十二萬五千人といふ男子の数は、あれほど烈しい戦争を續けてゐるドイツの一年當りの犠牲者總計約六十二萬人といふ數と大體トントンになつてゐる。この關係を別の言葉でいふならば、ドイツが一年につき約六十二萬人の犠牲者を出す程度で戦争を續ける場合には、前線におけるドイツ兵士の數は、年を経るとも大體同じ水準を保ち得るはずである。

一九四三年初頭以來、ドイツが東部戦線において思ひ切つた撤收作戦を行つたのも、また同年秋パドリオ政権が裏切つてもドイツが餘裕ある態度を保ち得たのも、さらに同年秋以來ヒットラー總統やゲッベルス宣傳大臣などが、米英軍による歐洲第二戦線の結成を歓迎すると聲明し得るのも、おそらく右のやうな關係を計算に入れてのことであらう。さらに九千萬人のドイツの人口數ではまだ十分ではないといふ決定的な理由があるからに相違ないが、ヒットラー總統の戦争指導の特徴として、なによりもまづ兵士を可愛がり、兵士の犠牲を極力僅少に止めんと努めてゐる點、および戦後におけるドイツ人口の持駒を多く残さんと考へてゐるらしい點をあげ得るであらう。すなはち一九四三年初頭ヒットラー總統がスターリングラード方面軍に對して死守することを命令したがごときは、ヒットラー總統としてはよほどの例外事實であ

り、大抵の場合には遮二無二な作戦を遂げ、これにより戦後に於けるドイツ人の數をなるべく多く保有し、延いては戦後における國際競争において有利な事態を築き得る素地を残さんとしてゐるやうに受取れるのであり、かうしたドイツの遠慮は、ドイツの戦力を觀察するにあつて見逃してはならぬ點であらう。

#### 四 國防軍と青年層の兵士との關係

ドイツ兵士の質をみるに、三十歳以下の若いものゝ層が國防軍全體の兵士數の中で壓倒的な部分になつてゐるといひ、いはゞかうした若い兵士の層が國防軍の中堅を構成してゐることになる。ところでヒットラー總統は在野當時から極力ドイツ青少年に向つて働きかけ、たとへばヒットラーユーゲントの制度を設けたのも、一九二八年すなはち政権を獲得する五年前であつたほどであり、従つて一九二八年の頃ヒットラーユーゲントの訓練を受けてゐた満十四歳の少年は、一九四四年には滿三十歳の働き盛りの兵士になつてゐるのであり、しかもかうした青年層はヒットラー總統を崇拜することでも凝り固つてゐて、ヒットラー總統の命令ならばなんでも服従するといふ連中である。ドイツ人自體が随分強靱な國民性を持つてゐるといふこと以外に、働き盛りの青年層がヒットラー總

統一點張りになつてゐることは、ドイツの戦力をよほど高め

るものと見てよい。だがこの點については別の反面の存することを否み得ないであらう。といふのはドイツ國防軍は、一九四二年秋までの作戦においては第一線では三十五歳以上の兵士をあまり使用せず、老年兵は大抵占領地の警備などに振り向けてゐたといふ事情がある。すなはち一九四三年はじめまでの三年半の期間における戦死者五十四萬二千人といふ數字の大半は、三十五歳以下の青年層であつたといふ推定がつくであらうし、またこの期間における傷病者ないしは行方不明者の大半が、同じやうな青年層であつたものと考察するならば、この間の事情について大體の見當がつくであらう。が、今次大戦では、ドイツの犠牲者數が前大戦の場合に比して格段な少數である點、五十四萬二千人といふ數が推定動員數一千五百三十萬人に較べてよほどの少數である點を銘記すべきであらう。

#### 五 農業および軍需工業の勞働力

つぎにドイツの戦後がいかに戦つてゐるかといふ問題であるが、總人口九千萬人のうち、約一千五百三十萬人の男子が前線に出てゐるものとせば、約二千九百七十萬人の男子と約

四千五百萬人の女子、すなはち合計約七千四百七十萬人の男女が戦後に残つてゐる計算となる。そこでこの約七千四百七十萬人がどの程度に戦争に寄與してゐるかといふ點が重要になるが、ドイツは一九三九年秋、一九四二年二月および一九四三年二月において、逐次大規模な企業整理と勞働力の微用とを強化した結果、一九四三年夏の状態では、勞働力についてゐるもの、すなはち十六歳以上六十五歳までの男子と十七歳以上四十五歳までの女子の數は、合計して少くとも三千七、八百萬人になつたと推定される。換言すれば戦後に残つてゐる人口のうち、約半分は勞働し、約半分は勞働しない状態だとみてよからう。もつとも勞働に徵用されない年寄といへども、率先して勞働についてゐるものが相當にあり、少年少女でも農業等の勞働を手傳つてをり、また國民學校の上級生が學習しながら高射砲隊の補助員となつてをり、さらに勞働しなければならぬ年齢のものであつても、妊産婦や多數幼兒の母親などが特に勞働しないといふがごとき例外はあるが、こゝではかうした例外を計算に入れないでおきたい。

約三千七、八百萬人の勞働力がいかに働いてゐるかといふに、約五百萬人は農業勞働に従ひ、その他はほとんど全部軍需工場に働いてゐるのであつて、しかも軍需工場に働く三千二、三百萬人は、男女を問はず、旋盤を動かすといふ工合

に、現實に機械を相手にして軍需品を生産しつゝあるのである。事務所の従業員としてタイプライターをたゞくがごとき類を含んでゐないのである。女子が大量に軍需工場の労働に従ひ得るにいたつたのは、歐洲戦の勃發前後から、ドイツが軍需工場の工程を簡單化するに努め、女子の不熟練工でも容易に工場労働を操作し得るやうに改善した結果だといひ、この點は特に注目してよいであらう。また約五百萬人の農業労働力が、ほとんど全部女子である點をも見逃してはならず、同時に前線で血をもつて防衛に當つてをる男子および銃後で農業と軍需工業とを引受けてをる男女を差引いた殘餘の約三千七百萬人は、次代のものとして待機してゐるか、老齡のためやむを得ず餘生を送つてゐるかであつて、労働力をもちながら漫然と遊んでゐるものでないことを注意してよく、かうしておそらくゲルマン民族はじまつて以來といつてよい程の團結の態勢を整へ得たのは、主としてナチス黨の組織力と國防軍の組織力によると見てよい。

### 六 銃後労働力の配分と食糧上の安定

第一次世界大戦當時においてさへ一人の前線兵士が戦闘を続けるためには、銃後において數人ないし數十人の労働者が

軍需工業についてゐて武器製造に當つてをらねばならなかつたといふのだから、今日のごとく一千何百萬人といふ機械化されたドイツ兵士が前線において引續き戦闘するためには、三千二、三百萬人程度の労働者が銃後の軍需工業に従つてゐるだけではまだ十分でないことはもちろんである。そこでドイツはかうした軍需労働力の必要を補ふため、歐洲戦勃發の前後から逐次多數の外國人労働者をドイツ本國に移入して農、工業に使用し、また屢次の電撃戦によつて得た捕虜をしてドイツ本國における農、鑛業ないしは土木事業に労働させてゐる。ドイツ側の報告によると、一九四三年春の状態では、約七百萬人の外國人労働者と約五百萬人の捕虜とが、ドイツ本國における労働についてをり、またこの合計約一千二百萬人のうち、約半數を農業労働に振り向けてをり、さうに軍需工業においては捕虜を使つてゐないといふ。

そこでドイツ本國の農業は、約五百萬人のドイツ女子と、主として男子より成る約六百萬人の外國人によつて運営してゐることになるが、ドイツはこのドイツ本國の農業生産によつて、現にドイツ本國に居住してゐるもの、すなはち七千四百七十萬人のドイツ男女と七百萬人の外國人労働者と五百萬人の捕虜との合計約八千六百七十萬人に對する食糧を確保する方針であつて、前線に出てをる約一千五百三十萬人のド

イツ兵士の食糧は、それ／＼現地調辨によらしめることにしてゐる。

一九四三年十月三日に行つたパンケ食糧省次官の演説によると、一九四三年においては、ドイツ本國の耕作面積は平時に較べて減少してゐるに拘らず、前年の收穫高に比し少くとも三分の一の増收となり、開戦以來の新記録となるばかりでなく、平時における平均收穫高をも突破したといひ、この報告演説にもとづいて一九一八年と一九四三年とにおける主なる農作物の收穫を比較すると、つぎのやうな數字になつてゐる。(單位千トン)

	一九一八年	一九四三年
裸麥	六、一〇〇	七、四〇〇
小麥	二、三〇〇	四、二〇〇
馬鈴薯	六、三〇〇	二一、三〇〇

現在のドイツは、一人當り一週につき、二千五百グラムのパン、三百五十グラムの獸肉を配給してゐて、この配給量では、肉類は十分でないとはいへ、パンは食べきれないほどの分量であつて、大抵のドイツ人はパンの切符を食へ残してゐる實情である。すなはちこの配給量は、各人の主食物に對して、餘分ができるほどに確保してゐるといふ點に強味があるが、このパンの配給量と、右にあげた一九四三年の收穫高と

不抜なるドイツ戦力の基礎

の關係を考察すると、餘程注目すべき事實の存することがわかる。といふのはパンの配給量が、一人當り一週につき二千五百グラムであるといふことは、一人當り一年につき百三十キロであることとむろんであり、ドイツ本國に居住してをる人口、すなはち約七千四百七十萬人のドイツ人、約七百萬人の外國人労働者、約五百萬人の捕虜、合計八千六百七十萬人に要する一年間のパン配給量は、一千二百二十七萬一千トンといふ數字にならう。他方においてドイツのパンが、一九三五年頃から以降は小麥や裸麥のみで製造してゐないことは周知の通りであるが、いま假りに小麥と裸麥のみによつて贅澤なパンを製造するとしても、一九四三年における小麥と裸麥の收穫は、合計して一千百六十萬トンになつてをり、右にあげたパン配給の推定所要量と比較すれば、大體の見當がつくであらう。

ゲッベルス宣傳大臣が一九四三年十月三日に演説したやうに、「パンと武器とは、戦争を遂行するための最も必要な前提要件である」に違ひなく、ドイツが右のやうな收穫を得たことは國民に對する主要食糧の供給を確保したばかりでなく、軍需工業に對する原料の供給、家畜類の飼料などにも餘裕ができてくる筋合である。しかもかうした收穫は乏しい太陽の光線と瘦せた土地といふ自然上の惡條件、および戦時下

の不如意といふ事情があるに拘らず、ドイツが農業に關してたえざる人爲的努力を拂つてきた結果である。また前にも觸れたやうに、ドイツ國民全般が開戦以來、パンのごとき主食物について食べ切れないほどの配給を受けてゐることは、銃後の食生活が大體安定してゐることになり、かうしたことで行列買ひや買出し群等の必要がないことだけでも、ドイツ銃後人口の節約する時間と努力は大きいものであり、それだけにドイツの戦力が高まるはずである。

さらにウクフイナの穀物收穫を考察するに、一九四二年には、同地域の住民に對する耕地の分與、種子の配給などに手間どつた關係から、十分の收穫を得るにいたらなかつたが、一九四三年には、天候の好條件と相まぢ非常に收穫を得たといひ、しかもこの收穫は、家畜や住民とともに一切西に向つて輸送し、その上でドイツ軍を西に撤收させたといふ。だから、一九四三年にウクライナで得た收穫は、そつくりドイツの食糧貯蔵となつてゐるといつてよく、この貯蔵がドイツの戦力の上に大きな役割を果すべきことも想像されよう。

### 七 軍需生産の躍進と理性的な態度

一九四三年十月三日に行つたゲッベルス宣傳大臣の演説に

各種口径の火炮	一〇〇	四〇〇
重機關銃	一〇〇	三〇〇
對戰車砲	一〇〇	六〇〇
戰車	一〇〇	二〇〇

さらに飛行機生産は數倍となつてをり、重戰車の數をみるに、一九四三年五月には、一九四二年の一年中の生産高總數を超過してゐる。そこで一九四三年下半年から一九四四年春にかけて、武器全體の生産についてさらに飛躍的な成績をあげるであらう」とのべたが、いふまでもなくかうした生産をもたらし得たのは、主としてドイツの組織力とドイツ女子の奮闘と外國人労働者の協力にもとづくものとみてよい。

なほ米英空軍の對獨爆撃に對して、シュペーア軍需大臣は、一九四三年春以來、ドイツ各地の軍需工場を斷行したと傳へられるが、かうした疎開も一九四三年中には完了したに違ひなく、したがつて一九四三年暮以降の軍需生産はよほど好都合な條件を得てゐるであらう。

ドイツの工業地帯としては、ルール地方のそれが古くから有名であるが、ナチス・ドイツは、一九三三、四年からマグデブルグ地方に龐大な工業地帯をつくり、また一九三九年頃から舊ドイツ本國の南東に位するプレスラウ地方に、大規模な工業地帯を建設しはじめた。ことにプレスラウ地方は現在

不拔なるドイツ戦力の基礎

よれば、「反樞軸軍は爆撃によつてドイツ軍需工業を全滅せんとしたが、この企圖は全く失敗に歸した。シュペーア軍需大臣は、廣範圍にわたる企業の合理化と再編成によつて、逆にドイツ軍需工業の生産を増強した」といふ。

シュペーア氏は、一九四二年二月トッド氏の死去の後を襲うて軍需大臣となり、強化された軍需大臣の權限でもつて軍需生産に努力し、綜合的計畫によつて量の上において極度の軍需優先を斷行し、たとへば一九四二年まで残存してゐた輸出生産を一切打ち切り、これを軍需生産に編成替へし、低能率の軍需工場を閉鎖して高能率の工場に生産を集中するといふわけで、フンク經濟全權も、經濟の運営を簡素にしたがら軍需生産力の擴大に貢獻した。シュペーア軍需大臣は一九四三年六月五日の演説で、「武器生産高は一九四三年五月にいたり、あらゆる分野において記録的數字を出し、またドイツ本國および占領地における軍需金屬の生産も増加しつゝある。一九四一年における毎月平均の生産高を百とすれば、一九四三年五月の生産高はつぎのごとき數字に躍進してゐる。

武器の種類	一九四一年の	一九四三年五
機關車	月平均生産高	月の生産高
彈藥	一〇〇	三〇〇
	一〇〇	六三〇

の大ドイツの眞中になつてゐて、外部からの襲撃に對して最も安全だとして戦時下ドイツの最も力を入れてゐるところであり、加ふるにこの地方が豊富な石灰産出地である關係から、この地方の工業地帯はすばらしい發展をとげつゝあるといふ。同時に米英空軍の對獨爆撃があれほど頻繁になつても、プレスラウ地方に對する爆撃があまり傳へられない點をも見逃し得ないであらう。

つぎにドイツ本國に屬しない地域であるとはいへ、獨ソ戦の結果ルーマニア領となつたトランス・ドニエストル、すなはちオデッサ方面の地域には、一九四二年以來、大規模な工業地帯を設けつゝあるといひ、この地域が獨ソ戦線のすぐ背後になつてゐるだけに、このことはルーマニアないしはドイツの戦力の上から大いに注目すべきものと思ふ。

現在のドイツ銃後を概観すれば、國民の一切の労働力を農業生産にあらざれば軍需生産に集中してゐるといふ姿であり、これがためにはしばしば思ひ切つた政策を合目的に斷行しつゝあり、たとへば人口問題に關する政策にしても詳言することを憚るが労働力の確保といふ觀點から、果斷な轉換をしたといふほどである。同時に一九四三年九月上旬のフランクフルター・ツァイツング紙上の論文が、ソ米英三國の物質的な兵力が量の上ではドイツに優ることを率直にみとめ、ド



イツとしては質の上でその開きを補ひつゝ、量の點でもでき得る限り追いつかんとしてゐることを指摘してゐたがごとく、ドイツはよほど理性的な態度でもつて事態を観察し、これにもとづいて案出した對策を果敢に實行しつゝある。それだけに軍需生産といふ點だけからみても、ドイツの戦力には弾力性と將來性を備へてゐるといへよう。

### 八 科學による戦闘力増強と新規資源の製造

物的資源の部面からみるに、ドイツ本國および占領地において多量の鐵、石炭などを産出し、南東歐のアルミニウム、マグネシウム、クロム、マンガンなどの産出と相まぢ、軍需工業の基礎が安定してをり、また同盟國ルーマニアの石油などが、ドイツの重要な戦争資材になつてゐることは周知の通りである。殊にドイツは占領地または歐洲友邦における資源を利用するにあつてこれらの地域がほとんどドイツ本國と地続きになつてゐて、輸送上に受ける便宜が甚大であり、これによつて得る戦力増強上の好條件を看過できぬであらう。それでもドイツはなるべくドイツ本國の資源だけでやりくりせんとする態勢を忘れてゐない。それは科學によるやりくりであつて、人造石油、人造ゴム、石炭から抽出する

人造綿、石炭から採取する食用油、各種の人造纖維、ないしはガラス製の布といったものがその例にならう。すなはちドイツの科學は、各種の新兵器を製造することにより直接的な戦闘力を高めてゐるばかりでなく、新規の資源をもつくり出してゐるわけで、ドイツの戦力の上では大きな役割を受持つてゐる。

ゲッペルス宣傳大臣が、一九四三年十月三日の演説で「空中戦は、ドイツ科學陣と反樞軸學界との抗争である。目下のところでは、ドイツ科學陣が非常な勢ひで反樞軸學界に追いついてゐるから、將來は反樞軸軍が人員と器材との両面において甚大な損害を受け、戦果と損害とが釣り合はぬ時期が必ず到来するであらう」と説いたのは、科學に關するドイツの自信と戦力との關係を物語るものであらう。と同時に歐洲戦勃發以來優勢を實證してゐたドイツ空軍を前にして、一九四三年以來米英空軍が頻繁に對獨爆撃を行ひつゝある事情は、十分検討すべき問題であらう。

### 九 指導者の政治と國民の氣魄

ドイツは周知のごとく、米英およびソ聯を相手として、史上かつてみないほどの大規模な民族的總力をあげて戦ひつゝ

あり、歐洲の事態は、もはや一局部における戦局の推移によつて大局を制するやうなことが不可能になつてゐるとみえるほどに、大掛りな力の均衡問題になつてゐる。換言すればナチス・ドイツが早くから採用してゐる島政策が、どこまで發展し得るか、またソ米英の勢力がどの程度までドイツの島政策を妨害し得るかといふ民族的角逐になつてゐる。

他方においてヒットラー總統の政治は、一九四二年十一月八日に行つた同總統の演説の中で、「この戦ひはドイツ國民のための戦争である。余は、ドイツ將兵に對し、余自らなさうとする以上のことを決して要求せず、ドイツ國民に對しても、現在余がやつてゐること以上のことを断じて要求しない」とのべてゐることによつてもわかるやうに、ドイツ國民を可愛がるといふことに終始してゐるといつてよく、同時にナチス黨と國防軍との組織力によつて、ドイツ國民を強固に團結してゐる。またドイツ國民は、傳統の強靱な國民性でもつて指導者の指導に従ひつゝ、現在の戦争の要請に應へてゐるが、一例を食糧問題にとつてみても、相當餘裕のある日常生活を営んでゐるといつてよく、ドイツ全體としての戦力にはなほよほどの弾力性をもつてゐる點は前にも觸れたところである。

卑近な例ではあるが、一九三九年九月歐洲戦の勃發した直

後、ベルリンに在住する某外國人がその下宿のドイツ主婦に向つて、「戦争がはじまつて食糧が窮屈になるだらうから、いまのうちに砂糖のごときものを買つておくがよからう」と話したところ、その主婦の答は、「そんなものを買つておいたところですぐに費つてしまふものであり、まさか一年分の砂糖などを買つておけるものでない」といふのであつて、平常と變らぬ態度でもつて、戦時生活に入つたといふ。このドイツ主婦は特別な教育上の經歷をもたぬ普通の市民であるが、普通の市民にしてこれだけの達觀と氣魄をもつてゐる點を見逃してはならぬ。すなはち普通一般のドイツ人は聞こえよがしに體裁のよいことをそれほど巧言しないが、國家の緊急必要に對應した無駄のない日常生活を合目的に實行してゐることになる。いふまでもなくかうした氣魄のある國民の團結は、冒頭においても觸れたごとくドイツ戦力の根本的な源泉であり、またドイツの戦力をして不拔のものたらしめるといへよう。

# カイロ、テヘラン會談と反樞軸の意圖

恒川 眞

## 一 カイロ、テヘラン會談の意義

一九四三年十一月から十二月にかけて反樞軸國側が開いたカイロ、テヘランの兩首腦者會議は、軍事的、政治的、その他いろいろの意味において意義深いものであつた。カイロにおける會談は十一月二十二日から二十七日まで六日間にわたつて行はれ、出席者は米大統領ルーズヴェルト、英首相チャーチルに加ふるに重慶の獨裁者蔣介石およびその介添役としての宋美齡であつた。米英兩國とも軍關係の主な指導者をほとんど網羅し、隨員は英が二百一名、米は一千名以上といふ多數にのぼつた。重慶からは元外交部長王寵惠、海軍部長陳紹寬、陸軍報道部長鄭章成ら二十名であつた。テヘラン會談は十一月二十八日から十二月一日まで四日間にわたつて開かれ、米英の出席者はほゞカイロ會議と同じで、重慶の代りに

ソ聯邦からスターリン人民委員會議長、モロトフ外務人民委員のほかヴォロシロフ、チモシェンコ、ジューコフらの諸元帥が出席した。

英首相チャーチルはかつて、戦争の激化とともに米英その他樞軸側首腦者の會議はいよ／＼頻繁の度を加へるであらうと語つたが、前記の兩會議はこれら連鎖的會議の一つにはかならない。もちろんこれら一連の首腦者會議のうちにもおのづからその重要度に一定の差が生ずるのは當然であるが、カイロ、テヘラン會談は一九四一年八月のルーズヴェルト、チャーチル大西洋上の會談、同年十二月ワシントンにおける反樞軸諸國二十六箇國の會議、一九四三年一月のカサブランカ會談、同年八月のクエベック會談、同年十月のモスクワ會談とともに最も重要な會談の一つであつた。

カイロ、テヘラン兩會議の重要性は、蔣介石が東亞の一角からルーズヴェルト、チャーチルら西歐の政治的首腦者と直

接會談のためはる／＼とエジプトまで出かけ、従来一步も國外へ出たことのないスターリンが、やつと腰を上げてテヘランまで出向いたこと——すなはち、これまで重慶およびソ聯が戦争遂行について、米英からなんとはなしに疎外されてゐるかの感があつたのを、その障壁がこれによつてとり拂はれ、東西の四國が戦争遂行ならびに戦後處置について意見の交換をなしたといふことにあつた。従來數次にわたつて行はれたルーズヴェルト、チャーチル會談は、主として戦争遂行の方法についてのそれであり、それに關する限り或る程度の結果をあげてきたことは決して輕視を許されない事實である。しかし最近における情勢の推移は會談を兩國にのみ限ることを許さなくなつた。戦局の推移はぜひとも重慶、ソ聯の協力を必要とするのであるが、戦争遂行上に重慶、ソ聯の協力を確保するためには重慶、ソ聯の政治的要求を充足せしめる必要があり、かくて戦争對策は戦後對策にまで複雑化され、米英會談に重慶、ソ聯の參畫が必要とされるにいたつた。

一九四三年一月のカサブランカ會談（地中海作戦について協議した）においてスターリンの参加が要請されつゝも實現されなかつたに反し、カイロ、テヘランに蔣介石、スターリンの出馬をみたことは、以上のごとき會談内容の推移深化を物語るものであらう。

カイロ、テヘラン會談と反樞軸の意圖

では、戦争對策をかたる前に、なぜ政治問題の處理、戦後對策の決定が要請されるのであるかといへば、それは米英とソ聯、重慶との間に巨大な疎隔があり深刻な背反があるゆゑである。米英とソ聯、米英と重慶との提携は決して本質的に相合致するものがあつてのそれではなく、むしろ反對に深刻に相反する利害の上に立つてゐるのである。米英と重慶の關係は搾取者と被搾取者、侵略者と被征服國のそれであり、一時的、形式的に米英重慶の提携を可能ならしめてゐるのは日本と重慶の對立、日本と米英の利害の對立が併在するといふ偶然であり、米英とソ聯との關係は資本主義とこれを敵視しこれを打倒潰滅せんとする社會主義のイデオロギイの對立、むしろ不倶戴天の仇敵にほかならないのである。従つて米英對ソ聯の關係は前者が商人的利害の打算によつてソ聯に接近しようとした場合のほか本質的には對抗關係を持続したのである。第二次歐洲大戰勃發の直前英國とソ聯との接近は、ドイツ抑制のためにソ聯を利用せんとした英國の老練政策であつたし、現在米英ソ聯の提携聯合は、たゞ／＼ドイツを共通の敵としてゐるといふ偶然および便宜上の關係にすぎないのである。

かやうなわけで戦争協力における重慶、ソ聯の米英に對する紐帶はきはめて弱いのである。米英對重慶、ソ聯のかやう

な一抔安定を缺く關係は、反極軸諸小國および中立諸國の動向に少からぬ影響を與へ、彼らの必勝の信念の樹立を阻んでゐるのである。戦局の推移とともに重慶、ソ聯の戦争協力の強化を現實に必要とし、自國側陣營の動搖を防止するためには米英は重慶、ソ聯との關係を再調整、強化し、その紐帶の強靱性を爾餘の聯合國および中立國に示威せねばならないのである。

カイロ、テヘラン兩會談の意義はこゝにあり、會談の結果は一應四國の協力を確保し、これを世界に宣傳する役目を果し得たものゝごとくである。

## 二 カイロ會談と日本處罰の白晝夢

カイロ會談における主要な論議題目は左の三點であつたとみられてゐる。

- 一、太平洋方面における戦略の決定
  - 二、戦後における日本處分問題
  - 三、戦後における支那の地位向上問題
- 日本に對する戦略の大綱は、戦争勃發當初における歐洲第一主義、カサブランカ會談におけるこの方針の強化から、クニベック會談における歐洲、太平洋兩戦線並行主義への移行

があり、それがさらにカイロ會談の新對日戦略にまで發展したのであつた。

クニベック會談において、對日反攻作戦は米英兩國の間に受持ち區域が畫定され、スマトラ、マライ、ビルマ以西が英國に委託され、英國はマウントバッテンを總司令に任命し、在支米軍、重慶軍の協力によつて西から反攻を開始し、米軍はアリューシャンより濠洲にいたる廣大なる海面より飛石戦術をもつて日本に迫らうとし、相まつて東西から日本を挾撃せんとする方法が決定された。

英國の對日進路は海軍機動部隊と空軍を中心として推進される、いはゆる飛石作戦で、これは北（アリューシャンから千島へ）と南（濠洲、ソロモン、ニューギニア、ビスマルク群島、内南洋の順路をとる）の兩方面から日本に對する攻撃を企圖するとともに、長距離爆撃機ボーイングB29によつて中部太平洋からたゞちに日本本土空襲を行はうとするものであつた。昭和十九年三月初旬における戦況は、敵は北千島へ數度の爆撃を加へ來るとともに、南においては、空母、戦艦よりなる強力なる機動部隊によりマーシャル群島へ上陸し來り、さらにトラック島およびその附近の島嶼、およびさらに北上してサイパン、テニヤン、グアムなどに空襲を試み、隙あらば一層日本本土に迫り來たらうとする態勢を示してゐ

た。他方、ビルマからの敵の戦略は、幾多の障礙によつて遲滞を餘儀なくさせられてゐた。障礙の主なるものは、印度國內政情の不安、ベンガル州など東部印度における大飢饉、在印英軍の進撃準備の未整などであるが、さらに一層大きな障礙は、統帥首脳部における内部的對立であるといはれる。それは米英重慶の寄合ひ世帯からくる必至的現象であるといへよう。對立は總司令たる英人マウントバッテンと在支米軍司令スチルウェルのそれとが全く相反してゐること、兩者の個人的反感などからきてゐる。マウントバッテンの作戦は海正面からの進攻であり、ニコバル、アングダマンの兩群島を経て、スマトラ、ビルマを海上から攻撃しようといふのであり、スチルウェルのそれはまづ北部ビルマに進出し、印度と重慶との連絡路（レド公路と呼ばれてゐる）を開いて完封下の重慶の苦境を救済し、重慶軍を利用して日本軍を撃破せんとするにある。スチルウェルの言葉によれば、この作戦は一つには、日本による完全封鎖によつて呻吟しつゝある重慶政権に多少とも軍需品を補給する手段となるし、二つには、これによつて日本軍に對する攻撃を行ひ、これに打撃を與へる機會が得られる、といふにあつた。

對日作戦における米英兩軍間のこの意見の對立こそは、敵の軍事行動を遅延せしめ、これを不成功に終らせてゐるもつ

とも大きな原因とみてよいであらう。米英本國においては大體マウントバッテンの戦略が支持されてゐるものゝごとく、米誌の報道によれば、ワシントン、ロンドン、ニューデリーなど反極軸主要都市においてスチルウェルが批判的になつてゐるといはれてゐた。

しかし三月から四月にかけて北ビルマにおいて試みられた敵の反攻企圖は、明白にレド公路再開のためまづミイトキイナを奪還し、パーモに出て舊ビルマ公路を再開せんとするものであり、明かにスチルウェル作戦の實施で、敵はこのために北ビルマにおける反撃を激化し、數千の空輸部隊を送つたりした。しかしまた、在緬皇軍の機先を制する反撃作戦の展開と、その善謀勇戦とは敵のこの作戦の潰滅を招來した。もつともこの作戦は敵の本格的なビルマ作戦とはみるべきことなく、一層猛烈な反撃がその後展開されるべきことも豫想されたが、局面は皇軍の優勢のうちに、彼我双方の作戦行動を全く不可能にする雨季がはやくもはじまらうとしてをり、いまやビルマからの對日反攻は十月頃までは不可能とならうとしてゐる。かやうな反攻作戦の停滞により總司令マウントバッテンに對する本國側の評判は極度に悪化し、その更迭も必至とみる向きもあるからである。

従來米英首脳者間の會談は、大なり小なりなんらかの結果

を生み出してゐたものであつた。ところがクニベックおよびカイロにおける會談の結果たる對日作戰の失敗はおよそかくのごときものがあつたのである。これら兩會談においてはやくも顯著に認められてゐた敵の對日焦躁は最近の戦局の不振に促されて一層その度を深化せしめてゐる。

戦後における日本の地位についてのカイロ會談は、全く敵米英の宣傳以外のなものでもない。それは戦局の不利を隠蔽せんとするために、ことさらに戦争の結末はやくも彼らに有利に確定されてゐるかの感を無知なる世界の大家に與へ、これによつて腰の弱い味方の陣營に活を入れ、自信なく不動の方針を持たぬ中立諸國を左右し、あわよくば極端諸國民心の動搖をも併せて招來せしめようとする苦肉の策なのである。

傳へられるところによると、米大統領ルーズヴェルトは米國の戦争目的は日本帝國を永遠に抹殺するにあると言明し、このため米英が戦後（戦争が敵に有利に終るものごとく假定して）日本に與へようとしてゐるものは、  
一、日本の無條件降伏によつてのみ戦争を終結せしめる  
二、日本屈服の後は日本を第三流國に蹴落す  
ことにあるとのことである。日本を第三流國に蹴落すとは、海外電報によれば

- 一、日本から植民地を没收する
- 二、日本から軍事力を奪ふ
- 三、日本の對外貿易を極度に制限して日本の經濟的生存を窒息せしめる

などであらうとのことであつた。これに對し重光外相は本年一月、休會明け第八十四議會劈頭の外交方針演説においてこれに言及し、米英首腦は「帝國に對し假借なく攻撃を加へ、無條件降伏を強要すべし」と稱し、本土以外の帝國領域は悉くこれを奪取して、あるひは自己の領土とし、あるひはこれを支那に分ち與ふべしと約し、重慶政権の離脱を防止せんと致したのである」と喝破した。

以上がカイロ會談において米英重慶の間で決定したところの、日本に與へんと欲した大體の相貌なのである。全計畫が米英重慶側の自分勝手な妄想からきた白晝夢にすぎぬことは問題を一瞥しただけで諒解されるであらう。敵がなぜこのやうな愚にもつかぬ計畫を案出するためにその首腦者をはるばるカイロまで出動させ、その痴人の讒語にも似た希望案を臆面もなく世界の前に發表してゐるかはすでにのべた通りである。われわれはそれに對して一顧を與へる必要もないのである。むしろかゝる小策によつて自己内面の焦躁を暴露しつゝある敵の狼狽振りを嘖つてやればよいのである。現實はかや

うな空想によつて少しでも動かされるやうなものでは決してないからである。

### 三 いはゆる戦後における支那の地位向上

カイロ會談はいはゆる戦後における支那の地位向上についても考慮を拂つた。これは昭和十八年十月のモスクワ會談から持越された問題であつた。モスクワ會談において支那の國際的地位は非常に向上された。といふのは、この會談（米英ソ三國間に開かれた會談）の結果たる共同宣言に重慶の名が加へられ、一見重慶政権は反極端側の四大國の一に數へられるにいたつたかの外觀が與へられたからである。しかしこのことを一層綿密に點檢してみると、この事件がきはめて不可解、奇妙なものであることがわかるのである。會談は三國の間に行はれ、宣言は三國によつて起草されたに相違ないのである。いはゞ重慶は三國の決定を事後承諾させられたにすぎないのである。この會談参加者の一人たる英外相イーデンは「これ（重慶の参加）はハル米國務長官の大きな外交的成功であつた」とその議會への報告でのべてゐる。それはハルの重慶勸誘がなんらかの政治的目的をもつてなされたもの

カイロ、テヘラン會談と反極端の露議

であり、その目的が重慶に空疎な名目的地位向上を與へた代償によつて易く獲得されたことを、イーデンの聲明は裏書きしてゐるのである。現に米國內においてさへ、重慶の實力が他の三國と肩をならべてこの宣言に署名するに足るほど強力なものでないことが指摘されてゐることをもつてみても、いはゆる支那の地位向上の本質が窺ひ知られるのである。

戦後重慶の地位がいかなるものであらうかは、米英當局者の外交的、政治的お世辭によつては推知し得られず、むしろ自由な立場に立つ人々の言葉によつてその眞實を掴み得るといへよう。南阿首相スマッツ將軍および米國の評論家ウォルター・リップマンの言葉はその代表的なものであらう。スマッツはカイロ會談進行最中（昭和十八年十一月二十五日）ロンドンにおける演説において、明確に「將來世界には三つの大國が残るであらう。米國、英國、ソ聯がこれであり、この三國は戦争か平和かを決する指導権を確保し、これは武力によつて支持されねばならぬ」とのべてをり、重慶は全く無視されてゐるのである。リップマンはその最近の著書「米國外交——共和の桶」の中で、「米英ソ三國の協働は三國各自の安全を保障するに不可欠のものであり、一層廣範圍な安全體制を建設することを得しめる唯一の前提條件である」とのべ、重慶のことは全く忘れ去つてゐる。またいさゝか舊著で

はあるが、エリー・カルバートソンはその著書「世界聯合案」の中で、スマツツ、リップマンらとは違ひ、支那（すなはち重慶）の存在を認めてゐる。彼は世界平和維持のため國際警備軍の組織を提唱してゐるが、警備兵數は米の二割、英の一分五分とともに、支那、獨、佛、ポーランド、トルコ、印度などいづれも四分を割當てられてゐる。これが米英人の重慶に對する評價の實相なのである。

ハル國務長官以下米英官憲の對重慶媚態がいかなるものによせよ、戦後の重慶が彼らによつてどんなに取扱はれるであらうかは、前述によつて明瞭に豫知できるのであるが、それを一層明確にするものは戦後支那における米英の立場がどうなるであらうかといふことであらう。戦後支那において米英の求めてゐるものは支那事變以前の狀態——すなはち、半植民地への復歸である。たとへば香港は英國が再び掠奪せんとするであらう（カイロでは蔣介石からその言質が與へられたと傳へられてゐる）支那における門戶開放、機會均等主義の維持（そのため日米交渉において米國がどんなに無理をいつたかを想起するとよい）が要求されるであらう。それは米英の對支經濟侵略、引續いて政治的侵略の端緒となるであらう。カイロ會談によつて約束された戦後重慶支配下の支那の地位向上の本體はまことにかくのごときものにほかならないの

である。それは被搾取國としての向上なのである。

#### 四 テヘラン會談と第二戦線

カイロ會談に引續いて行はれた米英ソ三國のテヘラン會談が、同年十月モスクワにおいて行はれた會談の延長であつたことは周知のとほりである。カイロ會談が太平洋における戦争に關聯したものであつたと同じく、テヘラン會談はヨーロッパ戦線についての協議會であり、ソ聯對米英間の第二戦線展開についての折衝と戦後におけるヨーロッパ支配についての英ソ間の論争が中心問題となつた。カイロ會談においては米英が重慶を自由に引廻したが、テヘランにおいてはソ聯が完全に牛耳をとつた。

第二戦線の問題は、東部戦線の開始、ソ聯と米英との軍事提携成立以來、ソ聯側からたえず、しかも強硬に要求してゐたものであつた。これに對する米英の行動は遲滞に遲滞を重ねるばかりであつた。一九四三年一月になつてやつとカサブランカ方式を採用し、ヨーロッパ第一主義を再決定、ついで北阿進出作戦および地中海作戦を開始し、これをもつて第二戦線たらしめようとした。これは米英の狡猾な策略からきたものであり、大陸における戦闘を主としてソ聯の犠牲におい

て遂行せしめ、獨ソ兩國とも傷き倒れるにおよんで、最小の自國の犠牲をもつてドイツを征服し、あはせてソ聯をも容易に再起不能の狀態に陥れようとしたものであつた。ソ聯がかやうな老獪手段に瞞着されるはずはなかつた。

米英はこのためバドリオ政権の降伏のち、道をバルカンにとり、こゝから第二戦線を展開する形を示さうとした。しかしこれはソ聯を満足せしめないばかりか、ソ聯を一層不機嫌にした。それはこの方面における米英の作戦はソ聯の利害に抵觸するからであつた。ソ聯はバルカン半島一帯を自國の勢力圏と考へてゐる。そこへ米英軍が第二戦線に名をかりて進出し來つてその勢力を扶植することは、ソ聯にとつて好ましいものでないことは當然である。このゆゑにソ聯はあくまで第二戦線は西部戦線より開始されるべきことを主張し、米英がバルカン戦線展開の第一歩としてトルコを參戦せしめんとするのにも、最近は反對態度を示してきてゐる。一時極度に米英側に傾いてゐたトルコが突如豹變して、英國の軍事的要求を蹴つたのも、かやうな背後關係を暗示するものなのである。

テヘラン會談において米英はソ聯より、米英のバルカン戦線開始に對する反對と西部戦線における第二戦線の速時開始を、改めて——しかも強硬に要求された。第二戦線展開は米

英がソ聯に對して負うてゐる債務であつてみれば、ソ聯の要求に對して返す言葉もなかつた。最近の機會において大規模作戦が展開されることが改めて約束され、十二月二十四日には歐洲方面反樞軸軍總司令としてアイゼンハウアーが任命され、麾下の幕僚、司令官らも同時に發表され、大規模作戦への準備進捗が誇示された。米英においてはたゞちに第二戦線展開がいまにも開始されるかの宣傳が流布されはじめ、スマツツのごとき要人さへ、本格的第二戦線の開始は三月であらうなどと言明し、これをもつとも遅く見積る者も五月頃か、遅くも夏のはじめ頃には開始の運びになるものと豫想した。

最近のソ聯側の發表によれば、第二戦線展開の時機はこの會談において四月十五日と確約され、それに對しソ聯側もなんらかの反對給付を提供したとのことであつた。

攻撃はおそらく英佛海峡、または地中海側からの上陸作戦によると豫想されてゐるが、この方面におけるドイツ軍鐵桶の守備は、米英側に多大の損害——豫想もできないほど大きな損害を與へずにはおかないであらう。老獪な英國は他人の犠牲において自國を肥すといふ傳統的政策によつて米國軍を先に立てようとするであらうが、暴虎馮河の米軍といへど、この大冒険には少からず躊躇せざるを得ないであらう。しかしこの際ソ聯の戦線離脱をおそれるあまり、米英はおそ

らくなんらかの形において攻撃を開始せざるを得ないであらう。また米國における本年の大統領選挙戦策としても、十一月以前になんらかの形において作戦を開始する必要があるであらう。しかしその犠牲をできるかぎり小さくせざるため、十分の準備を整へ万全を期しての攻撃であらうから、その準備には相當の時日を必要とし、攻撃開始は豫想されてゐるよりはすつと遅くなりはいないか、と想像されるのである。第二戦線に關しては、かやうに米英側の完全な譲歩によつてテヘラン會談ははつたものとみられてゐる。

### 五 ヨーロッパ支配についてのソ英の對立

將來のヨーロッパ處分の問題については、さう簡単な解決は許されなかつた。戦線の問題はドイツ倒滅といふ共通の目標によつて統一されてゐるし、第二戦線への要求に對し、米英はこれを拒絶または延期せしめる口實をもたないが、政治問題の解決は各國各様の政治的背景をもつてをり、それらの立場と利害關係をもつてゐて、これはさう單純な解決を許さないからである。

はじめ米英は提携してソ聯に對した。彼らの論據は大西洋

イリン、チャーチルの正面衝突にをはり、ソ英の對立が明白化されたまゝに會談ははつたのであつた。

もつとも公平な立場——一應敵味方といふことを離れて考へて見るとき、米英ソがかやうな將來の問題の論議から氣まづい關係を招来しつゝあることは不可解といはねばならぬ。なぜかといへば、彼らの前には共通の大敵ドイツを討つといふ焦眉の急があつて、將來の問題などは當分問題にしてゐる餘裕はないはずだからである。しかもいづれも練達堪能の政治家である三人が、この問題についてそのやうに固執しつゝあるのはなぜであるか。

それはソ聯と米英との對立があまりにも大きく、あまりにも重要だからである。本文の冒頭に、米英とソ聯とはなんら共通の利害をもたぬとのべたが、それどころか彼らの間には絶對に越えることのできぬ巨大な間隙——利害の背反があるのである。

第一に資本主義と社會主義との對立である。ソ聯は新宗教政策採用、コミンタール解散などによつて、米英への和協的態度を示してゐるものゝ、米英は決して油断をしないばかりか、今次の戦争が假りに彼らの希望どほりの結果にをはつた場合は、たゞちにつきの機会をとらへてソ聯——社會主義體制の倒滅をはからうと心ひそかに覺悟してゐる。ソ聯がその

カイロ、テヘラン會談と反獨裁の聲

憲章の原則であつた。大西洋憲章の本質は、巧に迷彩されてはゐるものゝ、結局において米英の勝手な世界處理の手段である。彼らにとつてもつとも有利な將來の世界の在り方は、小國の分立と、これによる勢力均衡である。米國はかやうな状態が自國にとつていかに有利であるかを、中米における實驗によつてよく知つてゐる。大西洋憲章の最初の數箇條は、それを東亞において實現せんためのものであり、民族自決はこれをヨーロッパにおいて實現するための口實なのである。米國は東亞において半植民地支那の再現を希望し、この間に自己の經濟的、從つて政治的勢力の擴大をはからうとし、英國はドイツ、フランスなきのちのヨーロッパにおいて諸小國の族立による自國支配權力の擴大を目ざしてゐるのである。このことをもつとも明瞭に示してゐるのは、十一月二十五日南阿のスマツツがロンドンでの演説でのべてゐる「英國は群小民主主義國をその傘下に叫合することによつてその他位を深化しよう」といふ言葉であらう。

米英のかやうな野望が、彼らのつぎの假想敵たるソ聯の主張と對立せざるを得ないことは當然である。さうして主としてヨーロッパ處理の問題がとり上げられて、ソ聯對英國の對立となり、米國は英國を支持する態度をとつた。この結果、米英側からの報道によれば、この問題についての折衝は、十六の自治國に外交自主權を與へたことが、米英にあれば大きな衝擊を與へた理由は、米英側のかやうな心構へによるのである。最近のヨーロッパにおける戦局、政局の動きは、かやうな心構へをもつた英國の神經を一層強く刺戟するもののみである。

東部戦線におけるソ聯の成功は、ソ波國境問題を惹起した。ポーランド亡命政權が舊國境の回復を主張するに對し、ソ聯は一九一九年のカーゾン線による國境を要求する。カーゾン線は一九三九年の獨ソ國境とほゞ同じものである。これによればポーランドの面積は戦前の約半分に縮小される。ポーランドをその配下におき將來ソ聯に對する防塞たらしめようとする英國はポーランドの弱體化を喜ばず、民族自決と領土不擴張主義の大西洋憲章の原則を楯にとり、ソ聯の主張に反對した。テヘラン會談におけるソ英對立の最大直接原因はこれであつたが、その後の情勢では、米國がまづ英國支持から手を引き、英國もつひに屈服した。本年二月二十日英國議會における戦況報告において、チャーチルはカーゾン線容認の意を表示した。

かうして英國公認のもとに、ソ聯の舊ポーランド領一部に對する勢力擴張が豫定されるにいたつた頃、同じ東歐の一國たるチェッコ亡命政權とソ聯との政治的提携が成立し、前者

が後者の勢力下にはいることが明示された。バルカンにおけるソ聯の勢力擴大も目覚ましいものがある。ユーゴスラヴィアにおけるゲリラ戦線は二つに分裂してゐるが、ソ聯の支持してゐる左翼派チトーの勢力が漸次増大されてをり、戦争がもしも樞軸側に不利に赴くやうなことがあれば、ユーゴスラヴィアの運命はソ聯の手に握られようともみられるにいたつた。ブルガリア、ルーマニアの將來についても同じことがいはれるし、最近の英國とトルコとの交渉決裂の事實は、トルコにおける英勢力の衰退、ソ聯勢力の急増を示してゐる。西亞特にイランにおいては、テヘランのソ聯大使館をもつとも安全としてそこに滞在したルーズヴェルトの行動によつても知られるとほり、ソ聯勢力の絶対優勢を示してゐる。北歐についてみても、スカンディナヴィア半島における動向は決して英國に有利なものとはいひ難いのである。かやうにみてみると、ヨーロッパ大陸において英國は全面的退却に當面しつゝあることがわかる。しかもその對立者たるものは本質において相容れることのできないソ聯なのである。かうして英國のソ聯に對する態度は、同盟國としての信頼から底の知れない恐怖と警戒へと變りつゝある。そして表面的には事毎にソ聯に讓歩しつゝも、その内心において、ソ聯抑制の希求に燃えてゐる。

これがテヘラン會議によつて招來された米英ソ——主として英ソ關係の開展である。それは三國連帯の強化ではなく、むしろ相反する利害關係の明白化、表面化であつた。この直接的な利害關係の衝突にもかゝらず、米英がなほソ聯に叩頭し、ソ聯の要求に屈服せざるを得ないのは、さもなければ、ソ聯の戦線離脱が必ずしも不可能ではないからである。

## 六 次に来るべきもの

さてつぎに起る問題は、カイロ、テヘラン兩會議の直接的結果として、戦線の上に、政治的動向の上に、どのやうな變化、開展が豫想されるかといふことであらう。敵の今後の大戦略、政略を豫言することはむろん不可能である。しかし勢を按じて大體の傾向を豫測することは、間違ふ場合が多いとしても、まきり意味のないことでもあるまい。

まづ太平洋戦線においてはつぎのことがいへるであらう。一、印緬國境戦線 日本側の先制的反撃によつて、この方面の米軍、重慶軍の策動は完封されるとともに、はやくも雨季に近づきつゝあつて、敵はなほ蠢動をつとけてゐるものゝ、本年度における大反攻は不可能となりつゝあ

る。

一、中部および西南太平洋 ニミッツの飛石作戦は相當の成績を示してゐるかにみえる。しかしそれは敵の補給路の長大化、日本側基地への近接化といふ重大な不利を伴つてゐる。それは日本軍得意の誘引作戦を豫想せしめるのである。現に日本軍ははやくも敵の占領島嶼に對して猛反抗を開始した。ブーゲンビル、アドミラルティ、ブラウンなどの諸島嶼における皇軍の反攻開始とその戦果が傳へられはじめた。それは一層廣大な面において、一層徹底的に行はれることが豫想される。

一、日本本土空襲 飛石作戦の多少の成功と米國における長距離爆撃機の生産増加とは日本本土空襲を必至ならしめてゐる。しかしニミッツ自身も認めてゐるやうに、機動艦隊や長距離機による空襲の規模および効果にはおのづから一定の限界があり、それによつて一億國民の鐵のごとき決意の前になにほどの効果をあげ得るかすこぶる疑問であらう。

一、政治的工作 蔣介石に對する物質的援助の繼續によつて、重慶の崩潰および戦線脱落を防止し、他方で、大東亞圏内の諸國に内部攪亂運動を繼續することであらう。特にビルマ、タイ、東印度などに對してはその魔手が執

カイロ、テヘラン會議と反極權の展開

拗に延ばされてくるに相違ない。もちろん米英の野心と東亞民族共通の理念に目覺めた共榮國各國の決意は毅然として微動だもするはずがないが、それにしても敵の政治工作の悪辣さは十分の警戒を要するであらう。

ヨーロッパ戦線においては

一、第二戦線の開始は早晚實行されざるを得ないであらう。しかしすでにのべたやうに、準備不足と敵が犠牲を極小にせんとする態度とは、その時期を相當遅らせることと考へられる。ことに米國がその主力を太平洋に向け、てゐる現在一層しかるを覺えるのである。もし早急に開始されるとすれば、それはさう大規模なものではあり得ないのではあるまいか。

一、政治戦線においては、ソ聯勢力の一層の擴大が豫想される。トルコの参戦はおそらく當分の間は實現されないであらう。従つてバルカンにおける作戦はソ聯の手へ委任されるであらう。

英國とソ聯との對立は、ソ聯勢力の一層の増大とともにますます深刻となり、それは戦争遂行に大なる障礙となり、戦争がいかに片づくにしても、英ソ間における大なる痼疾となるであらう。

米國の世界各方面に對する經濟的、政治的進出は一層

顯著となるであらうし、方面によつては領土的侵略が企圖されるであらう。それは米國建國以來の傳統的政策である。現在米國の甘言に乗つて、その自由になつてゐる諸國が氣がついたときには、完全に米國の毒手に掌握されてゐて、もう逃避の餘地もなくなつてゐるといふやうなことが起つてくる懸念が多分にある。アルゼンチン、ボリヴィアなどの反米態度はこの情勢に對する遠慮深謀に發足してゐるのである。

## 國內總蹶起の措置

### 國民總蹶起の態勢

田原 恒男

#### 一 議會運営の戦時體制化

戦争は畢竟意志と意志の戦ひである。最後の勝利はあくまでも最後の勝利を固く信じて闘志を繼續したものに歸すもの

國民總蹶起の態勢

である、と東條首相は第八十四議會再開劈頭における施政方針演説において喝破して、一億國民の必勝信念の堅持と米英撃滅への戦意の昂揚とを訴へた。首相の右の發言こそは單に耳になれた言葉として受けとるべきでなく、現下の時局の要請する核心を衝いたものである。



敵の反抗はいよ／＼熾烈執拗となり、大損害を反復受けてゐるにも拘らず、ひたすら物量を持って逐次基地を進め來つてをり、戦局はまさに深刻苛烈である。いまこそ一億國民の盡忠報國の精神力とすぐれた資質とを最高度に發揮し、こそつて何物をも焼き盡さずんばやまざる勢ひを以て總進軍すべきときである。強力に民意を暢達し、國民の底力を徹底的に動員し、眞に官民一體の總躍起が要請される。これまでやゝもすれば陥りやすかつた徒らに將來を豫想しての機構いぢりや、机上的な革新論を振り撒くときではない。のみならず事實、わが國の戦争政治はすでにかゝる段階をすぎ去つてゐる。戦争遂行に直接必要な機構的改革はおほむね斷行された。従つてできれば現在あるがまゝの機構を極限的に活用し、適材適所を得しめ、各人の持つ才能を十分に發揮せしめることに最も留意すべきときである。本年こそ一億國民各々の職域に恪遵しつゝ各自の地力を最高度に發揮せねばならぬ。本年の國民總躍起體制はこゝに立脚して推進されねばならない。

大東亞戦争勃發以來議會の召集されること七回におよんだが、今次の第八十四議會は明確に時局的要請を把握して運営された。その政治的意義は明瞭なものであつた。今次議會に對する準備においてまづ政府は右の見地に立つて特に慎重

な態度で進め、政府提出法律案件は三十二件に壓縮した。これを前二回の通常議會、第八十一議會の八十九件、第七十九回の八十四件に比較すればほぼ三分の一であつた。これは戦時下急速審議の必要上戦争遂行に直接必要の最小限に止めたこと、必要あればいつでも臨時議會召集を奏請する用意あることにもとづいてゐることは固よりであるが、將來の事態を慮つて豫め法律を用意して置くやうな從來の措置はこれまでの例に徴してもいたづらに摩擦を多くすることに留意しなればならない。第八十一議會における東京都制法案、市町村法案、農業團體法案の審議經過は、決戦下敵前議會としてみるとき遺憾な點が多かつたことは否定できない。また三十二件の提出法律案の内容は直接戦局の要請するものに限定され、論議の多い組織法關係のものは全く技術的改正にすぎず、政策關係法案においても八十二議會の企業整備、八十三議會の軍需省創設、航空増産問題に比すればはるかに内容の簡單なものであつた。しかしながら議場における論議は積極的に戦力増強に寄與すべく、政府も議會側も從來にない努力と工夫を拂つた。政府側についてみると再開勢頭の首相の施政方針演説にこれが現れ、必勝の信念の昂揚に基調をおき、できるだけ事實をもつて政府の施政一般の闡明にとつた。從來あまり例をみない一時間餘にわたつてのべ、今後ますます

長期戦の備へを固むべきことを強く要請しつゝ、航空機の生産は昨年二倍に達し、さらに現状の數倍への飛躍が期待されること、食糧事情に不安のないことを確言した。しかして議會審議に對する政府側の答辯態度は從來常套手段ともいふべきその場のがれといつた調子は完全に拂拭され、議員の質問に對して眞正面から所信を表明した。長い質問に對する短い答辯といふ型は逆になつて、政府の答辯には、議員に答へるばかりでなく國民に呼びかける氣魄をこめた。これに對し議會側また眞剣に積極的論議に集中し、今次議會の要請に應へることにつとめた。それは衆議院豫算總會に明確に現れた。

議員の質問は重複を避けて問題別に擔當を決め一人の質問時間を一時間に制限、この結果豫算審議期間の二十一日も三分の一の七日で終了した。かくして衆議院は二月五日をもつて全議案を議了してわづかに十六日、貴族院は二月七日議了して十八日がそれ／＼の審議期間であつた。

かやうに今次議會は從來例のない短期議會にをはり、提出法律案また可及的に壓縮されたが、政府と議會の間に交はされた論議は内面的に深く掘り下げられ、かつ多岐にわたつて行はれた。論議の大筋をたどつても、敵の謀略宣傳に對する戦争目的の再闡明、航空機ほか基礎資材の増産による戦力増強、食糧の確保、戦時國民生活の確保、決戦行政の刷新

強化、勞務動員の強化と國民運動の展開など現下喫緊の重要問題が活潑に論ぜられた。

## 二 運用の適正に論議集中

今次議會において論議された問題は多岐にわたつたが、それらを通じて共通の論旨は既定計畫の強力な遂行であり、運用の圓滑適正化であつた。いたづらに機構改革に走る論議はほとんどみられず、適材適所を得せしめ、人材の登用に遺憾なからしめることが論議の中心であつた。従つて決戦行政の強化と國民運動の展開、この二課題が論議の出発点でもあり結論でもあつた。この両者は内面的に深くつながりを持つものである。決戦行政の強化問題は行政への民間人の參與、國民の政治參與の問題であるといふべく、國民運動の展開は國民の戦意昂揚による戦力増強への突進であり、この目標達成のための國民政治力の結集である。この両問題こそは決戦下國民總躍起體制の核心であり、今後決戦體制の強化が進展するにつれ、ますます論議され、具體化されて行く問題である。

議會においては再開勢頭の國務大臣演説に對する前田房之助氏の代表質問によつて口火が切られた。すなはち行政運営の決戦化は戦時施策の根本的前提をなすものである。さきに

戦時官吏服務令の制定公布をみたが、決戦下の官界にはなほ國家の要請に副はざるものがある。割據主義はいまなほ依然として根絶してゐるとはいへない。甚しきは今日生産の隘路は官界の一部にありとの批判さへある。これら官吏の頭を戦時型に切換へることが焦眉の急務である。しかし行政監察使の實績に徴しても行政の刷新を圖つてその運営の圓滑と適正とを期するために中央地方に強力な行政監察機關を設け、特に第一線の監督に重點をおき、さらにこの機構には民間の事情に精通せる者を參與活用せしめることが急務である、といふのである。これをめぐる論議を結論して、勝田永吉氏は衆議院の最終豫算總會において總括的な質問を行つて政府の所信を問うた――

本委員會においては現下喫緊の要務である戦意昂揚、航空機増産を中心とする戦力の増強、食糧増産ならびに配給を中心とする國民生活の安定などに關して連日論議を重ねられ、必勝の年たる十九年度における國策遂行の根本は大體明瞭になつた。ところが段々つき進んでくると、これらの方策を支援なく遂行し敵米英の非望を撃滅するためには、結局のところこれら諸政策の運用の術にあたるところの人的構造をいかにすべきか、またいかなる組織方法によりこれらの人々をして全力を傾注して御奉公させるか、か

ういふ點にあると存する。このことは一見すこぶる安易なやうであるが、しかしその實並大抵のことではない。ひろく人材を天下に求め、適材を適所に配置し、これが指導鞭撻よろしきを得るといふことは實に戦時下における最も重要な課題である。戦勝の鍵は實にこゝにあるといつても過言ではない。

つぎに戦時行政の運営の完璧を期するため行政全般に對する監督の態勢を確立されたい。近來世上において官吏の一部の言動に對しとかくの風評があり、また甚しきは時局柄あるまじきことのあるとはまことに遺憾千萬である。國政運営の中樞に位し、その一言一動が國民の心理に重大なる影響をおよぼす指導的立場にある官吏として一般國民に率先垂範の覺悟をもつて、國政運営の上に、平生の生活の上に處していたゞきたい。首相はさきに民間の智能經驗を取入れられ、なほ過般重要産業部面に對しては行政監察制度を實施して、戦力増強上大なる貢獻をなしたが、いま一段この種の制度を強化、その範圍を行政全體の運営の上におよぼすならば、その成果はけだし大なるものがあることを確信してやまない。

これに對して東條首相は左のごとく率直に同感の意を表し、今後具體化し行くべきことを示唆した――

第一の人材登用については申すまでもなく適材適所主義にもとづいて戦争遂行の各面に人材を洩れなく最も有効に活躍せしめ、あはせてもつて一億國民の全智全能を發揮させ、いはゆる野に遺賢なからしめるといふことは戦争完遂のための不可缺の要件なりと信ずる。この點については政府としても從來とも思ひ切つた處置をとつて多かつつもりである。また戦局の推移に即應してさらにこれが強大強化を圖ることは喫緊の要務と認めてゐる次第である。しかしして現實の問題として人材登用につき各種の制約がいまなほ少からず存してゐることについては、政府としては必要と認めらるゝ場合にはこの上とも遅滞なく適切な措置を講じ、いやしきも有爲の人材の手腕發揮に萬遺憾なからんことを期して参りたい。

第二の行政監察の運用であるが、申すまでもなく政府としては各方面の建設的進言に對して行掛りにとらはれず、またあらゆる障礙を排除して、從來ともこの施策の具現の上にならざるに反映せしめんことに努めて参つたのであるが、この上ともこの方針を堅持する所存である。しかしして行政全般にわたる査察を行ひ、しかもひろく人材を活用すべしとの意見には同感である。今日まで査察は直接戦力増強の部面において行つたが、今後は國民生活および勤勞行

政などとはもとよりのこと、ひろく必要なる方面にわたつてこれを行ふごとく十分考慮して参りたい。

右の質疑應答によつてわかるやうに、戦時行政の刷新に對しては大東亞戦争以來果敢に斷行されてきた。軍需省、農商省の創設、企畫院の解消など機構改革は固より、中央地方を通過する行政事務の簡素強化化、あるひは地方協議會制度の設置など畫期的方策が實行され、また民間人材の登用については内閣顧問の任命、地方行政協議會會長には貴、衆兩院議員、民間有識者を起用し、行政監察使の特派はすでに六回におよんだ。今後の問題は、右のごとき從來の方針をさらに一段と強化し、官民一體を目標にして戦争政治の基礎をなす行政部面を強化するにある。

政府は二月十九日、藏相、農商相、逓通相を更迭、戦争經濟行政面の刷新の意圖を明かにしたが、つゞいて活潑な行政面の刷新がますます期待されるにいたつた。しかしその具體的方策として議會方面に行はれてゐる意見を要約すればつぎのごときものである。

一、まづ政務官制度の再検討。從來のごとく政務次官、参與官をおくか、あるひは新しくこれを實質的に網羅する参與官制度の採用である。たゞ参與官制を實施するには選舉法の改正を伴ふものと見られる。

一、内閣および各省委員制の問題。現委員制は政務運行に有効であるが、委員数があまりに多数のため、また機密保持のため省務の権限に直接參與出来ず（現状のまゝでは）政府、翼政のいづれの側にもあまり歓迎されてゐない。

一、内閣参事官陣容の擴大。参事官制度がおかれた當時は行政簡素化をまづ内閣自ら率先すべしとの趣旨から簡素な陣容となつてゐるが、舊企畫院の國政全般の綜合企畫調整部門を擔當するにはあまりに小陣容であり、これが擴大強化が考へられる。

一、地方官廳の民間人登用。中央官廳は企畫官廳であり、地方こそ戦力増強の實踐部隊である。地方行政協議會長に會長を補佐する參與制を設けるとか、現参事官、副参事官を増員するとか、なんらかの形で地方事情にあかるい議會人を登用することも一案である。

一、行政監察制度は六回實施され功績の著しきものがある。行政監察使は官制上國務大臣ないしは内閣顧問が勅命されるが、今後さらに國民生活、勞務行政など行政全般に巡察が實施されるとすれば、有能の士をひろく内閣顧問に起用するか、行政監察隨員に任命することが必要である。

一、内閣、各省にわたり平面的に議會人を用ひるよりも戦力増強上問題別にこれが解決を圖る場合、たとへば輸送本部

といふものが設けられたときそれに専門家を起用する。一、その他すでに内閣情報局に參與、諮議制があるごとく各省にも同趣旨の顧問、參與を設ける。

### 三 國民運動の強化を力説

國民運動の展開についても、前記の前田氏の代表質問によつて表明された。前田氏は「わが國の國民運動の現状をみるに、まだ改善の餘地が少くないやうである。國家存亡の岐路に立てる未曾有の重大時局に果して現在の國民運動そのものが即應し得るやいなや、甚だ疑問なきを得ない……従つて政府は國民運動の現状に鑑みて速に國民運動にさらに力を致して、官民一體となり、健全にして發刺たる國民運動を起し、國民をして心の底よりいやが上にも偉大なる精神力を振起せしむることは焦眉の急務と信ずる」とのべ、これに對する政府の所信をたゞせば、東條首相は

「全國民をして進んで奮起せしめることがなにより肝要である。その盛り上る精神力こそ前線の士氣をいよく奮起せしめ、銃後の生産能率を向上せしむるものである。つねに機會ある毎に申しのべてゐることく物よりは人である。機構の改革もさることながら、要は人の魂にあると信ず

る。國民が進んで自發的に難關が加はれば加はるほど身を鴻毛の輕きにおき、義勇奉公の誠をさしげることにはこれが國傳統の底力でありまた強味である。この基礎の上に立つて國民運動はさらに決戦下政府の施策に應じて、一段と活潑にして健全なる展開をはかるの要あることはまた論をまたぬところである。すなはち從來の行掛りに拘泥することなく、反省すべきは反省し、また缺點のあるものはこれを改むるに吝かであつてはならない。眞に官民一體、戦争に向つて邁進することを期して参りたい。」

と明瞭に國民運動の振起の必要を力説した。衆議院は二月五日全議案を議了したが、この日の午後本會議に必勝決議案を上げ、衆議院の總意としてこれを満場一致可決した。これが趣旨辯明に起つた清瀬一郎氏は、國民運動強化の必要をさらに力強く主張して決議案提出の趣旨とした。

すなはち國政運行は法令と豫算と行政と、この三つだけでは事を辨じない。そこには魂がなく動かす力がない。そこには國民全體の戦争遂行の熱烈なる意欲といふものが加はらなければ到底成功するものではない。しかしかゝる意欲は個人々々が心の中に持つて各別に行動するよりも、他の人と結合することによつて非常な力を持つ。眞に統一し

た國民運動が存在することによつてはじめて効果が發揮されるのである。かへりみれば昭和十五年國內新體制運動が擡頭、政黨は解消し、國民政治力を一元化せんとして翼賛會が生れ、爾來數年間國民總力の結果に苦心したが、今日の現状をみれば國民總力の結果は遺憾ながら理想的ではない。行動意欲に燃えてゐる多數の青年、壯年が所在に澤山あるが、その行動が十分に伸暢し得らるゝ態勢にはなつてゐない。これはどうしても速に改革して國民の總力を必勝の一點に結集して無礙絶大の威力を發揮するやうにしなればならない。さうして聖戰完遂の大原動力をつくる。これが今期議會においてこの議會を一機としてわれ／＼が考ふべき一つの具體的な大きな仕事である。

これが清瀬氏の論旨であつて國民運動強化の必要を單に力説したにとどまらず、この問題こそは本年の總選挙體制の具體的課題であると斷じた。東條首相またこれに對して發言を求めて登壇して、決議案の趣旨に賛成し一億國民あげて必勝の一點に結集してゆくことに政府としても努力してをり、これが實行のためには從來の行掛りにとらはれず、採るべきは採り、改むべきは改め、以て決戦下いよ／＼盛りあがる國民の忠誠心の發揚に萬全を期する旨を誓つた。かくして國民運動強化の問題は政府、議會側にいよ／＼とり上げられ、議會

が自然休會に入るとともにその解決に乗り出すこととなつた。

この問題については右のごとき議會表面の動きに並行して、議會裏では急進代議士の間でさらに活潑な動きが進められてゐた。殊に新人代議士によつて結成されてゐた清新俱樂部系統、翼壯に關係深い議員よりなる翼壯議員同盟系がもつとも熱心に活動してゐたが、漸次中堅代議士層をも動かすにいたり、二月三日には津崎尙武氏を座長として國民運動一元化有志代議士會を開催、五日も再會して本問題について「重大戦局に即應し強力な國民運動を展開するため翼政會、翼贊會を改組更新し、以て一元的中核組織を確立すべし」との申合せを決定した。この有志代議士會は議會休會に入つても翼政會本部に連日のごとく會合、協議を進め、同時に政府、翼政會幹部とも會見して活動を續けてゐる。しかして翼政會自體としては二月十五日の常任總務會において、國民運動の強化については翼政會總務會が責任をもつて解決に乗り出すことを決定した。この決定にもつき翌十六日總務會長前田米藏氏は翼政會衆議院部理事會に出席して右の常任總務會決定を傳へるとともに、その具體的解決策の研究について協力を求め、また有志代議士會に對しても具體案の提示方を求めるところがあつた。

しかしながら問題の具體的解決に乗り出すにつれて各人各様の立場が露呈し、解決の方向さへ混乱状態に陥つた觀がある。この問題推進のためもつとも足並みが揃つてゐたはずの有志代議士會さへ不統一を暴露した。有志代議士會が組織の一元化を中合せるや、有力な分子であつた翼壯議員派は早くも離脱し、その後活動を續けるにつれて有志代議士會内の主要分子はたえず移動をつゞけてゐる。かやうな始末であるので、さらに大きな翼政會全體についてみればほとんど纏りがつくまでにはいたつてゐない。

國民運動強化の問題はこれを具體的に解決せんとすれば、とりも直さず翼政會、翼贊會、翼壯の關係をどうするかに突き當る。この問題は昭和十五年近衛新體制によつて政黨解消し翼贊會結成されて以來の悩みで、さう簡単に解決され得ない重要課題である。今回の國民運動強化問題は議會側から提案された結果、翼政會が翼贊會側を吸収して國民組織を一元化する傾向に進むかに思はれた。しかしこの考へはまづ翼贊會から反撥され、翼政會内の翼壯議員から反撥された。さらにこれを冷靜に反省するとき翼政會の性格として翼贊會を吸収することには多大の疑問なきを得ない。翼政會は政事結社といふものゝ從來の政黨とは性格を異にし地方組織を持たず、中央における政治力結集體ともいふもので、さらに具體

的に率直に特徴からいへば議會運営體にすぎない。従つて全

國津々浦々にまで滲透する國民運動の展開は原則的にはやはり翼贊會を基盤とする。たゞこれが強力な展開には政治力の動員が不可欠である。この意味で翼政會の参加は是非必要である。そこで具體的解決の方向としては翼政會、翼贊會、翼壯とも組織は變更せず、いはゞ緊密に一體的活動を展開する方法の問題である、といふのが主流の考へ方である。過去において三者共同の國民運動が、たとへば一億救國實踐運動のごとき、展開された事例はある。かゝる方法による運動展開を恒常的なものにするに工夫されることとならう。

なほこれについて附言すれば國民運動そのものの性格について明瞭に理解しておかねばならない。國民運動とは一體なんぞや、文字通りこれを解釋すれば下から盛りあがる國民自發的運動と考へられるであらう。しかし決戦下の今日この際における國民運動はさやうなものではなく政府の決戦施策に即應し國民の戦意を昂揚し、至上命令たる戦力増強に邁進することである。換言すれば政府の施策の國民への滲透運動といふことである。この點から考へても國民運動強化問題が前述のごとき方向に沿うて解決されるほかはないやうに思はれる。

#### 四 國民運動發展の方向

しかし國民運動の強化が翼政會、翼贊會の組織自體には觸れず、兩者間の人事交流その他緊密な連繫を確立することによつて解決されるとしても、兩者の組織自體にも漸次再檢討が加へられ、改變されて行くことは免れないであらう。しかばこの問題はどうか發展するか、それについては今日までにおけるわが國の國民組織の發展を簡易に回顧して發展的に考へてみる必要があるであらう。

わが國において國民組織が問題となつたのは、昭和十二年第一次近衛内閣の當時であつて、高度國防國家の建設が要請されるとともに國民組織もしくは國民組織の再編成がとりあげられた。當時は國民組織問題を自して、單なる新黨運動と解するもの、國民の職能もしくは職域組織の確立運動とする觀方、他の一つは國民精神總動員體制強化であるとすると、この三つの見解があつた。この三つの見解が相錯綜し、共通的な考へ方は現状打開といふ根本觀念であつた。従つて現状打開、革新が國民組織問題の實體であつた觀があつた。

ついで昭和十五年、第二次近衛内閣によつて國民組織の全貌が明かにされた。同内閣は基本國策要綱において「庶政百

般にわたり速に根本的刷新を加へ、萬難を排して國防國家體制の完成に邁進することを以て刻下喫緊の要室とす」といひ、國民組織の問題が國家全般の革新を期することを明かにした。そして新體制準備委員會第一回會議において近衛首相は挨拶をのべ新國民組織は一億國民を一體として大政翼賛の臣道を完うせしむる組織であり、國民が日常生活を通じて國家に奉公する組織であると説明した。しかして(一)國民組織もしくは再組織といふことは國家の全般革新を伴ふこと、(二)革新の指導力として強力な政治力をもつた政治的中核體であり、従來の派閥的對立的政黨とは異つた意味の中核體を必要とすること、(三)かゝる政治的中核體によつて再組織され、同時に中核體の基盤となり、國民の政治的協力の實踐場となるものが國民組織であること、などの諸點を明かにし、政治的中核體として大政翼賛會を創設し、その基盤としての各種の國民組織ないし再組織が企畫された。

かくして従來から存した各種の國民組織、たとへば農林業團體、都市商工業者の同業組合、商業組合、工業組合、あるひは青少年團體、婦人團體、町内會等々に對して種々の轉換、再編成が加へられた。

しかし政治的中核體たる翼賛會の性格には必ずしも明確を期することが出来なかつた。政治性をもつとすれば政事結社

といふべきであるが、軍、官、民一體の組織である。これには憲法上の疑義もある。政府、議會との關係について明瞭を缺くこととなり、翼賛會は政治性をもつが治警法の政事結社ではなく、公事結社といふことに斷定され、引續き翼賛會に對し各種の制約が加へられるにいたつた。そこでこの缺點を補ふために政事結社としての翼賛政治會が生れた。この翼政會は政事結社であるゆゑに、公然と國民の政治的指導をなすことが可能であり、一應の解決が與へられたやうであつた。ところが翼賛會が變遷して政治性を稀薄化した一方には翼賛會内の中核組織として翼賛壯年團が結成された。そして昭和十七年の總選舉の際などには果敢に参加してすこぶる政治性を帯びた活動をなした。こゝにおいて翼壯を内包する翼賛會と翼政會との關係は再び混沌状態になつて今日にいたつてゐるといふことができる。

翼賛壯年團についても總選舉當時の行過ぎは漸次訂正され、殊に昨年十一月には相當の改組が行はれた。しかし依然として會員組織であり、中核的組織であることには變りがない。

これに對し翼政會は昭和十七年五月結成されて以來、議會運營の經驗を積み漸次同志的結束の方向に進んでゐることは否定出来ない。對政府關係においては代表の意向において關

係を透るとともに決戦施策の立案に行政の運営に着々と發言

權を持ちつゝある。對翼賛會關係では本部役員に多數の人々を送り、人事交流はまず／＼具體化してゐる。また地方に對

しては地方事情に精通する代議士の影響力を持つばかりではなく、翼賛會地方支部役員を地方會員として加入せしめ、すでに地方會員數は一千余名に達してゐる。

決戦下一億國民の總動員が要請されるとき、翼賛、翼政の關係を現状のままにおくことは許されまい。第一に國民の組織および再組織といふ難事業は政治的指導力をもつ政治團體の指導なしに實現し得るとは考へられない。第二には政府の政治力を強化するには強力な政治的推進體がなくてはならぬ。

かやうに考へてくるとき國民運動の強力化については翼政會、翼賛會、さらに翼壯の存在自體には隔れることなく解決されて行くであらう、しかしこれらの組織が單に並立的に存在することは妥當ではない。兩者の關係に對して改變を加へるか、あるひはその職域をさらに一段と明確化することが必要である。そしてこれと同時に翼政會自體の内部組織も檢討を加へられて行くこととならう。

### 五 決戦非常措置要綱

議會が自然休會に入るとともに、國民總動員體制の強化に對して政府、議會ならびに翼賛會の間で鋭意研究を進めてゐたが、政府はまづ二月二十五日の閣議で「決戦非常措置要綱」を決定、國民總動員に關する非常行政措置を斷行することに決定した。

また東條首相は戦局の重大化に對處して國內體制を強化刷新するため蔵相、農相、運通相を更迭、さらに國務と統帥の緊密化を斷行して、二月二十二日の閣議において所信を表明したが、右發言において時艱突破の要諦として

一、國家の有する物、國民の持つ力を剩すところなく米英擊摧の一點に打込み、もつて作戦において後顧の憂なからしめる。

二、いまやまさに帝國は隆替の岐路に立つてゐる。それゆゑにわれ／＼はこの決意を一刻の遲滞もなく實行に移すばかりである。

旨をのべ、決戦に對する國民の精進を要請した。右發言を根本趣旨として決戦非常措置要綱は成案されたもので、同要綱は方のごとくである。

一、學徒動員態勢の徹底、二、國民勤勞體制の刷新、三、防空體制の強化、四、簡素生活徹底の覺悟と食糧配給の改善整備、五、空地利用の徹底、六、製造禁止品目の擴大と規格統一の徹底、七、高級享樂の停止、八、重點輸送の強化、九、海運力の刷新強化、十、平時的または長期計畫的事務および事業の停止、十一、中央監督事務の地方委任、十二、裁判檢察の迅速化、十三、保有物資の積極的活用、十四、信賞必罰の徹底と査察の強化、十五、官廳休日を縮減し常時執務の態勢を確立す。

(附) 皇國隆替の岐路に際し舉國必勝の信念に徹底し、國民總動員體制を強化し、眞にその總力を竭して戦力増強、食糧増産にそれ／＼の職域に邁進するとともに、時局突破のため國民生活を徹底的に簡素化し、あらゆる忍耐を覺悟するの眞摯熱烈なる國民運動の展開を期待するものとす。

同要綱は急速に具體化し實施するため、官廳休日の縮減、高級享樂の停止をはじめ、若々實施要綱を決定しつゝある。各項目の實施要綱をみるに、いづれも徹底的にして、まさに最後の勝利に向つて突進する決戦體である。必勝を期さんとする戦争行政の切り札ともいはれてゐる。しかし要はその實行にある。この非常措置が迅速的確にどし／＼實行されるには政府ならびに諸官廳自體が率先實踐することが必要である。

が、國民が積極的に協力し實行することがなにより肝要である。従つて要綱においても特に末尾において眞摯熱烈なる國民運動の展開を期待する旨を明記してゐるゆゑである。

### 六 三位一體の總躍起へ

かくて國民運動強化方策が可及的急速に確立されることが必要となり、三月十日の閣議において國民總躍起運動の展開に關する件が確定され、翌十一日その要綱が左のごとく發表された。

決戦下戰意昂揚、生産増強、食糧確保および國土防衛の態勢確立の趣旨にもとづき、國民運動を強力かつ一元的ならしめるため、政府、大政翼賛會、翼賛政治會は中央に連絡本部を設け、各委員若干名を出し緊密なる連絡提携をはかる。地方にありては同様の趣旨にもとづき都道府縣ごとに地方廳、大政翼賛會、翼賛政治會などの關係者において適宜緊密なる連絡の方途を講ず。

右要綱にもとづき國民總躍起運動の強化方策は逐次具體化されてゐるが、今回の成案について要約して説明すれば、まづその根本趣旨は、從來のごとく國民運動といへば國民の下からの自發的な運動のみに限られるといふやうな狭い考へ方

を放棄する。官も民もなくすべてが一體となつて難局の突破にあたる。今日の國民運動はどうしても政府の決戦施策に即應して展開されねばならない。また割據主義的な考へに凝り固つて纏張り争ひをするやうなときでもない。あらゆる團體、組織は一九となつて征戰完遂に邁進すべきである。従つて二大國民組織たる翼賛會、翼政會の一元化問題には觸れず、兩者の並存は現状のままとし、兩者の緊密な提携、政府との協力を基調とする。政府、翼賛會、翼政會の三者一體となつて國民總躍起を推進する。このために三者の代表によつて國民總躍起運動連絡本部を設置する。

右連絡本部委員の構成は政府側五名、翼賛會、翼政會側各十四名、計三十三名とする。政府側委員は内相、内務次官、情報局總長、同次長、内閣書記官長でいづれも國民運動に關係深い閣僚、官吏である。翼賛會側委員は後藤副總裁、事務總長小畑忠良、總務局長小林光政、興亞總本部本部長宮田光雄の四氏と同會の代表的役員、それに地方支部代表の意味で大分縣地方支部事務局長柏原幸一氏。ついで翼賛會、翼政會双方の總務を兼ねてゐる石黒忠篤、太田新造、清瀬一郎、伍堂卓雄、八條隆正子、井田馨輔男、小林順一郎の七氏があげられ、翼政、翼賛會の一體的活動が期待される。残る二委員には下村宏、正力松太郎兩氏が任命

され、いづれも言論報道の中樞人物である。翼政會側委員は前田總務會長、大塚國務相、金光政務調査會々長の主流幹部三氏、中堅層を代表して政務調査會副會長前田房之助、衆議院部座長代理三好英之、情報宣傳部座長津雲國利、企畫部座長勝田水吉ならびに川島正次郎の五氏、國民運動強化に關する有志代議士會の代表として津崎尙武、橋本欣五郎の兩氏、貴族院代表として井上三郎侯、酒井忠正伯、龍正雄の三氏、それに事務局長橋本清之助氏が如はり翼政會の現機構における各面の代表的人物を網羅してゐる。

今回の強化方策の運營方法は政府の決戦施策を國民の一人一人に全國津々浦々にまで滲透せしめることを目的としてゐるので、運動の展開方法は生産増強、食糧確保、國土防衛など決戦下國民の重要な任務を具體的にとり上げて直接工場や農村において國民運動を展開する。従つて地方における活潑な運動展開が重要であるが、従來地方組織を有せざる翼政會としては、地方における運動に参加するための措置として地方協議會を設けることとなつた。この翼政會地方協議會は支部でもなく結社でもない。單に地方の運動に参加のための措置として設けられ、翼政會所屬の貴、衆兩院議員、地方會員によつて構成され、必要に應じ随時開會協議する協議體であ

る。かくして地方において各都道府縣ごとに地方廳、翼賛會支部、右の翼賛會地方協議會の三者の間で國民總躍起運動に關する連絡會議を設置する。地方の運動は中央の連絡本部の指導下にあることはいふまでもないが、その具體的な推進方法は各地方の特性に應じて決定され、活潑に運動を展開する方針である。

## 本年の財政と國民生活

松井 透

### 一 五百九億圓の決戦財政

#### 1 十九年度豫算の規模

第八十四通常議會において成立をみた昭和十九年度豫算は本豫算追加豫算をあはせて一般會計二百一億七千三百餘萬圓、臨時軍事費豫算追加三百八十億圓、この總計五百八十一億七千三百餘萬圓となるが、一般會計から臨軍特別會計への繰入れ七十二億五百六十餘萬圓の重複を控除すれば、一般臨軍兩會計の豫算純計は五百九億六千七百四十餘萬圓である。また帝國鐵道、通信事業、外地など主要特別會計も各著増を示してゐるが、しかし大體において右五百九億圓をもつて必勝の基礎を確立すべき昭和十九年度のわが戦争財政の實體を示すものといへよう。すなはちこれを十八年度の純計額三百

本年の財政と國民生活

七十億九千餘萬圓に比較すれば百三十八億七千餘萬圓の増加となり三割七分六厘強の膨脹を示してゐる。支那事變發生前の平時豫算たる昭和十一年度豫算二十三億二千餘萬圓に比較すれば實に二十數倍の巨額に上るわが財政史上未曾有の超然大豫算である。いまや猛り狂ふ敵の總反攻はいよ／＼熾烈の度を加へ、戦局はまさに彼我最終の決戦に近づきつゝあるが、五百九億豫算こそは米英撃滅、大東亞建設のため苛烈深刻なこの一年を戦ひ抜き勝利の礎石を築くべき一億國民の決意を盛るものであり、またわが國運の隆替を賭する文字通りの決戦財政といふべきである。

#### 2 一般會計も準軍事費

まづ一般會計についてみれば、その編成にあたり政府は昨年七月「昭和十九年度豫算編成方針」ならびに「重要事項豫算統制大綱」を閣議において決定、前年度豫算の徹底的改編

の企圖の下に、從來よりの施設にかゝる既定經費については軍國當面の急務にかへりみ厳正なる検討をとげるとともに、純新規經費については閣議における先議畫定の方法により施策の重點を確定し、戦力の急速増嵩または國民生活確保のため眞に緊急やむを得ざるものにして、しかも現實に具體的な實行可能のものにかぎり豫算に計上することとし、國民生活を確保しつつ、物資勞力資金など國家經濟の總力をあげて戦力増強に集中すべき戦時財政經濟の要請にこたへ豫算の非戦時性を徹底的に拂拭した。かく豫算計上に嚴密を期するとともに、豫算外の支出の必要に備へて特に國庫豫備金を増額し戦時緊要な施策の實施に遺憾なきやう豫算の弾力性機動力の強化をはかつた。

十九年度一般會計豫算は歳入歳出ともに本豫算百五十四億一千五百九十六萬九千圓、直接間接兩稅の十九年度増稅による増收額の臨軍繰入れを中心とする追加豫算第一號四十四億九千二百二十九萬七千圓、臨軍豫算追加にもなふ公債利子および發行諸費を計上せる追加豫算第二號二億六千五百八十八萬八千圓にして、右合計總額が二百一億七千三百七十六萬六千圓である。これを今議會成立の追加豫算を含む昭和十八年度一般會計豫算に比較すれば、歳出において五十七萬一千三百十六萬八千圓、歳入において五十七萬九千九百八十六萬圓の各増

加となつてゐる。右歳出の中陸海軍兩省の經費百八十三萬圓を除く文治各省の經費二百一億七千二百二十四萬六千圓についてこれを特殊經費および一般經費にわければ、特殊經費百四十五億四千七百五十二萬六千圓、一般經費五十六億二千三百七十一萬九千圓にして、これを前年度豫算に比較すれば特殊經費が四十八億三千四百三十九萬一千圓の増となつてゐるに對し、一般經費の増加は八億七千八百七十七萬六千圓に留まつてゐる。すなはち臨軍特別會計へ繰入れ七十二億五百余萬圓（前年度比較二十八億三千六百余萬圓増）、國債費三十三億四千六百余萬圓（九億九千余萬圓増）、地方分與稅分與金特別會計へ繰入れ九億九千余萬圓（三億二千九百余萬圓増）、國庫豫備金二十一億圓（五億二千萬圓増）、年金および恩給五億六千八百余萬圓（八千九百余萬圓増）、その他地域特別會計への經費補充金、警察費連帶支弁金、國民學校教員俸給分擔金、軍事扶助費、稅務交付金などの特殊經費が十九年度歳出膨脹の主軸をなしてゐるのである。しかして五十六億圓の一般行政經費の中新規重要經費は、外交外政強化費六千八百余萬圓、生産増強および低物價維持費十四億七千九百余萬圓、海陸空輸送力増強費三億六千余萬圓、食糧生産對策費十一億一千三百余萬圓、國

巨醫務および國民保健費六千九百余萬圓、國民生活および人口對策費一億六千五百余萬圓、軍人援護費一億六千九百余萬圓、文教刷新費四千九百萬圓、科學および技術振興費七千余萬圓、防空費一億九千三百余萬圓、企業整備費二億七千余萬圓、災害對策費七千九百余萬圓、合計四十億九千余萬圓にして一般經費の七割強を占めてゐる。

しかしてこれら新規經費は豫め閣議の先議において施策の重點を畫定したところにもとづいて物資勞務など動員諸計畫との緊密な調整をはかり優先的に豫算化が行はれたもので、それが現下の戦局に即應し最も機宜適實なる戦時緊急政策である意味においていまや一般會計の歳出といへども直接戰費たる臨時軍事費に準じ總力戦における録後の戰費として、いはゞ準軍事費といふべき性格を保有するにいたつてゐる。

右歳出に對する歳入の内譯は普通歳入百三十九億四千六百六十六萬八千圓、公債金六十億八千九百八十六萬一千圓、前年度剩餘金受入一億四千五百五十四萬六千圓、合計二百一億七千三百七十六萬六千圓にして、普通歳入中租稅收入は經常部八十六億八千九百九十七萬八千圓、臨時部二十億七千二百六十八萬八千圓、合計百七億六千二百六十六萬六千圓、ほかに地方財源たる還付稅收入二億三千三百四十萬三千圓、印紙收入二億一千八百七十七萬一千圓が見込まれてゐ

る。昭和十九年度における百十億圓に達する租稅收入は前年度豫算に比較して三十一億七千二百余萬圓の増加となつてをり、これは自然増收、十八年度の間接稅増徴の平年化および十九年度の直接間接兩稅におよぶ大増稅にもとづくものである。公債金六十億八千九百八十六萬一千圓の内譯は震災善後公債六十六萬余圓、道路公債二千四百九十三萬余圓、歳入補増公債六十億六千四百二十五萬余圓にして、右のほかに朝鮮、台灣、政府出資、帝國鐵道、通信事業各特別會計の十六億二千三百七十七萬二千圓を加へ、臨時軍事費特別會計を除く十九年度の歳出財源たる公債發行豫定額は七十七億一千三百六十三萬三千圓となつてゐる。

3 臨軍への他會計繰入れの増加  
健全性の指標

臨時軍事費豫算の昭和十九年度の追加額は前年に比しさらに百十億圓の巨額を加へ三百八十億圓となつたが、これは昭和十二年臨軍特別會計設置以後第八十一議會までに成立した臨軍累計現額七百四十一億二千八百五十六萬七千圓（昭和十六年十一月の大東亞戰勃發に備へた豫備費外豫算超過支出すなはち第二豫備金支出七千四百余萬圓、國庫剩餘金支出一億



千八百余萬圓を含む)に對しまさに五割一分強に相當し、今年こそ勝利への年と期する十九年度豫算の決戰的性格を端的に看取することができる。

三百八十億圓の内譯は本費三百十億圓、豫備費七十億圓となつてをり、これが財源は公債金二百八億九百七十五萬二千圓、借入金七十億圓、他會計よりの繰入れ八十五億二千二百二十二萬三千圓、雜収入十六億七千二百三十三圓、合計三百八十億圓である。従つて一般會計、特別會計、臨軍特別會計を通ずる公債發行豫定總額は二百八十五億二千三百三十八萬六千圓にして、十八年度に比し六十六億四千三百余萬圓の増加を示してゐる。

臨軍財源としての他會計よりの繰入れ八十五億二千二百二十二萬三千圓の内譯は一般會計より七十二億五百六十四萬一千圓(前年度比較二十九億六千六百余萬圓増)、朝鮮、台灣、樺太、關東局、通信事業、帝國鐵道の各特別會計より十一億八千四百五十萬二千圓(六億四百余萬圓増)、合計八十三億九千四百四十四圓(三十五億七千余萬圓増)の十九年度豫算計上額のほかに、舊曆二十七日より實施された煙草値上げによる十八年度内の專賣益金の増加額一億三千七萬九千圓が十八年度追加豫算をもつて臨軍に繰入れられてゐる。

年々急調をもつて膨脹する戰時財政需要を充足する上においてもちろん政府は公債政策に依存するほかないが、國家の支出増加を原因として激増する國民所得についてはその消費的流通を可及的に抑止し、國民消費生活を最低限度にまで切詰め、國民經濟の許容する範圍において殘餘の資金をあげて國家資金として吸收するために、貯蓄増強ないし公債の消化とともに租税の増徴をはかることが戰時財政の基礎を強固ならしめる絶對の要請であり、戰費調達手段として主要交戰各國の動向も戰時租税政策に相當の重點をおいてゐる。わが國においても支那事變勃發直後の昭和十二年八月北支事件特別税法による第一次増税を斷行して以來、戰費の増大に對處するための相つぐ増税は今回の十九年度の大増税をもつて八回の多きにおよんでゐる。また増税とともに交通、通信料金、專賣品たる煙草の値上げなども實施せられ、これらの増收額がすべて直接戰費たる臨時軍事費特別會計の財源として繰入れられてゐるのであつて、臨軍への他會計からの繰入れの増加はいはゞわが戰時財政の健全性の指標ともいひ得るのである。

一般會計より臨軍への十九年度の繰入れ増加額二十九億六千六百余萬圓は、直接間接兩税の大増税による初年度たる十九年度の増收額二十二億一千百三十二萬九千圓(還付

稅收入を除く)、煙草値上げによる増收見込額五億二千八百三十二萬一千圓および森林收入増加二億一千二百六十九萬三千圓がその主なるものである。各特別會計よりの繰入れ増加六億四百余萬圓は、帝國鐵道、通信事業兩特別會計における運賃通信料金の改正、通信事業特別會計より一般會計への納付金八千二百萬圓の撤廢、内地に對應する外地會計の増收、專賣煙草の値上げなどによるものである。しからば十九年度の一般會計、臨軍特別會計の歳出純計五百九億圓のうち、公債收入と租稅收入がいかなる比率を示してゐるかをみれば、印紙收入、專賣局益金、燃料局益金、相續稅物納收入、日銀納付金などを含み還付稅收入を含まざる租稅的收入は百三十八億一千六百萬圓にして二割七分となり、一般會計および臨軍特別會計の公債額合計二百六十八億九千九百萬圓は五割二分を占めてゐる。しかして昭和十一年以降毎年度の歳入中の公債と租稅の割合はつぎの通りである。

昭和十一年度以降歳入中公債と租稅との百分比

年度	歳入純計	租稅收入	公債	其他の諸收入
二	二,三三三,百萬圓	天%	三六%	二六%
三	五,四四四,百萬圓	天%	三六%	二六%

備考一、歳入純計は一般會計歳入と臨時軍事費特別會計との合計額より臨時軍事費特別會計へ繰入れたる額を控除したる額による。	元	百	千	萬	圓	占	率
一、租稅收入には印紙收入、專賣局益金、燃料局益金、相續稅物納財產收入、日本銀行納付金、驛馬會納付金(昭和十九年度はなし)および特別會計より臨時軍事費特別會計に繰入れたる額を含み還付稅收入を含まず。	八,一三三	一	三	七	七	占	二六%
二、借入金はその他の諸收入に含めた。	九,〇〇〇	一	〇	〇	〇	占	二六%
三、昭和十七年度までは決算額(たゞし臨時軍事費特別會計は豫算額)昭和十八年度以降は豫算額による。	二,三三三	一	三	三	三	占	二六%
四、昭和十八年度以降は豫算額による。	五,四四四	一	四	四	四	占	二六%

右によれば急激膨脹の一途をたどる戰費需要に對し、これによく追隨して租稅收入の増加をはかることがなか／＼困難であり、歳入總額に對する租稅割合がやゝもすれば低下せんとする傾向がうかがはれるが、同時に支那事變以來政府があるひは直接稅、あるひは間接稅を中心とする相つぐ増税を斷

行し、また新税を創設するなどなみ／＼ならぬ努力を拂つて來た苦心の跡をも看取し得るのであつて、歳入總額に對する公債金割合はこゝ兩三年漸減をすら示してをり、公債偏重の危険は全くない。しかして公債偏重を抑止するものとして政府の増税策とともに看過すべからざることは、公債收入租稅的収入以外の借入金その他諸収入の増大せる事實である。借入金その他諸収入の歳入中の比率は前年の一割八分から、十九年度は二割に増大し、十九年度の臨軍追加豫算には既述のごとく借入金七十億圓、雜收入十六億七千余萬圓の巨額の歳入計上がなされてゐる。

#### 4 共榮團共通財政の躍進

臨軍財源として七十億圓の計上をみた借入金制度は、昭和十八年度の臨軍追加豫算においてはじめて實現をみたもので、大東亞共榮團における共通財政の觀念にもとづき、共榮團内各域がその能力に應じ大東亞戰の戦費を分擔するといふ日本財政史上第一期を畫したものであるが、十九年度の借入額七十億圓は十八年度の三十三億圓に比較し、三十七億圓の増加にして一躍倍以上となつてゐる。右は現地において南發金庫券などの發行によつて調達されるのであるが、現地の物資、勞務の調辨可能力を適實に算定したものであることは議

會において賀屋藏相も言明してをり、これは共榮團の各域の資源の開發、生産の發展増加に應じ南方現地住民の戦費負擔力の飛躍的増進を如實に示すものであり、大東亞諸民族が大東亞戰の理念に徹し東亞の自存自衛のため協力提攜する力強い顯現である。同じく臨軍に計上された雜收入十六億七千萬圓は南獲品その他軍需品の拂下げによるもので、これと借入金合計八十六億七千萬圓は直接わが國民負擔からは除外されるわけであり、そのわが戦時財政への寄與は輕視し得ない。

#### 5 臨軍、一般會計の一體化

以上十九年の豫算を概観してわれ／＼の特に注意をひく點は、一般會計豫算が非戰時性を完全拂拭し準軍事費的性格を加へることによつて臨軍との間の實質的な區別をなくするにいたつてをり、また臨時軍事費特別會計については一般會計など他會計よりの繰入れおよび共榮團負擔の増加により公債財源に對する依存度において一般會計などとの平準化が行はれてゐる事實である。すなはちその形式は別として實質的には一般會計臨軍特別會計の一體化が進められてゐるのであつて、臨時軍事費のいはゞ臨時性が稀釋化されつゝあるのである。今年こそは勝利の年と期する決戦即應の態勢とともに、

あくまで敵を撃推し撃ちてしまひまむ長期戰に對處する財政上の均衡についても細心の配意がなされてゐることを看過してはならぬ。

## 二 戦費充足に大増税

### 1 十九年度増税の畫期性

五百九億圓の老大財政需要を充足するため十九年度において三十二億一千二百二十九萬九千圓に上る直接間接兩税の大増徴が行はれることは既述の通りであるが、地方財源たる還附税増收をもあはせると、今回の増税によつて初年度二十二萬七千二百余萬圓、平年度二十五億七千六百余萬圓の増收が見込まれてゐる。今回の増徴がいかに畫期的大規模のものであるかは最近二回にわたつて行はれた増税と對比すれば明瞭である。すなはち十八年度の間接税など増税の増收見込額は平年度において十一億四千六百余萬圓、昭和十七年四月より實施された直接税を中心とする増税の増收見込額は、平年度において十一億五千六百余萬圓にして、これらの増徴がすでにかつてみざる巨額のものであつて、それ以前についてみれば昭和十二年の臨時増税増徴法が三億五千萬圓、同年七月北支

事件の勃發とともにこれが經費に充當のため臨時議會を召集して創設した北支事件特別税が約一億圓、翌十三年北支事件特別税を吸收した支那事變特別税法が約三億圓(約一億圓の北支事件特別税吸收のため純増徴二億圓)十四年の右特別税法の改正が約二億圓、十五年には中央地方を通ずる税制の根本的改革がなされ現行制度を確立したのであるが、その増收額七億五千萬圓(地方分與税制度を採用したため國庫の純増收はその内四億四千余萬圓)、十六年の酒税など間接税の増徴が約六億圓であつて、いづれも十億圓に満たざるものであつた。それが大東亞戰の勃發による戦費の飛躍的増大により十七、十八兩年度の各十一億數千萬圓に達する増税が行はれ、さらに十九年度には一舉に約二十五億圓と文字通り前代未聞の大増税が實現するにいたつたわけ、二十五億圓といへば支那事變以來七回におよぶ既往の増徴額の合計約四十二億圓の過半を占めてをり、今回の増税規模がいかに大なるものであるかを示すと同時に國庫收入の充實に對する政府の強固な決意を現してゐる。

### 2 税率引上げに重點を指向

かくのごとく今回の増税は財政強化に重點を指向してをり、その方法としては、各税種についてそれ／＼大幅に税率

を引上げる方針をとりいはゆる新税は實現をみなかつた。すなはち租税體系の變更には手を觸れず専ら税率の引上げによる増収に重點をおいた結果、民間一部に論議されてゐる財産税もしくは一般賣上税、および戦時意識の昂揚をはかり國民各階層に戦費負擔の機会を均等ならしめる意味において經濟聯盟などから設置を主張された人頭税的な愛國税ないし國民税もかへりみられなかつた。しかし増税の中心は直接税における分類所得税の大體百分の五の税率引上げであつて、たとへば甲種勤勞所得百分の十に對し五割の増徴にあたり、綜合所得税についても分類所得税との均衡を保持するため税額において約二割の増徴が行はれ、分類綜合兩所得税の平年度増収見込額十一億四百萬圓は總増収額二十五億七千萬圓に對し四割四分三厘強を占めてゐる。直接税では法人税、特別法人税、臨時利得税、相続税、配當利子特別税の全面的税率引上げが行はれ、さらに通行税、登録税のほか地方財源の還附税たる地租、家屋税、營業税についても増徴がなされてゐる。間接税についても酒税をはじめ清涼飲料税、砂糖消費税、織物消費税、物品税、遊興飲食税、特別行爲税、入場税、廣告税、印紙税、骨牌税の十一税種にわたつて増徴が行はれてゐる。

3 新興所得階層をも捕捉

直接税の關係において注目すべきは、第一に分類所得税の源泉徴收制度を擴充し、從來乙種の事業所得として賦課課税の對象となつてゐた日傭勞務者の報酬賃金および原稿料講演料などを新に丙種の事業所得として捕捉し、報酬賃金などの支拂者をしてその支拂ひと同時に徴税せしめることとなつた點である。増税で課税が高率になるとともに擔税の公平を期する上から課税の課税のないやう、賦課徴收制度の適實が要求されるのは當然で、いはゆる時局の波に乗つて急激に所得の増加してゐる階層、すなはち大工、左官、石工、土工、沖仲仕、荷扱運搬夫等々日傭ないし自由勞務者についてはその實態を把握することが困難なために税務署の認定賦課から放置されてゐてよいわけはない。今回勞務報國會乙種會員登録の約百五十萬人を主たる對象として丙種事業所得の源泉徴収が創始されることとなつたのである。しかし基礎控除、扶養控除、生命保険料控除などについては雇傭主親方らにおいて勞務者の生活の實態を把握することが困難であるため、日給に對する一日いくらの總括的概算的な控除方法の方が便宜が多い。この一日の概算控除額は三圓と定められ、勞報乙種會員數百五十萬人のうち百十九萬人程度が税率百分の十五の丙

種事業所得の源泉徴収を受ける者と見込まれるにいたつた。すなはちこの百十九萬人の新増税者については所得の増加による浮動購買力の非戰時的横行をかなり封殺することが期待できるわけで、購買力吸収に效率的な作用をおよぼすものとして丙種事業所得創設の意義は十分評價されてよいが、自由勞務者自由職業者たる新興所得階層の捕捉はこれをもつて足るものではない。しかも戦時下特に納税を通ずる應能奉公の均衡、過剰購買力の完全吸収が絶対に要請される以上今後この點について一段と徴税制度擴充の新構想が練られねばならない。

4 勤勞所得擔税者新に二百萬人

つぎに一般サラリーマン層の甲種勤勞所得について百分の十の分類所得税率が百分の十五に引上げられたが、基礎控除、扶養控除、生命保険控除の金額が据置かれたため源泉徴

收の勤勞所得納税義務者として新に二百萬人の擔税者が登場することとなつた。假りに年收千五百圓扶養家族妻および子供三人の勤勞所得者を例にとれば、六百圓を基礎控除し舊税率で年税額九十圓にして扶養家族控除年九十六圓を差引き納税義務を負はないが、改正税率では税額百三十五圓となり新に扶養控除の差額三十九圓の納税義務を生ずるわけである。かくて甲種勤勞所得の新納税者二百萬人を加へ勤勞所得の源泉徴収を受けるものは一十萬人に達する見込である。従つて今回の増税による大衆的購買力の吸収が消費抑制とともに資金の決戦配置に資し得る面は相當のものと期待し得る。税率改正の前後における税負擔額を對照すれば次表の通りであつて、百分の五の税率引上げによつて税負擔額が從來の一躍六倍にも達するものがあり今回の増税の畫期性をよく示してゐる。

改正前後における甲種勤勞所得の所得税負擔額

區分 所得金額	右 改正前							左 改正後						
	獨身者	妻のみ	妻一人	妻二人	妻三人	妻四人	妻五人	妻六人	妻七人	及	及	及	及	及
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓

本年の財政と國民生活

100,000	六,七〇〇	六,九〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇
10,000	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇
1,000	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇
100	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
10	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二

5 少額預貯金の非課税撤廃

少額預貯金の配当利子非課税の制度が廢止されることとなつたのも注目すべき改正の一つである。今回の増税によつて元本五千圓を超える普通銀行預金の利子、合同運用信託の利益に對しては百分の二十、元本五千圓を超える貯蓄銀行の据置貯金および普通貯金、産業組合などの貯金利子に對しては百分の十五課税されることになるが、現在非課税の元本五千圓以下の貯蓄銀行の据置貯金、普通貯金および産業組合などの各種貯金をそのまゝにしては税引利廻りの關係から預金の移動を生ずるおそれがあるので、今回これらの非課税貯金利子に對しても百分の五の新課税をなすこととなつた。同様の意味において五千圓までの非課税郵便貯金利子について一厘二毛の引下げがなされ貯金利子は二分六厘四毛となつた。元本五千圓以下の普通銀行預金については元本五千圓を超え

本年の財政と國民生活

るものとなら區別なく現行税率は百分の十五の配当利子課税となつてゐるが、普通銀行も貯蓄業務兼營など大衆資金の吸收をも行ふにいたつた事情を考慮し、元本五千圓以下の比較的少額の普通銀行預金は課税を軽減されることとなり、貯蓄銀行の据置貯金、普通貯金および産組貯金と同率の百分の五となつた。すなはち少額預貯金にも課税する反面少額貯蓄の増強に配慮がなされてゐる。また長期貯蓄奨励の建前から三年以上の長期預貯金には百分の五の課税軽減が行はれる。(この長期預貯金の優遇は元本五千圓以下のものに適用されない。)なほ國民貯蓄組合幹旋の預貯金については依然非課税が据置かれ非課税限度も現行七千圓が一万圓に引上げられ一層の貯蓄推進策が増税措置に織込まれてゐる。

間接税は禁止税色を濃化

間接税について税率の引上げが行はれるとともに一部課税

範圍の擴張をみたが、しかしながら間接税が大體において國民各階層の平等負擔となる特質にかんがみ、國民生活に切實な關係を有する必需物資にはあるひは税率を据置き、あるひは増税率の緩和をはかるなど擔稅力に應ずる負擔公平に留意してゐる。しかし奢侈的不急消費に對する各高率課税は各人の所得をその消費の機會に捕捉して國庫增收を期する一面、いまや禁止課税の性質を濃化するにいたつてゐる。なほ一旦捕捉された税對象についてこれが遁脱を防止し徴收の適實を期するために、脱税犯などで再犯その他惡質のものは五年以下の懲役に處し得ることとして、新に體刑を採用し、脱税額の五倍相當額の罰金も十倍までに引上げられた。また遊興飲食税などにおいて消費者が業者から轉嫁されて支拂ふ税金についての不安を除くため、業者が料金を領收したときに必ず税金相當額の納税證紙を領收書に貼用することとし、納税證紙は稅務署が業者に交付し、業者が税の中告納入をなす際同時に納税證紙の受拂ひをも明確ならしめ徴收の適實を圖る新施策が實施される(一人一回五圓未満の大衆的食堂の料金については税率を五階級の定額制に改め、税額を表示した納税切符が領收書代用として消費者に交付せられる)。また從來小賣の段階において課税された物品税の品目中の一部は製造者課税に組替へられた。これも徴稅確保の一策にはかな

らない。

稅收中における直接税、間接税の比率はつぎのごとくであつて、昭和十三年より注目すべき轉換を示してゐる。すなはち昭和十二年度においては間接稅收入の方が直接稅收入より優位を示してゐたが、昭和十三年以來全く逆となり、爾來毎年この傾向を持續し、十九年度は直接稅五八パーセント、間接稅三八パーセント、その他四パーセントとなつてゐる。膨脹する國家財政の施行が國民所得を増大せしめる一方、經濟諸施策が消費統制に集中し數次の間接稅増徴がよく國民消費の抑制に作用してゐる事實を顯示してゐる。

昭和十二年度以降各年度收入額(單位百萬圓)

年度	直接税	間接税	その他	合計
十二年度	八七	八〇	二六	一九三
十三年度	一三六	七三	四三	二五二
十四年度	一六七	一三三	二六	三二六
十五年度	二六〇	一六八	三三	四六一
十六年度	三三三	一五七	三三	五二三
十七年度	四七六	一三〇	三三	六三九
十八年度	五二〇	一〇〇	三三	六五三
十九年度	七三三	一〇八	三三	八七四
(註) 十七年度までは決算、十八年度以降は豫算				

- 一、稅收入額は租税のほか還附稅收入、印紙收入、專賣益金および燃料局益金を含み、北支事件特別税を含みます。
- 二、直接税、間接税およびその他の區分左の如し。
  - (イ) 直接税 所得税、法人税(法人資本税)、臨時利得税、特別法人税、配當利子特別税(利益配當税、公債および社債利子税)、外貨債特別税、相続税、贈與税(贈産税)、地租、家屋税、營業税(營業收益税)、取引所特別税(取引所營業税)
  - (ロ) 間接税 酒税、清涼飲料料税、砂糖消費税、雜物消費税、揮發油税、物品税、遊興飲食税、特別行爲税、關稅、專賣局益金、燃料局益金
  - (ハ) その他 德舉税、取引税、有價證券移轉税、通行税、入場税、電氣瓦斯税、廣告税、馬券税、噸税、印紙收入

### 今後の趨勢は大衆課税

今回の増税が現行の租稅體系のもとに税率の大幅引上げを行つたことは既述の通りであるが、今後の租稅政策の見通しとしてさら税率引上げの餘地を残してゐるだらうか。今回の増税によつて税率の最高は、分類綜合兩所得税をあはせ不動産所得の五十萬圓を超過するものは分類の二十一、綜合の七十四の合計すなはち百分の九十五の高率に達してゐる。税率そのものが引上げ餘地をあまり残してゐない。しかも十七年

度の調査によれば所得年額六百八十二萬圓を最高峰として四十萬圓以上の高所得者數はわづかに百八十六人にすぎない。今後の租稅政策が大衆課税に向はざるを得ざる趨勢はあつたから明かであらう。一般大衆が負擔し税率が低くとも集積すれば巨額となるもの、しかし抑制を強化すべき國民消費を基礎とする間接税によらず、尨大豫算のうちに約束されてゐる資金の撤布によつて増大すべき國民所得に直接志向しなければならぬ。

### 三 國民生活水準の確保

#### 1 國民所得六百億圓

衆議院豫算總會において藏相は十九年度の國家資金計畫の概要を明かにし、國民所得を約六百億圓と説明した。十八年度と比較して百億圓の増加である。しかし藏相の説明によれば百億圓の所得増加は、航空戦力の増強その他物的戦力増強のため、國民勤勞の決戰的増加による生産力の増加を基礎として見積つたものである。しかし戦力増強のためにはその實現に要する資本財、勞働力の供給の可能性と緊密に照合しなければならぬ。資金と財貨生産量との不均衡を來たさん

か、たちまち悪性インフレーションとして國民經濟を破綻に陥れる。また戦力増強のために生産される軍需財の大半は非生産的に消費されるもので、従つてそこにはつねに資金と物資との間の不均衡を惹起すべき原因が内包されてゐるといふなければならぬ。かゝるインフレーションを抑制し低物價政策を堅持するために、戦時經濟統制の重要方策として生産力擴充による財貨供給の増大、切符制割當制による財貨の配給統制が行はれ、貨幣部面からは非生産的な軍需財生産からの所得部分が過剩購買力として吸収されなければならない。公債消化を目標とする貯蓄運動、増税がその方策である。しかして國民所得のうち消費資金は可能な消費財生産に對應するものでなければならない。

## 2 消費資金更に十五億圓壓縮——消費の戰時的組織化

十九年度六百億圓の國民所得の配分計畫は財政資金約四百二十五億圓、生産擴充資金約六十億圓、國民消費資金約百十五億圓となつてゐる。四百二十五億圓は五百九億圓の豫算から國民の直接負擔とならない借入金などを除いた額であり、このうち約百四十億圓は租税的收入をもつて賄はれるため、残りの公債依存の二百八十五億圓と生産擴充資金の六十億圓

が國民貯蓄によつて充足せられねばならぬ。しかして國民總所得から財政資金、生産資金を差引いた残りが國民の消費資金である。十八年度の配分計畫と比較して十九年度の消費資金は十五億圓の壓縮を受けてゐる。國民はこの消費資金の範圍内で國民の最低生活水準を維持確保しなければならないのである。またかゝる消費資金の概念と並行して生活必需品の割當配給制、切符制がよくその生産と需要とを適合せしめなければならない。

戦時國民生活は日常生活から一切の安逸と浪費を除去し、あくまで簡素質實でなければならないが、同時に戦力の人的基礎を維持培養する見地から強靱な國民生活の基礎を確保すべきものである。國民生活はいはゞ戦後の戦線である。この狀況は直接間接國家の戦力に影響するのである。すなはち國民生活における消費の抑制は眞實は消費の戰時的組織化でなければならぬ。この意味において最低水準においてはあつても強靱な戦時國民生活確保のため、政府は毎年生活必需品資動員計畫を策定し、その内容も逐次総合的計畫性を増し原料物動から製品物動へと徹底し、著しく高度計畫化の跡を示してゐる。十九年度生必需品資動員計畫は、決定されぬが十八年度の計畫においては、主要食糧について、米、麥、甘藷などそれ／＼別個の計畫對象となつてゐたものを、新に

大豆、玉蜀黍、乾麵などを加へこれを綜合して主要食糧として全體的な配給基準量を確保することとなつた。家庭燃料についても、六大都府縣その他十五縣には木炭、煉炭、豆炭、ガス、薪などを綜合して熱量に換算し一定量の確保が計畫された。纖維品についても、計畫が一步前進し細別的な最終製品にまで物動化が行はれた。生活必需品中の工場製品については、必要原料の確保から製品の配給にいたるまで細密な配給計畫がつくられ、それ以外の農林水産物は、集荷配給を國家の手で強度に統制して需給の確公平を期した。また新たに小麦粉、清酒、合成酒、焼酎、ゴム靴、地下足袋、石鹼が計畫物資に加へられた。

## 3 食糧確保が戦争意志の中核

十九年度の消費統制がいかなる具體化を示すか、昨年十一月の行政機構改革によりいはゆる民需省たる農商省の誕生をみた矢先でもあり一層施策の推進が期待される。今議會においても食糧の配給、改善などについて論議されたが、食糧問題は結局は國民の戦争意志の中核とも目すべく、今後食生活の積極的合理化について實踐努力がなされるとともに、徹底した配給機構の確立によつて闇取引、横流れなどを防止し、食糧を國民生活の隅々まで公正に配給する。それによつ

て一般勤勞者の最低生活を確保し、明朗な生産活動を促進することが最も緊切な課題である。

衣料方面には、まだ節約の餘地が残つてゐるのではない。衣料切符制の實施は昭和十七年二月からであるが、昨年八月「戦時衣生活簡素化實施要綱」にもとづいて纖維局の製造制限規則および配給消費統制規制の改正が行はれ、纖維品全般にわたり種類規格の單純化、高級不急不要品の生産抑制、衣料切符點數の改正などが實施された。十九年二月には衣料切符の更新期に際して従來の一人百點（農村は八十點）がさらに四十點ないし五十點と思ひ切つた削減がなされ、それは年齢によつて差等が附せられてゐる。

國民生活の具體的内容といへば衣、食、住のほか保健衛生、休養娛樂等々きはめて多岐廣汎にわたるが、食糧問題の核心が定立され衣住の簡素化が確立されれば戦時國民生活はまづ軌道に乗るといへよう。かくして國民生活費の合理的切下げが軌道に乗れば、國家資金計畫にもとづく資金の循環は完全に確保され得る。貯蓄の増強も納税も圓滑な推移をたどり大戦費も支障なく調達され得るのである。

## 4 貯蓄増加の基底は生活の安定合理化

十九年度の國民貯蓄増加目標額は三百六十億圓と決定され

た。國家資金計畫において國民貯蓄によつて充足すべき資金需要は、財政資金のうち二百八十五億圓および生産擴充資金の六十億圓の合計三百四十五億圓であるが、貯蓄目標額はこのほかに企業整備の進行による既設設備の單純な金銭化、すなはち生産活動には關係なく従つて國民所得を形成しないところのいはゞ資金の水平移動とみられるもの約七億圓、および通貨膨脹により意外に個人の手持現金が増加してゐる實情にかんがみ、この退職現金の吸取をも見込んで三百六十億圓となつたのであつて、積極的に資金の吸取をはかり通貨の膨脹を抑止せんとしたのである。十八年末の日本銀行券の發行高は三十日の最高百四億八千萬圓に達し、また昨年中の年間平均發行高は七十億六千九百餘萬圓にして十七年に比して十八億千三百餘萬圓の増加となつてゐる。蔵相は議會の財政演説でこれを戰時財政の運営にもとづく我國財政經濟の規模擴大にもとづくものと説明してゐる。財政規模の擴大は戦力の増強であり、その反映であるかぎり通貨流通量の増加は必ずしもおそれるにおよばないが、國民消費が資金計畫ならびに生必需品物動によつて限界づけられてゐる以上、この限界以外の浮動購買力の吸収に向つて強力に國民貯蓄が推進されなければならぬ。貯蓄増強の基底として問題は國民日常生活の合理化と安定化に還つてくる。今議會通過の法律のうち

は昭和十七年六月から實施の勞務者年金制度の改正擴充が入つてをり、會社銀行商店の役員以外の従業者は男女を問はず報酬額のいかんによらず強制的に被保險者となり、被保險者は現在の三百八十萬人から七百三十五萬人へとほぼ倍増が見込まれ、保險料(半額事業主負擔)の増額とともに保險掛金も従來の年二億圓から七億圓に増加する。右は戰時國民生活の安定とともに貯蓄増強に對する寄與は大きい。さらに國民動員の強化擴充にもなふ被徵用者の優遇援護に萬全を期し、勤勞生活の保護強化にも遺憾なきを期することが貯蓄増強の緊要策であり、要するに國家資金計畫の圓滑なる運営は單に資金面からの施策にとゞまらず、低物價の問題をはじめ政府全體の諸施策に完全に依據してゐるのである。

附記。一、二月末閣議決定の決戦非常措置要綱にもとづく奢侈追放によつて遊興飲食税、入場税その他所得税などにおいて四億圓程度の國庫減収が豫想されることとなつたが、不急營繕工事の停止や物動計畫の關係から豫算の實行上において節約額を抽出することによつて彼此豫算の收支は償ふものとみられる。二、物品、遊興飲食、入場、特別行爲の四増税は二月中旬から繰上げ實施され、たゞ徵税の適實を期するため創設された納税證紙ないし切符の制度は準備の都合上いまだ實現してゐないが、高級遊興飲食など

の停止によつて、納税證紙制度はその創設目的の實體を大體において喪失したやうな形となつてゐる。

# 日滿食糧計畫の一體性

柴田 敏夫

## 一 戦争完遂の二大要件

大東亞戦争完遂の基底をなす戦力増強の根本的要素は、航空機増産を中心とする軍需生産力の増強と、食糧増産を中心とする國民生活の確保の二つである。この二大要件はあたかも車の兩輪のごとく、相ともに増産の成果があがつてこそ戦力の増強は可能なのであつて、いづれが缺けるとも戦争の完遂は期しがたいことは明白である。その一要件たる食糧の増産は、外米輸入に依存することが不可能となつた現在、是が非でも食糧自給體制を確立し、外米依存脱却の態勢を完成することが大なる要請となつてくる。内地の食糧生産力に限度がある以上當然滿洲の沃野に一大農地を造成して、日滿を通ずる総合的増産計畫を樹立し、これを急速に實施してもつて食糧自給體制に完璧を期さねばならぬ。かゝる觀點から昭和

十八年度に入つて日滿兩政府の緊密なる提携による総合増産計畫が日程にのぼることとなつた。

滿洲における農産物の重點は舊來大豆にあり、米その他のものは、雜穀を朝鮮、北中支に輸出する以外は概して滿洲國內の需要を充足する程度にとゞまつてゐたのであるが、日本の兵站基地としての滿洲の役割は舊來の状態に甘んずることを許さず、進んで水田を主とする稻作地の一大造成計畫の樹立を必至ならしめたのである。

本論においては日滿綜合食糧自給計畫の主要を明かにせんとするのであるが、順序として一應日本側のこれに關する措置の主要と、内地、朝鮮および台灣における増産の概況について、まづごく簡単に觸れ、しかるのちに滿洲における食糧増産計畫の主要に關して沿革的に具體策について論述することにする。

なほ滿洲においては土地の面積の單位はヘクタールを用ひ、收

量ハトンを使用する。正確を期する上から本文においては、これをそのまゝ使用するが、これを換算すればつぎの通りである。すなはち一ヘクタールは一町歩弱であり、一トンはおほむね七石に當る。たゞしこれは雜穀ならびに穀の場合であつて、玄米、精米については

穀(單位トン)×0.73=玄米(トン)  
 玄米(トン)×0.94=精米(トン)  
 精米(トン)×7=雜米(石)  
 の數式により換算して概數を得ることとなる。従つて穀から精米となると0.73×0.94=0.6862すなはち約六割八分六厘となり、さらにこれを石單位に換算すれば0.6862×7=4.8034すなはち穀一トンから約四石八斗の精米を得ることとなるのである。

## 二 日本の措置

昭和十七年一月二十四日井野農相は第七十九議會において一議員の質問に答へて、日滿支食糧交流機關の設置について考究中なる旨をのべ、つぎに同年四月七日「東亞共榮圈内の主要農産物對策要綱」が策定せられて、日滿支、就中日滿を通ずる食糧自給の問題は漸次擡頭してきた。しかしこの「主要農産物對策要綱」は内地で十年間に米千二百萬石を増産し、

約八千三百萬石の收量をあげ、麥類は三千八百萬石、甘藷は二十億貫、馬鈴薯は十億貫を目標とし、おほむね主食糧は内地のみで充足することとしてゐたもので、滿洲については大豆の生産増強に力を注ぐこととし、米は滿洲國內の需要を充たして自給を行ひ、そのほかに相當の貯藏米を持つといつた程度のものであつた。越えて十八年十月つひに滿洲國側より武部總務長官以下同國政府首腦の上京となり、農地大造成計畫を示して日本政府の協力を求めた。その結果十一月二十二日の閣議において、「滿洲國緊急農地造成計畫」に對する協力援助の件」が決定せられ、技術、資材、機械、資金の各方面より徹底した援助を行ふこととなつたのである。さらにまた同年十二月二十一日の閣議においては、「日滿食糧自給に關する措置要綱」が決定せられ、こゝに日本側の措置は一應整つたのであつた。この要綱の骨子は

- 一、農商省内に農商、内務、大東亞三省その他關係各廳の係官をもつて協議會を設置し、各年度の各地域における生産計畫および需給計畫を調整する。
- 二、日滿各地域の増産確保上、必要な資金、資材、勞力、技術などについては、各地域ごとに調達をはかるものとするが、必要に応じて能ふかぎり相互に協力援助することとし、特に滿洲國に對してはその實情に鑑み、日本側に



三、日清各地域の食糧農産物価格の決定は緊密なる連絡を

とつて慎重な取扱いをする。

四、日清各地域相互間、ならびに日清の各地域と日清以外の地域特に北支との間における食糧の交流については、各地域と緊密なる連絡をはかり輸送配分の円滑なる運営を期する。

の四點である。

第一の協議會については、第八十四議會に提出された十九年度追加豫算案中にその運営などに要する経費として初年度分三萬圓を上程した。第二の日本側よりの援助の具體的内容は、造成費四億圓の半額たる二億圓を豫算外國庫負擔契約によつて支出し、技術指導については農地開發營團の幹部以下百名の技術陣が参加するほか必要なる資材を適宜供給することになつてゐる。かくて日本側の打つべき措置は一應の解決を見たわけである。

### 三 内地の食糧事情の輪郭

十八年産米の實收高は、六千二百八十萬石である。これは平年作と比較すれば約百萬石の減收であり、また豐作であつ

切干甘藷としての供出を期待する實情にある。しかし甘藷の生産は終つたのであるから、米穀同様、問題はその供出いかんにあるのみである。今後の諸類の増産について期待されるのは馬鈴薯の増産であつて、春馬鈴薯の一億二千萬貫の増産は必ず達成されねばならぬ。諸類について農商當局としては、昨年度の四ないし五倍程度を、主要食糧として需給關係の中に操作せんとしてをり、その達成いかんは本年度の食糧需給に影響するところ甚大なるものとされてゐる。雜穀についても可能なものは主要食糧として綜合配給せられるが、むしろ主たる用途は自家消費にある。それによつて農家の可及的節米を行ひ米穀供出の増大をはかるものである。

### 四 朝鮮および台灣の増産計畫

朝鮮からは従前一千萬石前後にもほる米穀が内地に供給されてゐた。ところが昭和十四年の大旱魃以來、内地向供給力が激減し、同十七年にはまた大凶作の結果、十八米穀年度においては朝鮮米の移入はゼロであり、今米穀年度において内地に供給すべき十八年産米も、作柄がよくないため收穫見込は一千八百七十萬石程度で平年作を二、三百萬石下廻るものである。朝鮮における米の需給關係よりみて、現在平年作

日清食糧計画の一體性

た十七年産米の六千六百七十七萬六千石に比べれば約四百萬石の減收となるのである。豐作であつた十七年産米の場合でも、一方麥類の不作といふことはあつたが、なほかつ相當數量の外米を輸入せざるを得なかつた。その時よりさらに約四百萬石の不足を豫想される十九米穀年度（十八年十一月から十九年十月まで）の食糧事情は、外米を全然輸入し得ぬ以上、相當窮屈となるのであつて、内地産米の供給力の不足は、麥類および諸類ならびに雜穀の大増産と、外地および滿洲よりの輸移入によつて補填せねばならぬのである。麥類の作付目標二百萬町歩の達成はすでに成功し、またその後の肥培管理も順調に進み、生産目標たる三千萬石の收穫は十分期待される實情にある。しかし麥類の收穫は大體において、六月以降でありその本格的な供出も七月下旬以降でないといふれない。従つてこれを主要食糧として需給計畫の中に操作し得るのはわづかに七、八、九、十月の三箇月ないし四箇月にすぎない。かつ麥類としては、主要食糧以外の部分に多くの需要を持つてゐるため、その増産收量を内地の食糧不足分のすべてに補填することはできないのである。そこで諸類ならびに雜穀類増産の要請が必然的に起つてくる。諸類のうち甘藷については、生甘藷としてすでにほとんど全國にわたつて米の代替物として供給済みであり、今後は生甘藷のほか甘

ならば四百五十萬石位は内地に供給し得るのであるが、昨今の工業振興による勞務者の増大、文化的水準の向上などにより、鮮内消費は増加の一途をたどつてゐる。右の趨勢にかんがみ、總督府當局では昭和十五年を起點とする米穀増産十五箇年計畫を策定し、昭和三十年において總目標三千八百六十三萬一千石の收穫を目標としてゐる。その方途としては大水利計畫を中心とする土地改良、貯水池の増設ならびに耕法の改良などがあげられてゐるが、從來、三年に一度の割で襲ふとされる大旱魃のため、朝鮮の米穀收量は二千四百萬石を最高として實に一千萬石の振幅をもつて上下してをり、これに對する根本的對策が成功せぬかぎり、上記の増産の達成は不安定たらざるを得ない。なほ麥については、十六年以降五箇年計畫により總生産高一千九百萬石、粟は同じく十六年以降五箇年計畫により總生産高五百五十六萬一千石、甘藷および馬鈴薯は十九年以降三箇年計畫をもつて、甘藷は二億五千萬貫、馬鈴薯は三億四千萬貫のいづれも總生産高を目標として計畫を進めてゐる。

つぎに台灣の米穀生産は九百八十萬石を最高とし、二百三十萬石を振幅として上下してゐるが、こゝにおける問題は製糖業その他工業部門との關聯がいかに調整されるかである。昨年来、甘蔗畑は漸次水田に轉換しつゝあり、甘蔗畑の二割

五分を占める太田甘蔗のうち約三割をすでに米作に轉換し、一萬五、六千町歩が新しく水田として二回作による増産を期してゐる。さらに甘藷についても、甘蔗畑に間作を行ひ相當の成績をあげてゐる。

以上内地および朝鮮ならびに台湾の食糧事情に關してごく簡単に略述したが、右にみるごとく、現在のところ内地、朝鮮、台湾の食糧生産力をもつてしては需要の絶對額を充足することは不可能である。こゝにおいて日滿綜合食糧自給計畫の樹立とその完遂は當然日程にのぼらざるを得なくなり、日本側としても滿洲國における一大農地造成計畫を根幹とする食糧増産計畫に對し、積極的な援助を行はんとするにいたる必然性が看取されるのである。

さて滿洲國の食糧増産對策の全貌はいかなるものか、順をおうてその概略をつぎのべることとする。

### 五 滿洲國の食糧計畫の發展

#### 1 戰時緊急農産物増産方策の策定まで

滿洲國において農産物の増産計畫が、經濟建設の一翼として最初に國家統制のうちに加へられたのは康徳四年（昭和十

二年）の産業開發第一次五箇年計畫においてであつた。これによつて流通部面に對する整備統制と、從來輸入にまつてゐた米、小麦、大麦などの特殊農産物の増産が行はれることとなつた。支那事變の勃發とともにこれに若干の修正が加へられ、さらに米穀統制法、主要糧穀統制法、重要特産物專管法などが相ついで實施をみ、他方康徳七年（昭和十五年）六月の行政機構改革に際しては、産業部の二局を占めるにすぎなかつた農業關係官廳を獨立せしめ興農部を創立するなど、農業生産の増強體制は着々整備されるにいたつたのである。さらに康徳八年（昭和十六年）には全農産物の專賣的集荷配給機關たる滿洲農産公社が創立せられ、これをもつて滿洲國における農業統制はほぼ形をととのへた。つぎに康徳九年（昭和十七年）建國十周年を卜して制定せられた「滿洲國基本國策大綱」の第四章經濟綱要において、特に農業施策に關する具體的方針が明かにされた。すなはち農業施策の重點を農村振興におき、増産を徹底して自給自足の確立および日支兩國に對する食糧ならびに油料農産物の基地たる使命完遂を期するため

(一) 科學的計畫性の徹底、(二) 自興村に對する施策の集中普及、(三) 農業技術指導網の擴充特に第一線滿系技術員の養成、(四) 畜力機械力利用による新農法の採用、

(五) 小作制度の改善、(六) 未耕地の計畫的開拓、(七) 治水利水事業の促進、(八) 農産物集荷方法の改善合理化とその徹底、(九) 農業關係團體の中心たる興農合作社の育成強化、(十) 農業特殊金融機關の設立による農業開發および農業金融の圓滑化、(十一) 農事試驗機關の強化、(十二) 特用農産物の耕地擴張を停止し、主として技術改善による増收達成。

などの十二項目を定めた。この基本國策大綱中の規定こそ、その後の「戰時緊急農産物對策要綱」、「戰時農産物蒐荷對策要綱」および農地造成計畫の根本をなすものである。つぎにこの兩要綱の具體的内容の概略について素描を試みる。

#### 2 緊急農産物對策の内容

まづ「戰時緊急農産物對策要綱」は康徳十年（昭和十八年）一月二十日の國務院會議において策定せられたものであつて、康徳九年（昭和十七年）を起點とする産業開發第二次五箇年計畫における、二十二地區の重點的適地適作による増産達成を基礎として、それとは別個に農業施策上の當面の緊急なる實施を要する事項を、八項目にわたりごく具體的に明示したものである。

まづ第一に計畫作物の作付面積の増加をかゝげ、計畫作

物について地方別の最低作付面積を定め、その確保をはかるとともに、單位面積收量の増加をはかる。第二に農地の造成改良については、地方の實情に應じ、特定の團體、會社、または有力なる個人をして、積極的に未利用地、濕地、干潟地の開拓改良を行はせ、さらに水利組合の設置による土地改良の推進を期する。第三に廢耕を防止するため、小作期間の延長および小作條件の改善を行ひ、一方廢荒地については縣または村で管理せしめることとする。第四に勞力需給を確保するため、青少年學徒、協和青少年團などの勤勞動員を行ひ、また離農防止の措置や、都市非生産的人口の地方疎散などを行ふ。第五に出荷量に應じ特定の生活必需品を農民に給付し増産意欲の昂揚をはかる。第六に農業金融と計畫作物の増産集荷との關聯を緊密にするため必要な措置を講ずる。その方法として營農資金の貸付は前年度の出荷実績を基準とし、康徳十年度（昭和十八年度）の作付面積および出荷豫定量を勘案して行ふこととし、貸付總額ならびに貸付限度の引上げを行ふ。第七に化學肥料および農業藥劑を效率的重點的に配給する。第八に緊急増産の具體的處置として早蒔（早期播種）、完全に緊急増産の具體的處置として早蒔（早期播種）、完全に除草、土糞倍加を徹底的に行ひ、最小限一割増産を達成する。

以上が「戦時緊急農産物増産方策要綱」の概観であるが、そのねらひは最低作付面積をまづ確保し、その上に努力、肥料、資本を集中的に投下し、さらに農業技術の注入、荒地、未利用地の開發、土地改良の推進などを行ふ。要するに當面の問題を最も集約的な方法論をもつて解決せんとするのである。

この緊急増産要綱にもとづいて各種の實施要領が決定され、それ／＼さらに具體的な方策が實施されたのである。中でもつきにのべる蒐荷對策と最も關係の深い「増産割當實施要領」はかなり徹底したもので、生産出荷責任體制を確立し、その遂行については、直接指揮にあたる官吏に大きな責任を負はせてゐる。まづ行政機關を通じて順次、縣、旗に割當てられた作物別増産量はさらに屯別に割當てられ、その遂行については屯長に責任を負はしめる。屯長は屯の割當量を地方の實情に應じて、屯内の土地所有者、または牌、あるひは牌を通じて個人に割當て、割當臺帳を整備して實績を監督する。割當の實績を確保するため、屯内有力者、篤農家、警官らを協力せしめて指導監督にあたりしめ、また役畜、農器具、勞力などの相互融通、共同作業、學生學童婦女子の動員などを全面的に行ふ。成績のあがらぬ屯長は罷免せられる。かくのごとき強力なる責任體制の確立は康徳十年（昭和

十八年）の蒐荷において著功を奏したのであつた。

### 3 蒐荷對策

蒐荷は増産をしてさらに効果あらしめるためかなりの強力なる措置を必要とする。いかに増産の割當が強行され、責任體制が確立されても、蒐荷對策が當を得なければ、折角増産された農産物も正常なる機構に流入せず、需給計畫の操作は頓挫を來すのである。こゝにおいて滿洲國政府は康徳九年（昭和十七年）十一月「戦時農産物蒐荷對策要綱」を策定し、全國の省長その他責任者を招集してその徹底を期した。こゝにおいて蒐荷についても責任體制は確立し信賞必罰の途は明かとなつたのである。本要綱は軍官民一體となつて蒐荷の徹底を期するところに大きな眼目があり、割當量は必ず蒐荷するといふことを明示した點に實行上の強力な責任形態が力強く表現されてゐる。すなはちその責任形態としては官廳、農産公社などの蒐荷機關において責任量を蒐荷し得ないものは罷免の處分を受けることとなつたのである。

この蒐荷對策は、共同または集團出荷制度、小作料金納制、農村生活必需物資の特配制度などを含み、さらに農家の必要とする増産資金はすべて出荷割當量に應じてその額を決定されるなど、蒐荷を完遂するための具體的方策が盛り込まれてゐる。農家に最も直接的效果をおよぼしたのは、本んどいつても生活必需物資の特配制度であつて、その具體的内容は、一トンの農産物出荷に對し綿布十五平方ヤール（夏服は五平方ヤール、冬服は十平方ヤールを必要とするから、十五平方ヤールで夏冬各一着分をつくり得る）、靴下一足、タオル一本を交付した。

右の蒐荷對策の確立遂行は必然的に副作用として行政の滲透をもたらし、官廳の擔當分野を組織的に明確にするとともに、個々の農家への行政力の滲透徹底が効果的になされたのであつた。

かくて康徳十年（昭和十八年）秋の蒐荷はかなりの成績をあげたのである。それは右のごとき責任體制の確立のほかに、幸ひ豊作であり植付前に割當を行ひ、これにもとづいて作付を行った農産物がかなりの收量を示したことによる。さらに一定量を必ず出荷させ、殘余の處分は農家が自由に處分することを默認したことも一つの効果的な方法であつた。

### 大農地造成計畫の全貌

さて以上で、滿洲國における農産物増産方策の進展に關しこれを沿革的にみてきた。これらの實情を基礎として滿洲國の大農地造成計畫は前面に押し出されてきたのである。思へ

ば第一次五箇年計畫において、はじめて滿洲農業に國家的な統制力が加へられて以來、僅々數年の間に滿洲國における農業政策は急速度に進展してきたのである。大東亞戰爭完遂の絶對的要請に即應じてこゝに日滿綜合食糧計畫が、日滿兩國政府の緊急なる提携のもとに樹立せられ、滿洲國における「緊急農地造成計畫」が策定せられるにいたつた。

この「緊急農地造成計畫」は昭和十八年十月滿洲國側の自發的申出によつて登場し、すでに前述せるごとく、同年十一月二十二日の閣議において右計畫に對する日本政府の協力援助の方針が決定され、十二月二十一日の閣議においてさらに具體的なる「日滿食糧自給に關する措置要綱」が策定せられた。

さてこの「緊急農地造成計畫」とはいかなる具體的内容を持つものであるか。

まづその第一點は第二松花江地區に五萬ヘクタールの水田を拓くこと、第二點は東遼河地區に二萬ヘクタールの水田を拓くこと、第三點は既着手の鶴立崗以下十二地區の開拓地造成計畫をくり上げ實施することの三つであつて、いづれも昭和二十年度に完成することを實行上の目標としてゐる。

まづ第一の第二松花江地區は、第二松花江の河水を貯水した人造湖を水源として、下流一帯のうち最も灌漑に便なる部

分五萬ヘクタールの地域を選んで、まづ十九年度に二萬ヘクタール、二十年度に三萬ヘクタールの水田を造成せんとする計画である。第二の東遼河地区は治水工事を行つて二十年度に二萬ヘクタールの水田を造成せんとするもの。第三の既着手地区の計画の内容はつぎの通りで、そのうち十九年度には水田一萬五千七百六十ヘクタール、畑四萬三千二百三十五ヘクタール、二十年度には水田二萬三千二百五十九ヘクタール、畑二萬七千六百二十七ヘクタールをくり上げ完成する。

既着手十二地区農地造成目標(單位ヘクタール)

地區名	田	畑
鶴立崗	一、一〇〇	六、〇〇〇
蓮江口	九〇〇	七、〇五八
太平嶺	四、八六九	七〇五
新開河	—	二、七四八
康平	七三五	一、〇九五
飲馬河	四八五	四五〇
呼裕原河	—	九、四〇〇
黒台	三、八五〇	四、〇〇〇
盤山	四、〇四六	六、六五二
甘南一期	九、七四〇	六、七七一
岔路口	三、〇〇〇	—
綏化	三、〇〇〇	—

小計	その他
三〇、七二五	一六四
防水稻發地區	一七、二〇〇
小規模地區	一三、四二二
總計	六一、三四七
	一九、八〇〇
	二〇、三八〇
	一一五、〇五九

従つて昭和十九年度における滿洲國の緊急農地造成實施面積は、水田が第二松花江地區の二萬ヘクタールと既着手地區の一萬五千七百六十ヘクタール、合計三萬五千七百六十ヘクタール、畑は既着手地區の四萬三千二百三十五ヘクタールであり、昭和二十年度においては、水田は第二松花江地區の三萬ヘクタール、東遼河地區の二萬ヘクタール、既着手地區のくり上げ分二萬三千二百五十九ヘクタール、合計七萬三千二百五十九ヘクタールであり、畑地は既着手地區の二萬七千六百二十九ヘクタールである。従つて昭和十九、二十兩年度において、水田は總計十萬九千九百九十九ヘクタール、畑は七萬八千六百二十二ヘクタールが造成されることとなる。これを表示すれば左記の通りである。(單位ヘクタール)

年度	水田	畑	水田	畑	水田	畑
十九年度	三〇,〇〇〇	—	—	—	一五,七〇〇	四三,三三〇
二十年度	三〇,〇〇〇	—	—	—	三三,二五〇	三七,三七七

計 五〇,〇〇〇 110,000 114,014 20,621

「總面積」

年度	水田	畑
十九年度	三五、七六〇	四三、一三五
二十年度	七三、二五九	二七、六二九
總計	一〇九、〇一九	七〇、八六二

右のごとき計畫をもつて造成せられた農地は初年度において七割、第二年度以降において十割が開墾される。いま各年度別に作付面積の目標數量を示せば左表の通りである。(單位ヘクタール)

年度	水田	畑
十九年度	二七、三〇〇	四六、二〇〇
二十年度	七一、九〇〇	一一、五〇〇
二十一年	一四四、八〇〇	一六五、三〇〇
二十二年以降	一七〇、〇〇〇	一八〇、〇〇〇

以上のごとき規模において造成せられた農地における穀、雜穀の收穫物は、國內必要量を見合せて可及的に日本へ向け出すことになつてゐるが、大體の増産目標の年次別による數量は左表の通りである。

年度	穀	雜穀
十九年度	四九、一四〇	三五、五七〇
二十年度	一四〇、〇〇〇	九五、〇〇〇

日清食糧計画の一瞥

年度	水田	畑	水田	畑
二十一年	三〇〇、〇〇〇	一六六、〇〇〇		
二十二年	三八五、〇〇〇	一九〇、〇〇〇		
二十三年	四一七、〇〇〇	二〇二、〇〇〇		
二十四年以降	四二五、〇〇〇	二〇五、〇〇〇		

すなはち最も急を要する十九年度(二十米穀年度の需給計畫に算入)において穀は約五萬トン、玄米に換算して約三十萬石弱、雜穀は約三萬五千トン、すなはち約二十五萬石を生産し、二十年度(二十一米穀年度に算入)は穀は約十四萬トン、玄米にして約六十八萬石、雜穀は約九萬五千トン、約七十萬石弱を生産することとなる。

以上で緊急農地造成計畫の大要を明かにしたが、この農地造成の仕事の主體となるものは滿洲土地開發株式會社を改組擴充せる滿洲農地開發公社である。滿洲農地開發公社は滿洲國の特殊法人で資本金五千萬圓である。工事に必要な總經費四億圓は政府において全額を負擔するが、前述した通りその半額は日本政府が出資する。

勞務關係については現地滿人苦力のほか、かなり多數の鮮農が入り込んでゐる。大體において充足してゐる様子であるが、さらに學徒、兒童その他を動員して組織的な勤勞奉仕を行ふことになつてゐる。

特に第二松花江地區はきはめて肥沃である。水利の便も松花江のダムや東遼河における治水事業などそれ／＼きはめて順調に進められてゐる。

輸送の關係で注目すべきことは、昨今の情勢にもとづき従來の海運依存をやめて陸運に轉換したことで、従つて従來の大連中心の交易は少くなり、鮮滿國境の清津、羅津および釜山などが漸次地歩を固めつゝある。

### 六 食糧確保の日滿一體性

滿洲國は大東亞共榮圈における穀倉としてその前途は洋々たるものがあり、以上論述せる緊急農地造成計畫もすでに着着として進行してゐる。戦力増強の根本命題の一つが食糧自給體制の確立にある以上、滿洲國に課せられた使命は實に重かつ大である。

今後の滿洲農業の課題は何か。

まづ第一にあげねばならぬことは農業技術水準の畫期的な引上げである。そのためには科學的な試驗研究ないし調査が徹底的に行はねばならない。これまでの非合理的な掠奪農法を根本的に清算して、百年の大計にもとづく最も合理的な選増農法が敢然として採用されねばならぬ。その具體的な方

策としては、滿系技術員を大量に養成して、これを増産第一線に挺身せしめ、優秀なる指導者を配して農業技術指導網の確立擴充をはからねばならぬ。しかしして農業經營形態については、畜力機械力の普及利用を徹底せしめ、滿洲独自の農法を體系づけねばならないのである。

これと並行して重要なのは農村に對する政治力の滲透、農民に對する政治的把握であつて、全農村を組織化し、國で樹立した施策は必ず農村の末端、農民の個々人にまで徹底することゝ態勢をととのへねばならぬ。國防國家における經濟はつねに計畫經濟であり、その遂行は必ず強力なる政治力によつて裏づけられねばならない。

つぎに忘れてはならぬのは滿洲大豆についてである。本論においては當面の日滿綜合食糧自給の中心題目たる緊急農地造成計畫に關する概貌を論ずることが主體であつたため、直接大豆に觸れることはなかつたが、大豆こそ滿洲における農産物の大宗であつて、従來はもちろん、今後においても滿洲農業の首座を占めることは論をまたない。しかも現在大豆は従前と異つて主要食糧として新しい角度から再認識さるべき段階に到達してゐる。わが國においては澱粉質系食糧にはめぐまれてゐるが、植物質蛋白質食糧の給源に乏しい。蛋白質營養の補給の問題が重大化してくるに従つて滿洲大豆は優秀

な蛋白質給源として新しい價値を獲得した。こゝにおいて滿洲は日滿を通ずる食糧基地たると同時に、さらに大豆の供給基地たることによつて重要性を一段と深くするものである。

ともあれ滿洲國は今回の緊急農地造成計畫の遂行によつて、日滿を通ずる食糧自給體制の確立を達成せんとしてきて、その役割はきはめて大きい。これに對する日本側の措置もおぼむねよろしきを得て、資金、技術、資材その他必要部面において能ふかぎりの積極的援助を行はんとしてゐる。ここにおいて日滿の緊密なる一體化はその實效を大いに發揮するのであつて、その成果はもつて期すべきものがある。

最後に一言附加すべき事柄は、従來食糧問題に關する考へ方として、土地と人口との相關關係に立脚して考へを進める傾向が一般的であつたが、今後の考へ方としては、その地域の産業の發展形態を重要な要因として考へねばならぬといふことである。内地において食糧問題が緊迫せる相において日程にのぼつてきたのは、諸種の要因に基づくものであるが、就中、重工業の畫期的な大擴張にともなふ鑛工業勞務者軍の大量再編成による米穀消費の激増が大きいものである。朝鮮においても現在その傾向が顯著となりつゝあり、滿洲においても今後かゝる傾向が漸次強くなるものと考へられる。農民が鑛工業勞務者に移行してゆく場合、生活水準の向上にと

なつて米穀の消費が増加して行く。日滿を通ずる綜合食糧計畫の遂行にあつても、このことを十分に考慮に入れて行はなければ重大なる遠算を生ずる時期が來ないとはいへないのである。

さらにまたいま一つの問題は、従前の内地の食糧需給の實情について一段と分析を加へねばならぬことである。戦前の日本の米穀事情は滿洲國の大豆、舊蘭印の油脂を五十萬トン、八十萬トンと大量に輸入して、これらを飼料として成立してきた。すなはち大量の飼料輸入を基礎として、戦前の米穀事情はなり立つてゐたのである。舊蘭印からの物資の輸入が船腹の關係から杜絶し、滿洲大豆も多方面の用途に供せられるにいたつた今日、この點においても戦前の食糧需給體制が相當な改編を余儀なくされるのは當然である。

ともあれ今後の食糧問題は相當多くの問題を持つてをり、高度の工業化が進展するにつれて諸種の問題が派生し、究極のところは南方地域をも含めた大東亞共榮圈全體を通ずる食糧自給體制の確立が、遠からずして日程にのぼることとならう。

### 資料と解説

## グルーの「東京報告」批判

岡本 鶴松

### 一 米國政府、國民への影響多大

前駐日アメリカ大使グルーは歸國後「東京報告」を發表し、アメリカ國民に時局の重大性を認識させようと努めた。

この「東京報告」は日本に十年間も滞在し、日本朝野の名士、識者と交はり、日本の習慣、民情、政治などを仔細に觀察した者の著述であるだけに、アメリカの政府當局者や、一般國民の間に多大の注目をひくにいたつた。アメリカ政府當局者がその對日戦争遂行の方針、政策などの作成に當り、グ

ルーのこの著述を参考として、そののべてる點をその政策中に織込んでゐることは、アメリカ當局者の對内宣傳と、グルーの「東京報告」とを比較すれば一目瞭然である。また一般アメリカ國民の現戦争に對する認識もこの「東京報告」の影響を被つてゐる點の多いことも自ら首肯されるのである。それ故にグルーがこの「東京報告」でどんなことをいつてゐるかを知り、そのうちのいづれの點が日本を正解してゐるか、いづれの點が日本を誤解してゐるか、あるひは故意に事實を歪曲して、アメリカ國民の判断を誤らせてゐるかを検討することは日本の對米思想遂行の上によぶ重要な仕事であらねばならない。それゆゑこゝに「東京報告」の要點を紹介することにする。

「東京報告」は全篇を左の十一章にわけてゐる。(一) 歸國、(二) 戦争の原因、(三) 日本の挑戦の範圍、(四) いかにして日本を破るべきか、(五) 何故に吾人はもはや日本を相手にできぬか、(六) 日本の青少年、(七) 日本における眞理、(八) 人種戦争か否か、(九) 太平洋におけるわが同盟國、(十) 日本とその誓約の履行、(十一) 將來の建設。

### 二 戦争の原因を日本に轉嫁

グルーの「東京報告」批判

第一章の「歸國」にまいて、グルーは大東亞戦争勃發當時の東京における彼の身邊について述べ、進んで日本がいかにアメリカ攻撃を長年にわたり準備してゐたかを國民に徹底せしめようと努めてゐる。しかしてこの戦争を挑發したものがアメリカではなくて日本にほかならないと第一章からはつきりとのべ、これが全篇を通じていたるところに力説されてゐる。しかして、グルーの言に従へば日米戦争におけるアメリカの主要任務は日本の巨大な軍部機構を破砕するにあるといふのである。グルーは

「日本の軍部を破り、その派閥を倒すにあらざればアメリカはもちろん、世界の同盟國民は一日も枕を高くして眠ることは出来ない。されば世界の文明、人類の福祉のためにもアメリカは是非ともこの對日戦争に打勝たなければならぬが、これは容易な業ではない。よほどの決心と犠牲を拂はなければこの目的を達することはできない」といつて、この第一章を結んでゐる。

第二章の「戦争の原因」においてもグルーはことさらに日本國民と軍部とを畫然とわけてゐる。また「太平洋の西岸にある諸國民については、日本人についてと否とを問はずアメリカやカナダの重大關心事である」と、グルーも一般アメリカ人のやうに、アメリカが東洋に君臨し、東洋民族を支配す

ることを當然とし、それが東洋諸國民の福祉を増進する所以であると、臆面もなく廣言してゐるのである。

かくてグルーはさらに日本がアメリカに挑戦した原因といふことにおよんでゐる。彼はこれに關し左の二問題を提供してゐる。(一)は日本は何故に巨大な工業および潜在的強力な軍事力を有する米英に挑戦したのか。(二)は狂信的ではあるが打算に富める日本の支配階級がいかにして英米、重慶その他の反樞軸國民に對し勝利を夢想したのかといふのである。第一問に對しグルーの回答はかうである。

「日本が英語國民に對し不遜の態度をとるのは日本人の優越観および實力に關する自信と、英米の劣等と脆弱を信ずる觀念からきてゐる。しかして日本人のかくのごとき觀念は一はその有する神話の産物であり、また一は日本人の國家的虚榮の結果である。しかしこれは日本人の眼からみれば論理的かつ實際的で堅い根據を有してゐることである。日本人は一致團結してゐる。その政府當局が愚者であつても賢者であつても、これを支持してゐる。天皇を神聖なものとしてゐる日本國民は陛下を通じてその軍部を信じ、その支配をもつて正しいものとしてこれに服従してゐる。ドイツやイタリアにおいては機會だにあれば叛亂を起さうとしてゐる諸團體が存在してゐるが、日本にはかゝる團體は

ない。つぎに日本人はよく訓練されてゐる。彼らは公然とその武器はアメリカの武器に劣つてゐるけれども、アメリカ人はそれを實質以下に評價してゐるといふ點が日本にかへつて有利であるとしてゐる。日本人はまた節約の國民である。日本帝國はほとんど不足によつて今日の繁榮を來した。貧乏の眞只中で彼らは巨大な軍部機關を建設した。北アメリカにおいて棄てられてゐるやうな食糧は日本全人口を養つて餘りある。つぎに日本人は狂信的である。彼らは戦勝を確信してゐる。そしてこれを賭する政府を信じてゐる。この國民的信仰の源はどこにあるか。その一部はキリスト紀元以前の彼らの歴史すなはち半ば神祕的な數世紀時代に遡つてゐる。また一部は最後に蒙古の大艦隊を破つた支那民族との久しい間の鬭争に起因してゐる。日本人は少くとも戦時に際しては全體主義國である。獨伊兩國が聯邦制度を採つてゐたときに日本はすでに獨裁制、秘密警察、「危険思想」抑壓を行つてゐた。日本はファシズムにも、國家社會主義にも轉向する必要はない。日本はすでにこの兩者を兼ねてゐたからだ。日本はヒットラーを要しない。右のごとき諸資格を有し、右のごとき政體を有する日本の支配者が戦争を忌避せず自信満々として國民を戦争に導いたのは敢て不思議ではない。日本の支配者は決して吾人

が想像するほどに形勢を誤算してはゐない。日本は過去における戦勝を記憶してゐる。日本はニューオルリアンや香港、ヴァンクヴァー、またはトロントを今次の戦争で占領しようとは期待してゐない。日本はアジアを征服し、吾人をそこから驅逐し、吾人を弱小化させるやうな講和をなすべく余儀なくさせることを眞剣に考へてゐる。そして五年、十年あるひは五十年のうちに奴隷にされた十億のアジア民族を使用し(米人自身の他民族に對する觀念をもつて日本を誣してゐる!)東洋の全資源をあげて再びアメリカを討つであらう。日本の征服欲には限度がない。この征服欲と、日本のアメリカに對する評價とをもつて日本が眞珠灣を攻撃したのは論理的發展であつた。アメリカ政府はことごとくにいたるべきをあらかじめ察知してゐた。日本との貿易關係を打ち切り、遅滞しながらアメリカが軍備再建に乗り出したのはこれがためである。

いまや何人も日本を三箇月で破り得ると信する者はない。日本艦隊や空軍を最早小馬鹿にはしない。吾人は一致團結したおそるべき敵に直面してゐるのである」と、以上が第二章の要點であるが、グルーは日本の軍事機關の強力な點、および國民が陛下に對すると同じ忠誠をもつて軍部を援けて大東亞戦争を完遂しつゝある點を重視して、もつ

てアメリカ國民の對日戦争に對する遊戯的氣分、樂觀的氣分を警戒してゐる。日本に關するグルーの意見はすべてグルーが外交官として十年間日本に滞在した事實のため實際以上に評價されてゐることは想像するに難くない。最近大統領が國民徵用法案を議會に提出するにあたり、グルーの意見を利用して國民をしてこの法案を呑みにさせるに役立たせようとしたのは、このためである。しかしてグルーの意見は事實を誇張してゐるのみならず、奇怪なるは日本の征服欲といふやうなことを前提に立てて、アメリカ大陸征服、いな世界の征服にまで發展するものと獨斷してゐることである。これはアメリカ國民をして莫大な犠牲をかへりみず戦争遂行に引きづつてゆくには、戦争目的を明確にしておかねばならないからである。なんのためにアメリカは戦つてゐるのかといふ國民の怨嗟の聲は、戦争に拂ふ國民の犠牲が大きく、戦争が長く引くに從つてますます増大するであらう。戦争目的がアメリカの世界制覇であるやうに國民に思はれてはかへつて逆效果を來して國民の間から反戦論が擡頭すべきは明かである。そこで日本のおそるべきことを力説しなければならぬ。従前のやうに日本の國力をことさらに過小に評價し、陸、海、空軍を子供の玩具扱ひにしては國民が眞剣にならないから戦争は長引くばかりである。それゆゑに日本の強さを強調し、そ

のおそるべき将来性、殊に世界征服の野心を包蔵することをまことしやかに宣傳することによつてアメリカ國民の奮起を促すことを試みてゐるのである。

### 三 對日戰の困難を強調

第三章の「日本の挑戰の範圍」において、グルーは日本國民がいかなる貧乏の境遇をも甘受するものであることを説いて、生活に對する觀念が自由を尊ぶアメリカ國民と根本的に相違してゐる點を指摘してゐる。彼は曰く

「日本人は建國以來統制に馴らされてゐる。西洋では封建政治は數百年も以前に既に滅びてしまつたが、日本ではごく最近までこの組織が行はれてゐた。現在なほ生存してゐる日本人の中には封建時代に生れた者もゐる。すなはち彼らは大名家が人民の生命の生殺與奪の權を握つてゐた時代を知つてゐるのである。日本人はアメリカ人には到底堪へられないやうな貧弱な食事で戦争もすれば、工場でも働く。彼らはアメリカの高度の生活水準のために西洋文明が墮落し、または情弱に陥つたと信じてゐる。かゝる考へ方を持つやうになつた日本人は、民主主義は國民を情弱にする。生活水準の高いときは國民は弱くなる。平和は國民を

弱くすると信ずるにいたつたのである。これこそ眞にアメリカに對するおそるべき挑戰といはねばならぬ。」  
と、グルーはこんな調子で日本と戦ふことのいかに困難であるかを強調し、

「この困難を克服して日本を破るにあらざれば、すなはち日米戦争にてアメリカが敗北すれば、こんどはアメリカが奴隸にされてしまふのである。しかしアメリカ人は敗北せぬであらう。なんとなればアメリカ人は自由な國土に住んでゐる自由人であつて、アメリカは自由を保存し、その家庭、その傳統、その文明、その原則、その人道主義を保存せしめようとの堅い決意を有してゐるからである。」  
とのべて第三章を結んでゐる。

第四章においてグルーは日本を破る方法を説いてゐる。曰く「日本國民は絶対に日本の軍部當局者を信頼し、これに服従してゐるから日本國民が政府當局者に對して反抗し、叛亂を起すがごときことを期待することはできない。これを期待できないうちは太平洋に永遠の平和は決して來ないであらう。しからば日本國民の軍部當局に對する信頼が薄らぐやうなことはないかといふに、それはアメリカとその與國の軍隊が日本軍を破ることによつてはじめて實現するであらう。」と。

しからば日本軍を破るにはどうすればよいかといふ問題についてグルーは戰略はこれを専門家に一任し、素人として二個の手段を示唆してゐる。

「一は日本軍をその占領してゐる幾多の島嶼や基地から漸次驅逐すること。二は日本海軍、船舶、空軍をつぎ／＼と撃破して日本軍の戦闘力を弱め、同時にその補給線を斷つて本國を占領區域から孤立せしめることである。しかしこれは最終の段階ではない。むしろ最終段階の第一歩であらう。」と。

かく日本撃破の手段方法を示唆したのち、グルーはアメリカ國民の決心を促してゐる。それは彼が十年間日本に滞在して得た知識を基礎としてアメリカ國民に警告を發したのである。彼はドイツと日本との差異を認めてゐる。彼はドイツにも十年滞在したのであるからドイツに關する彼の知識も日本に關する彼の知識に劣るものではない。かくて彼はその豊富な知識をもつて兩國の國民性の差異を比較検討して一つの結論を得たのである。それは、

一九一八年にドイツ國民は戰が不利になると士氣沮喪して參つてしまつた。それゆゑに今度もドイツ人は戦局が彼に不利に進展すれば一九一八年の二の舞を演ずるであらう。しからば日本人はたとひ戰に敗れても決して精神的に

も、經濟的にも參らないであらう。一杯の粥を半杯に減じても、戦ひ抜くであらう。たゞ人的および物的資源が全く盡き果てゝはじめて彼らは敗れるのである。それに日本軍は支那との戦争で五年間の實戰の經驗を持つてゐる。この強力な日本軍を破ることは容易ではない。

とグルーがアメリカ國民に異常の決心を抱かなければならないことを警告してゐるのであるが、しかし彼は同時に日本の新占領地域が決して不敗の態勢にありとは認めてゐない。弱點も多々あるから、これを巧みに利用すれば結局日本の地位は危殆に陥る。それは日本が大東亞戦争開始後數千平方マイルに達する地域を占領したが、しかもその防禦線の側面にある英米の有力な陣地を奪取することができなかつたのである、といつてゐる。

また日本の防禦線の弱點としてはグルーは日本の補給が海上から行はれなければならない點を指摘してゐる。海上輸送は敵の攻撃に暴露されるといふ弱點を有してゐる。日本は船舶の損失を容易に補充できる國ではないから、船舶の消耗によつて終局の敗北を喫することがないとはいへぬ。しかし以上の弱點が必ずしも日本の敗北の原因となるとは斷言できない。たゞアメリカとその與國が一大攻勢をとり、上述の日本の弱點を利用することによつてのみはじめて日本を破ること



ができるといつてゐる。

グルーは日本國民の強味は熱狂的にその政府當局者に服従することである。アメリカ國民の強味は上からの命令を待たないで自ら考へ自ら行動するにあるといつてゐる。それゆゑにアメリカ國民は政府が國民のために考へてくれるのを待つてゐてはならぬ。ワシントンの當局者はすでに非常な重荷を負つてゐる。だから勝利への途を進むに當局者は一々國民の手をとつて、それを指示するやうでは駄目だ。この戦争はアメリカの戦争であることを忘れてはならないといつて本章を結んでゐる。

#### 四 日米交渉を歪曲強辯

第五章の「何故に吾人はもはや日本を相手にはできぬか」において、グルーはアメリカがこのうへ消滅的態度をとることが望ましくなくなつたと感じた時がつひにきたとのべてゐる。けれど彼は當時、問題は日本の膨脹計畫を阻止しなければならぬか、どうかといふことではなく、いつかくのごとき時がくるかであるといふ意見を持してゐたのである。彼は曰く、

「日本の膨脹が繼續するときは、アメリカの生命線に對す

アメリカが搾取のため植民地を有してゐることを忘れてゐるかのごとき口吻を弄してゐるのである。

グルーは進んで日本がこのレーベンスラウムを得るために侵略政策をとるにいたり、それがため日本の支配階級は經濟と國民の福祉増進といふ實際的な簡單な考へ方を戦争の神話に對する考へ方に變へなければならなくなつたとのべて、いつも國民と支配階級とを隔離して論じてゐる。グルーは經濟から戦争の神話への轉換の一例として滿洲事變をあげ、この頃から日本人の間に唱へられるにいたつた大東亞國すなはち東亞のレーベンスラウムは經濟的概念ではなく、征服の概念である。日本の極反動派は戦争の目的のために自給自足を欲し、決してアメリカその他と自由貿易を欲しなかつたと説き、かくのごとき新經濟的概念をもつて、日本はその艦隊、陸軍、空軍の背後にある軍事經濟へ一切を注ぎ込んでゐるかから、アメリカにとり日本は實におそるべき敵であるとのべて、いつも自分の結論へ讀者を導かうと試みてゐる。殊に本章の末端においてグルーは、今次の戦争は一國民對一國民の戦争ではなく、また一地方的の戦争または、かゝる戦争の集つたものではない。世界を征服し、これを奴隸化しようとする世界的の大軍を滅ぼさんがための戦争であるとのべてゐる。

る脅威は最も重大な性質を帯びるのである。しかしてかくのごとき時期がくるまではアメリカは石油、鐵屑その他の物資を日本へ自由に輸出してゐた。かゝる時期がきてはじめてアメリカはこれらの輸出を禁止したのである。」と説いてゐる。彼のいふところによると、

アメリカ政府が日本に對して採つた政策は「アッピーズメント」といふよりも、「建設的融和」政策といふべきである。この政策によつて日本は得るところ多くて、失ふところは一つもない。これによつて日米兩國の間に合理的な協定が成立すれば貿易は活潑になり、財政的協力が可能となり、兩國が同等の機會をもつて東亞の資源に自由に近づくことができる。日本はこれによつて生活水準を高め、將來の繁榮を保障することもできるのに、日本の樞軸派はこれに耳を傾けなかつたので、この協定は成立しなかつたのである。彼らはその同盟國ドイツがレーベンスラウムと稱するものを求めたのである。

と、厚かましくも當時の事實に反することを平然とのべて、こゝにグルーはレーベンスラウムの註解を行つてこれは生活すべき空間となんらの關係はなく、むしろ野蠻的な征服と搾取のための空間を意味するとのべて、地政學の科學的論據を殊更に無視してゐるのは滑稽である。かくて彼はイギリスや

#### 五 自ら矛盾に陥る

第六章の「日本の青少年」において、グルーは日本青少年の軍事教練をとり上げ、國民學校時代から日本の少年は厳格な軍事教育を受けてゐる事實を指摘し、この事實をもつて彼は日本の戦争準備であつたと斷言し、この準備が眞珠灣攻撃以來の日本軍の成功の原因であるといつてゐる。なほ著者は青少年の軍事訓練をもつて單なる軍事訓練ではなく、むしろ少年の精神訓練であるといひ、この精神訓練は目上の命令に對する絶対服従を目的としてゐる。しかしこの青少年の教育方針は日本の本國に限局されてゐないで、滿洲をはじめ、新たに占領した比島その他の青少年にまで適用されてゐること、對しアメリカ國民の注意を喚起してゐる。彼はヒットラーがドイツの青少年の心を把握した結果を知る者はアジア民族に對する、殊にその青少年に對する日本の計畫のいかなるものであるかについて概念を得るであらうと説いてゐる。日本今日の軍人は軍國の榮譽を原理化した結果生れたので、軍人が戦場で喜んで自分の身を擲つことは學問的に一主義を遵奉する結果ではなく、子供の時分から國家のため身を捧げるやうその情緒を馴致する結果である。そしてかくのごとき國

民を生んだ諸勢力は家族、學校、兵役、國教、および個人に對する國體の抑壓力などである。これらの勢力によつて絶對服従と犠牲、すなはち軍國に對する服従と犠牲を自分の教義とする國民が生れるのである。といつて日本軍の強さの原因について強調してゐる。

しからばこの強い日本軍を破るにはどうすればよいかといふ問題に達着してグルーは一のデレムマに陥つたのである。彼はこの強い日本軍を破るにはアメリカ人自身も日本人のやうな犠牲を拂ふ決心がなければならぬことを説かねばならぬ羽目に陥つた。彼は一個人が國家の一從屬物にすぎないやうな人生觀を排斥しながら、日本軍を破るためにアメリカ人自身もこの人生觀を持たねばならぬことを間接に認めるにいたつた。たゞこれによつて日本を破ることができれば、その時はじめてアメリカ國民はその固有の生活を享くることができるといひ、その生活とはなんであるかといふに、それは例によつて自由、正義の上に立脚した生活であるといふ使ひふるしの原理を振りかざし、あたかも日本人の生活には自由も正義もないと暴斷するところに、グルーもまた一般民主主義國人、特にアメリカ人の日本に對する認識不足の弊に陥つてゐるのである。

第七章は「日本における眞理」といふ題であるが、グルー

上げた。これは一見いかにも科學的であるからである。と、かくいふグルーはアメリカが人種排斥の本尊であることを百も承知してゐるので、左のごとき辯解を試みてゐる。

「われらアメリカ人は『東洋的』とか『アジア的』とか、もしくは『黄色人種』といふものはたゞ單に假定として存在してゐることを知つてゐる。われらの科學者は人種の定義についてはもつと周到の注意を拂つてゐる。ドイツ人は實在してゐないアリアン主義とか、セミチズムの名をもつてしばしば罪惡を犯してゐる。アメリカ人もまたつねにこの言葉を用ひてきた。アメリカの新聞は日本人をアジア人と稱してゐる。しかし日本が支那をその第一の最大敵國としてゐることを忘れてゐる。」

と、のべてゐるのは、今次の戰爭を人種問題と關聯せしめられることを極力避けようとする態度を示唆したもので、これは支那をはじめ東洋諸民族が日本の味方になりつゝあることをおそれ、これが牽制策であることは明かである。それゆゑに大東亞宣言のときはアメリカに深刻な打撃を與へたこともおのづから首肯されるのである。

第九章においてはグルーは「太平洋における同盟國」と題し、口を極めて重慶政權を稱揚してゐる。大西洋においては

は日本政府の政策は民をして知らしめぬといひ、その證據としてラジオ、書物などの統制をあげ、その統制の方法は、日本人の唯一の信仰たる神話に反するやうな思想を盛つた外國の書物は悉く輸入を禁止されてゐると極言してゐる。グルーは日本國民が全く無智で、たゞ軍部當局に盲従してゐるから、彼らが事實の眞相を知らないのは無理もない。たゞアメリカが日本の軍部機構を完全に打破するまでは日本國民の迷夢を覺ますことはできないと説いてゐるのは、各章を通じていつも彼が附會する結論である。

### 六 反問苦肉の言

第八章は人種問題を取扱つてゐる。彼の説によると、「日本人は人種戰爭を説いてゐる。日本の當局者はドイツの軍部と同じく經濟的理由のために國民が戦死するやう教へることができないのを承知してゐる。なんとすれば侵略戰爭でなら經濟的利益は得られないからである。また宗教戰爭へも國民を指導することはできない。なんとすれば現代人は宗教的理由では戦ふを欲しないからである。また帝國主義そのものゝために戦ふやう國民を説得することもできなかつた。そこで戰爭の原因として人種問題をと

イギリスとソ聯の勇氣と犠牲心を稱揚してゐるが、太平洋においてアメリカの味方として戦つてゐる國は重慶のみであるだけに、これに投じてゐる賞讃の辭は輕薄で齒が浮くやうである。たとへば支那が東洋において文化の指導國であつたから、この支那の太平洋戰爭における役割は根本的な重要性を持つてゐるといふ、支那が敗れば東洋の文化は一掃されるから、アメリカ國民は東洋における最も豊かな文化の繼承國に自由を與へるために戦つてゐるといふにいたつては實に滑稽で反駁の要をすら認めないのである。

### 七 遂に日本侵攻の暴言

第十章は日本とアメリカとの國交について論じ、アメリカがペルリを送つて日本に開港を迫り、その後ハリスを公使として派遣して日本と通商條約を締結した経緯を、として述べ、アメリカがいかに日本を國際場裡へ導き、文明國の伍伴に入らしめたかについて、アメリカ國民の注意を喚起した。しかし日本はアメリカのかゝる恩顧に對し何を報いたかと問ひ、日本民族の自然の發展をもつてあたかも侵略政策の遂行であるごとくに國民に信ぜしめようとしてゐる。すなはち朝鮮併合からワシントン條約およびその後の日本の行動は悉

くこれ誓約の破棄であると稱し、結論として、「いつかアメリカの軍隊は日本の沿岸に上陸するであらう。しかしそれまでに日本政府はおそらく倒れてゐるだらう。日本の支配者は征服を試みた結果その目ざすゴールは幻影にすぎなかつたことを發見するだらう。その時こそアメリカが東洋の秩序を回復する時である。」といつてゐる。グルーはさきに日本國民は絶対に政府に服従してゐるといつておきながら、この章であたかも國民にかかる不穩分子のあることを期待し、彼の説くことに一大矛盾を生ずるにいたつた。

最後の十一章は「將來の建設」といふ題で再びアメリカ國民に、日本に對する認識の足りないことに注意を喚起してゐる。彼は曰く、  
「今次の戦争でアメリカは勝利を得るだけで満足してはならない。日本の軍事機關やそれに陪伴する政治團體を無力化しなければならぬ。さうしてはじめて眞の平和が來て、堅實な基礎の上に立つ新世界が出現するのである。この新世界の建設に役立つものはヴェルサイユ條約をかくも短命にした高價な誤謬や短見を參考とし、この過失をくり返へさないやうにしなければならぬ。」とのべて彼の「東京報告」を結んでゐる。

## 八 米國の世界征覇思想

以上グルーの長論文を一讀して何人も感ずる點は、アメリカが世界新秩序を樹立しようとするその念願が、各ページに横溢してゐることである。これはひとりグルーの論文ばかりではない。ウヰルキの「一つの世界」中にもべられてゐる。しかしアメリカの欲する世界新秩序は、アメリカが世界の警察權を握り、その指導下におかうとするもので、これはアメリカの世界制覇を美辭麗句で示唆したにすぎないのである。しかし吾人が對米宣傳上最も注意しなければならぬ點は、アメリカ國民の一部分がグルーの東京報告中のべてあるやうな日本の世界征服を眞面目に信じてゐるおそれがあることである。もし彼らがルーズヴェルト一派の支配階級の今次の戦争の眞の目標は、アメリカの帝國主義の遂行にほかならないものであることを知るにいたれば、彼らの間に反戦運動の擦頭すべきは火をみるよりも明らかである。ルーズヴェルトの最もおそれる點はこれである。ゆゑに國民が最もおそれてゐる自由の喪失と日本の世界征服とを關聯せしめ、今次の戦争にアメリカが敗北を喫すれば日本の世界征服が實現することになり、その結果アメリカ國民は自由、正

義、民主主義を失ふであらうと説いてゐる。しかしアメリカ國民がルーズヴェルトの思ふやうに、さう易々と日本の世界征服といふ虚構の事實を信じないので、これを信じさせようとして種々の宣傳工作をなしてゐる。その結果でき上つたのが日本の神話と世界征服とを結びつけたのである。グルーの東京報告のごときもこの宣傳の一端を承はつたものと推察される。この仕事にはグルーは最適任であることは、彼が駐日大使として十年間日本に駐在して日本の風俗習慣を知悉し、かつ日本の歴史にも相當の知識のある點が國民の信用を得るのに大いに効果的であるからである。

アメリカの帝國主義に反對し、十九世紀の後半以來アメリカの大陸防衛主義を主張してきた政治的および思想的一團がある。これを大陸派と稱し、それが後には孤立主義派となつたのである。ルーズヴェルト一派の帝國主義派は、この孤立派の言動がアメリカの政界に相當根強い勢力を持つてゐて、事毎に帝國主義者に反抗してその政策を議會で打破るに業を費やしてゐる。そこで彼らは日獨兩國の世界征服といふ鬼面をでつち上げて、これをもつてアメリカ國民を感嚇し、同時に孤立主義者をもつてあたかも日獨兩國の世界征服を默認する賣國奴であるが如き觀を抱かしめようと努めてゐる。たゞ、日本の輿論がアメリカの孤立主義者の正論を正當に認識する

や、アメリカの帝國主義者は得たり賢しと、この事實をとり上げて、孤立主義者を槍玉にあげ、もつて彼らを國民の間に不信ならしめようとしてゐるのである。

かくてグルーの「東京報告」より吾人が得る事柄は、アメリカ國民の間に日本の大東亞戦争に對する眞の認識を深めさせることである。それは日本が世界の新秩序樹立を欲する點は毫もアメリカ國民に劣るものではないが、一民族の指導下に世界をおくことによつて世界の平和を庶幾することは困難である所以を説き、むしろ地域的にアメリカ大陸、ヨーロッパ大陸、大東亞といふがごとき地理的區域によつて各々の區域内の秩序を維持して、互に他を侵さないやうにするのが日本の大東亞戦争の眞の目的であることを科學的に、論理的に諄々と説き伏せることである。かくてアメリカ國民ははじめてルーズヴェルト一派の野心に目覺め、反戦運動を展開する望みがないとはいへないのである。これわが宣傳の是非とも仕遂げねばならない大使命である。

# 獨立前夜にある印度の民族と經濟

岸 克己

## 一 獨立への途ひらく

大東亞戦争を大いなる轉機として印度獨立運動は俄然異常なる現實味を帯びてきた。多年英國の虐政下に呻吟を續けてゐた三億八千萬印度民衆の解放はまことにこの時を措いては求め得られないのである。思へば、シンガポール陥落の直後、昭和十七年三月早くも印度獨立聯盟が結成され、同年六月十五日バンコックに開かれた獨立大會は「印度を戦亂の巷から救ふ唯一の道は印度の完全なる獨立を宣言し、英國とのあらゆる關係を即時斷絶するにある」との宣言を發し東亞國各地の印度人に呼びかけた。ついで十八年四月には、英國色拂拭のあともしろましい昭南に獨立大會を開き重ねて打倒英國の決意を闡明したが、同年六月、獨立運動の大立物スパス・チャンドラー・ボース氏をドイツより迎へ、運動は一段の精

彩と激刺とを加へるにいたつた。さる十六年、英印官憲嚴戒の眼を滑り祖國を脱出しベルリンに姿を現して以來、故國民衆に對し電波にのせて激動の辭を送りつゝあつた氏が、こゝに忽然として日本を訪れたことは獨立運動の一黨にとつてまさに救世主の出現にも比すべきものがあり、十八年七月昭南における印度獨立聯盟東亞代表者會議において獨立聯盟會長の地位はビハリ・ボース氏よりチャンドラー・ボース氏に移り、爾來運動は着々と進んでゐたが、つひに十八年十月廿一日、同氏を首班とする自由印度假政府が昭南に樹立された。實に數十年にわたる印度人の反英抗争史においてはじめて印度人による打倒英國を使命とする政府が實現したのであつた。假政府は廣く東亞國內の印度人を糾合組織化するとともにこれを武裝化し、印度獨立義勇軍の擴大強化に全力を傾倒してゐるが、同政府は十九年一月七日昭南を去つてビルマ領内に進出、義勇軍は皇軍との協力のもとに「印度人の印度」

建設に向つて世紀の進軍を開始せんとしてをり、その祖國解放運動はいよ／＼本格的段階に入つた。これが英印當局に絶大の畏怖を與へたことは想像に難くないが、彼らが印緬國境第一線より印度兵を後退させ、アフリカ黑人兵をもつて當

かであらう。

## 二 民族的桎梏の深刻性

て、また最初諒解をこゝとしたチャンドラー・ボース氏に對し最近追從的言辭を弄して輻輳離脱を要請してゐるがごときは、まさにこの間の消息を告げるものであらう。印度總督ウエーヴェルは十九年二月十七日中央立法會議において

しかし、假政府の前途に横はる道は光明にこそ満ちてはゐるが決して坦々たるものではない。目的達成の前に幾十、幾百の試練が待ちうけてゐる。それらのうち、もつとも重視すべきものゝ一つとして民族問題、ならびにこれより派生する諸問題があることを知らねばならない。

英國は印度國民の團結融和を希望こそすれなんらの野心もない。しかし印度自體の政情が不安定ではいかに英國が念願しても印度の獨立は不可能である。……英國は今次大戰終了次第うちに印度に獨立を賦與するであらう。だが戰爭完遂までは是非協力してもらはねばならぬ。……印度獨立はすでに保證されてゐる。われ／＼は戰爭完遂までの協力を要望してゐるに過ぎない。

印度は總面積百五十七萬五千七百七平方マイル、日本總面積の六倍強に當る。歐露を除く全歐にも匹敵するこの巨大なる半島に居住する人口は、一九三一年の國勢調査によれば三億三千八百一十一萬九千五百五十四人、さる一九四一年行はれた調査の數字は入手し得ないが、おほむね三億八千八百萬人といはれ、過去十年間に實に五千萬人を増加してゐる。が、世界一の人口を誇示する支那の壘をも摩さうとするこの大民族は決して單純なる一種族ではない。學界の通説はこれを大別して左の七種としてゐる。

と、前大戰當時獨立の公約をふみにじつた英國一流の惡辣な前科を棚にあげ、内容空虚な戦後の獨立賦與を好餌に印度全國民を戰爭協力に驅り立てんとする虫のよい演説を試みたが、戦後うんぬんのかゝる公約がいかに頼みがないものであるかを、前大戰以來十分に見せつけられて來た印度民族が、これによつてなんら心を動かされることはないことは自ら明

- 一、トルコ・イラン族    バルチスタン、西北國境方面に住み、色白く眼黒く鬚髯多い。
- 二、インド・アリア族    パンジッブ、ラジプタナ、カ